

長峯遺跡

田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第3集

1997

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会
田村・沖宿土地区画整理組合

なが みね い せき
長 峯 遺 跡

田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第 3 集

1997

土浦市教育委員会
土浦市遺跡調査会
田村・沖宿土地区画整理組合



第2号住居址出土灰釉陶器



第15号土坑出土「国厨」墨书土器

例　　言

- 1 本書は、土浦市田村沖宿土地区画整理事業に伴う、同市田村町字長峯2463-10外に所在する長峯遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は田村沖宿土地区画整理組合の委託を受け土浦市遺跡調査会が実施した。
- 3 調査期間は1991年（平成3年）1月8日から同年4月20日である。
- 4 発掘調査は関口満が担当し、調査員として黒澤春彦、駒澤悦郎が当たった。
- 5 本書の編集は黒澤が担当し、小松葉子、福田礼子が補佐した。
- 6 本書の執筆は石器を窪田恵一、縄文時代を福田礼子、平安時代を小松葉子、その他を黒澤が行った。遺構の時期決定は黒澤が行なった。
- 7 調査員の整理分担は下記の通りである。

実測遺物選択 駒澤（石器） 関口（縄文） 黒澤（平安）

遺物実測（拓本） 駒澤・雨宮（石器） 関口・吉野（縄文） 小松（平安）

遺構図版作成 関口 小松

遺物図版作成 雨宮（石器）、関口（縄文・中世以降）、黒澤（平安）

写真 黒澤（遺構写真は主に関口が撮影した。墨書の撮影は、国立歴史民俗博物館の平川南教授と勧茨城県教育財團の川井正一氏にお願いした。）

- 8 整理作業は上記担当指導のもと、下記の分担で行った。
拓本（遠藤成江・川田光子） 実測（大野美津子・椎名まさ子・須貝和子・富田シズエ・浜田久美子） トレース（小松崎廣子・松川さち子） 図版（大坪美知子）
- 9 本調査及び報告書作成には下記の諸機関にご援助、ご協力を賜った。
田村沖宿土地区画整理組合 （株）川鉄商事 （株）清水建設 茨城県教育委員会 県南教育事務所 （財）茨城県教育財團 東洋大学未来考古学研究会 愛知県陶磁資料館
- 10 本調査及び報告書の作成には下記の方々よりご協力ご援助を賜った。記して感謝の意を表したい。また墨書土器については東洋大学鬼頭清明教授、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教授を受けた。（敬称略）
浅井哲也 浅田能員 磐前順一 大沢淳史 小川和博 瓦吹翠 加藤真二 加藤博文 川井正一 黒澤彰哉 斎藤弘道 中山英樹 北條朝彦 星野保則 吉田匠
- 11 本遺跡の資料は土浦市教育委員会が保管する。
- 12 本遺跡群の発掘調査報告書は全11集の予定である。各集共通の事項や、考察は第11集の総集編に掲載予定である。

凡　　例

- 1 遺構番号については、遺構の種別ごとに付したが、調査や整理の過程で遺構でないと判断したものには欠番とした。また名称を変更した遺構については旧名称も記載した。遺物注記や図面、台帳などは旧名称を使用している。
- 2 土層観察における色相の判断は「新版標準土色帖」（日本色研事業株式会社）を使用した。
- 3 各遺構の実測図は原図20分の1を使用し、縮尺3分の1を基本としたが、大きさによって2分の1、4分の1を用いた。
- 4 カマドの実測図は、原図10分の1を使用し縮尺3分の1を基本とした。
- 5 実測図中の標高はすべてm単位で示している。
- 6 実測図中の「K」は、攪乱、「P」はピット、「S I」は堅穴住居址、「S B」は掘立柱建物跡を示している。
- 7 実測図中の出土遺物に付した番号は、遺物図版及び写真図版の番号に一致する。また接合関係にある遺物は、それぞれを実跡で結び、接合しない同一の個体は破線で結んだ。
- 8 実測図中の破線は推定線を示している。
- 9 実測図中におけるスクリントーンの指示は下記の通りである。
焼土  カマド抽部粘土 
- 10 遺物の縮尺は3分の1を基本としたが、大きさにより原寸、2分の1、4分の1を使用した。
- 11 遺物実測図中心線の一点鎖線は回転実測を表わす。
- 12 各部位の法量表現は下記の通りである。
A：口径 B：底径 C：器高 D：高台径 E：高台高 G：つまみ径 H：つまみ高
- 13 遺物実測図中のスクリントーンの指示は下記の通りである。
黒色処理  吸炭・タール  割れ口  灰釉陶器断面 
- 14 土器観察表について、図版番号は実測図中の番号を示す。
種類は上段が器種、下段が種類である。
種類で、土師器の色調を呈するが、須恵器の技法を用い、還元焰焼成を試みたもの（須恵器を作ろうとしたが還元焰焼成が不完全）であれば須恵器とした。
法量は上記の12の表記を用い、（ ）は現存値、〔 〕は復元推定値を表す。
焼成は良好、普通、不良の3段階に分けた。胎土は半透明透明の鉱物を石英、白色の鉱物を長石とした。
備考の番号は実測遺物の通しNoである。
- 15 色調は原則として外面、内面の順に記した。

調査会組織（平成5年度まで）

会長	永山 正	土浦市文化財保護審議会長
会長	須田 直之	〃
副会長	青木 利次	土浦市教育委員会教育長
理事	茂木 雅博	土浦市文化財保護審議会委員
	大塚 博	〃
	雨貝 宏	土浦市建築指導課長
	横田 紀夫	土浦市耕地課長
	内海崎保生	〃
	野口 幹雄	土浦市区画整理課長
	小川 和博	日本考古学研究所
監事	藤枝 正	土浦市教育委員会教育次長
	二野屏昌雄	〃
	鶴町喜美雄	〃
	滝ヶ崎洋之	土浦企画課長
	廣田 宣治	〃
幹事	田中 紀夫	土浦市教育委員会社会教育課長
	福田 統太	〃
	竹本喜一郎	〃
	宮本 昭	〃 文化課長
	久松 一夫	土浦市教育委員会社会教育課副参事
	岩沢 茂	土浦市教育委員会社会教育課課長補佐
	加倉井藤雄	土浦市教育委員会社会文化課主査
	石山 淳一	土浦市教育委員会社会社会教育課担当係長
	飯村 甚	土浦市教育委員会社会社会教育課主幹
	石川 功	土浦市教育委員会社会文化課主事
	黒澤 春彦	〃
	中澤 達也	〃
	関口 満	〃
	塙谷 修	土浦市立博物館学芸員

調査者名簿

試掘調査 石川 功 土浦市教育委員会社会教育課
中澤達也

調査主任 関口 満 土浦市教育委員会社会教育課臨時職員（平成4年度より職員）

調査員 黒澤春彦 土浦市教育委員会社会教育課
駒澤悦郎 東洋大学大学院
小松葉子 （整理）
雨宮瑞生 （整理）
吉野健一 （整理）
福田礼子 （整理）
吉澤 哲 （整理）筑波大学大学院
井上敏昭 （整理）
窪田恵一 （整理）

調査補助員 東洋大学学生（鍋木洋、柴崎浩二、高花宏行、広田良成、森本玲子、渡辺展好）

事務担当 市川律子 秋元照子（～H5.3.31）中村博子（H5.4.1～）

事務局 土浦市教育委員会社会教育課（平成5年4月1日から文化課）

発掘参加者（10日以上）

赤池定夫 浅川和代 舛田とみ 伊勢山こう 伊勢山とき 糸川延子 岩瀬いま 岩本よし子
大木ちよ 大久保さだえ 大塚浩平 大坪美知子 大竹きみ子 大原繁 岡本美樹子
小倉はる 小沼さと 折本秀子 貝塚雪枝 加藤博司 川島敏子 川俣茂子 岸徹 木代貴子
木村泰崇 久保木昭子 久保田勝 倉田俊夫 栗又八重子 小松崎仁男 斎藤政男 坂本節子
桜井久代 佐藤広美 清水せつ子 清水たまの 白波瀬初代 鈴木きみ 鈴木秀男 鈴木みね
田中光 富島栄子 土肥末 野口絹子 浜田雄一 福田久之 福田高明 福田まさ 細野重雄
堀越俊枝 堀越方子 松延貞次郎 粱山末義

整理参加者（10日以上）

石山春美 内田さやか 遠藤成江 大野美津子 川田光子 小松崎広子 佐久間郁子 植名
まさき 須貝和子 田辺利子 富田シズエ 長嶺道子 中村節子 浜田久美子 松川さち子
松鳴有子 村井律子 横山紀子

目 次

口絵

例言

凡例

調査者名簿

調査会組織

目次

第1章 調査経過	1
第2章 調査	1
第1節 遺構確認	1
第2節 基本層序	4
第3節 遺構調査	4
第3章 遺構と遺物	8
第1節 旧石器時代	8
第2節 繩文時代	8
第3節 平安時代	6 4
第4節 中世以降・時期不明遺構・遺構外	1 4 0
第4章 結語	1 4 3
報告書抄録	1 4 4
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 遺跡分布図	2	第11図 第2群土器-3	1 6
第2図 グリット設定図	3	第12図 第2群土器-4	1 7
第3図 基本層序	4	第13図 第2群土器-5	1 9
第4図 位置図	5	第14図 第3群土器-1	2 0
第5図 遺跡全体図	6・7	第15図 第3群土器-2	2 2
第6図 第1群土器-1	1 0	第16図 第3群土器-3	2 4
第7図 第1群土器-2	1 1	第17図 第3群土器-4	2 6
第8図 第1群土器-3	1 2	第18図 第3群土器-5	2 7
第9図 第2群土器-1	1 4	第19図 第4群土器-1	2 9
第10図 第2群土器-2	1 5	第20図 第4群土器-2	3 1

第21図	第4群土器-3	3 3	第53図	第6号住居址カマド・出土遺物	8 5
第22図	第5群土器-1	3 5	第54図	第6号住居址遺物出土状況	8 6
第23図	第5群土器-2	3 7	第55図	第6号住居址出土遺物	8 7
第24図	第5群土器-3	3 8	第56図	第7号住居址完掘	8 8
第25図	第5群土器-4	3 9	第57図	第7号住居址出土遺物	8 9
第26図	第5群土器-5	4 1	第58図	第8号住居址完掘・出土状況	9 1
第27図	第6群土器-1	4 3	第59図	第8号住居址カマド	9 2
第28図	第6群土器-2	4 5	第60図	第8号住居址出土遺物(1)	9 3
第29図	第6群土器-3	4 7	第61図	第8号住居址出土遺物(2)	9 5
第30図	第7~9群土器	5 1	第62図	第9号住居址カマド・出土遺物	9 6
第31図	第10群土器-1	5 2	第63図	第9号住居址完掘・	9 7
第32図	第10群土器-2	5 4		遺物出土状況	
第33図	遺構外出土石器(1)	5 6	第64図	第9号住居址出土遺物(1)	9 9
第34図	遺構外出土石器(2)	5 7	第65図	第9号住居址出土遺物(2)	1 0 1
第35図	遺構外出土石器(3)	5 9	第66図	第9号住居址出土遺物(3)	1 0 2
第36図	遺構外出土石器(4)	6 0	第67図	第10号住居址完掘・出土遺物	1 0 4
第37図	遺構外出土石器(5)	6 1	第68図	第10号住居址カマド・出土遺物	1 0 5
第38図	第2号住居址完掘	6 5	第69図	第11号住居址完掘・出土遺物	1 0 7
第39図	第2号住居址カマド	6 6	第70図	第12号住居址完掘	1 0 8
第40図	第2号住居址出土遺物	6 7	第71図	第12号住居址カマド	1 0 9
第41図	第3号住居址完掘	6 8	第72図	第13号住居址完掘	1 1 0
第42図	第3号住居址出土遺物	6 9	第73図	第13号住居址カマド	1 1 1
第43図	第4号住居址完掘・出土状況	7 1	第74図	第12・13号住居址出土遺物	1 1 3
第44図	第4号住居址カマド	7 2	第75図	第14号住居址完掘	1 1 4
第45図	第4号住居址出土遺物(1)	7 3	第76図	第15号住居址完掘	1 1 6
第46図	第4号住居址出土遺物(2)	7 5	第77図	第15号住居址カマド・出土状況	1 1 7
第47図	第5号住居址完掘・出土状況	7 7	第78図	第15号住居址出土遺物	1 1 8
第48図	第5号住居址カマド	7 8	第79図	第17号住居址完掘	1 1 9
第49図	第5号住居址出土遺物(1)	7 9	第80図	第19号住居址完掘	1 2 0
第50図	第5号住居址出土遺物(2)	8 1	第81図	遺跡鳥瞰図	1 2 1
第51図	第5号住居址出土遺物(3)	8 3	第82図	第1号掘立柱建物跡	1 2 3
第52図	第6号住居址完掘	8 4	第83図	第2号掘立柱建物跡	1 2 5

第84図	第3号掘立柱建物跡	1 2 8	第90図	第4号溝出土遺物	1 3 6
第85図	第4号掘立柱建物跡	1 2 9	第91図	第3・4号溝	1 3 7
第86図	第5号掘立柱建物跡	1 3 1	第92図	平安時代石器	1 3 9
第87図	掘立柱建物跡出土遺物	1 3 3	第93図	畝状遺構(1)	1 4 0
第88図	第15・17号土坑	1 3 4	第94図	畝状遺構(2)	1 4 1
第89図	土坑出土遺物	1 3 5	第95図	遺構外出土土器	1 4 2

写 真 図 版

P L 1	航空撮影・試掘状況	P L19	第2・3・4号住居址完掘
P L 2	遺跡遠景・基本層序		第4・5・6号住居址完掘
P L 3	第2・3号住居址完掘 第3号住居址遺物出土状況	P L20	第1号・2・3号掘立柱建物跡完掘
P L 4	第4号住居址完掘・遺物出土状況	P L21	第4・5号掘立柱建物跡完掘
P L 5	第2・4号住居址カマド・作業風景	P L22	第15号土坑・井戸状遺構完掘・土層
P L 6	第5号住居址完掘・遺物出土状況	P L23	全景・周辺風景
P L 7	第5号住居址カマド・土層	P L24	遺構外出土石器
P L 8	第6号住居址完掘・遺物出土状況	P L25	遺構外出土石器
P L 9	第6号住居址カマド 第7号住居址完掘	P L26	遺構外出土石器
P L10	第8号住居址完掘・遺物出土状況	P L27	第1群土器-1・2
P L11	第8号住居址遺物出土状況・カマド	P L28	第1群土器-2・3
P L12	第9号住居址完掘・遺物出土状況	P L29	第2群土器-1
P L13	第9号住居址遺物出土状況・カマド	P L30	第2群土器-2
P L14	第10号住居址完掘・カマド	P L31	第2群土器-3
P L15	第11号住居址完掘 第8・9・10住居址遠景	P L32	第2群土器-4
P L16	第12・13号住居址遺物出土状況 第12・13・14号住居址完掘	P L33	第2群土器-5
P L17	第12号住居址遺物出土状況 第12・13号住居址カマド	P L34	第3群土器-1
P L18	第15号住居址完掘・カマド	P L35	第3群土器-2
		P L36	第3群土器-3
		P L37	第3群土器-4
		P L38	第3群土器-5
		P L39	第4群土器-1
		P L40	第4群土器-2

P L41	第4群土器-3	P L57	第5号住居址出土遺物
P L42	第5群土器-1	P L58	第5号住居址出土遺物
P L43	第5群土器-2	P L59	第6号住居址出土遺物
P L44	第5群土器-3	P L60	第7号住居址出土遺物
P L45	第5群土器-4	P L61	第8号住居址出土遺物
P L46	第5群土器-5	P L62	第8号住居址出土遺物
P L47	第6群土器-1	P L63	第9号住居址出土遺物
P L48	第6群土器-2	P L64	第9号住居址出土遺物
P L49	第6群土器-3	P L65	第9号住居址出土遺物
P L50	第7~10群土器	P L66	第10~12号住居址出土遺物
P L51	第2号住居址出土遺物	P L67	第12·13号住居址出土遺物
P L52	第3号住居址出土遺物	P L68	第15号住居址 掘立柱建物跡出土遺物
P L53	第4号住居址出土遺物	P L69	土坑出土遺物·遺構外出土遺物
P L54	第4号住居址出土遺物	P L70	平安時代石器
P L55	第4号住居址出土遺物		
P L56	第5号住居址出土遺物		

第1章 調査経過

- 1989年3月 試掘調査を行う。トレーナーは1本、台地に沿って設定した。結果、明確な遺構は確認されなかったが、遺物が出土していることや、地形などから遺跡と判断し、調査対象とした。
- 1991年1月8日 壱杯清水西遺跡がほぼ終了したため、テントの設営等の調査準備を行う。
- 1月9日 調査を開始する。遺構確認のための精査を行う。
- 2月7日 精査の結果、竪穴住居址1・8軒などが確認された。
- 2月14日 遺構の検出を西側の畝状遺構から始める。同時に縄文の包含層の調査を始める。
- 2月20日 住居址の検出を開始する。
住居址が密集する地区で掘立柱建物跡が確認される。
- 3月25日 並行して行われていた寺畠遺跡を中断し、調査担当の黒澤と作業員約30名長峯遺跡の調査に合流。（4月20日まで）
- 4月17日 遺構検出作業をほぼ終了する。
- 4月20日 調査を終了する。
- 4月22日 テントや器材を撤収し、次の調査地である前谷西遺跡、前谷東遺跡、東原遺跡へ移る。

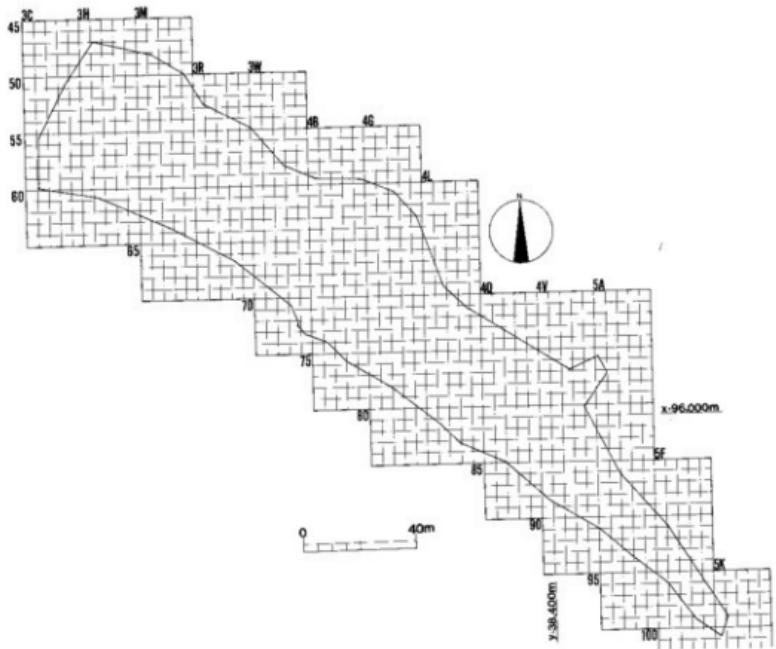
第2章 調査

第1節 地区設定

発掘調査を実施するにあたり、日本平面直角座標を用い、調査地区を設定した。調査区の名称はアルファベットと算用数字を用い、4 m毎に西から東へA、B、C、北から南へ1、2、3とし、「A-1区」のように呼称した。長峯遺跡の場合、寺畠遺跡と同台地上にあるため、寺畠遺跡の延長で、名称を付けた。そのため、当遺跡の地区は3Dラインより東になる。遺構が密集する「4R-76区」は日本平面直角座標第1X座標系、X軸9,620、Y軸38,383である。



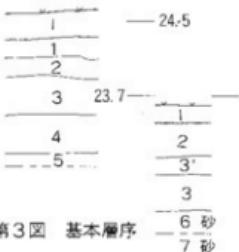
第1図 遺跡分布図（国土地理院発行 1/50,000 に加筆）



第2図 グリット設定図

第2節 基本層序

当遺跡の基本的な層位として、上層に表土(1)(耕作土)が約30cm堆積し、その下にローム漸移層(7,5YR4/6)や縄文の包含層が約20~30堆積している。この面が遺構確認面である。その下にローム層(2)(10YR4/6褐色)が約30~40堆積し、全体にソフト化している。当遺跡のローム層は他の台地に比べ堆積が薄く、これは細い尾根状の台地という立地が原因と思われる。ローム層の下には褐色色の粘土層(3)が50~60堆積し、酸化鉄や白色粒、黒色粒を含有する。さらに褐色の粘土層(4)や灰白色の粘土層(5)へ続いている。



第3節 遺構調査

1 確認調査

平成元年3月に重機による確認調査を実施した。トレントは1本設定し、幅1mで全長160m、掘り下げはハードローム上面までとした。試掘の結果、遺構の確認面はローム漸移層・縄文土器包含層上面で、地表からの深さは30cmである。

2 表土除去

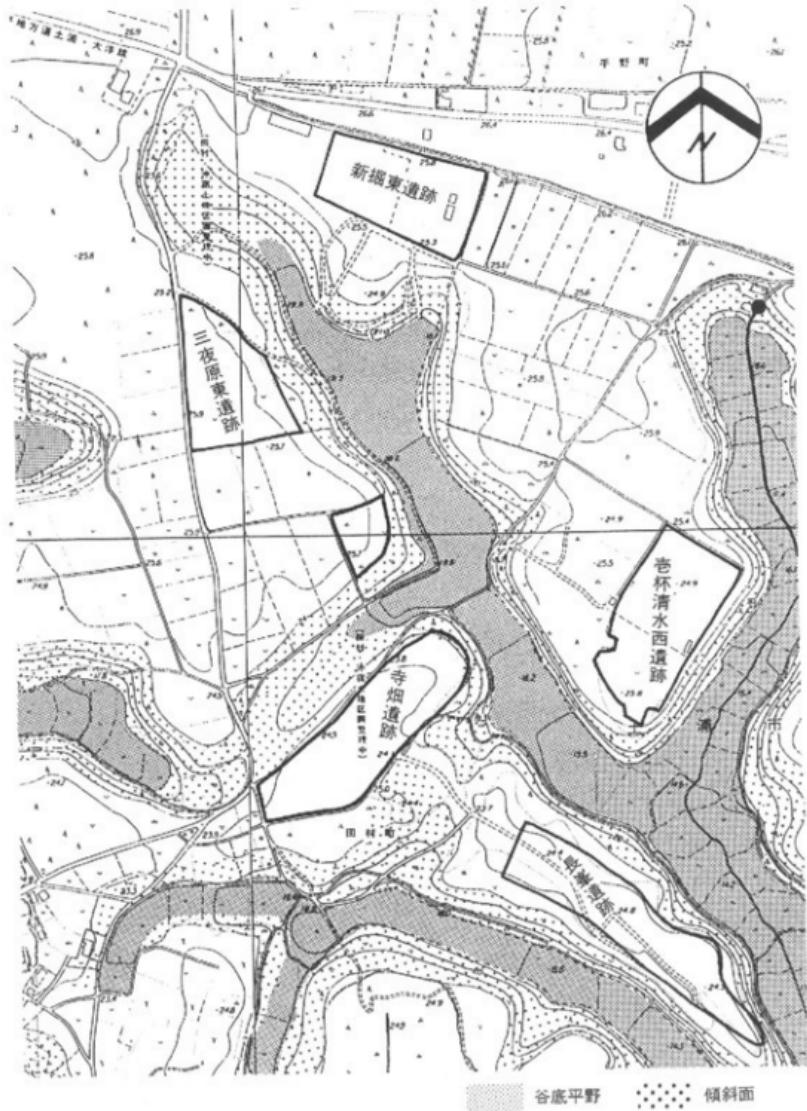
試掘の結果、遺構確認面までの深さが30cm以上あることから、重機を入れても遺構に与える影響は少ないと判断し、重機による表土除去を行った。掘り下げた面は縄文包含層・ローム漸移層・ソフトローム上面である。木根については調査時に人力で除去した。

3 遺構調査

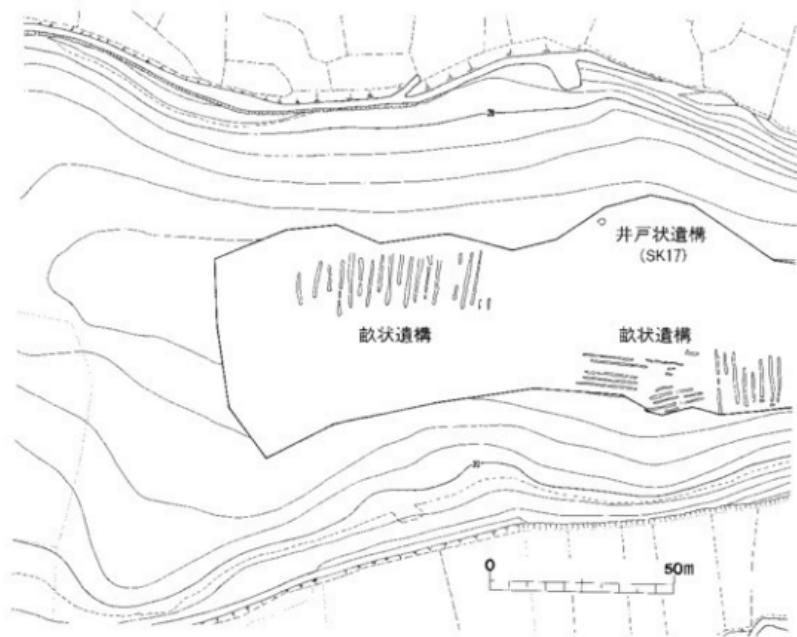
住居址の調査は、土層観察用ベルトを十字に設定して検出する方法を原則とした。地区的表記は主軸の右前を1区とし、時計回りに2、3、4区とした。土坑については長軸方向に分割し地区番号は住居址の表記に準じた。検出作業は覆土の変化や遺物に注意して掘り進めた。土層観察は、色調、含有物の種類と量、締まり、粘性等を観察した。土層観察用のベルトを除去した後、遺物を写真や図面等で記録し、レベルを測定して取り上げた。取り上げた後、カマド、柱穴、貯蔵穴等の付属私設を調査し、完掘した後、写真や図面等の記録を行って終了した。

平面図は水糸を1m毎に張って測量した。

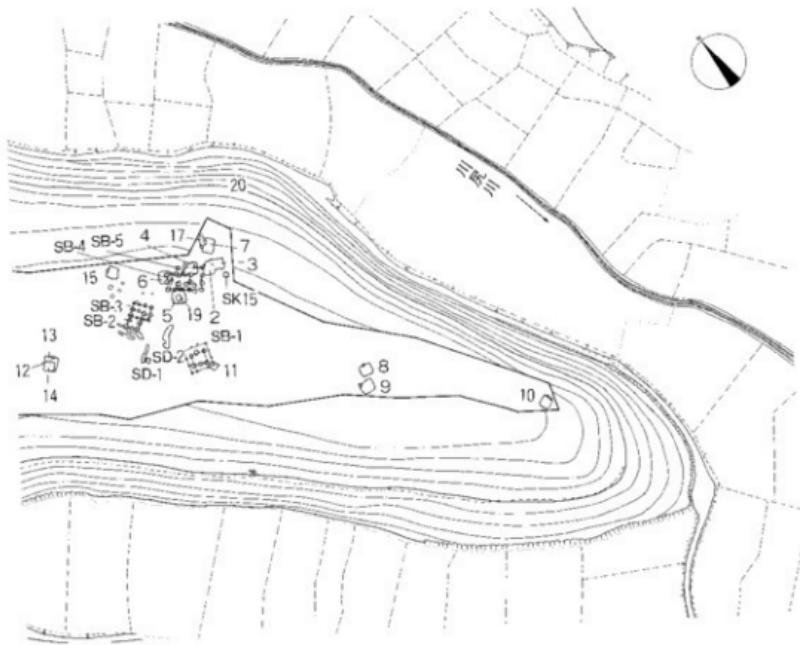
写真は、ローリングタワーや脚立の上から35ミリ、120ミリ(中型)で撮影し、フィルムは35ミリモノクロ、リバーサル、120ミリモノクロを使用した。



第4図 位 置 図



第5図 遺跡全体図(1)



遺跡全体図(2)

第3章 遺構と遺物

第1節 旧石器時代

旧石器時代の石器（第33図14・15・18）

長峯遺跡からは、スクレイバーが3点、折面のある剥片1点、剥片2点の合計6点の資料が出士した。その内3点について図示する。

14は調整打面を持つスクレイバーで末端背面側に刃部を形成している。器体の一部を折損する。15は剥片の末端に調整加工を加えたスクレイバーである。打面側を折り取っている。18は縦長剥片の右側縁全体に調整加工を加えたスクレイバーである。素材にはバルブの発達がほとんどない。剥離角は128°である。図示しなかった折面のある剥片1点、剥片2点は接合しなかったが同一母岩資料と判断した。

図版No	器種	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重量	打面形状	刃面進行	打面幅	剥離角	石材
33-14	スクレイバー	4T-76区	2.25	3.00	0.70	3.66	調整打面	0.46	0.59	120°	安山岩A
15	#	中央	3.70	3.00	0.75	7.67	---	---	---	-	珪質頁岩
18	#	北西	6.60	4.40	1.50	34.97	平打面	0.85	4.00	128°	安山岩A

第2節 繩文時代

繩文時代の遺物は、繩文時代早期から中期にわたり確認されている。繩文土器は遺跡内のQ4南北ライン東側で多く見られ、西側では少なかった。遺跡中央の平安時代の住居跡や掘立柱建物跡が集中する地域からは、繩文時代早期条痕文系土器や前期黒浜式土器の出土が目立った。

遺物は包含層中の出土である。早期から前期の土器の中には大型の破片も出土しており、遺構の存在が考えられるが、明確な繩文時代の遺構を検出しえなかった。

遺構外出土縄文土器、土製品

出土した土器はすべて破片資料で、時期は早期前半から後期初頭まで及ぶものである。破片資料およそ3700点（約100kg）のうち、小破片等を除いた約1300点を対象として分類作業を行い、大きく時期により10群に分類した。さらに器形や文様その他の属性により細分を行なっている。各群の内容と破片数によるおよその量比は下記のとおりである。

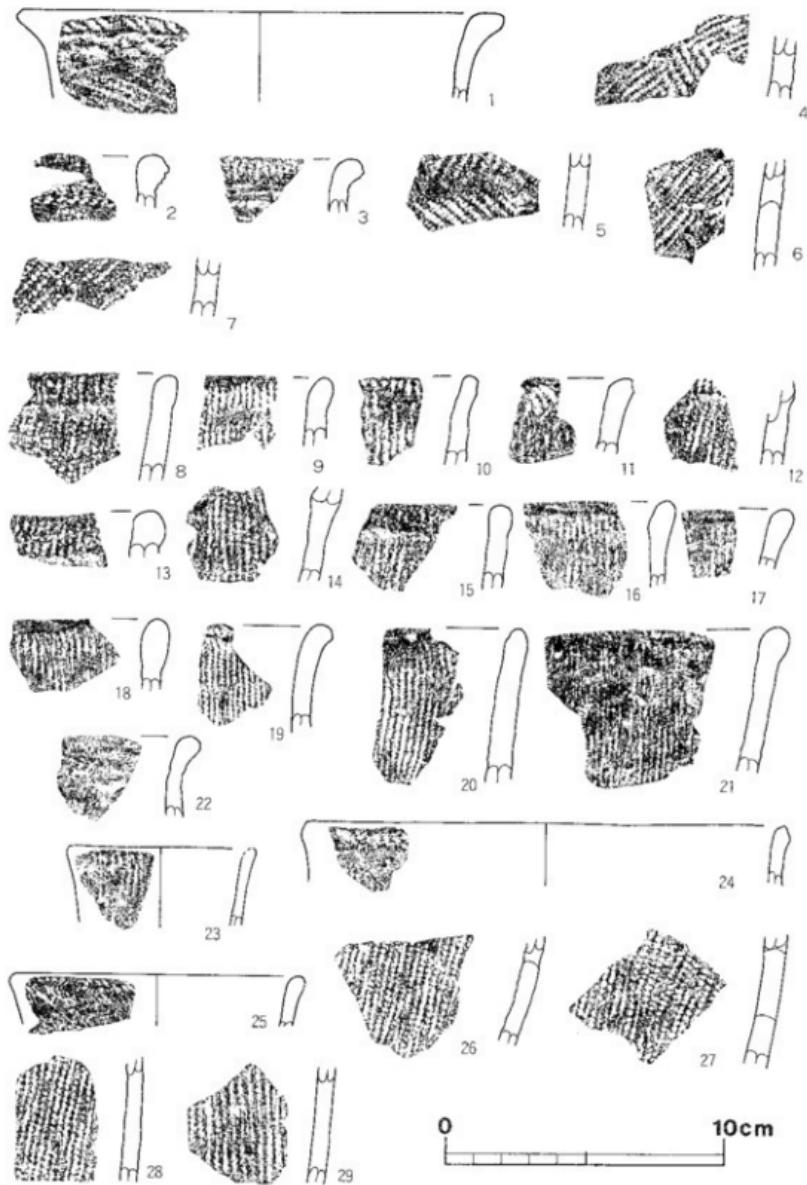
第1群土器	縄文時代早期前半の土器	（約6.3%）
第2群土器	縄文時代早期後半の土器	（約9.5%）
第3群土器	縄文時代前期前半の土器	（約22.2%）
第4群土器	縄文時代前期後半の土器	（約9.5%）
第5群土器	縄文時代前期末葉から中期初頭の土器	（約31.2%）
第6群土器	縄文時代中期初頭の土器	（約20.5%）
第7群土器	縄文時代中期前期の土器	（約0.3%）
第8群土器	縄文時代中期後半の土器	（約0.5%）
第9群土器	縄文時代後期初頭の土器	（約0.1%）
第10群土器	第3～9群に相当する底部片及び土製品を一括する。	

第1群土器（第6図～8図：PL27・28）

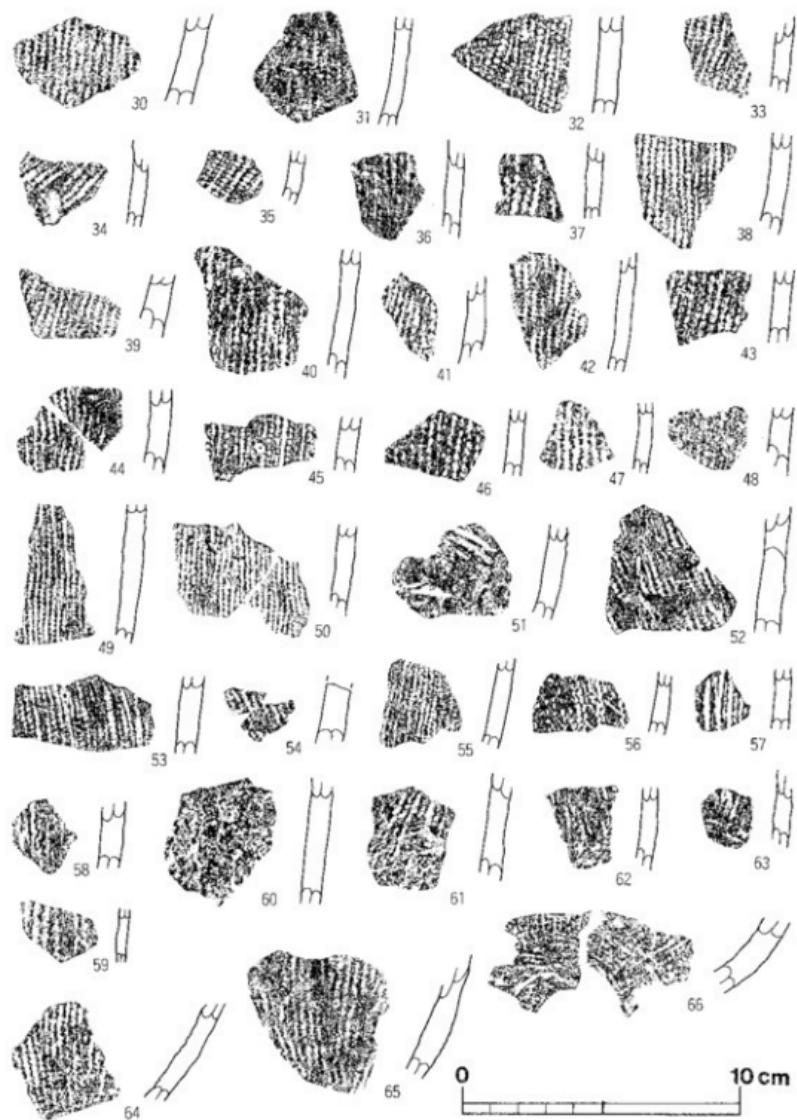
縄文時代早期前半に相当するもので、撚糸文系土器、沈線文系土器、無文土器を一括した。土器は調査区3 E～3 V区、4 D～4 J区、4 Q～4 Y区と3カ所に分布域が認められ、4 Q～4 Y区にかけて比較的多く出土している。台地先端部はまったく出土していない。器形と文様の特徴によりさらに3類に分類した。

第1類土器 撥糸文系土器を一括する。器形と文様の特徴によりさらにA・Bに2分した。
A. 口縁部が外反し、やや肥厚気味となるもの。斜撚文が多く認められる。（第6図1～7）
1・3は口縁部に稜を形成しており、ここに縄文が施文される。1は頭部に削りが認められ胎土には雲母を混入していた。2は口唇部脇部から単節RLが施文されている。
B. 口縁部が直立気味に立ち上がり、撚糸文もしくは条が垂直となるように縄文が施文されるもの。（第6図8～29・第7図・第8図67～76）

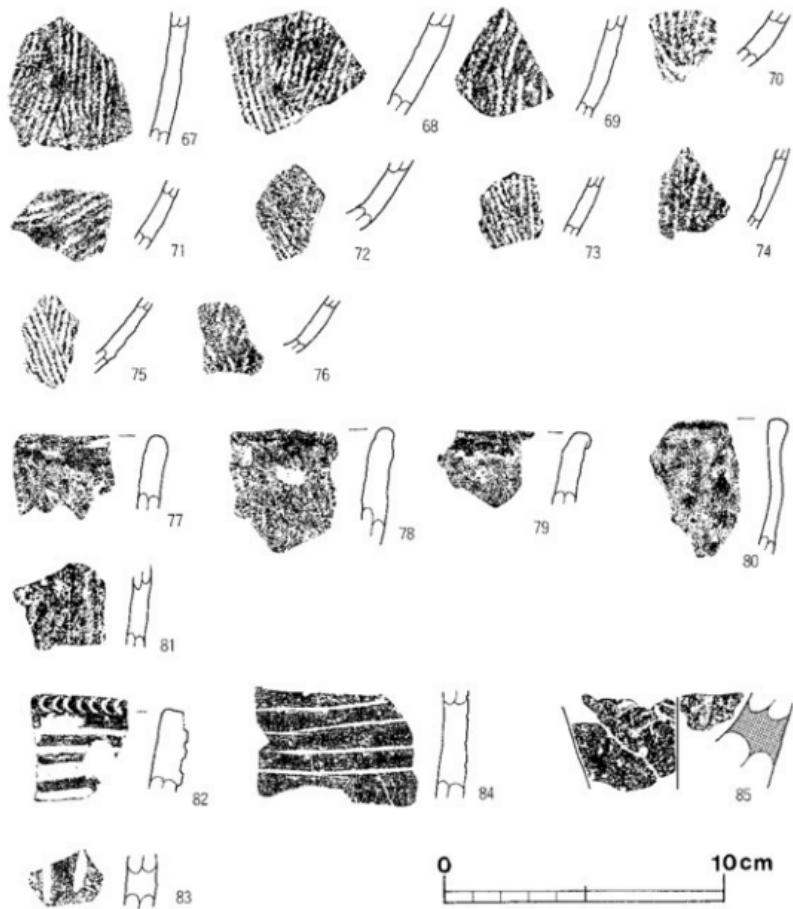
8は口唇部が丸棒状を呈し、口縁下はわずかに稜を形成していた。9はその稜部がより明瞭となるもの。10・16は内面に稜を有して立ち上がり、R撚糸文が施文されていた。11はやや内削ぎ状、13は丸棒状で外側に肥厚気味、19・22がやや外反気味となる他は、いずれも丸棒状の口唇部を呈し、直立気味に立ち上がっている。12は口縁部直下で外面に稜を有していた。18まではいずれもR撚糸文が施文されている。19は口唇部に稜を有し、附加条が施文されている。20はO段多



第6図 第1群土器-1



第7図 第1群土器－2



第8図 第1群土器－3

简单節RL、21は ℓ 撲糸文で胎土に石英を多量に混入していた。22は器面が荒れていて判然としないが撲糸文と思われる。23～26・28・29は溝手の土器で23・25は口唇部が丸棒状を呈している。24はやや復元に無理があるが、口唇部は内外面ともに削がれた様になっており、先端部より縄文が施文されている。25は ℓ 撲糸文か。26～29・30～48はR撲糸文が施文されていた。31・

33~37・40・42・43・46・47は薄手の土器、49・50は同一片で附加条が施文されていた。51はL撫糸文、52~55はL撫糸文であった。55~57・59も薄手の土器で56は木目状撫糸文、57~59はL撫糸文、60は結節状を呈すると思われる。61~63はL撫糸文で、62・63は薄手の土器であった。64~76は底部片である。64・69・71・73~76は薄手の土器、66がR撫糸文の他は全てL撫糸文であった。

本類はAが井草式、Bは夏島式に比定される。

第2類土器 無文土器を一括する。（第8図77~81）

81を除き全て口縁部片である。77~79はほぼ直立気味となる器形で、78はなでが不十分で若干の凹凸が器面に残されていた。79は内面に棱を有し、外面は口縁下の粘土紐がなでつけられずにそのまま残されている。80は口唇部に平坦面を有し口縁部直下がゆるく抉れ、胴部が膨らむ器形を呈している。器面はなでられておりかなり薄手の土器で、胎土が他の破片に比べて緻密なことからも近在地の製品ではなく搬入品と思われる。東海系の早期末葉に相当するものであろうか。81はやや薄手の胴部片で胎土に石英を多量に混入していた。

第3類土器 沈線文系土器を一括する。（第8図82~85）

82は口縁部で口縁下に半截竹管状工具による連続する爪形文が巡り、胴部は太い沈線が横走している。83・84は胴部片で83は太い沈線が2条垂下し、その両側に貝殻文が施文されていた。84は1本引きの沈線が横走している。地文は無文であった。85は底部片、斜沈線文が描かれ胎土には鐵錐を混入していた。

本類は田戸下層式に比定される。

第2群土器（第9図~13図：P L29~33）

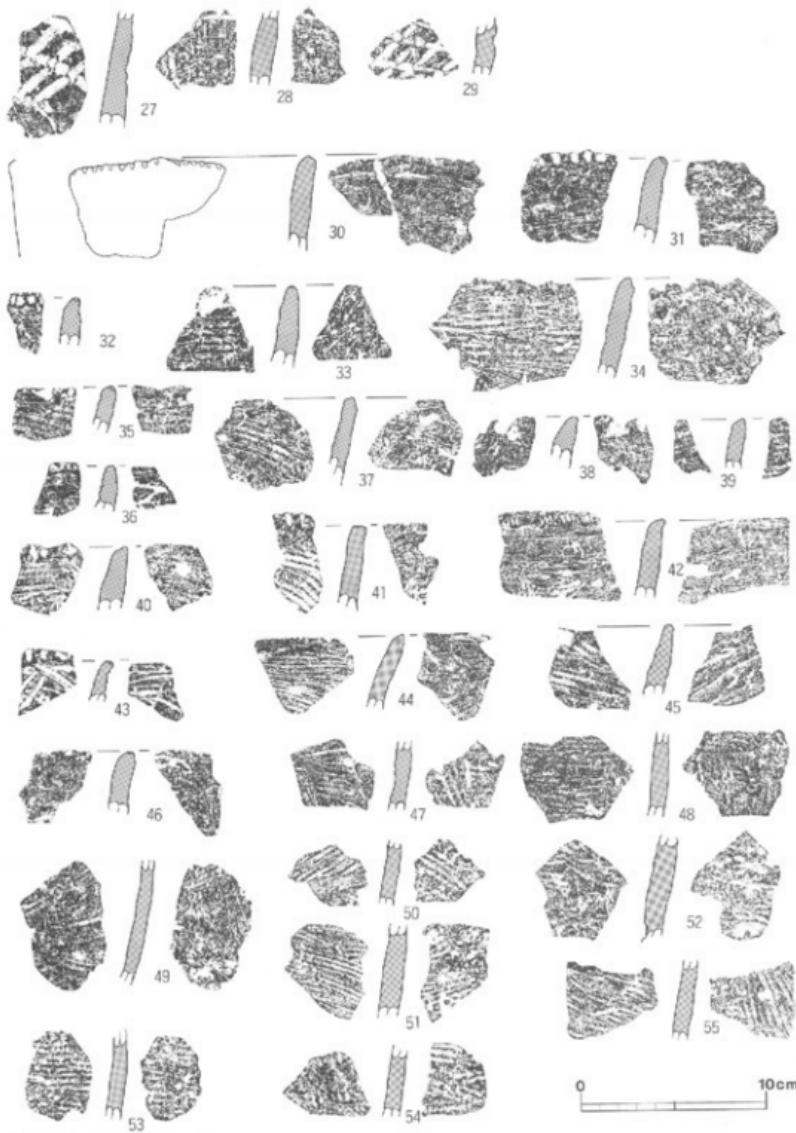
繩文時代早期後半に相当するもので条痕文系土器を一括した。土器は4F~4J区、4R~4Z区に比較的多く出土しており、台地先端部は散発的であった。本群は4R~4Z区が第1群土器の出土と重なっているが、第1群土器が出土している調査区北側からの出土は認められなかった。器形と文様の特徴によりさらに3類に分類した。

第1類土器 口縁部がやや直立気味となり胴部に屈曲をもつ器形で、半截竹管状工具による沈線文及び微隆起線文が多用されるものを一括した。（第9図・第10図27~29）

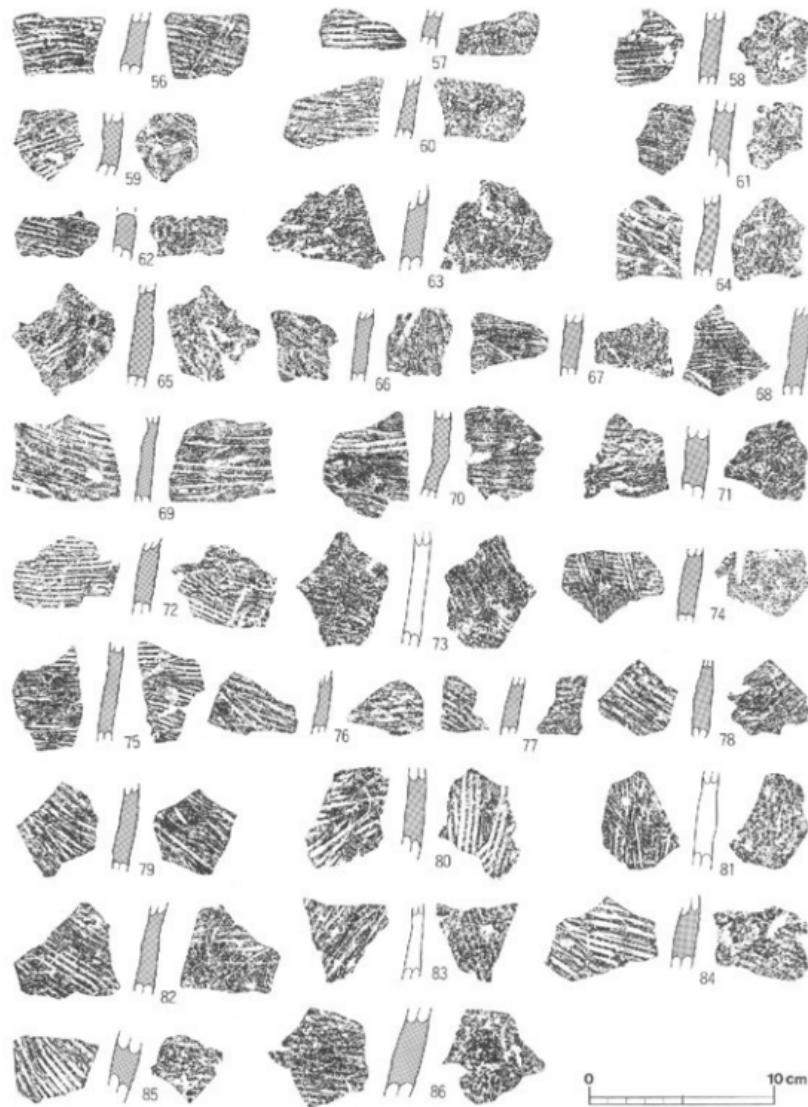
1は波状線、表裏横位条痕文で沈線により区画文が描かれる。区画内は半截竹管状工具による押し引き文が充填され、区画文交点には円形竹管文が配されている。2・4も同様の文様構成をとるが口唇部が内削ぎ状を呈し、ここに刻文が連続していた。4は波状線、6は内削ぎ状の口唇部に刻文を有し、胴部は刺突により区画文が描かれている。13も内削ぎ状口唇部で表裏条痕文が施文され、裏面はなでられていた。胴部は半截竹管状工具による押し引き文が加えられ、区画上



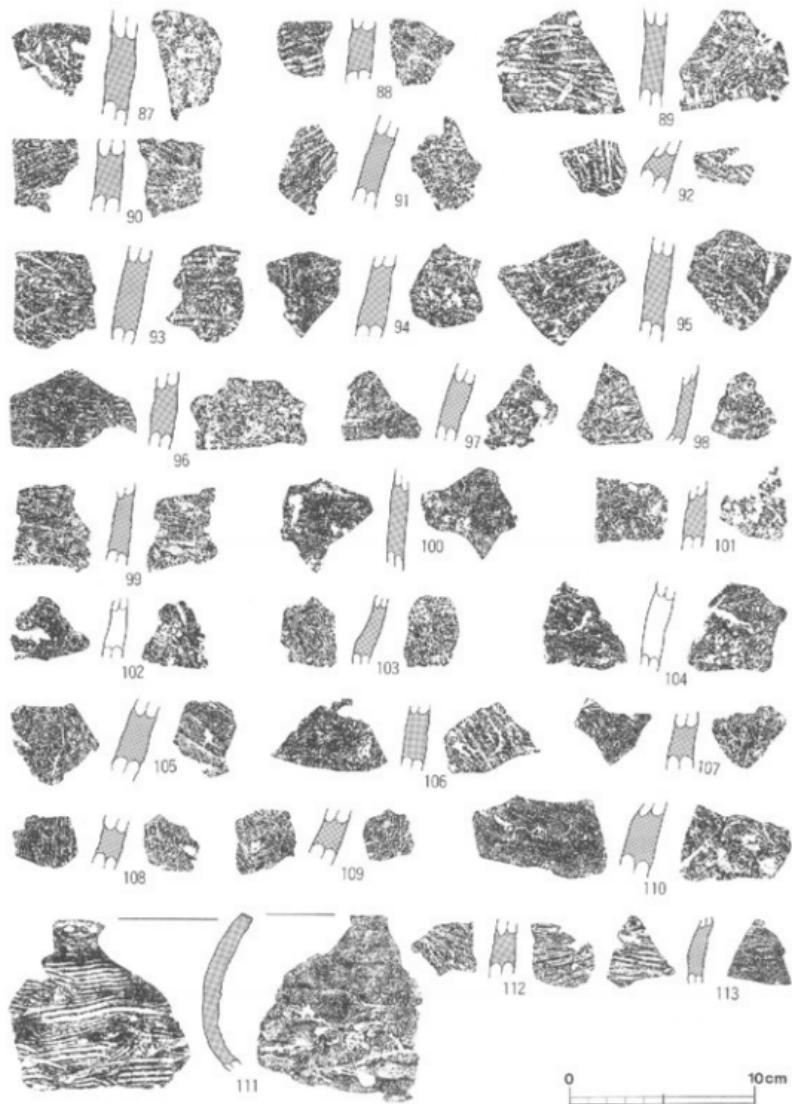
第9図 第2群土器-1



第10図 第2群土器-2



第11図 第2群土器-3



第12図 第2群土器-4

に円形竹管文が配されている。裏面は横位条痕文であった。7・9は同一片で沈線による直線的な区画文が描かれ、区画内は無文部と半截竹管状工具による押し引き文が充填される部分とに二分される。沈線上には円形竹管文が配され、裏面には横位条痕文が施文されていた。7は補修孔を1孔有し、9は器面の条痕文が若干磨き残されていた。5・10は7と同様の文様構成をとるものである。12は屈曲部ではり7と同様の文様構成をとるが、区画内に無文部は見られず全て押し引き文が充填していた。8は屈曲部で屈曲上半に半截竹管状工具による押し引き文が認められる。11は表裏横位条痕文で沈線による区画がなされるが、沈線文が浅く地文の条痕文が沈線内に観察された。14・16も屈曲部で16は屈曲部上に刻文、刺突が施されている。15は微隆起線文により区画文が描かれ、区画内は沈線が充填していた。微隆起線文上には半截竹管状工具による刺突文、裏面は横位条痕文、表面は条痕文施文後になでられている。14~16は胎土に雲母を多量に混入していた。

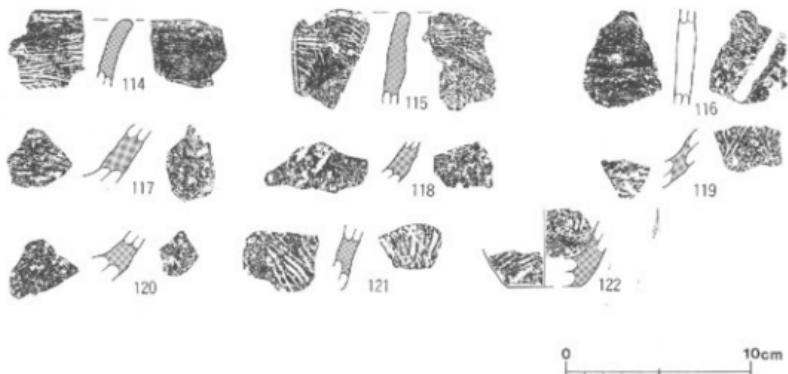
17~27・29は全て格子目文で、文様の描き方により2通りに分けられる。1つは斜沈線を交差させることで格子目文を描くもので、17・18・20~26・29がこれに当たる。17・24は格子目文内にさらに沈線文を充填し、17・20・23・24は半截竹管状工具による刺突が加えられている。18・21・25・26・29は格子目文の交点に円形竹管文が配されていた。18・21は同一片と思われる。もう1つは押し引き沈線文で格子目文を描くもので、19・27がこれに当たる。27は左下→右上の順で押し引かれていた。17・18・20・21・23~26は胎土に雲母が多量に混入していた。28は沈線による区画文で、区画下地文となる縱位条痕文はなでられている。2・6・13以外の胎土に繊維の混入が認められた。

本類は鶴ヶ島台式に比定される。

第2類土器 ほぼ直立して立ち上がる器形で条痕文が施文されるものを括した。

(第10図30~54・第11図・第12図87~104・106・111・113・第13図114~116)

30・31・40・45・46は波状線で口唇部に刻文を有している。45は先尖状、他は程度の差こそあれ内削ぎ状の口唇部を呈している。45は表裏斜位条痕文、31・40は表裏横位条痕文、30・46は条痕文施文後に器面をなでている。32・33・35・36・41・43・44は口唇部に刻文を有していた。35・44はやや内削ぎ状、41は角頭状の口唇部を呈している。32・36は表面横位条痕文、33・35は表裏横位条痕文、41は表面斜位条痕文で補修孔を1孔有している。44は表面横位、裏面斜位条痕文、43は表裏横位条痕文で沈線文、円形竹管文が加えられていた。34は先尖状口唇部に押圧を加え、表面は横位条痕文、裏面は条痕文施文後になでられている。37は内削ぎ状口唇部を呈し、刻文は見られなかった。表面斜位条痕文、裏面横位条痕文の後になでられている。38は丸みを帯びる口唇部に棱を有し、表面条痕文施文後になでされていた。39は内削ぎ状の口唇部を呈し表裏横位条痕文が施文されていた。31・34・35は胎土に雲母を多量に混入し、31・41を除き繊維が認められた。



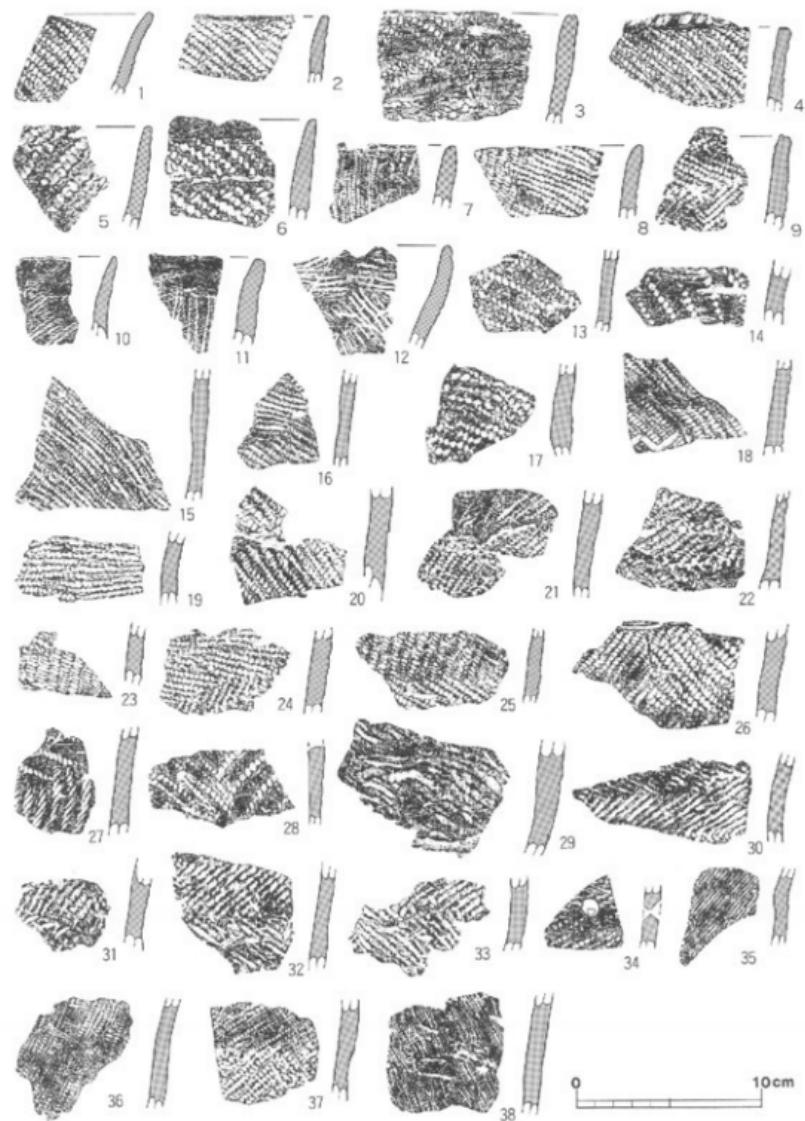
第13図 第2群土器-5

胴部片は図化した61点のうちおよそ90%に当たる52点が表面横位（24点）、斜位（28点）の条痕文で占められていた。表面横位条痕文のうち74・81は後から縦位条痕文が施文されている。表面は縦位条痕文のもの2点、無文のものは3点と少數であった。97・98・101・103は表裏とも無文である。47～55・58～67・97・98・101～104は胎土に雲母を、また63・73は石英を多量に混入していた。48・49・53・73・81・83・102・116には纖維は認められなかった。66は内面に炭化物が付着していた。78・98は屈曲部である。111は緩やかな波状線で、角頭状の口唇部に刻文を有していた。表裏横位条痕文で裏面はなでられている。114の口唇部はやや丸みを帯びる角頭状、115は丸棒状を呈していた。114は表面横位条痕文で内面は横なで、115は表面横位条痕文→縦位条痕文→なで、裏面は斜位条痕文である。

本類は茅山下層式に比定されるものが主体となるが、胴部片が多いため前後の型式が混在していると思われる。

第3類土器 第1・2類に相当する底部片を一括した。（第12図105・107～110・112・第13図117～122）

122が平底となる他は尖底状を呈する。107・120は無文で105は裏面に斜位条痕文、118・119は縦位条痕文が施文されていた。底部は胴部に比べて横位条痕文は少なく101の1点だけであった。尖底状を呈する底部に横位条痕文は施文しにくい方向であったと想像される。破片の胎土全てに纖維が混入していた。



第14図 第3群土器－1

第3群土器（第14図～18図：PL34～38）

縄文時代前期前半に相当するもので、縄文が多用され半截竹管状工具による沈線文が描かれ、胎土に織維を混入しているものを一括した。本群は第5群に次いで多く出土している。分布は3E～3Q区、3Z～4J区、4S～4Y区の3ヶ所に認められ、台地先端部からも若干出土している。集中区域は第1・2群と重なる4S～4Y区と北側3E～3Q区に見られた。器形と文様の特徴によりさらに4類に分類を行った。

第1類土器 ゆるやかに外反、もしくはやや直立気味に立ち上がる器形で、口唇部は平坦面を有するもの、丸棒状を呈するものが見られる。胴部は多種の縄文が施文されるものを一括した。

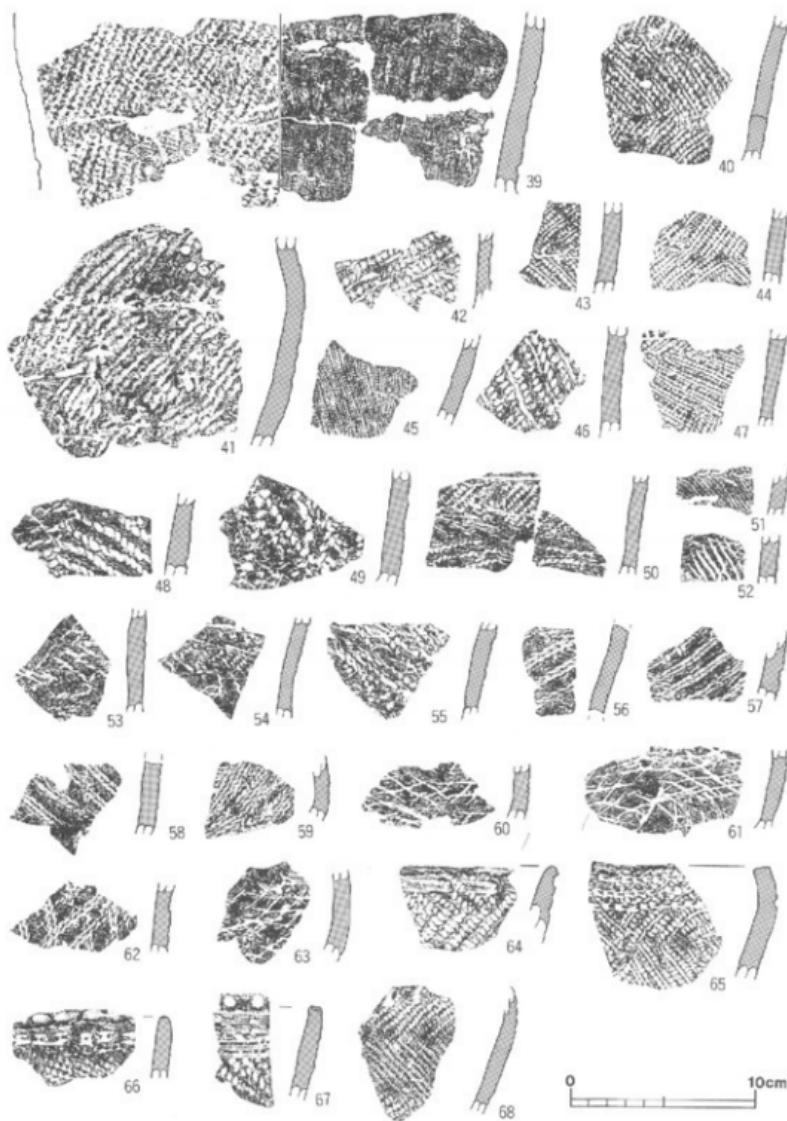
（第14図～第15図39～63）

1・2は波状縁である。いずれも単節RLで、2は裏面が丁寧に磨かれていた。3も波状縁で原体押圧か。4は口唇部に刻文を有し地文は単節RLである。2と同様に裏面は磨かれていた。6～8は平縁で9は口唇部直下の破片である。6は単節RL、7は単軸絡条体第1類で原体を2本巻き付けているもの、8はLR0段多条とR¹の直前段多条、9は単節縄文の結束である。10は平縁で先尖状の口唇部を呈し、縄文はR¹の直前段反撫と思われる。裏面は丁寧に磨かれていた。11は波状縁でL撫糸文、12も波状縁で波頂部に凹みを有しており、無節Lrが施文されている。

胴部片は口縁部同様に直線的となるものが多く、膨らむ器形はごくわずかである。29は無節R¹、31・35・41は無節Lrで31は不規則な爪形文、41も同様に不規則な円形竹管文が加えられている。30・32・33は無節の結束縄文である。32・33は同一片と思われる。単節RLは15・17・18・21で18は沈線による鋸齒状文が描かれている。34は単節LRか。14・49は単節RLの押圧と思われる。25・26・28・48は単節の羽状縄文で、48は結束していた。26は胴上部に半截竹管状工具による横位沈線文が巡っている。16はRL0段多条、23はLR0段多条縄文である。27はL¹直前段反撫とRL0段多条、39はLRL複節、54は単節LRと単軸絡条体第1類無節R¹か。胴部上半部には横位沈線文が巡っていた。51はS字結節文である。37は単節LR+¹の結束、43・47は単節LR+無節R¹と単節RL+無節Lrの羽状縄文で、47は胴部上半に半截竹管状工具による平行沈線文が描かれ沈線内には爪形文が連続していた。38・40・45・46は単節RL+無節Lr、42・44は単節LR+無節R¹である。単軸絡条体は第1類と第5類が見られた。第1類は4点出土し、56・62が無節Lrを2本、57は¹原体を同じく2本巻き付けたもの、58は単節LRと¹を1本ずつ巻き付けたものと思われる。第5類には61・63が相当し、60・61は同一片と思われる。無節R¹原体を1本ずつ交互に絡条体に巻き付け、器面に網目状を呈するものである。63も同様である。38は器面に40は裏面に炭化物の付着が認められた。

本類は花積下層式に比定される。

第2類土器 器形はやや外反するもの、直立気味に立ち上がるもの、内擣するものに大別され口唇部は丸棒状、角頭状、やや肥厚気味となるものなどバラエティに富んでいる。地文に縄文を



第15図 第3群土器－2

施し、その上より半截竹管状工具による直・曲線文が描かれ沈線内に爪形文や円形竹管文が充填されるものを一括した。文様によりさらにA・Bに二分した。

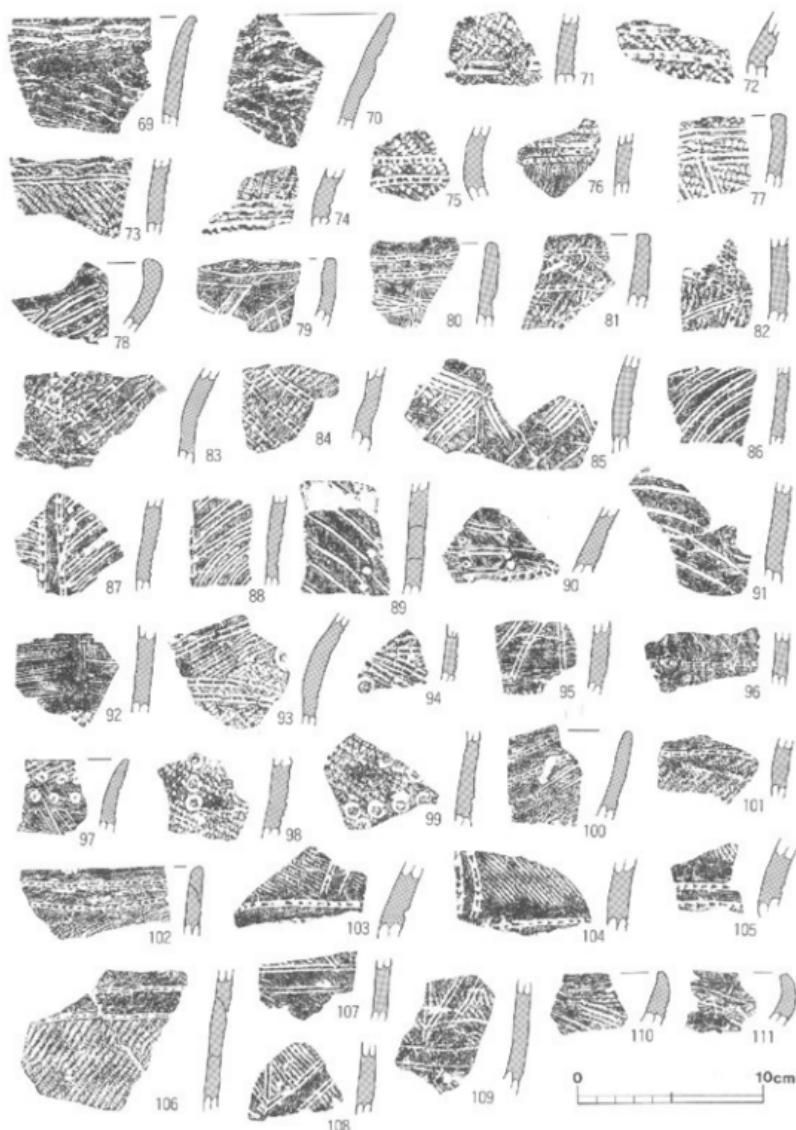
A. 口縁下に平行沈線もしくは短沈線文が巡り、胴部文様は横位沈線文が主体となるものである。
(第15図64~68・第16図69~76)

64は口縁部やや外反し、地文は単節の羽状繩文で口縁部に平行して半截竹管状工具による短沈線文が描かれる。65は波状線で角頭状の口唇部が内側している。地文は附加条件単節LR+無節Rの羽状繩文で、その上から波状線に沿い3列の押し引き文が描かれる。輪積み面に粘土紐接合強化のためと思われる溝が3ヵ所観察された。66は直立気味に立ち上がり、口唇部は丸棒状を呈する。口唇部に押圧が見られ地文繩文の上より、半截竹管状工具により「二」の字状の短沈線文が引かれる。裏面は丁寧に磨かれていた。67はやや外反気味で口唇部に平坦面を有し、ここに押圧が加えられる。地文は単節LRで1本引きの平行沈線文が巡り、沈線上に刺突が加えられる。69・70は外反する口縁部で先端部はやや丸みを帯びる。70は波状線で赤彩が一部観察された。ともに地文繩文で66と同様に「二」の字状短沈線文が口縁部と平行に描かれている。

68は口縁部直下の破片で、地文は単節の羽状繩文で押し引き文が加えられる。71・72は地文繩文で71は64と同様の短沈線文、72は半截竹管状工具による押し引き文である。71は65と同様の目的と思われる溝が輪積み面に2ヵ所観察された。73・74はともに多条繩文で73は平行沈線文、74は押し引き文と弧の浅いコンパス文が描かれる。75は地文単節LRで平行沈線文内に爪形文が充填される。76も地文繩文で75と同様の文様である。単軸絡条体か。

B. 口縁部に平行沈線文が巡り、垂下沈線文とその間に直・曲線文が描かれるもの。(第16図77~109・第18図158)

77は平線で角頭状の口唇部を呈する。地文は単節RLで半截竹管状工具による平行沈線文が口縁部横位に2条巡り、胴下半に向けて垂下する。78は波状線で口唇部は肥厚し、やや内側する。地文繩文で平行沈線文が描かれる。79・81は角頭状の口唇部で直立気味に立ち上がる。ともに直線的な平行沈線文が描かれ、81は沈線内に爪形文が連続している。80は波状線でやや丸みを帯びた角頭状の口唇部を呈している。地文は無文で口縁部に平行沈線文が2条巡り、垂下沈線文との交点に円形竹管文を配している。横位・垂下沈線文下に爪形文を連続させ垂下沈線で区画された両側の直線的沈線文間には爪形文は見られなかった。97は先細りの角頭状口唇部でやや外反気味となる。地文は無節の羽状繩文で、円形竹管文を2列配している。100は波状線で丸棒状の口唇部を呈し、地文は単軸絡条体第1類rを2本巻き付けたものと思われる。波状線に沿って平行沈線文が2条巡り、沈線間には爪形文が連続する。裏面は丁寧に磨かれていた。102は直立した丸棒状を呈する口縁部で、地文は附加条件単節LR+無節Rで、口縁に沿って2条の平行沈線文が巡り、沈線間は爪形文が連続している。



第16図 第3群土器-3

82は地文縦文で斜位の平行沈線文が描かれ、爪形文が連続する沈線とそうでないものが見られた。83は地文が無節LR、84はLR 0段多条と思われともに結節沈線文で直線文が描かれている。83は円形竹管文も加えられていた。85は地文単節LRで半截竹管状工具を2本用いて斜沈線文が描かれる。86~92は地文無文である。86~88は同様の文様と思われ、2条の押し引き沈線文が垂下し、その両側は連続する平行沈線文で曲線文が描かれている。89・91は1本引きの沈線文で施文され、89は円形竹管文列が並び、裏面は丁寧に磨かれていた。90は平行沈線文が巡りその間に円形竹管文を配していた。下半には押し引き文が見られる。92は櫛齒状工具による条線文で縱位→横位の順に施文される。表面には炭化物が付着していた。93・94は地文縦文、93は附加条単節LR+無節Rで押し引き沈線文が横位に巡り、爪形文が斜行して連続し円形竹管文が加えられていた。95・96は地文無文、96は胸下半に平行沈線文が巡り、沈線内に爪形文が連続する。沈線上方は鋸齒状文が描かれ、裏面は丁寧に磨かれている。98・99は地文縦文で98は単節RL、ともに円形竹管文列が並ぶ。101~106は同様の文様構成で地文は101が単節LR、103は単節RL、106はLR 0段多条で104・105は103と同一片と思われる。101・106は横位平行沈線文間に爪形文が連続し、沈線内は地文が磨り消されていた。103~105は半截竹管状工具による押し引き沈線文で、横位沈線上方に2条の曲線文が描かれる。101は器面に炭化物が付着していた。107~109は平行沈線文で区画文を描いている。107と109は同一片である。地文は単節RLで沈線内は磨り消されていた。158は口唇部と平行して縦文を付した高い隆帯が巡るものである。口唇部はやや丸みを帯びた角頭状で、口唇下に刺突列と平行沈線内に爪形文を連続させたものが巡っている。隆帯下は地文縦文で半截竹管状工具による鋸齒状文が描かれている。明瞭な無文部は作られていない。鋸齒状文は東北地方の影響を受けたものであろうか。

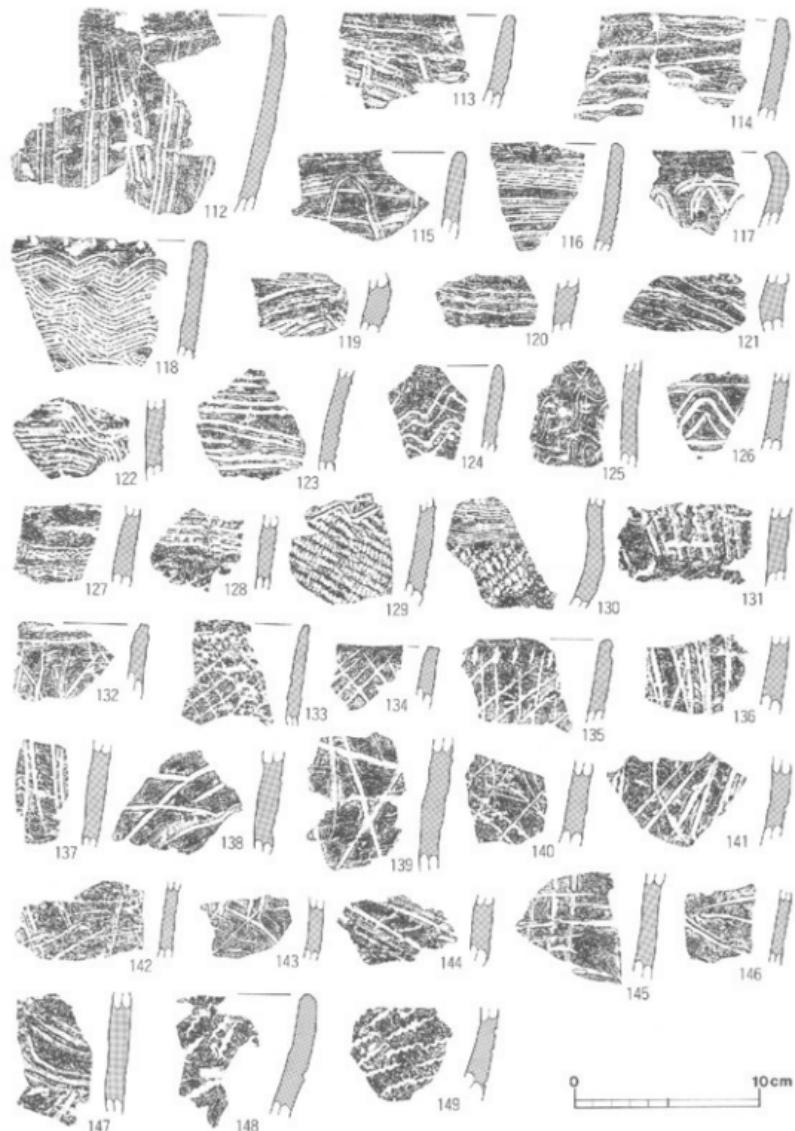
地文が磨り消され沈線間の無文部が明瞭となるものはより新しいものと思われる。

本類は黒浜式に比定される。

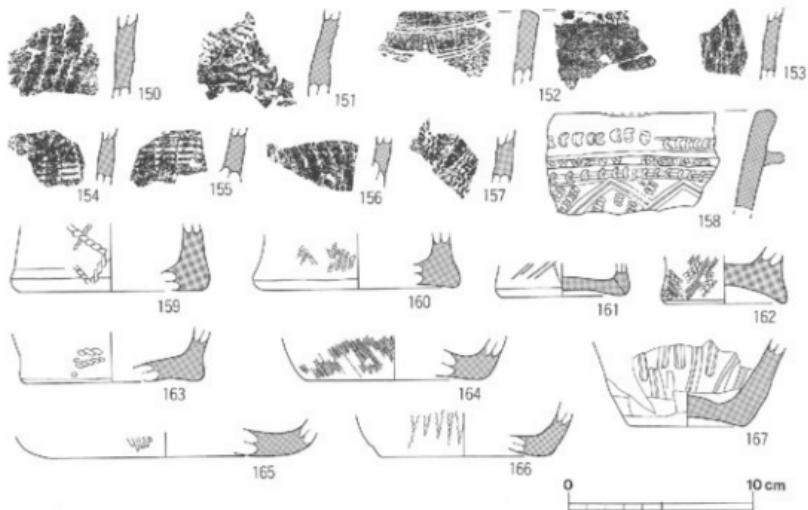
第3類土器 器形は内彎もしくは直立気味に立ち上がり、口唇部は平坦面を有するもの、丸棒状を呈するものである。地文は無文が主体で、集合沈線文が描かれるものを括した。文様によりさらにA~Cに分類した。

A. 集合沈線文により垂下文、波状文、横位沈線文が描かれるもの。（第16図110・111・第17図112~131）

110は口唇部が若干内傾するが器形は直立気味となるので斜位条線文が描かれる。111は口唇部に平坦面を有し内彎する器形で地文は縦文である。112・113は口唇部が丸味を帯び、112は条線文が垂下し、113は横位沈線文の後同一施文具により波状文が描かれる。115も同様である。114は平坦面を有する口唇部で幅の広い横位沈線文が描かれる。116は丸みを帯びた口唇部で横位に巡る沈線文が集合化している。117は面を有する内彎した口唇部で「且」状沈線文が描かれる。



第17図 第3群土器 - 4



第18図 第3群土器-5

118は丸棒状の口唇部を呈しここに刻文を有する。胴部は4本一単位の工具による波状文が描かれていた。119は斜条線文、120・121・123は横位沈線文、122・124・126は沈線による波状文で、122は彫齒状工具、124は半截竹管状工具、125は4本一単位の工具により、126は横位に巡る平行沈線文内に1本引きで3条の波状文が描かれている。128～130は地文無文である。129はRL0段多条、130は附加条と思われる。128は半截竹管状工具による短沈線文、129は平行沈線文と波状文、130は横位条線文が描かれる。いずれも胴部中位より下半は調文のみの施文であった。131は半截竹管状工具による垂下沈線文である。

B. 1本引き沈線により格子目文が描かれるものを主体とする。（第17図132～147）

132・134は口唇部が角張り、平坦面が明瞭である。134は波状縁で格子目文が左上・右下→右上・左下方向で施文されている。133は先尖状を呈する口唇部で文様は134と同じ順で施文されている。135は棱を有する口唇部で口縁下に「>」状の刺突列が並んでいた。

136・137は垂下沈線文、138～140は格子目文で138は横位→斜位・横位、139は縦位→斜位・横位、140は133と同じ順序で施文されている。141～143も沈線が交差し格子目状を呈する箇所もあるが全体に乱れていた。144・146・147は斜沈線文、145は格子目文で縦位→横位の順で沈線が施文されている。

C. 貝殻文が施文されるもの。（第17図148・149・第18図150～157）

148は口縁部で口唇部は丸棒状を呈し、口唇部から胴部にかけてサルボウ・ハイガイなどの

アナダラ属系貝類の腹縁が押捺されている。149・150も同様で、151は地文が無節RL+でその上より貝殻文が加えられている。152は波状縁で地文は単節LR、半截竹管状工具による曲線文が描かれる。口唇部内側に粘土紐接合強化のためと思われる刻文列が配されていた。153・156は同一片、154・155は貝類を用いた短沈線文である。

本類は東関東地方に特徴的な土器と思われる。

第4類土器 第1～3類に相当する底部片を一括した。（第18図159～167）

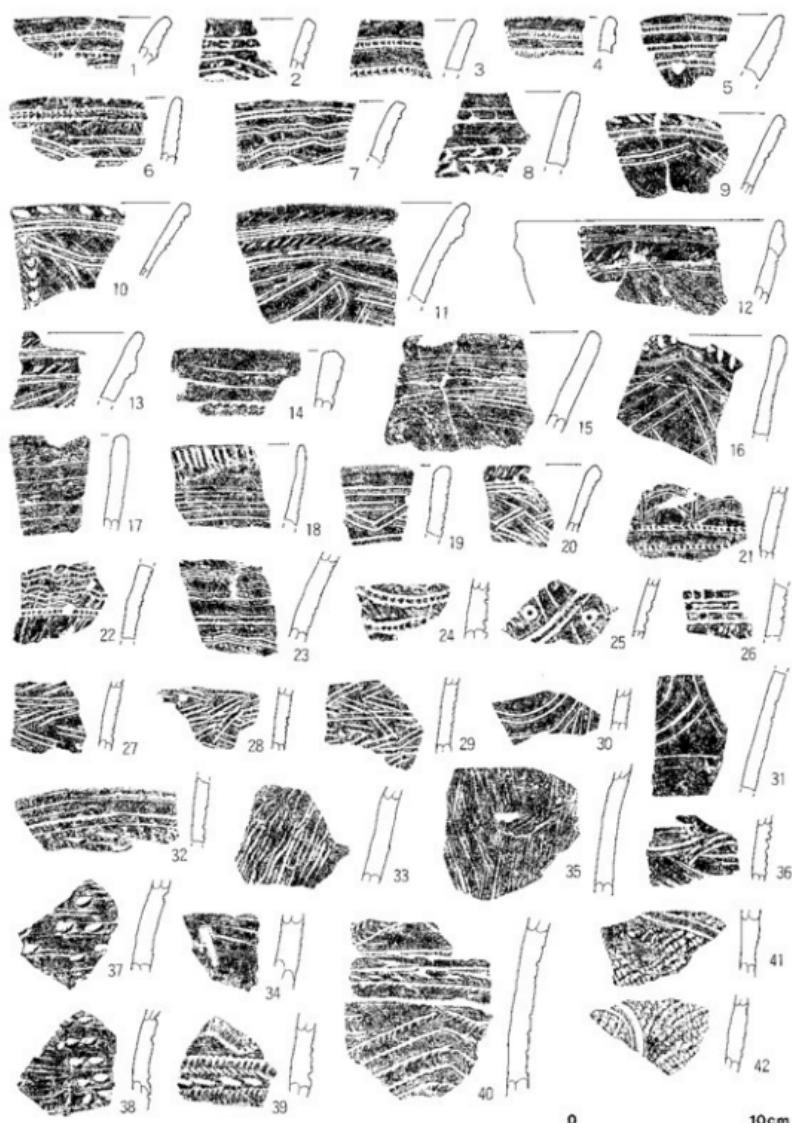
いずれも平底で上げ底状を呈するものが多く、かなり顕著な162は中心部が1cmほど上がっていた。159・160・162～164は繩文施文で163は単節RL、162・164は附加条、164は単節RL+とも思われる。161・165は条線文、167は短沈線文が垂下している。166はアナダラ属系の貝類押捺で167とともに裏面は平滑であった。

第4群土器（第19図～21図：P L 39～41）

繩文時代前期後半に相当するもので、胎土に纖維を混入せず平行沈線文による直・曲線文、条線文、貝殻文が多用されるものを一括した。分布は3F～30区、4A～4J区、4R～4Y区の3カ所に見られ、第1～3群まで変わらず集中域であった遺跡東側からの出土量が減少し、量的に多い範囲は北側へと移行している。台地先端部からは出土していない。器形と文様の特徴によりさらに5類に分類を行なった。

第1類土器 直立もしくはやや外反する器形で、口唇部は丸棒状を呈するものが多い。平行沈線文が多用され、直・曲線文が描かれている。沈線間に爪形文の連続が見られる。（第19図）

1～20は口縁部片で2・16が波状縁となる他は全て平縁であった。棱を有する口唇部も見られるが多くは丸棒状を呈する口唇部で、18はやや先尖状となる。1～7は口縁に沿い半截竹管状工具による押し引き爪形文が1～3条巡るものである。2は口縁下に刻文列が並び沈線間はなでられている。5は地文に無節Lrが施文される。6・7は口縁下のみ爪形文で胴部は平行沈線による直線文、波状文が描かれる。7は地文に一部垂下沈線文が認められた。8は押し引きではなく平行沈線間に爪形文が連続するものである。9・10は地文繩文で口唇部に棱を有し口縁下に幅広の刺突列、平行沈線文下には連弧状の文様を描いている。9は単節RL、10は単節LRで連弧文間に刺突列が垂下している。11～13は丸棒状の口唇部を呈し、口縁と平行に刻文を有する降帯文が巡っている。11・13は口縁部にも細い刻文を有し、半截竹管状工具による曲線文が描かれる。12は裏面が平滑に整えられていた。14・15・17は平行沈線文で14は沈線内に爪形文が連続していた。15は地文繩文で条線文が横走する。17は幅の広い沈線文、16は丸棒状を呈する口唇部に幅広の刺突列を有し、平行沈線文で菱形状の文様を描いている。18は先尖状の口唇部を呈しこよ



第19図 第4群土器 - 1

短沈線が垂下する。脇部は横位条線文であった。19は平行沈線文により三角文が描かれ、20は地文繩文で口唇部に刻文列が並び、平行沈線による「く」の字状文が描かれる。地文が繩文のものはいずれも平行沈線文間に明瞭な無文部を作り出してはいなかった。

21は脇下牛2列の平行沈線文が巡り、沈線内に爪形文が連続していた。上方は垂下沈線文間に連弧文が連絡している。22・23は地文繩文で平行沈線内に爪形文が連続し、波状沈線が描かれるもので23は平行沈線下にも波状沈線が描かれていた。22は表面は平滑に整えられていた。24は押し引き爪形文による曲線文、25は地文単軸絡条体でその上から1本の押し引き文で曲線文を描き、押し引き沈線文を挟んで円形竹管文が配されている。26は横位に巡る押し引き爪形文、27～29は平行沈線による「く」「>」状文である。30・31は連弧文で30は垂下沈線文、31は横位沈線文が連弧文下に描かれる。32は平行沈線文下に「二」の字状文、33～35は繩文で33は無節Lr、34は単軸絡条体第1類、35は単節LRと思われる。36は地文繩文で平行沈線による木葉状文が描かれる。37・38は同一片と思われる地文条線文で刺突が加えられる。39は連続する爪形文と刺突列が平行しており、上方に波状の押し引き沈線文が描かれる。40は平行沈線文間に爪形文が連続し、これを境として上・下方に爪形文を有する锯齒状文が描かれていた。41・42は地文単節LRに曲線的な平行沈線文が描かれるものである。

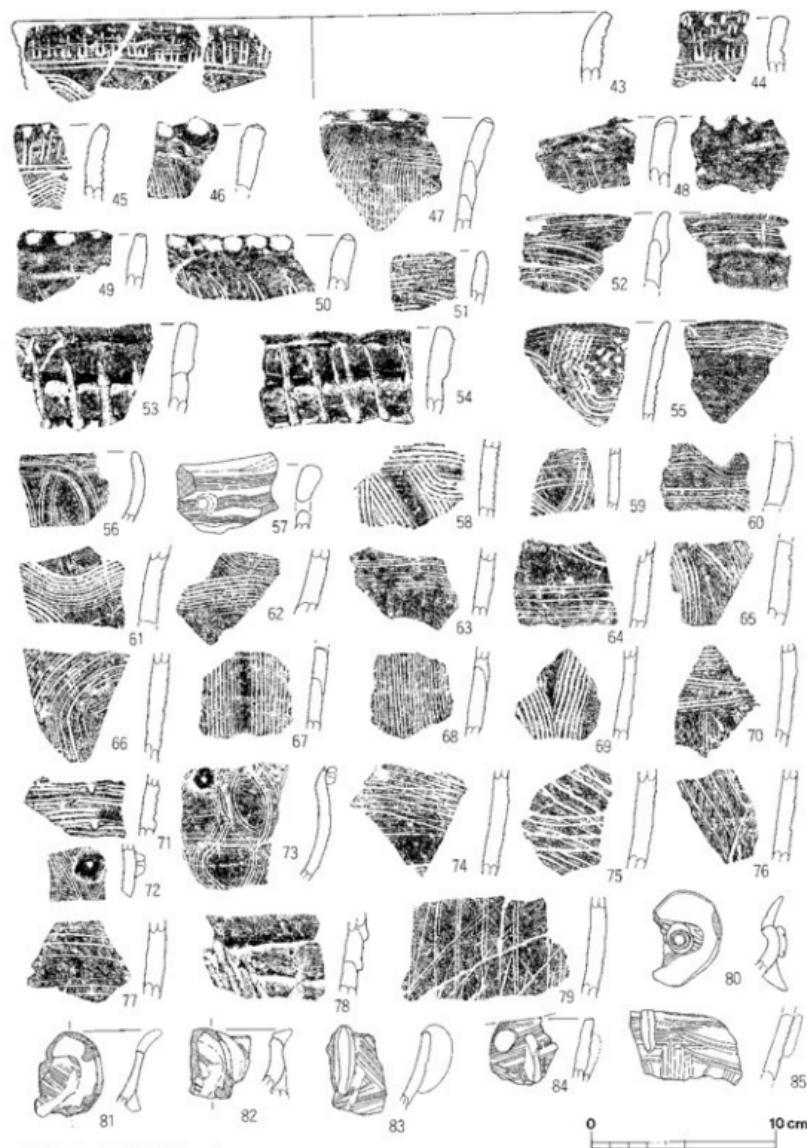
爪形文は口縁下もしくは脇部中位に巡る横位沈線内に連続されるものから、脇部の幾何学文内に施文されるものという流れが認められる。

本類は第3群第2類土器Bとした一群から文様の連続性が見られ、土器胎土中の纖維の有無による分類では型式学的な分類に対応できない現状が改めて浮き彫りにされた。

本類は諸碳a式に比定される。

第2類土器 やや外反する器形が多く、口唇部は丸棒状・角頭状を呈するのが主体となる。文様は集合沈線により直・曲線文を描くもので貼付文を加えるものもある。地文が繩文となるものは見られなかった。（第20図・第21図86～88）

43はやや外反する器形で角頭状口唇部を有している。口唇部刻文が見られ、口縁下半截竹管状工具による短沈線が垂下する。横位沈線文が巡り脇部は集合沈線により曲線文が描かれる。復元にやや無理があるか。44・45も同様に口唇部に刻文・短沈線が見られ、これを区画するように沈線が横走する。脇部はいずれも直線文で45は施肥状となる。46～50は口唇部に指頭痕が見られ、ともに条線文が垂下し47は横位条線文が加えられている。49は口縁部裏面に赤彩が観察された。51・52は横走する条線文で51はやや先尖状、52は外反し有段状の口唇部であった。52は口縁部裏面にも条線文が描かれていた。53・54は同一片と思われる。角頭状の口唇部を呈し刺突と鋸広の垂下沈線文が描かれる。口縁部は有段状を呈していた。55は先尖状口唇部で曲線文が描かれ空白部に刺突列が連続していた。裏面は横位条線文である。56は内側する先尖状口唇部で横位条線文



第20図 第4群土器－2

の後に対弧状文が描かれる。57は波状線で波頂部に向かいやや肥厚する口唇部で横位条線文が描かれる。表裏から穿孔された補修孔を有していた。

58～66は曲線文で60・61は同一片と思われ、63・64は横走する条線文が描かれる。67・68は条線文が垂下しており69・70は曲線文を描いている。71は横位条線文で縦位に点列が加えられる。72・73は対弧状文が描かれ刺突を有する円形貼付文が付される。ともに胴部が膨らむ器形である。74～77は曲線文、78は無文で祐土紐接合帯の部分を平滑になめておらず、文様効果として残している意図がくみとれる。その上から縦位のミガキがなされている。79は縦位→斜位と施文され格子目状となる。80～83は把手部で、80～82は耳状を呈しており地文は斜位の条線文である。80は耳状突起の中央に円形貼付文を付していた。83～86は地文が直線的な条線文で棒状貼付文が付されていた。84は波状線で円形貼付文が付され、85と同一片と思われる。86は貼付文の左右に条線文を沿わせており、胎土には長石を多量に混入していた。87・88は半截竹管状工具による集合曲線文で無文部はまったく作られていない。

本類は諸磯c式に比定される。

第3類土器 外反する器形で貝殻文が多用されるものを一括した。（第21図89～104）

89～93・95は口縁部で全て平線であった。89はハマグリ系の貝殻腹縁による波状文で2列となる波状文間に刺突が加えられている。90は丸棒状の口唇部で有段状を呈している。有段となる上方には指頭による押圧文が加えられ、有段部にまたがるようにアナグラ属系の貝殻腹縁による波状文が描かれる。91は貝種不明、押し引き状にしているのか。92・93は口唇部に刺突列を有し刺突下に細かな貝を押捺している。この貝種は不明であるが下半はともにアナグラ属系の貝殻腹縁による波状文である。93は貝殻背面により刺突文と三ヵ月状の隆起を作り出していた。95は丸棒状を呈する口唇部で刺突列が並び、ハマグリ系の貝殻腹縁による波状文が描かれる。

94・99～102・104はアナグラ属系の貝殻腹縁による波状文で104は平行沈線文が加えられていた。96～98はハマグリ系の貝殻腹縁による波状文。103は貝種不明、押し引きか。

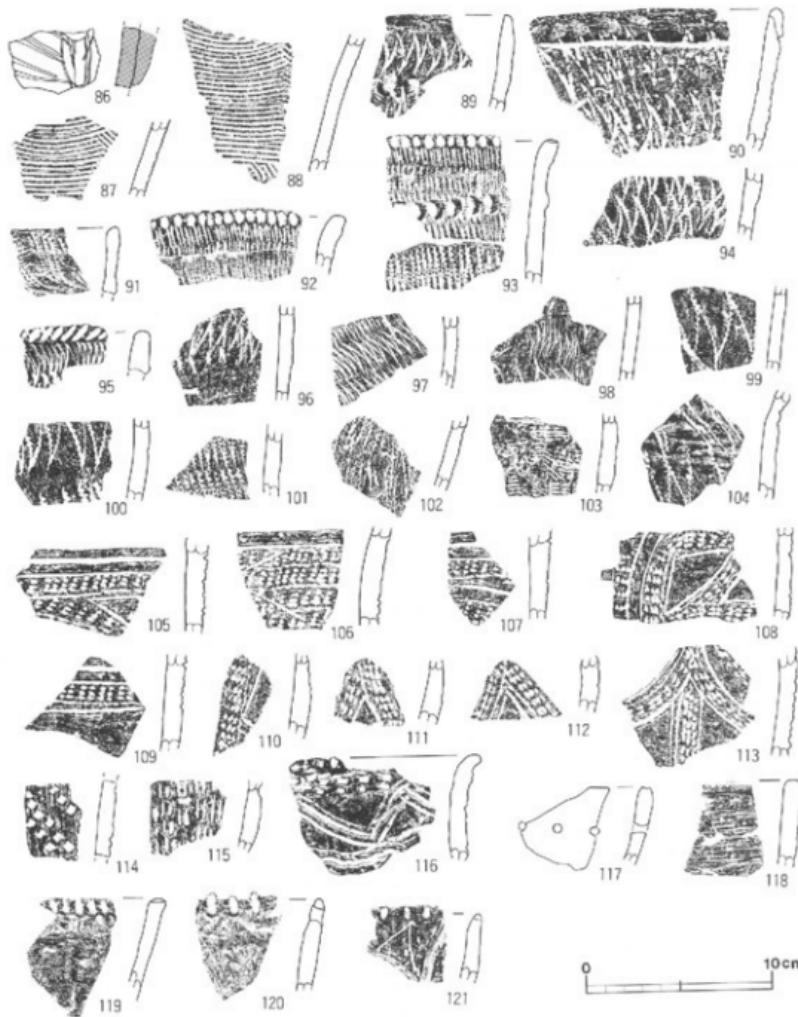
本類は浮島II式に比定される。

第4類土器 磨消貝殻文が描かれるものを主として一括した。（第21図105～115）

いずれも胴部片であった。105～113は平行沈線文で幾何学的な文様を描くもので三角形のモチーフが多く見られた。105・107・109は幾何学文を描く工具とは異なる太い沈線が文様上部に縦位に巡っている。106は充填文ではなく、無文部を作り出す意図は感じられない。113は垂下沈線文で右上方は平行沈線による区画が見られなかった。108・111は同一片と思われる。114・115は貝殻文が見られないもので114は刺突列、115は垂下する短沈線列が加えられていた。

本類は興津式に比定される。

第5類土器 第1～4類以外の土器を一括した。（第21図116～121）



第21図 第4群土器 - 3

全て口縁部である。116は先尖状口唇部が外傾するものでここに刺突列が加えられる他に、口唇部に平行して2列の刺突列が配されている。地文は無文で絞齒状文・波状文が描かれていた。117は波状線で少し凹みを有する角頭状口唇部を呈する。無文で3孔の焼成前穿孔が等間隔に穿たれている。118は横走する条線文で第2類に属するものかもしれない。119～121は口唇部に刺突が加えられるものである。119は丸棒状の口唇部を呈しここに其種不明の貝殻による刺突が加えられていた。口唇部直下は磨き残されており文様効果としているような意図がくみとれる。120・121は先尖状を呈する口唇部で120は垂下する条線文の後なでており、121は2種の棒状工具により細・大沈線文が描かれていた。

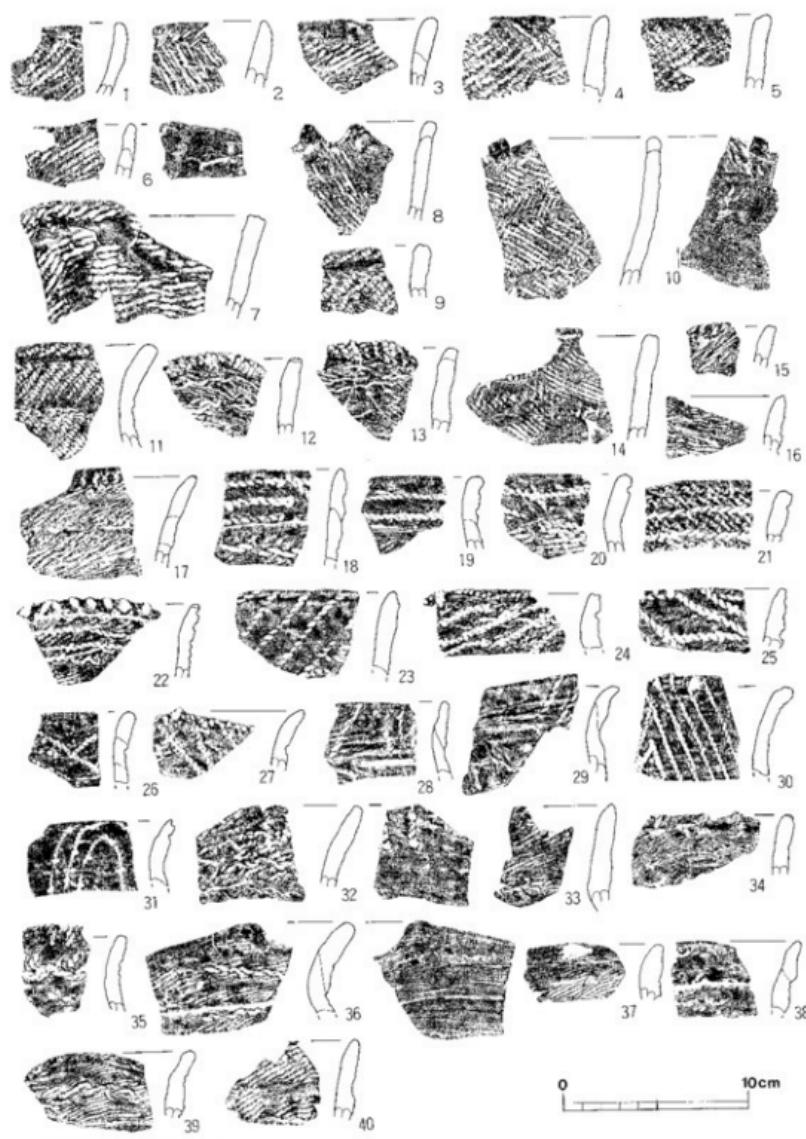
第5群土器（第22図～26図：P L 42～46）

縄文時代前期末葉から中期初頭に相当するもので、主として多種多様な縄文が施文されているものを一括した。遺跡からの出土量は本群がもっとも多く、分布は3J～3O区、4A～4J区、4M～4Y区と3ヵ所に認められ、台地先端部からは散発的に出土していた。最も多く出土したのは4M～4Y区で集中区が前群より再度東へ移行している。器形と文様の特徴によりさらに6類に分類した。

第1類土器 斜縄文が多用されるものを一括した。（第22図1～17・第23図54～79）

1～5は平縁で1はやや内脛、他は直立気味に立ち上がる器形を呈している。1は単節、2・3は無節と思われ4・5は単節縄文が羽状に施文されている。6～8は波状線でいずれも外傾していた。6は先尖状の口唇部を呈し無節縄文の後から条線文が施文されている。7は口唇部に平坦面を有し、ここと胴部に無節Lrが施文されていた。8は波頂部が二コブ状を呈しており7と同様に口唇部と胴部に無節Lrが施文されている。9・11は平縁で幅の広い口唇部と胴部に単節LRが施文されている。10は波状線で口唇部に梢円形の浮文が付されている。口唇部は浮文の右側は無文、左側は縄文が施文されていた。胴部は単節縄文で裏面は口唇部が無文となる側に斜沈線文が加えられている。11は抉れる器形を呈し、12・13は波状線で直立気味の器形となる。いずれも波頂部が二コブ状を呈しており、平坦となる口唇部には外面と異なる縄文が施文されている。14～17は平縁で14～16は直立、17は外傾する器形である。14は口唇部平坦面に単節LR、外面は無節R lが施文されていた。15～17も口唇部に縄文が施文されている。15・17は外面附加条、16は無節縄文か。

54～79は胴部片でいずれも直立する器形を呈している。54～60・67・68・70～72は無節Lrで55は結束していると思われる。57は結節縄文、62・69・73は単節LR、66は附加条。75・78・79は単節RL、61・63～65はL〔〕直前段反撲、74は多条縄文か。76は単輪絡条体第1類rと思わ



第22図 第5群土器 - 1

れ本類より外れる可能性が高い。77は附加条が結束したものか。79は原体の端が観察された。

第2類土器 側面押圧縦文、羽状縞文が多用されるものを一括した。（第22図18～32・第24図80～91）

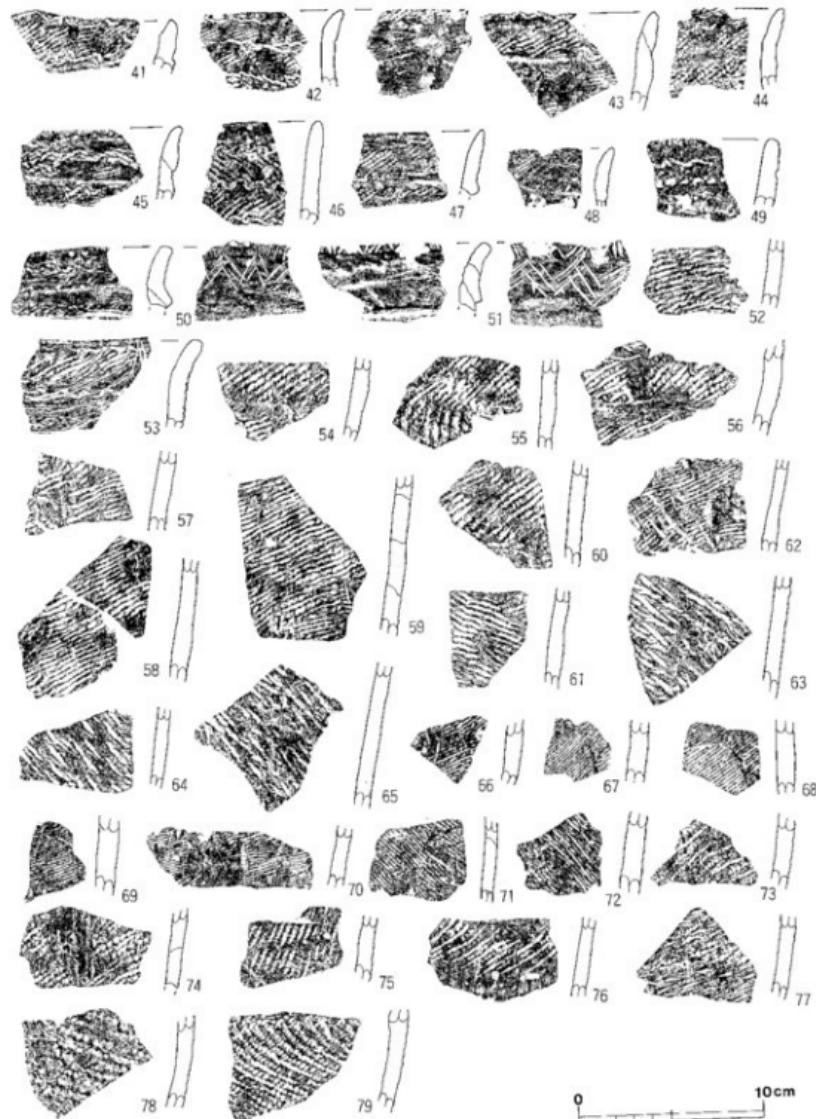
18～22は平縁である。18は口唇部先尖状、21は丸みを帯び、他は丸味を帯びた角頭状を呈している。器形は19・20が緩やかに抉れ他はほぼ直線的に立ち上がるものである。18～20は口唇部無文で、口縁部に横走する2列の側面押圧が加えられていた。いずれも無節である。18の胸部は結節、19は単節LR、20は無節Lrであった。21・22は口唇部に文様があるもので21は縦文、22は半截竹管状工具による刺突列が連続している。ともに横走する側面押圧が加えられており、21は単節が2列、22は無節が3列である。22の地文は無節Lrと思われる。23・24は平縁で23は口唇部先尖状を呈しほぼ直線的に立ち上がる器形、24は角頭状の口唇部で緩やかに抉れる器形を呈している。ともに側面押圧が斜行して施されているが、23は無節、24は単節で結節部を有している。口唇部にも同じ原体で押圧が加えられており、24は円形竹管による刺突も見られた。25～27は無節の側面押圧が鋸歯状に幅広く加えられるものである。25・26は平縁、27は波状縁で25・27は先尖状、26は丸棒状の口唇部を呈している。器形は25・26が直立気味となり、27は外傾している。26は口唇部無文、25はヘラ状工具による刻文、27は波頂部に刻文、他は円形竹管文が施されていた。27は押圧される原体に結節部を有している。28・29は接合資料で、28の左側に29が接合した。波状縁で先尖状を呈する口唇部を有し外反する器形である。垂下する無節の側面押圧と斜行する側面押圧が3列加えられている。30は平縁で外傾する器形を呈し、無節の側面押圧が間隔を狭く鋸歯状に加えられ口唇部も同様であった。31は平縁、外傾する器形で先尖状の口唇部を呈している。無節で結節を有する原体側面を連弧状に押圧している。32は波状縁で器形は外反し角頭状の口唇部を呈している。口唇部には縦文と側面押圧が加えられ、波頂部裏面には結節を有する無節の原体を2列縱位に押圧している。外面は波頂部下に横位1列、縱位2列の押圧が加えられていた。

80は口縁部の欠損したもの、81～91は胸部片でともに直立した器形を呈している。80は単節RL、89は単節LRで原体の端が一部観察された。81～83・85・86・91は単節縦文の結束である。87は単節RLと無節RLを羽状に施文している。88は単節と無節の結合に結節付きの縦条体を転がしたものと思われる。90は無節の結合、91は縱位に原体を転がしており結節部が垂下して表れている。

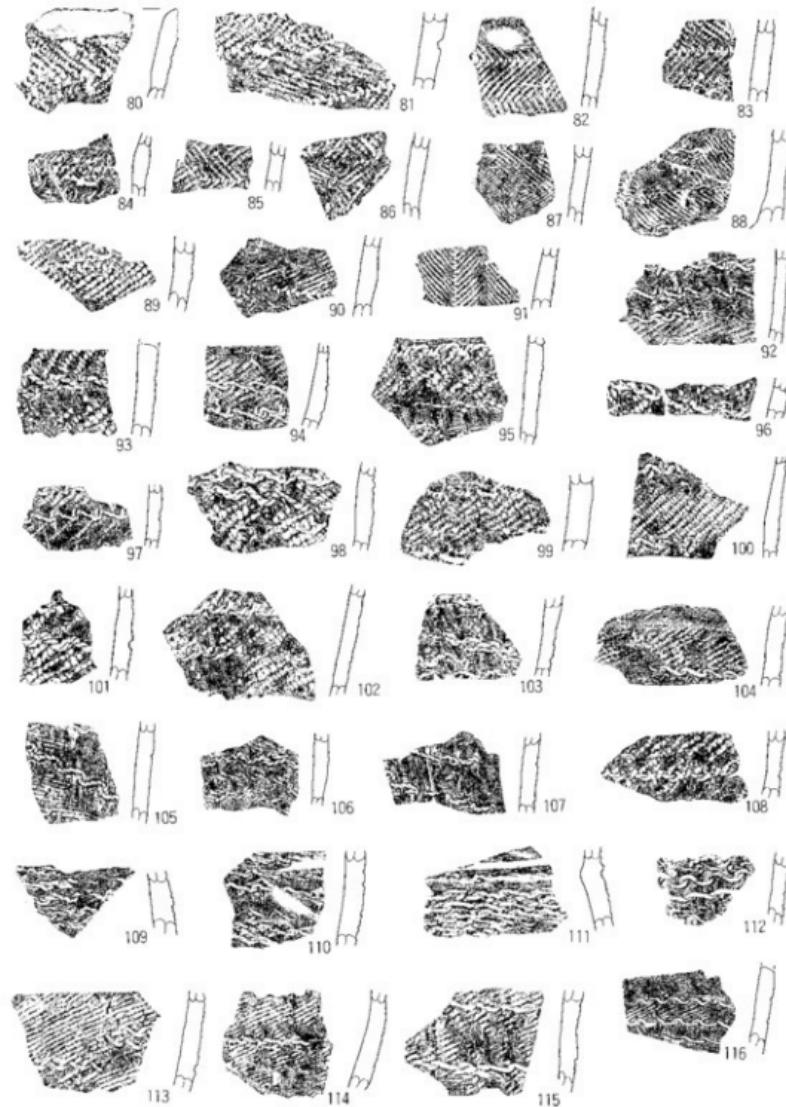
第1・2類は東関東地方に特徴的な土器である。

第3類土器 結節縦文が多用されるものを一括した。口縁部は棱を有して有段状となるものが主体であった。（第22図33～40・第23図41～52・第24図92～116・第25図117～124）

33は波状縁、屈曲する器形で口唇部は先尖状を呈する。無節の結節である。34・35は平縁で34は直立気味、35は外反する器形を呈する。口唇部は丸棒状でここに縦文の押圧が認められ、35は

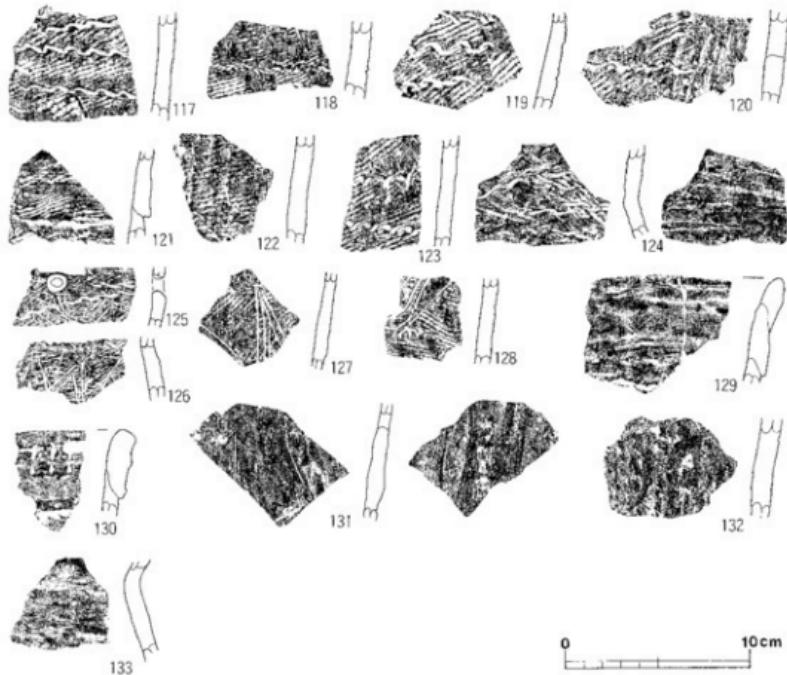


第23図 第5群土器-2



第24図 第5群土器-3





第25図 第5群土器-4

結節縄文であった。36は波状線で突起を有し器形は外反し抉れている。文様は無節の結節縄文である。37・38は平縁でやや外反氣味の器形を呈する。37は無節の結節か。39は波状線で外反する器形を呈し結節縄文が施文されていた。40は平縁で口唇部は先尖状を呈し、文様は多条縄文と思われる。41は緩やかな波状線で口唇部にも縄文が施文されている。42は平縁で先尖状を呈する口唇部の裏面にも縄文が施文されており、外面には2種類の結節縄文が認められた。43は平縁で平坦面を有する口唇部には連弧状に縄文が押圧され、腹部は単節の結節縄文が施文されている。44～47は平縁で先尖状口唇部を呈し、ここに縄文を施文している。ともに単節の結節縄文であった。48はやや外反する器形で先尖状の口唇部を呈し、集合細沈線による鋸歯状文が描かれる。口縁部に平行して刻文を有する隆帯文が巡っていた。49は平縁で口唇部は丸棒状を呈する。結節縄文か。50・51は平縁で裏面に細沈線による鋸歯状文が描かれる土器である。50は口唇部に細沈線と円形刺突が加えられている。51は口縁部に刻文を有する突起を付し、口唇部にも鋸歯状文が描

かれていた。いずれも結節縄文である。52は胴部片で無節Lrであった。

92~124は胴部片、直立気味となる器形が大半で109は内傾し、111・124は屈曲部を有していた。いずれも結節縄文が多用されるもので、結節の幅が狭いものと広いものに分けられる。また結節間を磨消しているものも少なくない(92・95・107・110・116)。111は胴部中位に横走する沈線が1条巡り、120は縄文施文後にタテ方向に削られていた。124は有段部が残っており口縁部直下と思われる。

本類は下小野式に比定される。

第4類土器 地文が縄文で条線文により曲線文が描かれるものを一括した。(第23図53・第25図125~128)

53は平縁でやや外傾する器形を呈する。口唇部は角頭状で地文は無節Lrが結節しており間隔の不規則な弧状の文様が口縁下より描かれている。

125~128は胴部片である。125・126は内脣、127・128は直立する器形を呈する。125~127は地文が無節Lrで128は単節RLである。いずれも曲線的な文様が描かれ126は鋸齒状文であった。125は両側より穿孔された縫修孔を1孔有している。

第5類土器 無文土器を一括した。(第25図129~133)

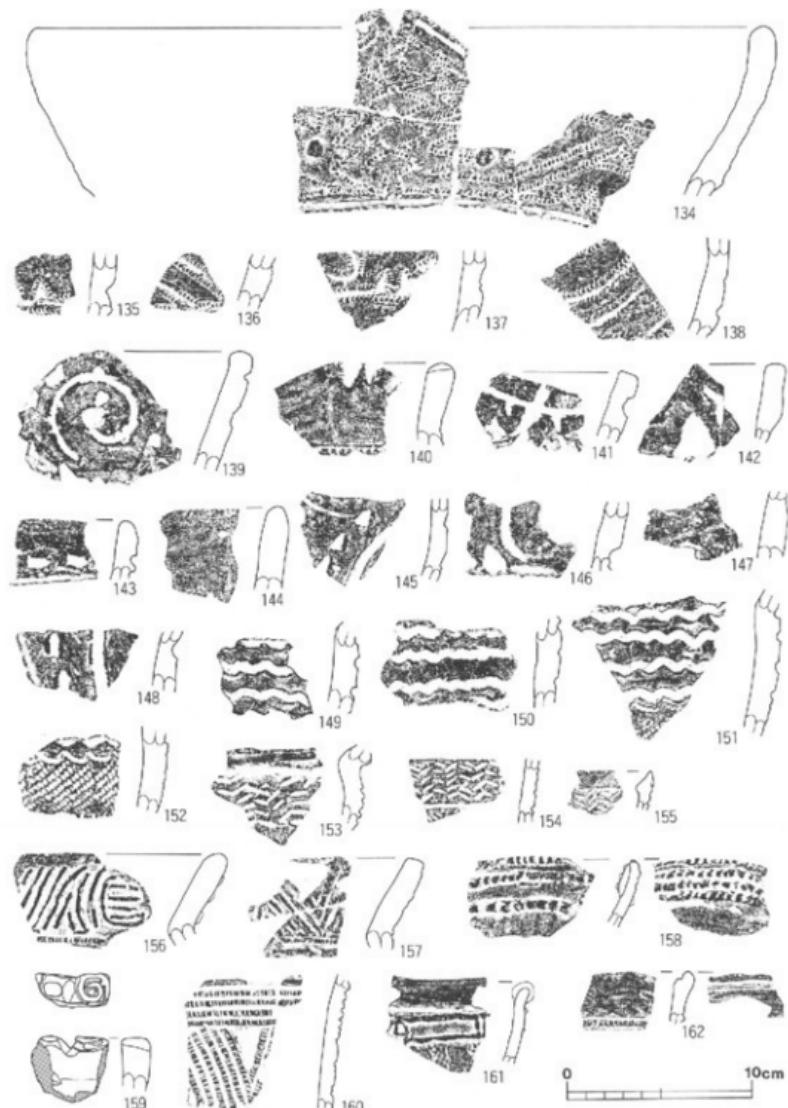
129・130は口縁部で器形はほぼ直線的に立ち上がっている。129は先尖状、130は丸味を帯びた角頭状口唇部を呈し、ともに有段状を呈しながらされている。130は口縁下に2列の刻文が巡っていた。131~133は胴部片で133は屈曲部、131・132は直立する器形である。131・132は外面タテミカキ、133はヨコミカキ、131の内面はタテ削りが施されていた。

第6類土器 その他の土器を一括する。文様によりA~Dに分類した。

A. 半截竹管状工具による押し引き沈線文が描かれるもの。(第26図134~138)

134は波状縁で波頂部に短沈線が1条加えられ二コブ状を呈している。波頂部には円形浮文が3ヵ所付されており波頂部の短沈線から波底部の浮文間にかけて沈線文が1条巡っている。頸部に横位沈線文が1条巡り、口縁部からこの頸部沈線文間に押し引き沈線文により直線的な文様が描かれている。文様構成は複雑で、波頂部より垂下沈線で始まり頸部沈線に再び垂下沈線で連絡する4つの山を有する鋸齒状文が対向して菱形を作るよう2条垂下している。この両側にも鋸齒状文が垂下し、波底部の円形浮文部を頂点とする2重の三角文に2条の鋸齒状文が連絡している。三角文内は横線と鋸齒状文が描かれていた。また垂下する鋸齒状文と三角文間に円形浮文が付されていた。

135~138は胴部片である。138がやや内脣気味となる他は直線的に立ち上がっている。135・136は直線的な文様で135は三角形の彫刻文が施されている。137は直線文と曲線文が組み合わされ、やはり細かい三角形の彫刻文が見られた。138は曲線文である。



第26図 第5群土器－5

B. 太い沈線により曲線文が描かれ、刺突・彫刻文が加えられるもの。（第26図139～148）

139～144は口縁部で143・144が平線となる他は波状線である。139は波頂部で逆「の」の字状沈線が描かれ、この下方に一对の三角形の彫刻文が加えられる。140も波頂部で3条の短沈線が口唇部に垂直に引かれていた。屈曲部は平行沈線間に爪形文が連続しており口縁部から頸部までは無文である。141・142は波頂部下にあたる。141は波状線に沿って沈線が1条巡りここから角状の彫刻文が突出している。142は大形の三角形を呈する彫刻文と「>」状の沈線が描かれる。143は口縁下に沈線が1条巡り、沈線上方に半截竹管状工具による刺突列が巡っている。144は無文である。いずれもやや外傾する器形を呈し、141が角頭状となる他は丸棒状の口唇部を呈していた。144・147・148は第9群土器に相当するものかもしれない。

145～148は胴部片である。145がやや内側する他は直立気味となる器形である。いずれも沈線により曲線的な文様が描かれ145・148は沈線間に刺突列、146は三角形の彫刻文が加えられている。

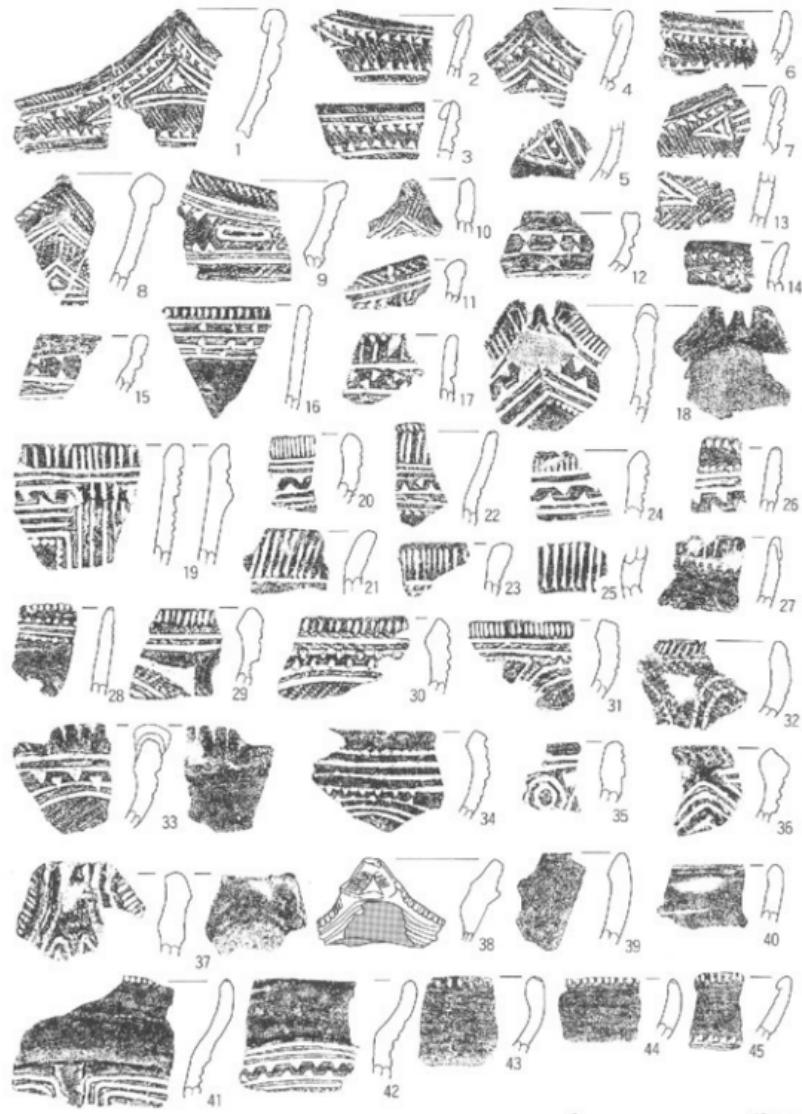
C. 沈線による波状文・矢羽状文が描かれるもの。（第26図149～155）

149～152は波状文が描かれるもので149・151は内面上方に屈曲部を有している。波状文間は無文で151・152は波状文下に単節LRの結節繩文が施文されていた。

153～155は矢羽状文が描かれるもので155は口唇部が先尖状で内削ぎとなっている。口縁下には有段状を呈しここに単節LRが施文されていた。他は胴部片、153は屈曲部でここに隆帶文が巡っており胴部下半に文様が施文されている。胎土には雲母を多量に混入していた。154は横走する沈線により区画され上方は矢羽状、下方は単節RLが施文されている。矢羽状文の上方にも沈線が巡っていた。

D. 微隆起線文で文様が描かれるもの。（第26図156～162）

160を除き全て口縁部である。156・157は外反して頸部に屈曲を有する器形である。156は丸棒状の口唇部を呈し微隆起線文で横位隆線を4条有する円形文と、これを問む対弧文・斜行文が描かれ、屈曲する頸部には押し引き爪形文が巡っている。157は角頭状の口唇部を早し微隆起線文による鋸歯状文が描かれ、156と同様に頸部押し引き爪形文が巡っている。158は内側する器形で口唇部には押し引き爪形文、外面は並走する2列の隆帶文上を押し引いている。内面は貼付が巡らされ有段となり、ここに3列の隆帶文が並走し爪形文が押し引かれていた。159は突起が二コブ状で一方は無文の円形、一方は逆「の」の字状沈線が描かれていた。器面は無文である。160は胴部片で刺文を有する平行沈線文が胴上半に数条巡り、下半は同様の沈線により斜行文が描かれる。沈線が接すことのない部分は三角形の彫刻文が彫られていた。161は波状線でやや外傾して立ち上がる器形である。波状線に沿って沈線が1条巡り、微隆起線文による窓状区画がなされ区内にも隆帶による垂下文と円形区画文が付されていた。地文は単節LRで区画内は無文である。162



第27図 第6群土器-1

0 10 cm

はやや外傾して立ち上がる器形で低い突起を有している。口縁部に無文帶を有し頭部の平行沈線文間には刻文が連続している。裏面は口縁部に沿い沈線が2条巡っていた。

第6群土器（第27図～29図：P L 47～49）

縄文時代中期初頭に相当するものである。分布は3K～3T区、4C～4J区、4R～4Y区の3ヵ所で台地先端部からの出土は認められなかった。量的には3K～3T区が最も多く出土しており、次いで4C～4J区であった。4C～4J区は第5群の分布と量的にも重なっている。3K～3T区が多い点は第1～4群でも見られなかったことである。器形と文様の特徴により以下の2類に分類した。

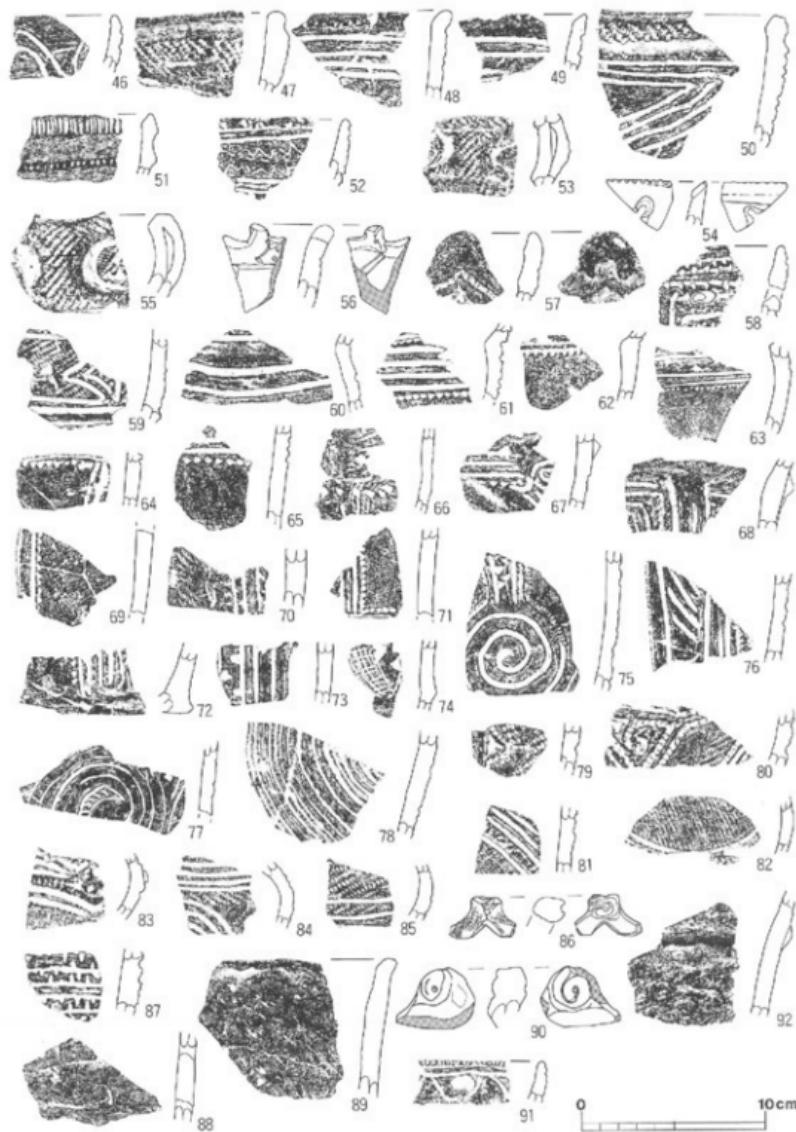
第1類土器 口縁部に沿って沈線により区画される文様帶を有し、この沈線に沿って刻文列が巡るものの一括した。地文と口縁部の文様によりさらにA～Dに分類した。

A. 地文が縄文となるもので口縁下に刺突・短沈線文が見られないもの。（第27図1～11・13・第28図53・55）

5・13が頭部である他は口縁部片である。1・2は同一片と思われる。波状縁で外傾する器形を呈し内側に肥厚する口唇部を有する。地文は単節RLで波状縁に沿って2列の沈線が巡り頭部に水平に沈線を巡らせてここを口縁部文様帶としている。沈線に沿って三角刻文列が対向して連続しており波頂部下は二重の三角文が描かれていた。三角文の中央は彫刻文である。3～6・8・10・11・13も同様の文様と思われるが8は刻文列が見られなかった。3・4は地文単節LRである。7・9は口縁部文様帶は同様であるが7は内側に彫刻文を有する小さな三角文が、9は文様幅が狭くなる箇所に橢円区画が描かれている。53・55は橋状把手部で把手は器面より浮いていた。55は鉢形を呈する器形の波底部にあたり、把手の両側に沈線によるX画文と刻文列が描かれている。53も沈線の一端が観察された。いずれも単節RLである。

B. 地文が縄文で口縁下に刺突・短沈線文が加えられるもの。（第27図14・37・第28図47）

14は平縁でやや外傾する先尖状の口唇部を呈し口縁下には2列の三角刻文が加えられる。地文は単節RLであった。37は波状縁で波頂部に空白部を作らず、口唇部より直接口縁に沿った沈線が描かれる。沈線は結節沈線と棒状工具による沈線が併用されており、左側は2条の結節沈線文、右側は外側2条が棒状工具による沈線文、内側1条は結節沈線文となっている。内側の結節沈線文間は同様に結節沈線文による曲線文が描かれていた。沈線間の両側は刻文列が連続し、地文は単節RLであった。47は平縁で丸棒状の口唇部を呈しやや直立気味の器形となる。口縁下に太くて浅い沈線が1条巡り下方に直線文の一端が観察できる。地文は単節LRで文様の特徴から第8群に相当する土器と思われる。



第28図 第6群土器-2

C. 地文が無文で口縁下に刺突・短沈線文が見られないもの。（第27図12・15・第28図57）

12・15は波状線で外傾する器形を呈し、口唇部は角頭状で内側はやや肥厚している。口縁部に沿って対向する刻文列を有する1条の沈線により区画文が描かれ、下端は横位沈線が巡っている。57は波頂部で波状線に沿い結節沈線文が1条巡り、その下は結節沈線に平行に棒状工具による沈線が描かれている。結節沈線と棒状工具による沈線の併用例である。波頂部裏面は弧状の貼付が付されている。刺突は見られず胎土には雲母を多量に混入していた。

D. 地文が無文で口縁下に刺突・短沈線文が加えられるもの。（第27図38）

波状線でやや外傾する器形を呈している。波頂部は平坦で波頂部下に貼付により彫刻文を意図した三角文を作り出している。この三角文の左右と口唇部に刻文列が連続している。口縁下は波状線に沿って3条の沈線が巡り、沈線下に刺突の一部が観察される他は器面が大きく剥落していた。

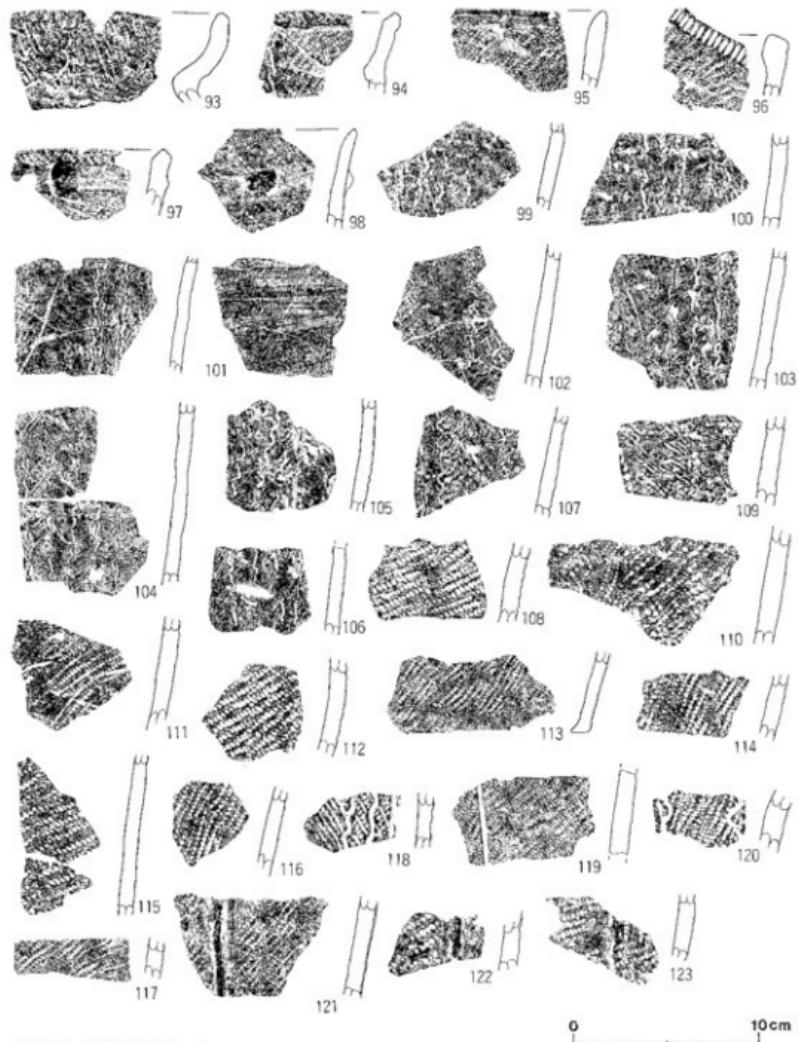
第2類土器 口縁部に沿って沈線により大きく区画される文様帶が消失し、胴部に向かい文様帶が作り出されるものを主として一括する。地文と口縁部の文様によりさらにA～Dに分けた。

A. 地文が縄文で口縁部に刺突・短沈線文が見られないもの。（第27図33～36・48・50・86）

33は平縁で沈線文を有する楕円形突起を付している。内壁する器形で口唇部は内側に肥厚し、口縁部には沈線が2条巡り、胴部の曲線文との間には三角形の交互刺突が刻まれている。地文は単節RLである。34は平縁で器形は内窪し、内側に稜を有する角頭状の口唇部である。口縁下に4条の沈線が巡り1条目と3条目は刺突の連続により沈線状の文様としていた。胴部は曲線文でここと4条目の沈線間に楕円形の交互刺突が施されていた。35は波状線で丸棒状を呈する口唇部がほぼ直線的に立ち上がっている。平行沈線文下に同心円状の文様が描かれ、三角形の彫刻文が見られた。地文は磨り消されている。33・34ともに口縁下平行沈線文と胴部曲線文間に交互刺突が加えられている。いずれも胎土に雲母を多量に混入していた。36は波状線でやや外傾する器形を呈し口唇部は肥厚している。大きく外削ぎ状となる箇所にも単節LRが施されていた。沈線による多重の三角文の各一角が接するように描かれこの交差部に突起を有していた。48・50は平縁で外傾する器形を呈し、口唇部は48がやや先尖気味で内削ぎ状、50は角頭状で内側に稜を有している。48は平行沈線文が4条巡り、胎土には石英を多量に混入していた。50は口縁下浅い沈線と胴部三角文の上方を巡る1条の沈線に挟まれて若干隆起気味となっている。下方には多重の三角文が描かれ区画内は磨り消されていた。いずれも地文は単節RLである。80は把手部で波頂部はここを作る粘土が集合したままで整形されておらず、裏面は渦巻き状の貼付が付されていた。波頂部に沿って三角形の透かし孔が作られており地文は単節RLである。

B. 地文は縄文で口縁下に刺突・短沈線文が加えられるもの。（第27図29～32）

30が波状線となる他は平縁である。程度の差はあるが皆口唇部が内側に肥厚しており、31は角



第29図 第6群土器-3

頭状を呈している。29は口縁と平行に沈線が2条巡り副部に曲線文が描かれ、この口縁と副部の沈線間に三叉状沈線文が描かれている。三叉文が聞く先に円形沈線の痕跡があり玉抱き三叉文であったことがうかがえる。30は33と同様の文様で交互刺突が楕円形である点が異なっている。31は口縁部に沿って棒状工具による沈線が2条巡り下半は直線的な区画文が描かれるが、左側は結節沈線、右側は棒状工具による沈線で施文されている。平行沈線文とこの区画文間に楕円形の交互刺突が加えられていた。32はすべて結節沈線で施文され口縁下に沈線が1条巡り、下半は沈線が2条単位で曲線文を描いている。口縁下沈線と曲線文が垂下してできた空白部に三角形の彫刻文が見られた。いずれも地文は单節RLである。

C. 地文が無文で口縁下に刺突・短沈線文が見られないもの。（第28図46・49・58）

46・49は平縁で曲線文・平行沈線文が描かれている。58は波状縁で口縁部に沿い2条の沈線が巡り、この沈線上に半截竹管状工具による交互刺突が加えられている。この交互刺突により沈線間に波状を呈する結果となっている。下方は直線文により区画文が描かれ、ここにも交互刺突が加えられていた。両側より穿孔される補修孔を1孔有している。46・49は本群に相当するか不確実な破片である。

D. 地文が無文で口縁下に刺突・短沈線文が加えられるもの。（第27図16～28・第28図52・56）

16・17は平縁で丸棒状を呈する口唇部が外傾している。16は口縁部刺突下に4条の沈線が平行に巡り、沈線間に楕円刺突が継位3列にややずれて加えられている。17は口唇部に刺突列、口縁下に短沈線文が加えられ、短沈線文下は沈線が2条巡り、沈線間に三角刻文が2列加えられている。18は波状縁で波頂部に2条の深い凹みを有し、波状縁に沿って短沈線列が連続する。短沈線文下は両側が沈線文となる微隆起線文、下方は山形沈線が3条描かれる。この間を三角形の交互刺突文、弧状の刺突文が連続している。19は平縁で内側に稜を有する角頭状の口唇部で器形はほぼ直線的に立ち上がっており、短沈線下に2条平行沈線文が巡り、この下に断面が丸味を帯びた三角形を呈する貼付がなされ、ここより沈線が数条垂下している。貼付文横の沈線間にには三角刺突が交互に加えられていた。交互刺突下は横位に數条の沈線が描かれ、無文となる区画内に沿って刺突列が連続している。22・24は波状縁で22は副部が膨らむ器形となる。22は口唇部に刻文列を有し文様は19・24と同様であろう。26は平縁で丸棒状の口唇部を呈し器形は直立気味である。口唇部から無文帶を挿んで沈線文が横位に巡っている。最上部の沈線に接して円形竹管文が連続し、下方は三角刻文が交互に加えられていた。20は平縁で内側に肥厚し内側する口唇部である。文様は19と同様と思われるが、交互刺突文を加えることで作られる波状文を意識して刺突の両側が整えられていた。21・23・25も19と同様の文様であろう。27・28は波状縁でやや先尖状の口唇部を呈し直立気味に立ち上がる器形である。27は短沈線文下に横位沈線が1条巡りここに下方より刺突が加えられる。28は口唇部に刺突列を有し、波状縁に沿わせずに水平に沈線を2条巡らせてい

る。沈線の両側には円形竹管文を連続させていた。52は波状線で先尖形状口唇部を呈し直立気味となる器形である。口縁下沈線は波状線に沿って巡り下方の沈線は水平に巡っている。これらの沈線内に2条の波状文が描かれていた。56は突起を有する波状線である。口縁下に沈線が1条巡りこの上方に刺突が加えられるが連続しておらず様相はうかがえない。91は平縁で丸棒状の口唇部を呈し器形はやや内脣気味となる。結節沈線文を口縁下に2条巡らせその下に弧状文を描く。貼付が剥落した痕跡が見られた。52・56は本群に相当するか不確実な破片である。

第3類土器 口縁下に幅の広い無文帯を有するものを一括した。（第27図39～45・第28図54・88・90）

41は波状線で先尖形状、内脣する口唇部を呈し口唇部に刻文列を有している。無文帯と文様帯間は微隆起文となりこの上に貼付が付されていた痕跡が見られた。胴部は方形区画文が連続し、区画が隣接する垂下沈線間に三角刻文が交互に加えられていた。42は平縁で丸棒状を呈する口唇部が内脣している。頭部に3条の沈線が巡り下方沈線との間に三角刻文が交互に加えられていた。39・45は波状線で45は口唇部裏面が有段状を呈し、口唇部には刻文列が見られた。40・43～45は平縁である。54は平縁で口唇部裏面が有段状を呈し、口唇部には刻文列が連続していた。両側より穿孔された補修孔を1孔有している。89は直立して立ち上がる器形で口唇部がやや外反する。斜方向のケズリが加えられていた。90は把手部で円形の貼付がなされ表裏面とも沈線による曲線文が描かれていた。88は胴部片で横方向のケズリが加えられている。

第1～3類は五領ヶ台式に比定される。

第4類土器 縄文と陸帶文で施文されるものを一括する。（第28図51・92・第29図93～98）

93～95は平縁で93は頭部が大きく屈曲し94も頭部内側に稜を有している。93は無筋か。94は口縁部に稜を有し单節RLが施文されている。95も同様である。96は波状線で角頭状を呈する口唇部を有し、口縁下に短沈線が連続している。97は平縁で地文縄文、口縁下に対向する弧状の貼付を有しこれより両側はなでられていた。96・97は单節RLである。98は波状線で地文单節LR上に断面形が三角形を呈する降帯が1条巡る。51は地文無文で口縁部の短沈線下に無文帯を介し、刻文をもつ降帯が1条巡っている。92は胴部片で降帯が1条巡り、胎土には雲母を多量に混入していた。

本類は西村正衛（1972）において提唱された「阿玉台直前型式」に比定されるものと思われる。

第5類土器 第1～4類に相当する胴部片を一括する。文様によりA～Eに分類した。

A. 広い無文部を有し、沈線文に沿って刻文列を有するもの。（第28図61～76・87）

63は無文部側に細かな刺突、沈線文間に三角刺突を交互に加えていた。66は地文に附加条が施文されている。67は曲線文が交わる箇所に断面三角形の貼付を付している。68は地文单節RLで垂下沈線の上方に橋状把手を付し、棒状工具による沈線と結節沈線が併用されていた。70は地

文無節Lrの結節が縦位に施文されている。72は底部片。74は微隆起線文を有し細沈線により区画文が作られここを格子目文で充填している。75は渦巻き文で渦巻きの途中から垂下沈線の外側にかけて押し引きとなっていた。これも棒状工具による沈線との併用である。

B. 直・曲線文が描かれるもの。（第28図59・60・77～85）

59は地文単節RLで平行沈線文間に直線的な文様を描いている。60・77～85は曲線文である。77は渦巻き文で中心部のみ刻文が加えられていた。78は集合曲線文、79は地文単節RLで垂下する微隆起線文とこれを一辺とした結節沈線による三角文が描かれ、内側に三角形の影刻文が見られた。80は単節RLで結節沈線により文様が描かれていた。83は刻文を有する降帯文が巡りこれが二叉に分かれて三叉文状となり渦巻き文へと連絡していく。玉抱き三叉文を隆帯で表現したと考えられる。78は本群とするのに不確実な破片である。

C. 結節繩文が施文されているもの。（第29図99～107）

100は横位に不規則な刻文が加えられている。無節の結節文が多く1列おきに磨り消しているもの、2列おきに磨り消しているものが見られた。

D. 斜繩文が施文されているもの（第29図108～117）

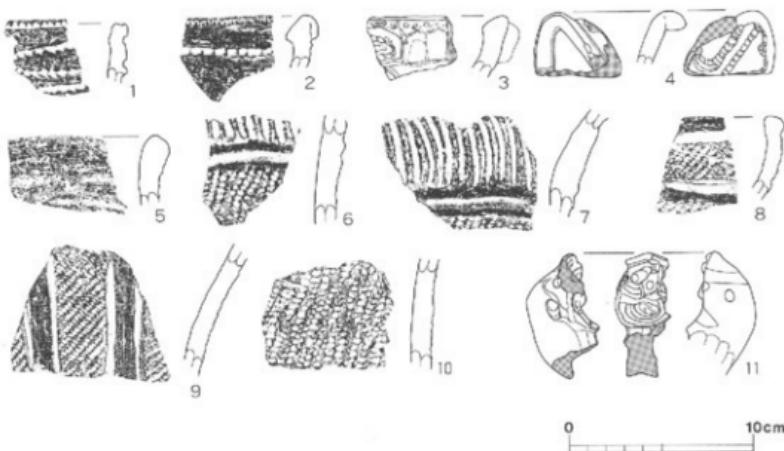
109は地文単節LRで縦位に刺突列が連続している。108・110～117は単節RLで113は底部直上片である。112は胎土に雲母を多量に混入していた。

E. 地文が繩文で沈線文・隆帯文により文様が描かれるもの。（第29図118～123）

118～120は沈線文で、118は垂下沈線と2条の波状文が描かれている。地文は単節RL+の附加条か。120は幅の広い垂下沈線の両側に弧状の短沈線文を連続させ波状文を作り出している。いずれも地文は単節RLで、120は胎土に雲母を多量に混入していた。121～123は隆帯文が垂下するものである。121・122は降帯文の脇をなでおり123は降帯文に沿って結節沈線が垂下している。ともに単節RLで、123は隆帯上にも繩文が施文されていた。122は胎土に雲母を多量に混入していた。「阿玉台直前型式」と思われる。

第7群土器 繩文時代中期前半に相当するもので、破片の出土量はごくわずかであった。 (第30図1～4 : PL.50)

いずれも口縁部で波状線である。1は角頭状の口唇部を呈しここに刺突列を連続している。口縁下は隆帯文が水平に巡り、半截竹管状工具による刺突が結節状に連なり直線文を描いている。2は口唇部が肥厚し、ここに半截竹管状工具による刺突が連続し口縁下には結節沈線文が1条巡っている。3は口縁部に沿って横長の貼付を付し、貼付の内側には結節沈線により指円形区画が作られている。貼付右側は指頭痕が見られ文様効果として残されていると思われる。口縁部直下



第30図 第7~9群土器

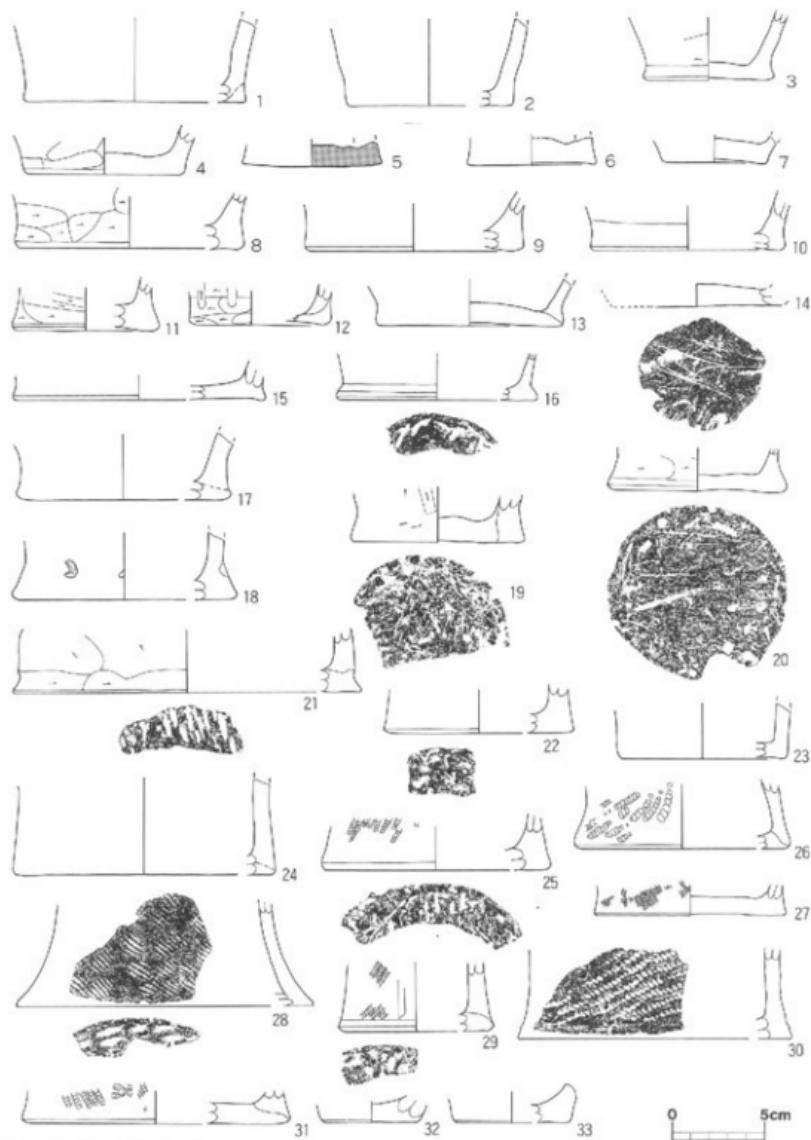
は半截竹管状工具による刺突が連続している。4は波頂部で断面形が三角形の高い貼付が付されていた。おそらく「m」状となる貼付の一部であろう。裏面は結節沈線による連弧文が描かれる。いずれも胎土に雲母を多量に混入していた。

阿玉台I a式に比定される。

第8群土器 繩文時代中期後半に相当するもので、調査区北側より若干出土しているだけである。（第30図5~10：P L50）

5は平縁でやや外反する器形を呈し沈線により曲線文が描かれる。胎土には石英を多量に混入していた。6・7は胴部片で微隆起線文による区画文が描かれ、区画内を垂下する沈線で充填している。微隆起線下の網文は単節LRで、6は胎土に雲母と石英を多量に混入していた。8は平縁で口縁部はやや内脣している。口縁下には沈線による区画文が描かれ、区画内に単節RLを充填している。9・10は胴部片で9は大きく外傾している。9は地文が単節RLで2条単位の沈線文が垂下し地文を交互に磨り消している。10は単節RLで沈線の一端が観察された。

加曾利E式に比定され、6・7はI式、8・9はIII式、5はIV式である。



第31図 第10群土器 - 1

第9群土器 綱文時代後期初頭に相当するもので量的に最も少ない群であった。

(第30図11: P L 50)

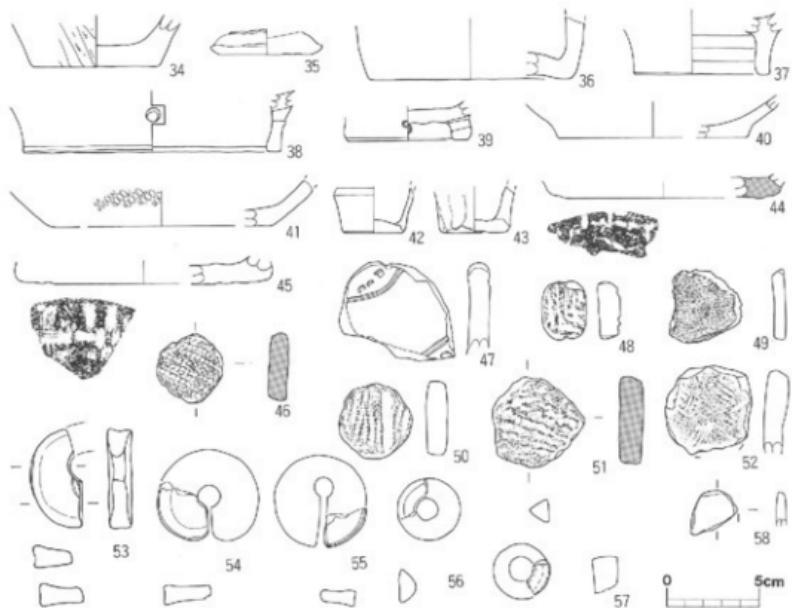
把手部で器面は無文だが、波頂部には弧状沈線と円形刺突が加えられ、うち2孔は貫通していた。

称名寺式に比定される。

第10群土器 第3~9群に相当する底部片および土製品を一括する。

(第31・32図: P L 50)

1~45は底部片である。無文のものが多く、1・3・4は底面が磨かれていた。3は底面完存である。5は底面に縄文を施した後に磨かれ、胎土に纖維の混入が見られたことから第3群に相当するものと思われる。約2/3残存。12は外面、底面ともに削られていた。約1/3残存。14は底面に条線状の圧痕が残されており、周間全体は磨滅している。底径は推定である。16は底面の周辺に纖維が押圧されたような痕跡が見られ、中央部は磨かれていた。18は底部直上に半截竹管状工具による刺突が加えられていた。約1/4残存。19は底面に縄文が施された後磨り消されている。22も同様か。20は底面に条線状の圧痕が、21は縞み物痕が見られた。復元にやや無理があると思われる。25~27は単節RLが施文され、25は約1/4の残存で底面編み物痕、27は条線状の圧痕が見られた。26は内面に炭化物が付着しており、約1/5残存である。28は単節LRで底面に編み物痕が見られた。底部直上から底面にかけて大きく広がっており器形の特徴から第6群に相当するものと思われる。29は単節RLと垂下沈線文が描かれており、底面には圧痕が観察されたが明瞭ではなかった。胎土には雲母を多量に混入していた。30は単節RLが施文されており、約1/4残存である。31は単節LRと刺突が加えられており、胎土には雲母を多量に混入していた。32はわずかに外面に縄文が観察された。底面は磨かれており、割れ口を打ち欠いて円形に整えられている。33は約1/3の残存で底面は磨かれており、割れ口の輪積み面を一部磨っていた。34は外面と底面がよく磨かれており、内面にはタール状のものが付着していた。約2/3残存。35は底面に条線状の圧痕が、また内面にはヘラ痕が満巻き状に残されていた。底面はほぼ完存である。37・38は脚部で一部残存である。37は脚部の内側がなでられており、脚底面には縄文が施文されているようである。38は脚部に焼成前穿孔が1孔見られた。39は高台付きの土器で一部欠損である。鉢形土器と思われる。高台部に焼成前穿孔が1孔見られ対であったものと思われる。胎土には石英を多量に混入していた。41は単節LRで残存は一部である。42・43はミニチュアで底面は完存している。42は内面に炭化物が付着し、43は器面を縦位に磨いていた。44は底面に縞み物痕が観察され、胎土には纖維を混入していた。第3群に相当しようか。45は底面にザル編みが残されており、編み方は1本越え1本潜り1本送りである。



第32図 第10群土器－2

46～58は土製品で、46・50～52は土製円盤である。46・50は周縁を磨って形状を整えているものである。51は一部に磨り面が見られ、52は打ち欠かれたままであった。46は単節RL、51は無節Lrでともに胎土に横維を混入しており、第3群に相当すると思われる。50は多条縄文の上から沈線文が描かれていた。第8群に相当しよう。52は無節Lrである。

47～49は土錘である。47は約1/2の残存で沈線による曲線文が描かれ刺突が連続し、沈線間は広く無文部となる。全周磨って整形されており切り目は1ヵ所である。第9群に相当すると思われる。48は完形で、全周磨って整形されており切り目を1対有していた。地文縄文で半截竹管状工具による沈線文が描かれている。第4群に相当すると思われる。49は無文で、よく磨かれている。一部形状を整えており切り目は1ヵ所であった。

53～57は耳飾りで、53～55は快状である。いずれも薄手で挿入部が残存していた。53は約1/2の残存で、中心近くに沈線文が見られる他は無文でなでられている。54・55は約1/4の残存で無文、55は平坦面が磨かれていた。56・57は耳栓で約1/5の残存である。厚みを有し中央部に孔が開いていた。いずれも無文で丁寧に磨かれていた。

58は不明である。約1/2残存で梢円形を呈している。周囲は磨られているが形状・重量・厚さとも上製円盤としたものとは異なっていた。無文である。

土製品観察表

No.	名 称	残 存	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重 量(g)	型 形	文 様	時 期	備 考
46	土製円盤	完形	3.6×3.6	1.0	13	全 周	單面RL	第3群	鐵器混入
47	土 鍤	1/2	5.2×6.2	1.1	48	全 周	沈線文・刺突	第9群	切り目1ヶ所
48	土 鍤	完形	3.2×2.4	1.1	10	全 周	施文・沈線文	第4群	切り目1ヶ所
49	土 鍤	2/3	3.9×3.9	0.6	13	一部	無 文	不 明	切り目1ヶ所
50	土製円盤	完形	4.1×4.0	1.2	19	全 周	多条纏文・沈線文	第8群	
51	上製円盤	完形	4.9×5.0	1.3	27	一部	無面Lr	第3群	鐵器混入
52	土製円盤	一部欠	4.7×4.7	1.2	26	打ち欠き	無面Lr	不 明	
53	抉狀耳鉗	1/2	5.3×2.8	1.2	15	全 周	沈線文	不 明	
54	抉狀耳鉗	1/4	3.1×2.7	1.0	8	全 周	無 文	不 明	
55	抉狀耳鉗	1/4	2.1×2.2	0.8	3	全 周	無 文	不 明	
56	耳 杖	1/5	2.3×1.1	1.8	5	全 周	無 文	不 明	
57	耳 杖	1/5	2.0×1.2	1.2	2	全 周	無 文	不 明	
58	不 明	1/2	2.4×2.6	0.5	3	全 周	無 文	不 明	

遺構外出土の石器（第33図～第37図）

本遺跡からは縄文時代の石器が93点出土した。しかし今回の調査区には縄文時代の遺構は遺存しておらず、原位置を遺離したものが大半である。器種構成は、石鍬、搔器類、ビエスエスキーユ、細石刃、打製石斧、磨製石斧、礫器、敲打器、石皿、磨石類、石核、二次加工剥片、折面のある剥片、剝片、碎片である。以下は器種別に述べる。

a) 石 鍬 (第33図1～8)

8点出土した。

胸部の抉り込みが浅いスタイルが主体的である。先端部や脚部を折損するものが4点ある。6の先端部付近の剝離面には、長軸方向と平行する線状痕が観察される。

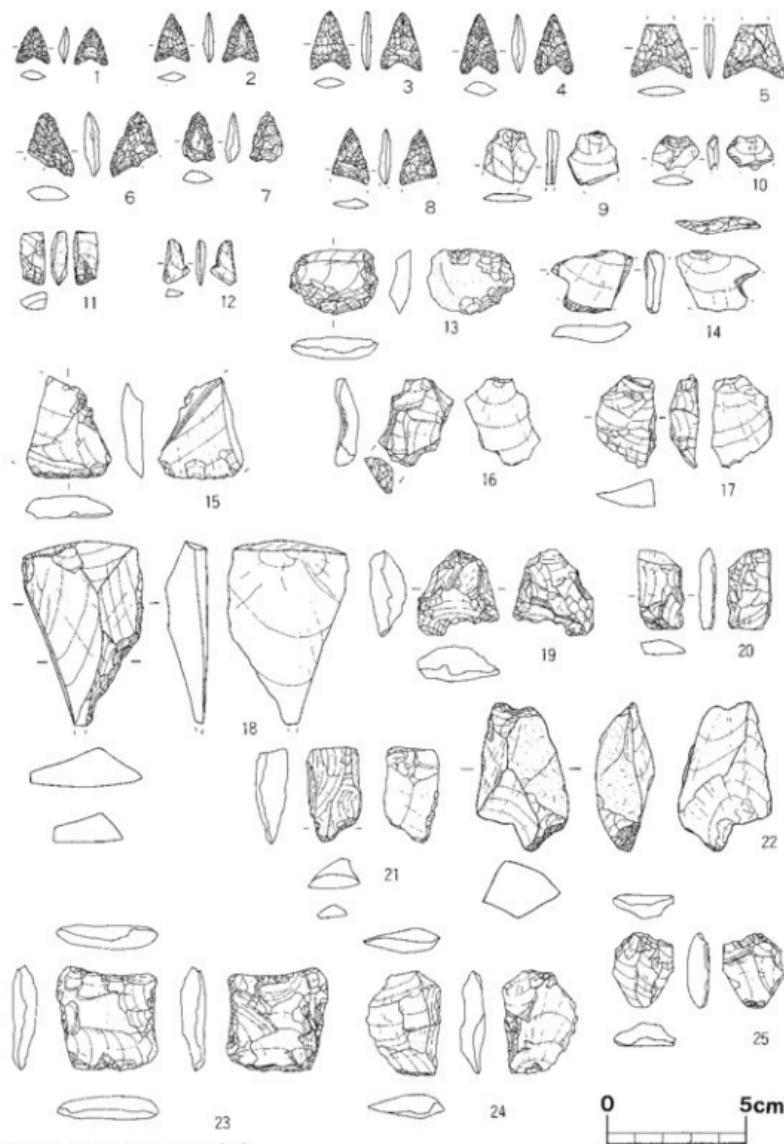
b) 搔器類 (第33図9～13・16・17・19～22)

11点出土した。

剝片の一部に二次加工を加えたもの（9～12・17）や、素材の形状を大幅に変更するほどの二次加工を加えたもの（13・16・19～22）がある。27は刃部の棱線が摩滅している。

c) ビエスエスキーユ (第33図23～25、第34図26・27)

7点出土したうち5点を図示した。



第33図 遺構外出土石器 (1)



第34図 遺構外出土石器（2）

剥片の対峙する二側縁につぶれを生じる状態まで剥離を加えたもの(24・27)と、四角形剥片の四辺すべてにつぶれを伴う剥離が加えられたもの(23)の2種類に大別できる。この剥離では上下両方からの剥離が入り組む形で入り、線状打面はステップフラクチャーを起こしている。

d) 細石刃 (第34図33・34)

5点出土したうち2点を図示した。

この石器は旧石器時代に登場するものと同様の形態を保持するが、細石核の出土が無くバティナがほとんど発達していないため、縄文時代の石器として取り扱った。

e) 打製石斧 (第35図41・42)

2点出土した。

調整加工のみにてスタイルを仕上げたものを一括して取り扱った。

f) 磨製石斧 (第35図35~40)

6点出土した。

この石器は長さ4cm前後の小型品から、10cm前後の中型品、10cm以上の大型品などサイズが様々である。研磨時に除去しきれなかった整形時の剥離面が各所にみられる。35には片面に穿孔を行ない始めた深さ2mmの凹みがある。

g) 碟器 (第35図43・44)

2点出土した。

楕円形碟を分割し縁辺に二次加工を施したもの。44は分割面がネガ面で長軸方向の両端に剥離面を持つことやバルブが未発達なことから、両極打撃により碟分割が行われたものと思われる。

h) 敲打器 (第36図45~48)

4点出土した。

楕円形碟もしくは棒状碟を素材として、表面の一部に敲打痕が残るもの。

i) 石皿 (第36図49~51)

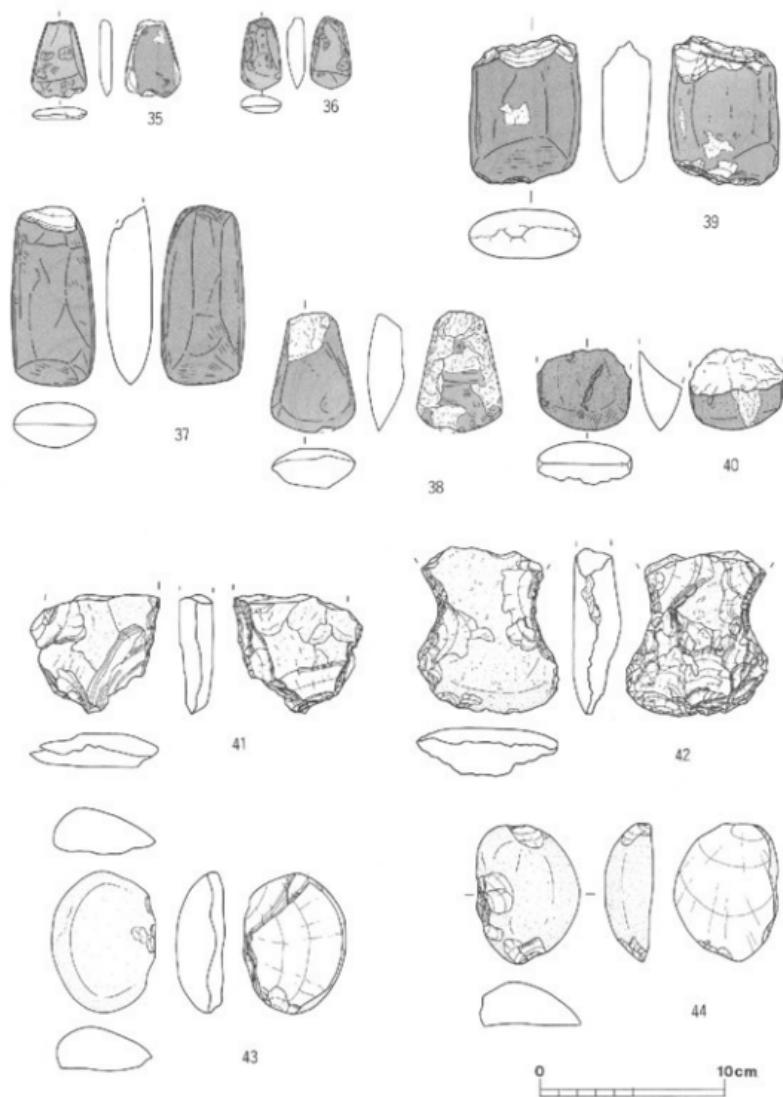
3点出土した。

49・51は多孔質安山岩の軽石を素材としたもので、外周に仕切り壁を削りだしたものである。この資料は非接合資料ながら同一母岩資料である。50は最終的に板状になった石皿破損品である。

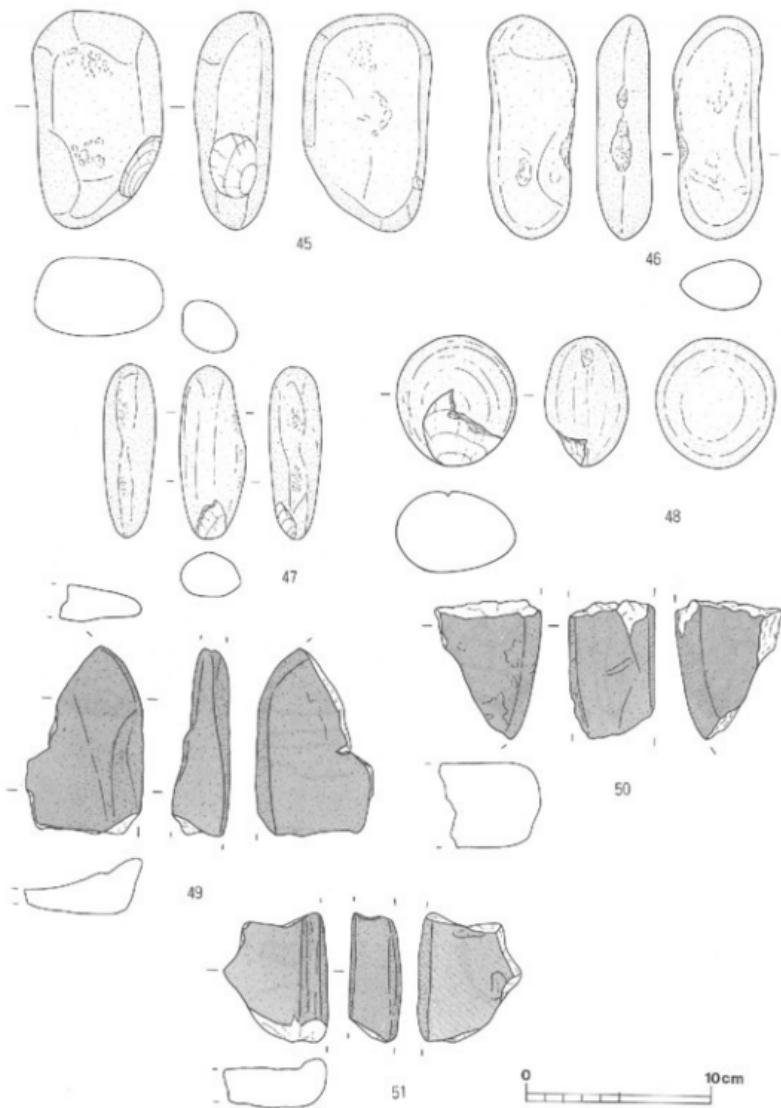
j) 磨石類 (第37図52~60)

9点出土した。

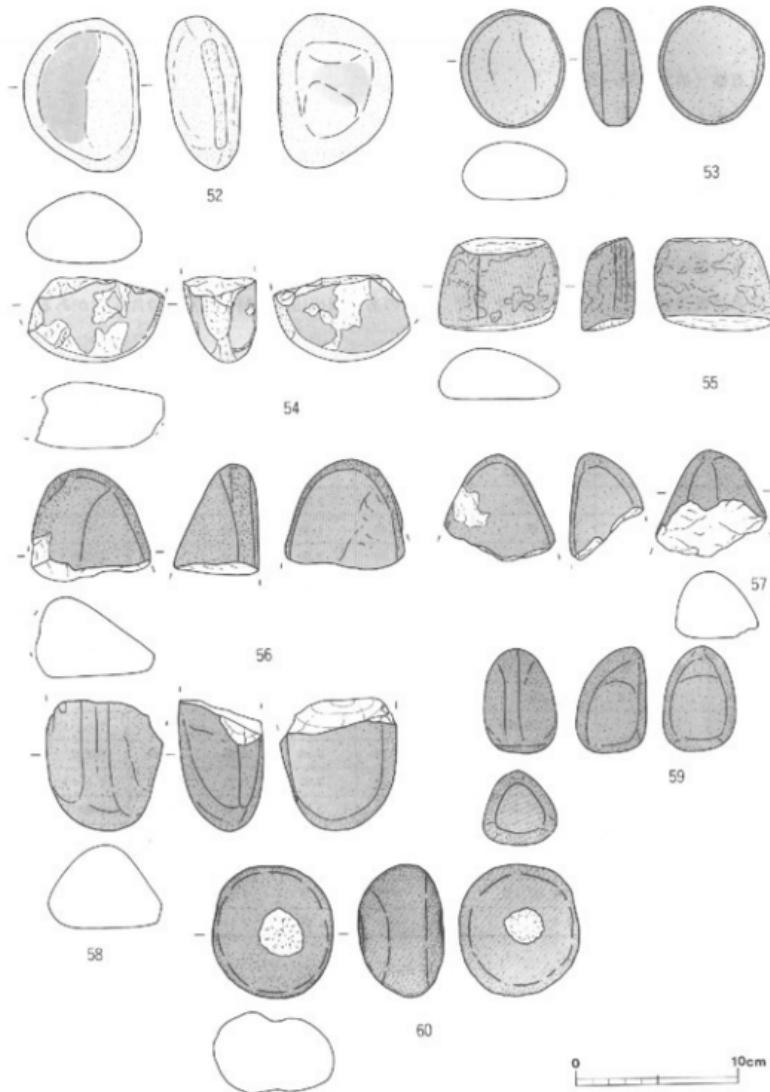
この器種の特徴は、一つの器体に異なった複数の作業痕跡が残っているものが多い点にある。「特殊磨石」に分類できるもの(52・56・58)は、断面略三角形になる碟の稜付近を研磨に使用したもの。平坦面との共用で明確な面取り状態になる。稜研磨面は曲面になることはほとんどない。この部分に線状痕が見られるもの(52)もある。平坦面と側面を研磨し楕円形の外形になる



第35図 遺構外出土石器（3）



第36図 遺構外出土石器 (4)



第37図 遺構外出土石器（5）

もの（53～55・57・59）が本遺跡では主体を占める。その他の研磨面＋敲打痕のあるもの（60）がある。

k) 石核（第34図28～32）

5点出土した。

すべて黒曜石を用いたもので、打面と剥離作業面の転移が頻繁に繰り返されていることが観察された。中には32のように打面を固定して打面調整を織り込みながら縦長剝片の連続剥離を行なうなど旧石器時代的な資料を含んでいる。

I) その他の石器

図未掲載遺物には、二次加工剝片1点、折面のある剝片15点、剝片14点、碎片1点がある。

縄文時代石器觀察表（1）

No.	器種	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材
33-1	石核	SB P25 290	1.35	1.20	0.35	0.34	チャート
2	〃	4U-80区 392	1.75	1.25	0.35	0.45	〃
3	〃	4J-72区 58	2.30	1.45	0.35	0.72	〃
4	〃	一木	2.15	1.35	0.50	0.86	〃
5	〃	東 150	1.90	2.20	0.30	1.24	安山岩
6	〃	4H-68区 560	2.30	1.70	0.50	1.29	黒曜石
7	〃	4W-81区 352	1.80	1.15	0.50	0.89	チャート
8	〃	SI-10 No.6	2.00	1.35	0.40	0.68	黒曜石
9	器種類	SI-3 2区 164	2.00	1.90	0.40	1.12	〃
10	〃	SI-5 2区	1.25	1.70	0.40	0.56	〃
11	〃	SI-5 3区 159	1.90	0.90	0.55	1.01	チャート
12	〃	4U-78区 (II) 390	1.60	0.95	0.35	0.33	黒曜石
13	〃	SI-5 4区 194	2.30	3.20	0.75	6.25	チャート
16	〃	SI-3 2区 164	3.15	2.80	0.75	4.54	黒曜石
17	〃	4J-65区 568	3.40	2.15	1.00	5.39	〃
19	〃	4H-72区 41	3.10	2.90	1.30	9.46	チャート
20	〃	SI-5 2区 192	2.90	1.50	0.60	3.20	〃
21	〃	SI-5 195	3.40	1.95	1.15	6.91	〃

縄文時代石器観察表(2)

No	石種	出土地点	全長	最大幅	最大厚	重量	石材
33-22	孫器類	4V-80区 395	5.40	3.30	2.10	30.61	チャート
23	ヒエヌ・ミスル・ユ	4R-81区 308	3.70	3.60	0.90	11.78	■
24	■	4R-79区 380	3.70	2.75	0.90	8.07	安山岩
25	■	北北西上 9119, 91.2	2.70	2.20	0.80	4.05	黒曜石
34-26	■	中央115	3.35	1.50	0.80	5.59	チャート
27	■	SI-5 2区 192	3.00	1.10	0.80	2.98	■
28	石核	SI-5 161	3.00	3.85	1.80	16.77	黒曜石
29	■	4R-73区 573	2.95	2.65	1.50	11.40	■
30	■	4W-79区 402	5.10	5.70	6.10	93.61	■
31	■	北北西より 119	4.80	3.80	3.45	60.01	■
32	■	SI-2 3区 198	3.40	2.90	2.50	26.89	■
33	細石器	4A-63区 23	1.35	0.90	0.30	0.29	■
34	■	SI-5 161	2.80	1.05	0.40	0.68	■
35-35	磨製石斧	中央114	4.10	2.90	0.60	12.63	砂岩
36	■	RX-5 161	3.80	2.15	0.90	11.94	緑色燧灰岩
37	■	北西119	9.60	4.45	2.40	157.42	■
38	■	SD-16 491	6.45	4.55	1.95	71.26	石英斑岩
39	■	135	8.00	5.95	2.60	204.55	閃緑岩
40	■	北西121	4.35	5.00	2.25	46.18	■
41	打製石斧	中央114	6.35	7.00	1.80	82.17	ホルンフェルス
42	■	中央38	8.85	7.60	2.50	203.19	砂岩
43	塊器	SS-36区 82	7.60	5.60	2.55	123.96	■
44	■	東106	7.40	3.55	2.60	116.95	ホルンフェルス
36-45	敲打器	4E-65区 243	11.75	7.05	4.60	495.33	泥質岩
46	■	北西119	12.00	4.70	2.90	229.15	砂岩
47	■	SD-16 491	9.35	3.60	2.80	121.87	■
48	■	51	6.90	6.45	4.45	244.04	■
49	珪	SI-4 1区 203	10.10	6.30	3.10	93.25	安山岩
50	■	136	7.50	5.70	4.60	223.19	■
51	■	中央39	6.90	5.65	2.80	79.22	■
37-52	磨石類	SD-19 494	9.60	7.10	4.60	410.14	砂岩
53	■	4I-64区 562	7.20	6.40	3.65	235.96	安山岩
54	■	中央114	5.30	8.45	4.45	247.29	石英斑岩
55	■	4J-67区 583	5.75	7.40	3.30	205.53	砂岩
56	■	東106	6.90	7.60	5.25	281.16	■
57	■	中央38	6.60	6.80	4.55	158.38	安山岩
58	■	東106	8.00	7.20	5.20	363.53	■
59	■	北西120	6.50	4.50	4.30	157.88	■
60	■	4I-66区 563	8.20	7.45	5.30	447.64	閃綠岩

第3節 平安時代

本遺跡から発見された遺構は、竪穴住居址16軒、掘立柱建物跡5棟、土坑2基、溝2条である。遺構の多くは調査区の東半分にみられ、特に4R～5Aラインに集中している。また台地東の先端部にも竪穴住居址が1軒存在している。また、集落からは離れるが西方に井戸状の土坑がある。掘立柱建物跡には四面庇付が1棟あり、出土遺物などから判断すると仏堂的な建物と考えられる。遺物は土師器や須恵器が主で、墨書き器の出土が目立つ。建物はそれぞれ重複がみられることから、数期にわたって集落が営まれていたと思われる。

1 竪穴住居

第2号住居址（第38図～40図 P L 3・5・51）

位置 調査区ほぼ中央の遺構集中域。標高2.4m付近で、北側の谷津を臨む台地縁辺部。4X・4Y-78区。

規模・形態 第3号住居址と切り合っており、当住居が新しい。復元主軸長3.1m、幅3.8mの不整形方を呈する。復元床面積約11.8m²。

主軸方位 N-46°-W

壁 傾斜して立ち上がり高さ48cm余りである。旧住居址覆土との区別が明瞭でなく東～北壁の一部は検出できなかった。残っている部分も北側で崩れが見られる。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は西～南壁下で明瞭に検出され、他は残存状況が悪い。元は竈を除き全周していたものと思われる。幅30cm前後、深さ10cm程度である。

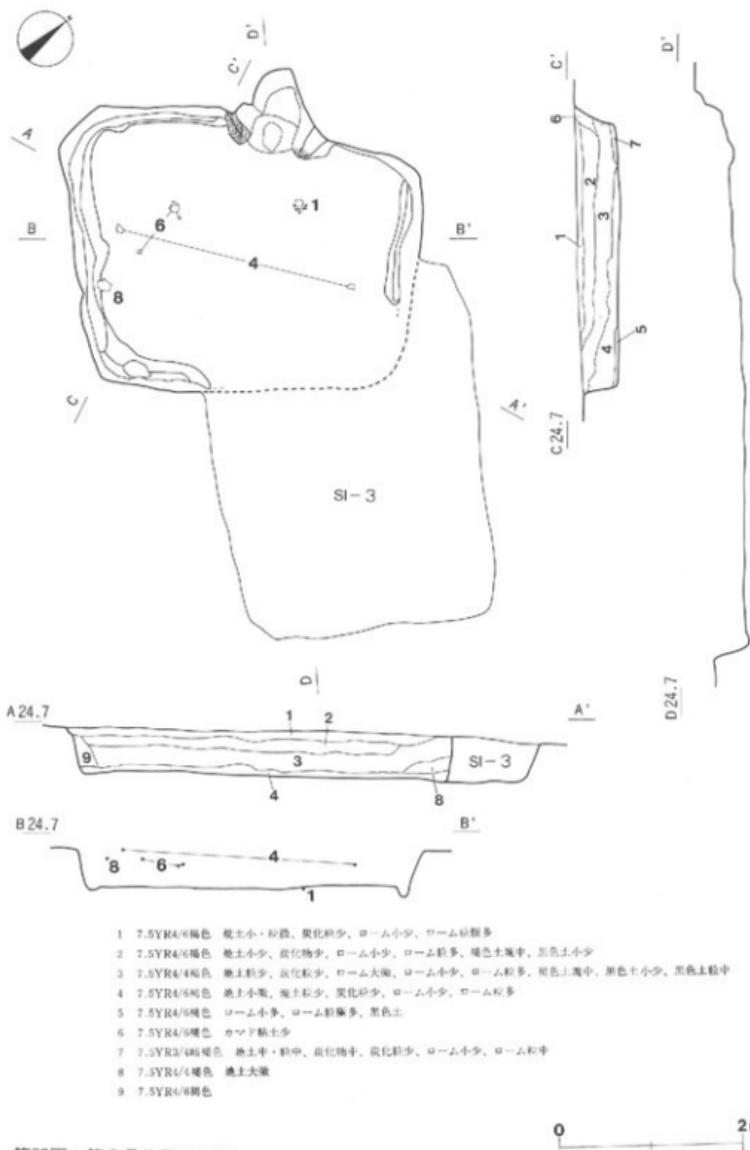
ピット 検出されなかった。

竈 壁外へ70cm掘り出し、北西壁やや北寄りに黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長91cm、残存袖部幅45cmである。焼成部は楕円形で主軸方向に45cm、幅47cm、深さ5cm余り窪んでいる。奥壁から煙道部にかけては緩やかに立ち上がっている。覆土の下部大半は焼土粒を多量に含み赤褐色を呈する。特に3・6層は顕著な焼土層である。上層（1・2層）は構築土が主体で天井部かと思われる。遺物は細片のみで非常に少ない。

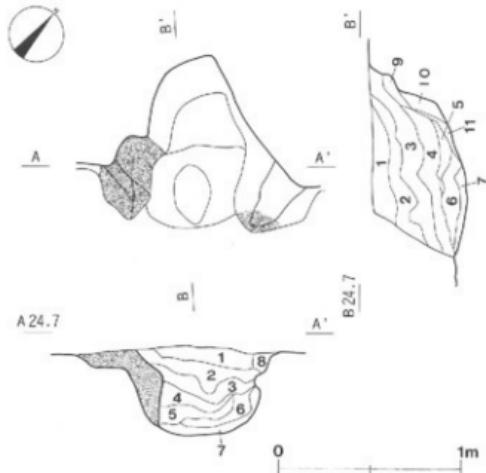
覆土 最下層上に壁際から8・9層が流れ込み、その後1・2・3層がほぼ平行に堆積している。

遺物 底部外面に「福福」（5）、体部と底部外面の2ヶ所に「定」の墨書きがある土師器（6）、灰釉陶器の段皿（8）等が出土しているが、これらは覆土2～3層上で接合関係をもつ廃棄遺物である。当住居に伴う可能性のあるのは体部外面に横位で「本」と墨書きのある内黒の杯（1）のみである。

所見 床面上から出土した遺物より、9世紀後葉の住居と考える。

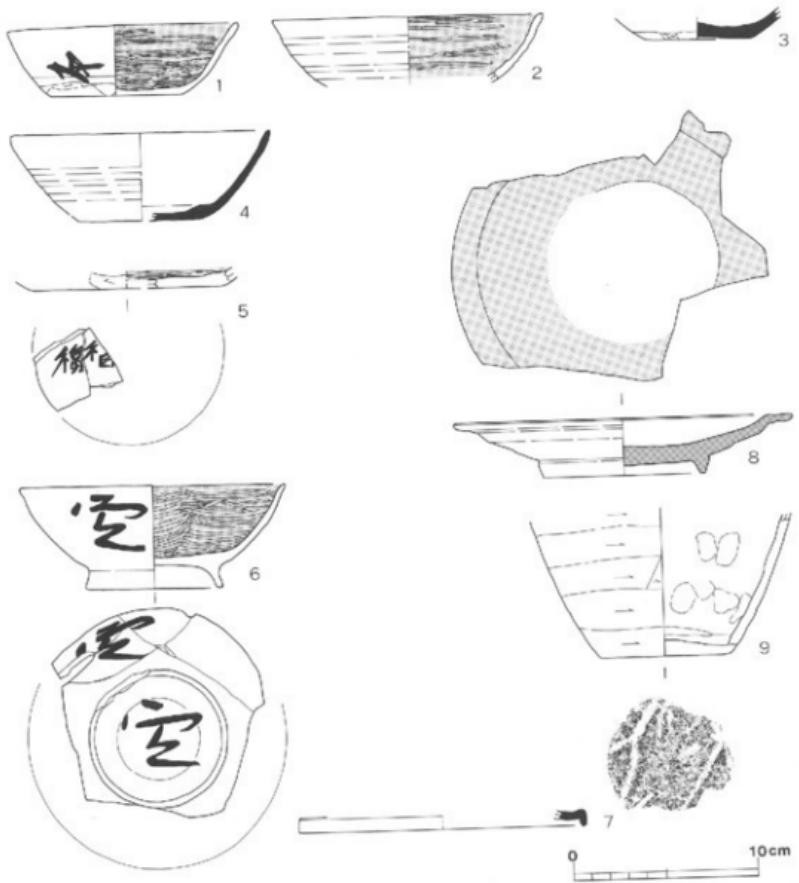


第38図 第2号住居址完掘



第39図 第2号住居址カマド

団数No	器種形	法量	出土位置 段 号 半	焼成	地土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A : 12.4 B : 7.0 C : 3.9	床上 2/3	良好	板状板を少 量含む	に赤い褐色 黒	下体部に手持ちヘラ削り 内面には細かい痕方向のヘラミガキ	内黒 墨書「本」 体部横位 2
2	杯 土師器	A : 14.8 C : (2.7)	覆土 小片	普通	雲母細粒を 少量含む	に赤い褐色 黒	内面に横位のヘラミガキ	内黒 4
3	杯 須志器	B : 5.6 C : (1.2)	覆土 小片	普通	長石・石英 粒と雲母 片を含む	に赤い褐色 黒	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方削り	般大堀他成色 6
4	杯 須志器	A : (14.1) B : 5.6 C : (1.2)	覆土上層 1/3	普通	雲母細粒を 多量に含む	に赤い褐色 黒	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後ヘラ削り	般大堀他成色 5
5	杯 土師器	B : (10.4) C : (1.0)	覆土 底部小片	普通	長石・石英 粒を含む	に赤い褐色 黒	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後一方削りヘラ削り 内面ミガキ	内黒 墨書「板幅」 底部 9
6	高台付杯 土師器	A : (14.4) C : 5.6 D : (7.3)	覆土上層 1/2	普通	雲母細粒を 多量に含む	褐 黒	内面緻密なヘラミガキ	内黒 墨書「定」 体部正位と底部 1
7	蓋 須志器	A : (15.0) C : (0.9)	覆土 小片	普通	長石・石英 粒を含む	灰 黄灰	口縁端部は直に折り曲げられる	8
8	灰陶 灰釉陶器	A : (18.5) C : 3.1 D : 8.8	覆土上層 2/3	厚歛	黑色細粒を 多量に含む	灰白	口縫内面に明瞭な段を有して外反する。端部 は丸い、底辺は内側きみで断面三角形を呈し、 筋部は丸味をおびる。	K-90 白色糊質土器? 7
9	裏 土師器	B : 7.0 C : (7.5)	覆土 小片	普通	長石・石英 粒を多量に 含む	に赤い褐色 黒	体部下半に横位のヘラ削りの後、横位のケズ リ	底部に本窓机 3



第40図 第2号住居址出土遺物

第3号住居址（第41図・42図 P L 3・52）

位置 調査区は中央の造構集中域。標高24m付近で、北側の谷津を臨む台地縁辺部。4Y・4Z-78区、4Z-79区。

規模・形態 第2号住居址と切り合い関係にあり、当住居の方が古い。北西壁は壊されているが、復元主軸長約4m、幅2.9mの縦長の方形を呈し、復元面積は約12m²となる。

主軸方位 N-57°-W

壁 ほぼ直に立ち上がり、深さ44cm。北西壁は残存しない。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は一部途切れもあり、東コーナー付近では検出されていないが、元は全周していたものと考える。幅15~30cm、深さ5~7cm。

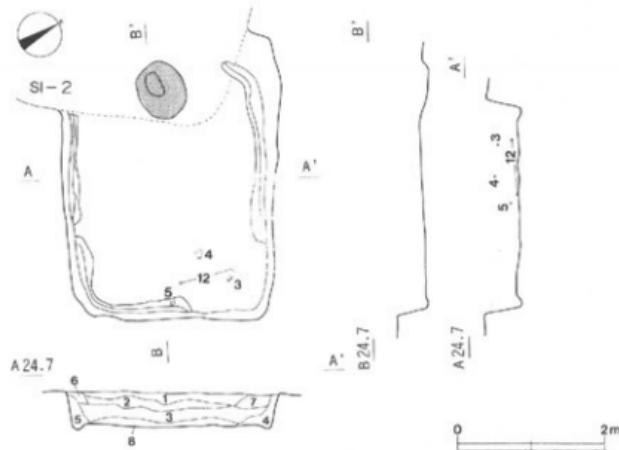
ピット 検出されなかった。

窓 新しく構築された第2号住居によって袖・天井部とも壊されているが、燃焼部のくぼみ並びに焼土の分布から、北西壁は中央に黄白色砂質粘土を使用して構築されていたものと考える。残存する燃焼部は長軸80cm、短軸65cmほどで床から10cm余り窪んでおり底面はよく焼けて赤変している。

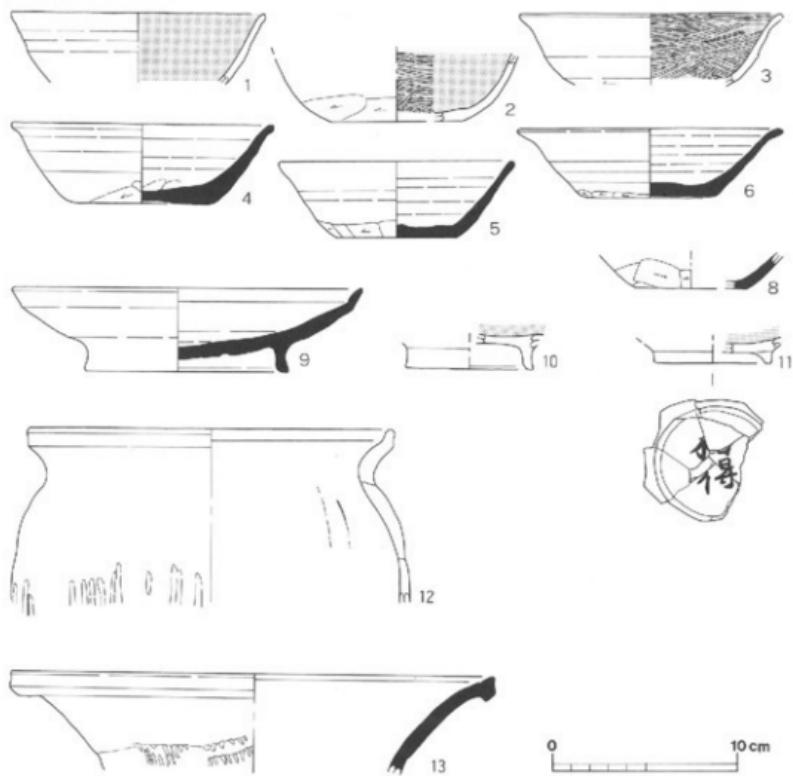
覆土 ロームを多く含む4・5層が壁際に流れ込み、その後上層がおおむね平行に堆積している。

遺物 「福徳」と底部に墨書きのある高台付きの内黒杯（11）などが出土しているが、全て覆土中～上層内の廃棄遺物である。

所見 第2号住居址との切り合い関係から9世紀前～中葉の住居と考える。



第41図 第3号住居址完掘



第42図 第3号住居址出土遺物

第3号住居址土層

- 1 7.SYR4/4褐色 地上小・粉中、ローム少、小少、ローム较多、黑色土较少。AT少
- 2 7.SYR4/5褐色 硬土大面、地土少、硬土稍中、ローム少、ローム较多、黑色土粒多
- 3 7.SYR4/6褐色 地土粒少、灰化物微、灰化较少、ローム大・小・粒幅多、黑色土粒中
- 4 7.SYR4/9褐色 ローム小・粒幅多
- 5 7.SYR4/6褐色 ローム粒幅多
- 6 7.SYR4/6褐色 地土粒粗、ローム粒幅多
- 7 7.SYR4/6褐色 灰化物微
- 8 7.SYR4/6褐色 ローム粒幅多

国版No	器種形	法量	出土位置 残存率	地成	施土	色調	器形・技法の特徴	備考
1 杯 土器	A : 13.9 C : (3.8)	覆土 小片	良好 良好	長石・石英 粒を含む	にふい種 無	内面横化のヘラミガキ 外面ロクロナナ	内黒 297	
2 杯 土器	B : 7.2 C : (4.5)	覆土 小片	普通	雲母細粒を 少量含む	にふい種 無	下体部に手持ちヘラ削り 内面ヘラミガキ	内黒 15	
3 杯 土器	A : (14.4) C : (3.9)	覆土中位 1/3	普通	長石・石英 粒を含む	暗 無	口縁部はゆるやかに外反する。下体部に手持 ちヘラ削り 内面に緻密なヘラミガキ	内黒 13	
4 杯 須恵器	A : (14.2) B : 7.8 C : 4.4	覆土中位 1/2	普通	長石・石英 粒を多量に 含む	灰黒褐 にふい質	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後ヘラ削り 器内が厚く重い	酸火焰燒成色 17	
5 杯 須恵器	A : (12.8) B : 6.6 C : 4.1	覆土下位 1/3	良好	長石・石英 粒を含む	灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後一方向ヘラ削り	18	
6 杯 須恵器	A : (14.4) B : (6.8) C : 3.8	覆土 1/3	普通	長石・石英 粒を多量に 含む	黑褐	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方向削り 落手で、口縁部は外反する	14	
8 杯 須恵器	B : (6.0) C : (1.8)	覆土 小片	普通	雲母細粒を 多く含む	無	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方向削り	12	
9 盤 須恵器	A : (20.0) C : 4.6 D : 12.0	覆土 1/3	良好	長石・石英 の大形粒を 多量に含む	灰	口縁部の折り返しは低く、棱線も甘い 底部は草木氣味 貼り付け裏面	11	
10 高台付 土器	C : (1.9) D : (7.0)	覆土 小片	良好	雲母細粒を 多量に含 む	暗 無	高台端部は平頭 内面ヘラミガキ	内黒 20	
11 高台付 土器	C : (1.0) D : 6.4	覆土 底部小片	普通	雲母細粒を 少量含む	暗 無	高台は頗る、環部は丸い 貼り付け裏面	内黒 19 墨書「福と持」 底部	
12 盤 土器	A : (20.0) C : 9.3	床土 口縫部	良好	石英・長石 粒を多量に 含む	棕 にふい種	体部中段には縦位のヘラミガキを施す 底部は(の字に墨出し)、口縫部で上方につ まみ出す。内面ヘラナナ	16	
13 盤 須恵器	A : (26.4) C : (5.3)	覆土 口縫部	普通	石英・長石 粒を少量含 む	暗灰褐	若干巻き上げ後、底部に難なナナ。上体部に は縦位の平行削き 口縫部は断面二角形に彎り出し、段を成す	10	

第4号住居址（第43図～46図 P.1.4・5・53～55）

位置 調査区ほぼ中央の造構集中域。標高24m付近で、北側の谷津を臨む台地縁辺部。4W・4Y-771K、4X-77・78区。

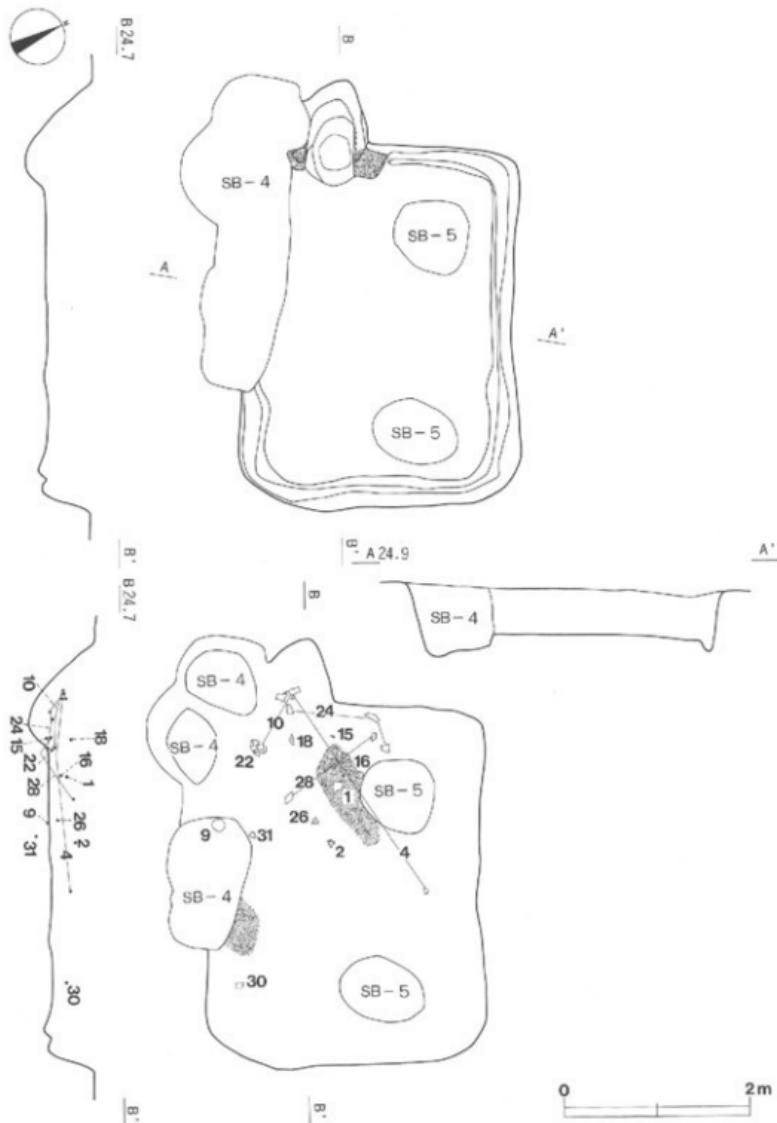
規模・形態 主軸長3.9m、幅3mの縱長方形を呈する。床面積11.7m²。第4号・第5号掘立柱建物跡と切り合ひ関係があり、当住居の方が古い。

主軸方位 N-55°-W

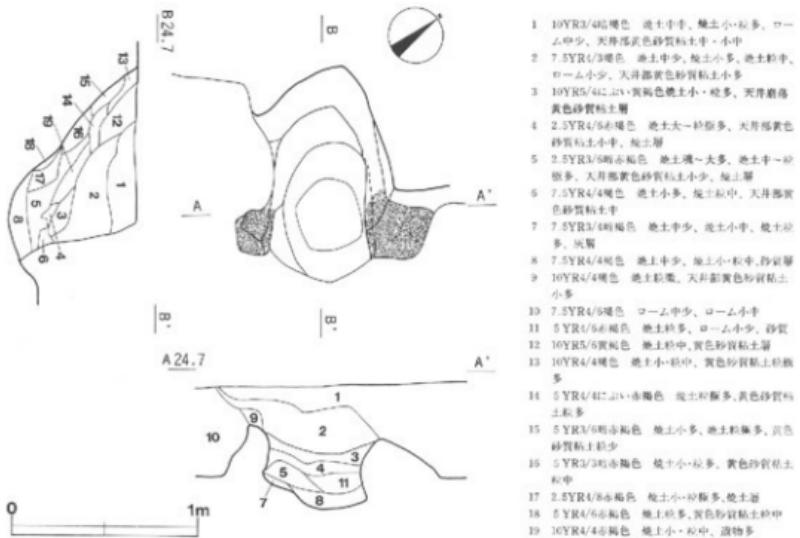
壁 南壁は掘立柱建物跡に壊されているが、他では垂直に立ち上がり、高さ52cm余りの良好な残存状況である。

床 一部壊されているが、平坦で良好な検出状況である。壁溝は甌を除き全周していたもので、幅20～34cm、深さ10cmと明瞭な掘り込みをもつ。

ピット 当住居にともなうものは検出されなかった。



第43図 第4号住居址完掘・出土状況



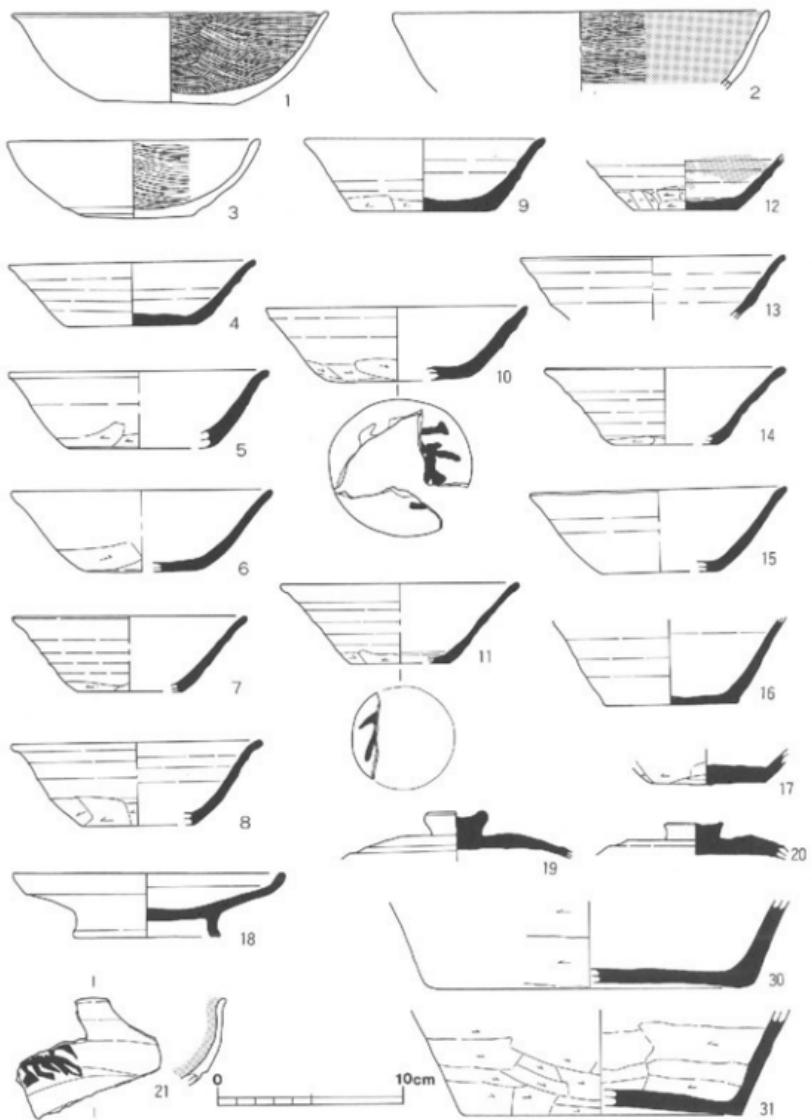
第44図 第4号住居址カマド

窯 壁外へ約70cm掘り出し、北西壁やや南寄りに黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長114cm、残存袖部幅50cmである。燃焼部は橢円形に掘り窪められ、長軸76cm、短軸48cm、深さは16cmと非常に深い。奥壁から煙道部にかけては緩やかに立ち上がっている。覆土の内3層は構築上で天井崩落土の一部かと思われる。以下は焼土を多量に含み赤味がかった土である。内部からは土器小片が出土するが廃棄遺物である。窯袖が4号掘立柱建物跡の柱穴掘り方に壊されており、当住居の方が古いことがわかる。

覆土 壁際に流れ込むような三角形の堆積が幾重にもみられ、人為的埋め戻しが行われたことを想起させる。また窯全面や西壁下に窯構築土の散乱がみられ、その付近、同レベルに遺物小片が検出されている。また床面より上位から5号掘立柱建物跡の柱穴覆土らしき土層が検出されていたので、ここでも当住居が古く、掘立柱建物跡に切られているものと考える。

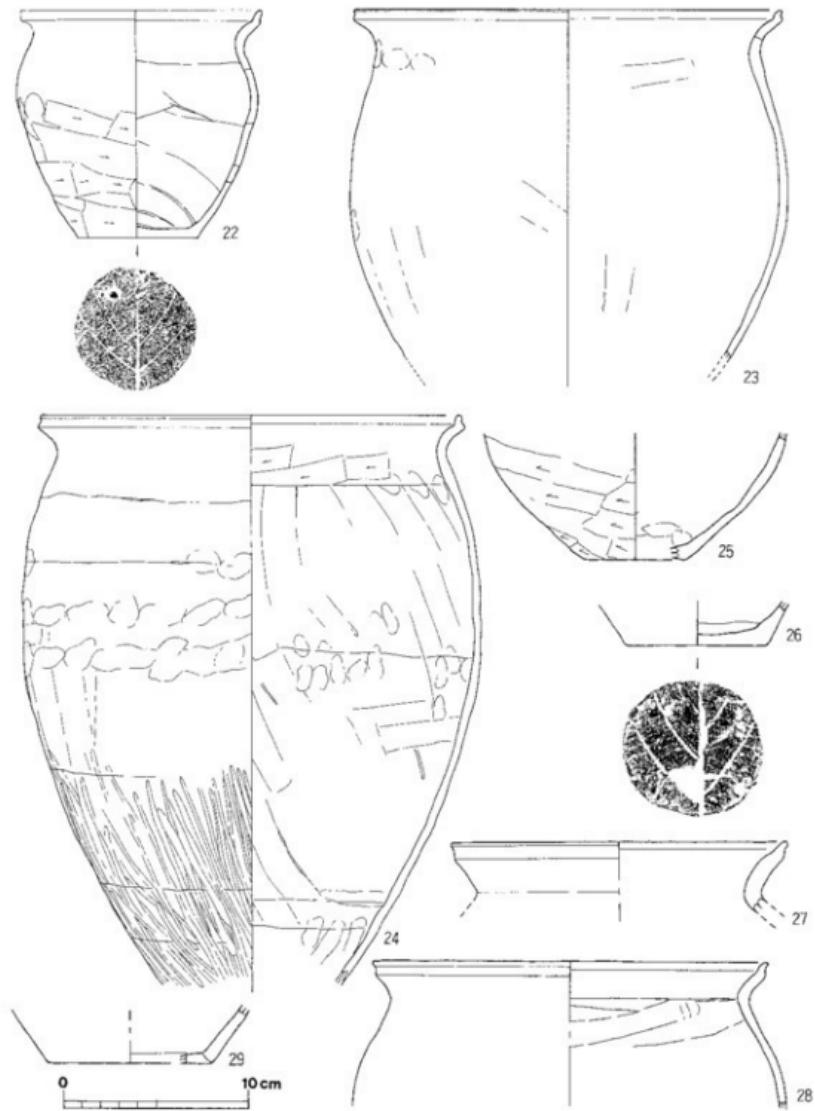
遺物 ほとんどが廃棄遺物である。当住居にともなう可能性のあるものは床直上から出土した完形の須恵器杯（9）、土師器甕（22・24）などであろう。とくに24は下脚部に焼土の付着があり窯で使用されたものであろう。また、覆土出土の細片であるか、隣接する寺塚遺跡に集中出土する「口案」銘墨書のある内黒杯（21）も注目される。

所見 出土遺物より9世紀前葉の住居と考える。



第45図 第4号住居址出土遺物(1)

器皿No	器 形	法 量	出土位置 残 率	施成	胎 土	色 调	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
1	杯 土器器	A : 17.1 B : 5.0 C : (7.4)	覆土中位 1/2	良好	大形長石・ 石英粒を含む	明赤褐 黒	体部下半に圓軸へラ削り 内面に緻密なヘラミガキ 口縁部外縁に復量の漆付着	内黒 46
2	杯 土器器	A : (20.4) C : (4.3)	覆土中位 小片	堅致	長砂粒を少 量含む	に赤い 黒	体部下半に圓軸へラ削り 内面に緻密なヘラミガキ	内黒 37
3	杯 土器器	A : (13.6) B : (6.2) C : 4.2	覆土 1/3	普通	長石・石英 颗粒を含む	に赤い 黒	下体部に手持ちへラ削り 内面に緻密なヘラミガキ	41
4	杯 須恵器	A : 18.2 B : 6.8 C : 3.3	覆土中位 2/3	不良	石英・石英 他の白色粒 子を含む	に赤い 灰黄	底部切り離し後一方向へラ削り 軽質で焼成温度が低い	28
5	杯 須恵器	A : (14.0) B : 8.0 C : 4.2	覆土 1/3	普通	長石・石英 粒を多量に 含む	に赤い 黒	下体部に手持ちへラ削り 口縁部はゆるやかに外反	42
6	杯 須恵器	A : (14.0) B : (6.0) C : 4.4	覆土 小片	普通	長石・石英 粒を多量に 含む	灰黄	下体部に手持ちへラ削り 底部凹輪へラ切り	36
7	杯 須恵器	A : (12.6) B : (5.6) C : 4.1	覆土 小片	普通	長石・石英 雲母細粒を 含む	暗灰黄	下体部に手持ちへラ削り	39
8	杯 須恵器	A : (13.4) B : (6.0) C : 4.5	覆土 小片	良好	長石・石英 雲母細粒を 多く含む	灰	下体部に手持ちへラ削り 底部切り離し後一方向削り 口縁部外反	31
9	杯 須恵器	A : 12.9 B : 7.8 C : 4.0	床上 完形	堅致	長石・石英 の火形粒を 多量に含む	灰	底部は厚く重感がある。口縁部はわずかに 外反する。下体部に手持ちへラ削り 底部回凸へラ切り後ナデ	23
10	杯 須恵器	A : 14.2 B : 7.5 C : 4.1	覆土下位 1/2	普通	石英・長石 の火形粒を 多量に含む	に赤い 黒	下体部に手持ちへラ削り	垂像「□」 底部 44
11	杯 須恵器	A : (12.9) B : (7.4) C : 4.3	覆土 1/3	普通	石英・長石 を少量含む	灰黄	下体部に手持ちへラ削り 薄手	並背「□」 底部 50
12	杯 須恵器	B : 5.6 C : (2.7)	覆土 1/3	普通	石英・長石 粒を若干含 む	灰白 灰黄	下体部に手持ちへラ削り	内外外面共に漆が 付着 45
13	杯 須恵器	A : (14.4) C : (3.4)	覆土 口縫部小 片	普通	小砂粒を多 く含む	灰 灰黄	下体部に手持ちへラ削り	38
14	杯 須恵器	A : (15.0) B : (5.6) C : 4.2	覆土 小片	普通	小砂粒を若 干含む	灰黄褐	下体部に手持ちへラ削り	40
15	杯 須恵器	A : (13.8) B : (6.2) C : 4.4	床上 小片	良好	大形白色粒 を多く含む	黄灰	内外共にいねいなクロナデ	25
16	杯 須恵器	B : 7.0 C : (4.7)	覆土下位 小片	堅致	大形砂粒を 若干含む	橙	内外共によくナデられ、施成の良い優品 杯かどうか疑問も残る	底部外面にヘラ 記号 34 触火焰施成色
17	杯 須恵器	B : 6.3 C : (7.8)	覆土 底部小片	良好	石英・長石 颗粒を含む	灰黄	下体部に手持ちへラ削り 切り離し後棒状工具が押し当てられて、底部が 凹凸している	破砕後の2次的 打削痕2ヶ所み り 30
18	盤 須恵器	A : 14.7 C : 3.6 D : 7.9	覆土中位 2/3	不良	磁砂粒・赤 色粒を多量 に含む	に赤い 黒	貼り付け高台の端部は平底で1条の沈線が固 る。口縁部の立上がりはゆるく、彼もせい	触火焰施成色 27
19	蓋 須恵器	C : (2.5) G : 3.4 H : 1.3	覆土 小片	良好	石英・長石 颗粒を多量 に含む	黄灰	つまみは須頭部が大きく盛む クロロは時計廻り	22
20	蓋 須恵器	C : (2.3) G : 3.2 H : 0.9	覆土 1/3	良好	石英・長石 颗粒を多量 に含む	灰	つまみは蓋平で底部は盛む クロロは時計廻り	47



第46図 第4号住居址出土遺物（2）

21	軽 土器器	C : 5.1	覆土 小片	良好	大砂粒を 含む	にひい種 黒	体部下平に凹板へフ朝り 内面ヘラミガキ	内墨 26 墨書「L」案 体部側位
22	捷 上部器	A : (12.9) B : 6.5 C : 12.4	覆土下位 2/3	普通	石英・長石 細粒を多量 に含む	にひい赤褐色 灰褐色	腹部下平に横位のヘラ削り。上刷部・颈部は ナダ。口縁部はやや外よりにつまみ出す。内 面はナダ	底部に本葉底 21
23	捷 上部器	A : (23.2) C : (23.8)	覆土 1/3	普通	石英・長石 雲母細粒を 多量に含む	にひい種 にひい種	腹部の外反はゆるやかだが、口唇部の立上がり は明瞭な棱をもち、漏部は軽く外につまみ 出されている	体部に幾十付箇 カマドに使用 266
24	捷 土器器	A : (22.7) C : (31.0)	カマド内 1/2	良好	石英・長石 を少量含む	にひい赤褐色 にひい種	腹部下平1/3程を擬似のヘラミガキ。上刷部は ナダ。口唇部の棱は軽く、漏部のつまみ出し も明瞭。内面はヘラナダとナダ	体部に施土付箇 カマドに使用 265
25	捷 上部器	B : 5.6 C : (6.8)	覆土 小片	普通	石英・長石 を多量に含 む	明黄色 明赤褐色	腹部下平に横位のヘラ削り 内面はナダ	35
26	捷 土器器	B : 7.5 C : (2.3)	覆土下位 底部小片	普通	細砂粒を多 量に含む	にひい種	外面にスス状炭化物・施土付箇	カマドに使用か 本葉底あり 33
27	捷 土器器	A : (18.2) C : (3.2)	覆土 は底部小 片	良好	細砂粒・ 赤色粒を少 量含む	にひい種	颈部はくの字に屈曲するが、口唇部の棱は甘 く端部のつまみ出しも明瞭でない。 内外面共にナダ	29
28	捷 土器器	A : (21.2) C : 7.9	覆土下位 口縫部片	普通	石英・長石 雲母細粒 を多く含む	にひい種	颈部はくの字に屈曲、口唇部の棱は明顯で端 部は外縫跡につまみ出される。外面ナダ。 内面ヘラナダ。焼土付箇	カマドに使用か 45
29	捷 土器器	B : (8.8) C : (2.9)	覆土 底部小片	普通	石英・長石 粒を多く含 む	黄灰 にひい種	体部下や横位のヘラ削り 内面ナダ	49
30	捷 須恵器	B : (17.6) C : (4.2)	覆土下位 小片	不良	石英・長石 小粒を多量 に含む	にひい黄褐色	外側、機位のヘラ削り 内面、機位のナダ	酸化焼成色 24
31	捷 須恵器	B : (15.2) C : (5.2)	床下 小片	普通	石英・長石 小粒を多量 に含む	褐灰	外面、機位のヘラ削り 内面、機位のナダ	32

第5号住居址（第47図～51図 P L 6・7・56～59）

位置 調査区中央の遺構集中域で、標高2.5m付近の台地上。4 V・4 W-79区。

規模・形態 主軸長3.6m、幅3.7mの方形で床面積約13.3m²。第4・第5号掘立柱建物跡、および第19号住居址と切り合い関係があり、当住居址は19号よりは新しく、掘立柱建物跡より古い。

主軸方位 N-30°-E

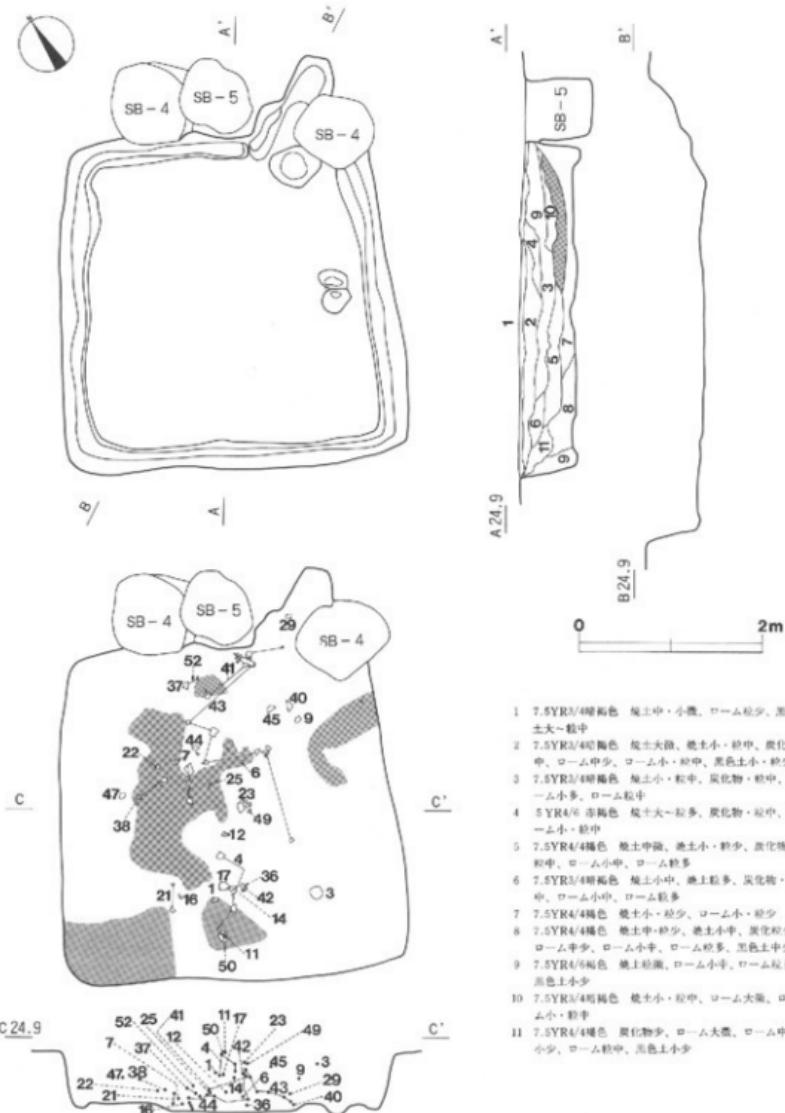
壁 北壁は掘立柱建物跡で壊されているが南面では高さ60cmではば垂直に掘り込まれ良好な残存状況を示す。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は幅30～35cm、深さ3cm程で、竈部を除いて全周する。

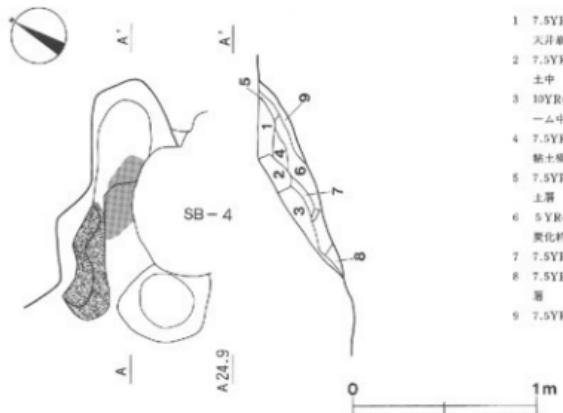
ピット 東壁際に1ヶ所、2個が連結したような形状で検出された。長軸長47cm、短軸長30cm、深さ23cmで性格は不明である。

竈 北東コーナーに、主軸に対し東へ25°傾斜して壁外へ1m程掘り出し、黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長143cm、袖部幅は不明である。

燃焼部は径50cm余りの円形に窪められ、深さ15cm、内部に灰が薄く堆積していた。6層は被熱赤化した竈内部の土である。奥壁から煙道部にかけては緩い傾斜で立ち上がっている。



第47図 第5号住居址完掘・出土状況



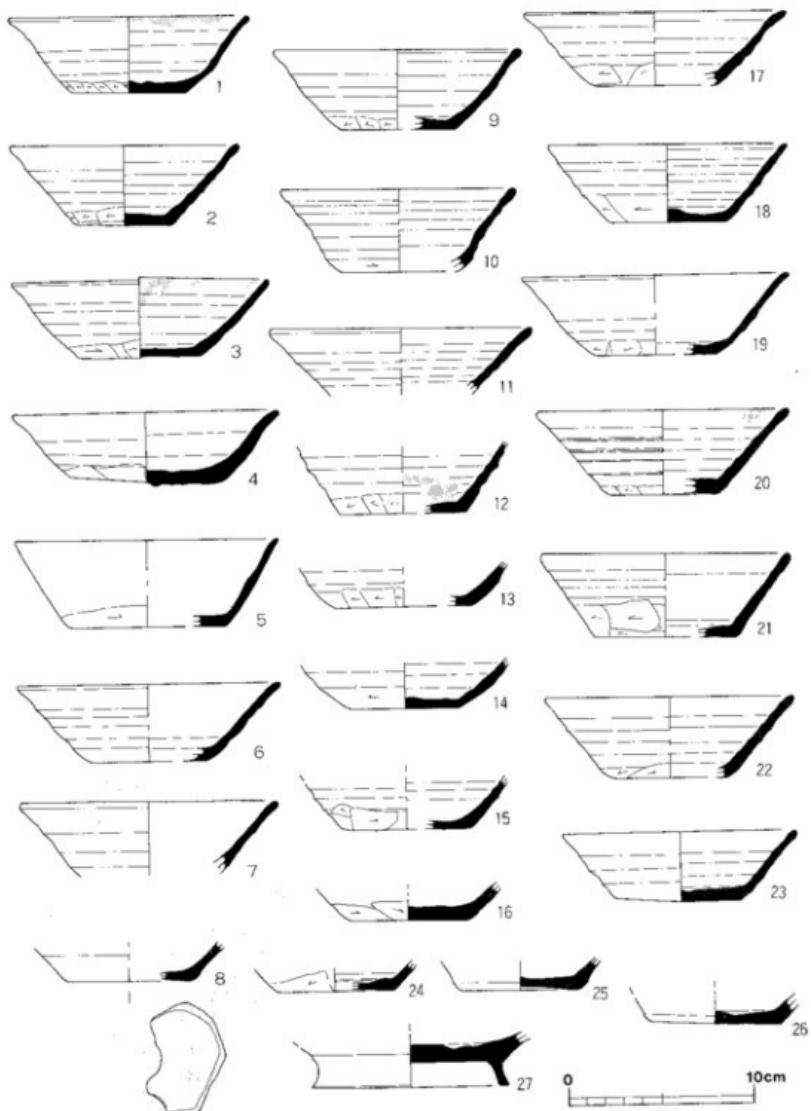
第48図 第5号住居址カマド

覆土 中央部や南西コーナー付近など住居西側を中心に焼土が広範囲に検出された。主として7・8層が堆積した上に広がっている。炭化物の出土がないことからも、この焼土は埋没初期段階に他から廃棄されたものと考える。遺物もこれに混入した小片が多い。

遺物 体部と底部外面の2ヶ所に「長谷寺」の墨書がある杯(28)、「万福」銘の杯(29)等が含まれるが、いずれも細片で覆土中～上層中にかなり散乱しており、廃棄遺物と考えられる。

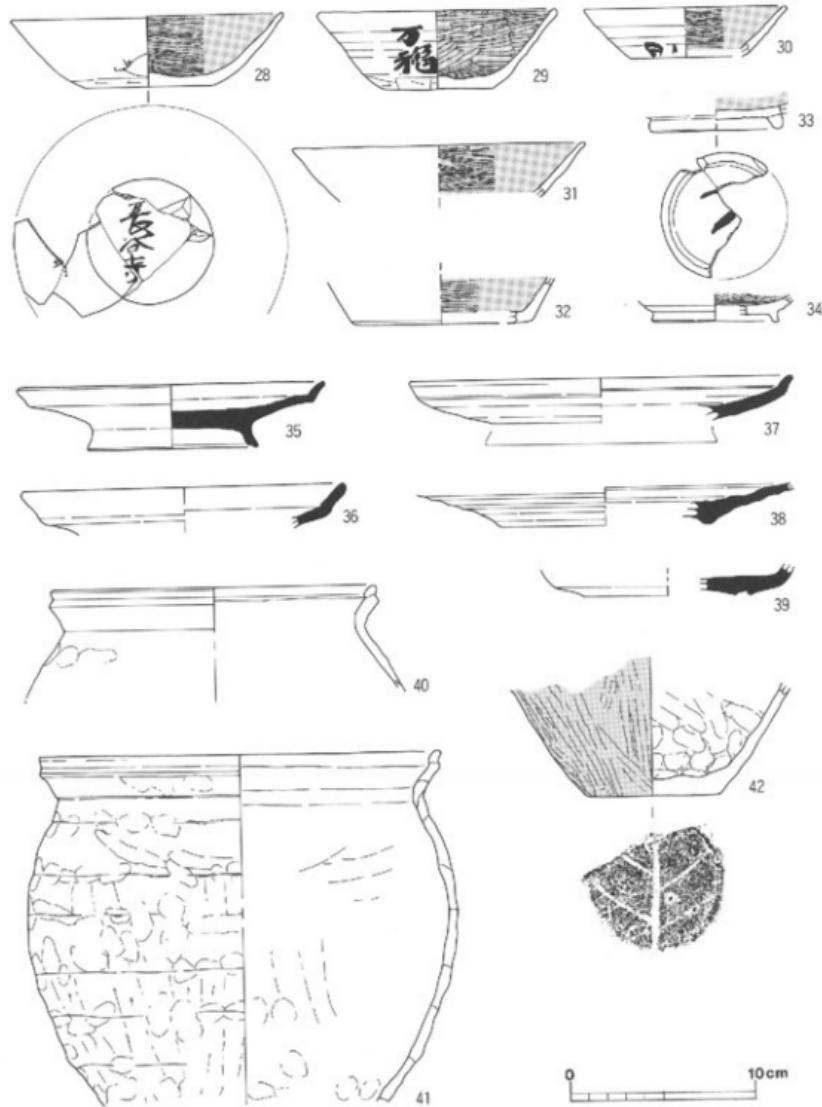
所見 切り合ひ関係や覆土の下位出土遺物を総合的に判断して9世紀前～中葉の住居と考える。

回数	器種	法量	出土位置 焼土率	地成	鉱土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 須恵器	A:12.8 B:6.2 C:4.3	覆土中位 完形	不良	長石・石英 粒を含む	灰青褐	体部下平に手持ちヘラ削り 底部切り離し後一方向へラ削り 口縁部外表面に微量の漆付着	60
	杯 須恵器	A:12.6 B:6.6 C:3.8	覆土上位 完形	良好	大形石英・ 長石粒を少 量含む	灰	全体に丁寧なロクナナデ 底部切り離し後ナナデ	90b
	杯 須恵器	A:13.8 B:6.6 C:4.1	覆土上位 口縁部完形	普通	長石・石英 雲母細粒を 含む	にぼい赤褐	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後一方方向へラ削り	難火焰燒成色 口縫部内外に漆 付着 83
4	杯 須恵器	A:14.3 B:8.2 C:3.9	覆土上位 2/3	良好	大形長石・ 石英粒多く 含む	灰	底部回転へラ削り後ナナデ 器肉が厚く重壓感がある 下体部に手持ちヘラ削り	91
5	杯 須恵器	A:[14.2] B:[8.6] C:4.7	覆土 小片	不良	石英・長石 粒多く含む	灰白	下体部にヘラ削り 焼成温度が低く、軟質で風化が激しい	86
6	杯 須恵器	A:[14.2] B:[6.0] C:4.2	覆土下位 小片	良好	石英・長石 粒多く含む	薄灰 灰	下体部に手持ちヘラ削り	56
7	杯 須恵器	A:(13.6) C:(4.0)	覆土下位 小片	普通	雲母細粒 を多く含む	粗	内外共ロクロナナデ 底部切り離し後一方方向ケズリ	難火焰燒成色 62



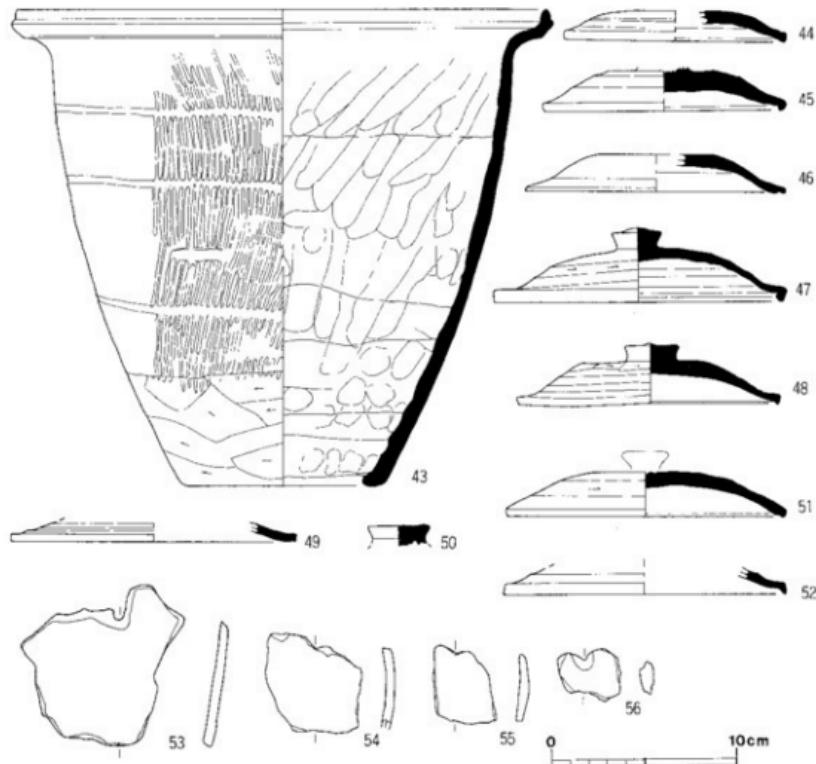
第49図 第5号住居址出土遺物（1）

8	杯 須恵器	B : (6.6) C : (1.8)	覆土 小片	普通 石英・長石 小粒を多量に含む	灰黄	内面でいねいなロクロナデ 外底部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後ランダムなケズリ	底部穿孔か 270
9	杯 須恵器	A : (13.4) B : (6.2) C : 4.3	覆土中位 1/3	良好 細砂粒を少量含む	地灰黄	下体部に手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	93
10	杯 須恵器	A : (12.6) B : (6.3) C : 4.6	覆土 小片	良好 石英・長石 小粒を多量に含む	灰	体部にロクロナデを明瞭に残す 下体部に手持ちヘラ削り	53
11	杯 須恵器	A : (14.0) C : (3.6)	覆土上位 小片	普通 石英・長石 を少量含む	灰黄	内外共ロクロナデ	69
12	杯 須恵器	B : (6.8) C : (3.7)	覆土下位 1/3	普通 石英・長石 粒を若干含む	灰オリーブ 灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、神なナデ	内面に少量の漆 付着 95
13	杯 須恵器	B : (7.4) C : (2.2)	覆土 底部小片	普通 小砂粒を多く含む	褐色 地灰黄	下体部に手持ちヘラ削り 底部回転ヘラ切り後ナデ	64
14	杯 須恵器	B : (5.6) C : (2.4)	覆土中位 1/3	不良 小砂粒を若干含む	灰白	下体部に圓軸ヘラ削り 施成温度が低く軟質	72
15	杯 須恵器	B : (7.0) C : (2.8)	覆土 小片	普通 細砂質片を多く含む	にじみ 灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方向ヘラ削り	輪火焰施成色 76
16	杯 須恵器	B : 6.4 C : (1.6)	塗上 底部小片	普通 石英・長石 小粒を多量に含む	灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方向ヘラ削り	97
17	杯 須恵器	A : (14.2) C : (4.0)	覆土中位 1/3	普通 人形石英・ 良瓦を含む	灰白	口縁部は大きく外反 器肉は薄い 下体部に手持ちヘラ削り	100
18	杯 須恵器	A : 13.0 B : 6.2 C : 4.2	覆土 2/3	良好 石英・長石 を多量に含む	灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部は回転ヘラ切り後、荒いヘラナデ	77
19	杯 須恵器	A : (14.4) B : (6.6) C : 4.3	覆土 1/3	良好 石英・長石 大粒を多く含む	灰オリーブ	下体部に手持ちヘラ削り	59
20	杯 須恵器	A : (12.6) B : (5.6)	覆土 1/3	普通 石英・長石 を多量に含む	灰 にじみ 楊	体部にロクロナデ、下体部に手持ちヘラ削り	口縫内面に少量の 漆付着 81
21	杯 須恵器	A : (12.5) B : (7.6) C : 4.5	覆土 1/3	良好 石英・長石 を多量に含む	灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方向ヘラ削り	94
22	杯 須恵器	A : (13.4) B : 6.0 C : 4.4	覆土下位 1/3	普通 石英・長石 細粒を多量に含む	黄灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方向ヘラ削り	92
23	杯 須恵器	A : 12.6 B : 6.8 C : 3.8	覆土上位 完形	普通 大粒の長石 ・石英含む	灰	底部切り離し後ヘラ削り 不安定な底部	90
24	杯 須恵器	B : (6.2) C : (1.6)	覆土下位 小片	不良 石英・長石 を少量含む	灰白 灰	施成温度が低いため軟質 底部回転ヘラ切り	71
25	杯 須恵器	B : 7.3 C : (1.4)	覆土 底部小片	普通 雲母層片を多量に含む	灰黒	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、一方向ヘラ削り	96
26	高台付 須恵器	C : (2.9) D : 10.6 E : 1.8	覆土 底部小片	良好 石英・長石 粒を少量含む	褐灰	貼り付け高白 ロクロは時計廻り	52
27	杯 上部器	A : (14.8) B : 6.8 C : 3.8	覆土 1/3	良好 細砂粒を少 量含む	明赤褐 墨	底部およびその周辺に回転ヘラ削り ロクロは時計廻り 内面精巧なヘラミガキ	内黒墨書き 67 「長谷寺」底膨 「」外部模倣
28	杯 土師器	A : (15.0) B : 6.0 C : 4.3	覆土下位 2/3	良好 石英・長石 雲母層片を多く含む	にじみ 灰	下体部に手持ちヘラ削り 底部切り離し後、大雑把な一方向ヘラ削り 内面太めのヘラミガキ	内黒 73 墨書き「万福」 体部正経



第50図 第5号住居址出土遺物（2）

30	杯 土師器	A : (11.0) B : (6.0) C : 2.8	覆土 1/2	普通 普通	雲母極繊片 を若干含む 繊維粒を少 量含む	にほい 黒 黒	深い小形の杯 内面ヘラミガキ 底部圓弧へラ切り	内黒 63 墨書き「□」 部鉢推進
31	杯 土師器	A : (15.7) C : (3.0)	覆土 小片	普通 普通	繊維粒を少 量含む	灰 黒	外側ナデ 内面ヘラミガキ	内黒 70
32	杯 土師器	B : (8.8) C : (2.6)	覆土 小片	普通 普通	繊維粒を少 量含む	にほい 黒 黒	外側ナデ	内黒 80
33	高台付杯 土師器	C : (1.4) D : 7.1 E : 0.5	覆土 底部小片	普通 普通	石英・長石 粒少量含む	にほい 黒 黒	断面凸形で背の低い貼り付け高台が付く	内黒 66 墨書き「□」 底部
34	高台付杯 土師器	C : (1.2) D : 7.0 E : 0.6	覆土 底部小片	普通 普通	繊維砂粒を 少量含む	にほい 黒 黒	断面凸形で背の低い貼り付け高台 内面ヘラミガキ	内黒 68
35	白付盤 須恵器	A : (16.6) C : 3.5 D : 9.2	覆土 2/3	普通 普通	石英・長石 粒多量含む	にほい 黒 黒	口縁端部の折り返しはゆるやかに外反し穂も せり。底部切り離し後圓弧へラ削り。 高台接縫部に深い沈線が巡る	酸火焔施色 51
36	白付盤 須恵器	A : (15.6) C : (2.3)	覆土 口縁小片	良好 良好	石英・長石 中粒多く含む	灰	肉厚で丸みのある断面を持つ。底部内面に 沈線が一条廻る。外側の棱は非常に甘い。	101
37	白付盤 須恵器	A : (20.8) C : (2.4)	覆土下位 口縁小片	堅致 堅致	石英・長石 大粒を少量 含む	灰オリーブ	底部の立上がりは短く、断面内面に沈窓が 一帯廻る。外側の棱は甘い。	98
38	白付盤 須恵器	C : (2.1)	覆土下位 小片	普通 普通	雲母繊粒を 多量に含む	にほい 灰 灰	大型品。杯部外側にロクロナデを明瞭に残す 酸火焔施色	54
39	高台付杯 須恵器	C : (1.5)	覆土 小片	良好 良好	石英・長石 大粒を多く 含む	灰	高台貼り付け部に深い溝を切り、接合し易く している	75
40	裏 土師器	A : (17.7) C : (6.2)	覆土 小片	普通 普通	石英・長石 小粒を多く 含む	灰	口縁端部は貼り付けられ、折り外反する。 外側は底部のヘラケズリ、内面ナデ	264
41	裏 土師器	A : (21.8) C : (19.0)	覆土中位 1/3	普通 普通	石英・長石 粒を多量に 含む	にほい 灰	ヘラ削りにより、器壁は傷く調整されている 外側には指跡压痕を残すが、内面には丁寧な ナデを施す	87
42	裏 土師器	B : 7.4 C : (5.5)	覆土中位 小片	良好 良好	石英・長石 粒を多量に 含む	茶褐	内面に指跡压痕 外側にはための継位ヘラミガキ痕を残し、そ の上に広範に炭化物が付着している	底部に木葉痕 88
43	瓶 須恵器	A : (26.6) B : (16.0) C : 26.0	覆土下位 1/3	普通 普通	石英・長石 粒を少量含む	灰白 灰白	丸みを帯びた断面部に継位の平行叩き目を施 し、その後3本の凹縦を引く。下脚部には横 のヘラ削り。口縁部の造りも丁寧	84
44	蓋 須恵器	A : (12.0)	覆土下位 1/3	普通 普通	雲母繊粒を 多量に含む	灰白 灰白	小型。天井部にはつまみを接合する為の溝巻 状の沈窓が入っている。口縫内面に杯部を受 ける凹縦が一帯廻っている	89
45	蓋 須恵器	A : (12.6) C : (2.2)	覆土中位 1/2	良好 良好	石英・長石 粒を少量含む	灰 灰	小型。天頂部にはつまみを接合する為の溝巻 状の沈窓が入っている。口縫内面に杯部を受 ける凹縦が一帯廻っている	102
46	蓋 須恵器	A : (14.0) C : (2.0)	覆土 小片	堅致 堅致	石英・長石 粒を少量含む	灰 灰	小型。口縁端部の折り返しはほとんど無く薄 い。内面に杯部を受ける凹縦が一帯廻る	61
47	蓋 須恵器	A : 15.6 C : 4.1 G : 2.7	覆土中位 2/3	良好 良好	石英・長石 粒を少量含む	灰 灰	天井部1/2ほどを回転ヘラ削り、ロクロは時計 回り。口縁端部は内側に断面長方形を呈す 板状つまみは側面。地底上の泥水を生す。	57
48	蓋 須恵器	A : 14.0 C : 3.4 G : 2.9	覆土 2/3	良好 良好	石英大粒を 多量に含む	灰 灰	天井部を中心にして圓弧ヘラ削り。ロクロは時計 回り。口縁端部は角張って直立し内面に深い 沈窓が廻る。つまみは扁平	78
49	蓋 須恵器	A : (15.3) C : (1.1)	覆土上位 小片	普通 普通	石英・長石 粒を少量含 む	灰 灰	偏平 ロクロナデのあとをよく残す	55
50	蓋 須恵器	G : 3.4 H : 1.0	覆土上位 板状疎つ まみ	普通 普通	石英・長石 粒を少量含 む	灰 灰	つまみ裏側に、天井部に接合する為の溝巻状 沈窓が入っている。	74



第51図 第5号住居址出土遺物（3）

51	素 須志器	A : (15.2) C : (2.4)	覆土 1/3	普通 石英・長石 粒を少量含む	灰白	天頂部に渦巻状沈線。天井部1/2ほど凹部へ ラ削り、ロクロは玲瓏彫り。口縁端部は丸み を帯び、内側に比較が一条剛る。	99
52	素 須志器	A : (15.4) C : (1.4)	覆土中位 小片	良好 石英・長石 粒を多く含む	灰	口縁端部は尖り気味	85

固 体 Mn.	種 類	最大長	最大幅	重 量	孔 径	出上位置	残存率	焼成	胎 土	色 調	備 考
53	土 製 品	8.7	8.9	48		覆 土		普通	砂粒目立たない	褐	-
54	土 製 品	8.3	5.2	20		覆 土		普通	砂粒目立たない	明赤 鮮	-
55	土 製 品	4.2	3.3	9		覆 土		普通	砂粒目立たない	にぼい橙	-
56	土 製 品	2.9	3.5	7		覆 土		普通	砂粒目立たない	明赤 橙	-

第6号住居址（第52図～55図 P L 8・9・60・61）

位置 調査区ほぼ中央の遺構集中域。標高2.5m付近で北側の谷津に臨む台地縁辺部。

4 V-76・77区

規模・形態 主軸長3.5m、幅3.2mの方形。総面積約11.2m²。東南側は第4号掘立柱建物跡に切り込まれ、床の一部が壊されている。

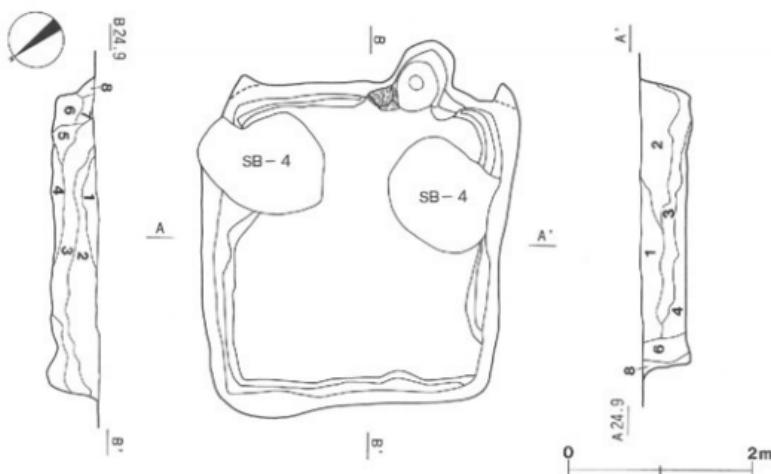
主軸方位 S-52°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がり、高さ45～50cmを測る。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は竈部・西コーナーを除いて全周していたものと思われ、幅25～35cm、深さ4～5cmである。

ピット 検出されなかった。

竈 壁外へ45cm掘り出し、東南壁南コーナー寄りに黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長90cm、残存袖部は短く、その幅40cmほどである。燃焼部は径約45cmの円形に窪んでいるが、



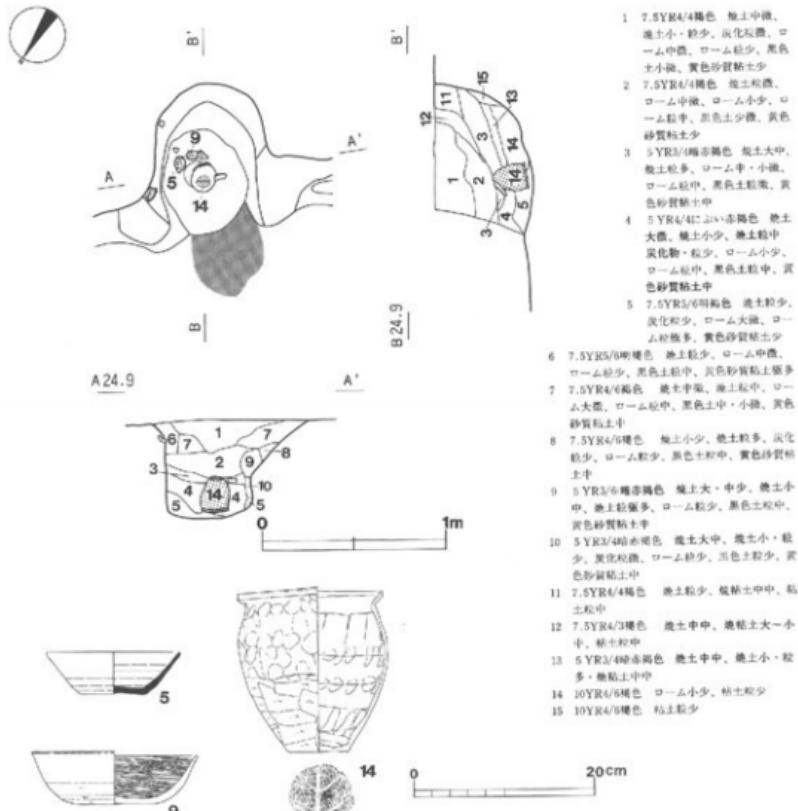
- 1 7.5YR3/4褐色 土粒少、炭化物少、ローム大粒、ローム中少、ローム小、粒中、黒色土半・小少、黒色土粒中
- 2 7.5YR4/6褐色 地土小中、地土粒少、ローム大・中、ローム小・粒多、黒色土中少、黒色土中小・粒中
- 3 7.5YR3/1褐色 地土大少、ローム大・粒中、黑色土少少、黑色土粒中
- 4 7.5YR4/4褐色 地土大微、ローム小中、ローム粒多、黑色土粒中、カマド砂雲母
- 5 7.5YR4/4褐色 地土小中、炭土粒少、ローム小中、ローム粒多、黑色土粒中、カマド砂雲母
- 6 7.5YR4/4褐色 ローム小中、ローム粒多、黑色土粒中
- 7 7.5YR4/6褐色 地土小少、地土粒微、黑色土粒中
- 8 7.5YR4/6褐色 ローム小少、ローム粒多、黑色土粒中

第52図 第6号住居址完掘

炊き口にあたる床面には炭化粒が散っており、袖はもう少し長かった可能性がある。奥壁から煙道部にかけては住居壁と同じようにほぼ垂直に急な立ち上がりを示す。

1・2層は住居埋土で、3・4・13層などが被熱して赤化した窓内部の土であろう。ただし最下層の土は被熱しておらず、その上に完形の小型甕(14)が逆位で遺棄されている。

胴部外面全体には焼土及び窓構築土が固く付着しており、内側には重量感のある粘土が充満していたことなどから、支脚として使用されていた個体と考えられる。ただし熱による外壁の剥離・磨滅等は見受けられない。むしろ土器内面に若干ダメージがある。燃焼部底面から若干浮き、はさまれた土に被熱の痕跡がないことから、使用時の焼土等は清掃し、新たに整地した上に支脚と

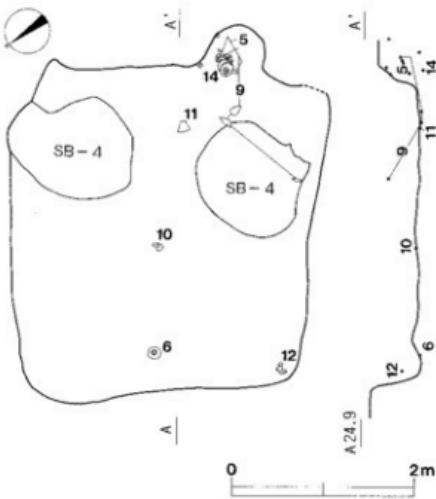


第53図 第6号住居址カマド・出土遺物

して使っていった器を再配置・遺棄したものと考える。14に隣接して出土した須恵器杯（5）・土師器杯（9）は接合する破片が甌から出て散乱しており廃棄遺物と考える。

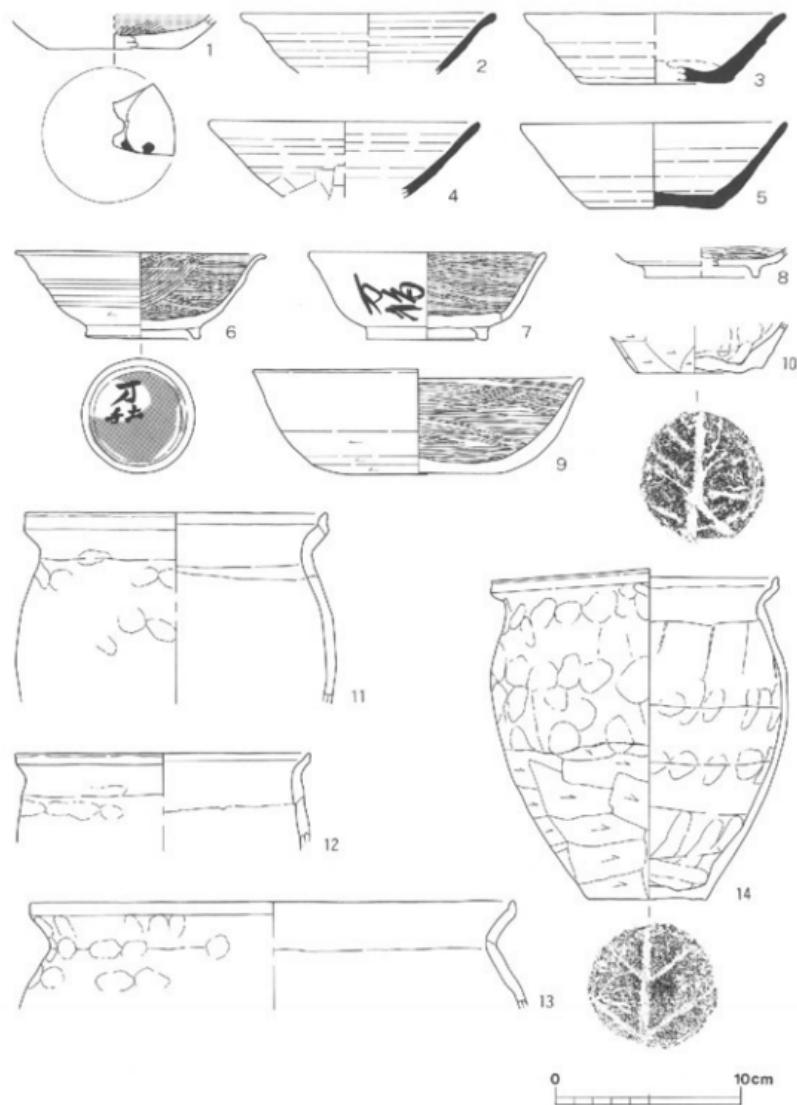
覆土 壁際が最初に埋まつた後、レンズ状の堆積がみられる。6層は4号掘立柱建物跡の柱穴覆土の一部である可能性がある。

遺物 当住居に伴う可能性があるのは前述した代用支脚器（14）の他、床面に伏せられ、ほぼ完形で出土した「万匁」銘のある内黒の高台付き杯（6）がある。この他、覆土中からは体部に横位で「万福」銘のある土師器（7）も出土している。所見 出土遺物から9世紀後葉の住居と考える。



第54図 第6号住居址遺物出土状況

図版No	器種 器形	法量	出土位置 発 現 率	地成	地 上	色 調	器形・技 法の特徴	備考
1	杯 土師器	B : (7.2) C : (1.5)	覆土 底部小片	普通	極細砂粒 を少量含む	にふい黄 黒	内面にヘラミガキ	内黒 105 墨書「匁」底部 打削痕 1ヶ所
2	杯 須恵器	A : (14.0) C : (3.3)	覆土 小片	普通	石英・長石 雲母粒多く 含む	灰青	口縁部はゆるやかに外反し、微量の疊付着	109
3	杯 須恵器	A : (14.2) B : (8.0) C : 5.8	覆土 1/3	普通	長石・石英 人頭を多量 に含む	黄灰 にふい褐	厚子 底部回転へラ切り	酸火照焼成色 108
4	杯 須恵器	A : (14.6) C : (4.1)	覆土 小片	普通	雲母極細片 を多量に含む	暗灰黃	下体部に手持ちへラ切り	110
5	杯 須恵器	A : (14.8) B : 7.6 C : 4.6	カド覆土 1/2	不良	石英・長石 粒状雲母を多 量に含む	灰オリーブ	下体部に手持ちへラ割り 述部切り離し後、一方向へラ割り 外側に地付着	117
6	高台付杯 土師器	A : 13.6 C : 4.8 D : 6.2	床上 ほぼ完形	良好	石英・長石 粒を少量含む	にふい橙 黒	下体部に圓軸へラ削り。口縁部は明瞭に折り 曲げられ。体部にロクロナゲのあとを残す。 器身は薄く、丁寧な造り。内面ミガキ	内黒 107 墨書「匁」底部 軽用刷記
7	高台付杯 土師器	A : (12.9) C : 4.8 D : 6.6	覆土 1/3	普通	長石・石英 粒を含む	にふい褐 黒	低く、斜面凹凸の貼り付け高台 内面ヘラミガキ 述部に蟲食あり	内黒・墨書「万 福」体部根柢 軽用刷記 114
8	高台付杯 土師器	C : (1.3) D : (6.2) E : 0.6	覆土 小片	良好	石英・長石 小粒を含む	橙 明赤褐	繊細な貼り付け高台 内面ヘラミガキ	108
9	杯 土師器	A : 18.0 B : 7.4 C : 5.7	覆土 2/3	良好	長石・石英 大粒を少量 含む	にふい褐 褐	大形品、切り離し後、底部周辺をへラ削り削 整し、丸みを審びさせる。ロクロは時計廻 り。内面ヘラミガキ	112
10	甌 土師器	B : 6.8 C : (2.6)	床上 底部小片	良好	長石・石英 大粒を少量 含む	灰褐 にふい褐	外側へラ削り 内面ヒビナデ、指捺圧痕	底部木柵底 106



第55図 第6号住居址出土遺物

11	甕 土師器	A : (16.4) C : (10.3)	床上 小片	普通	長石・石英 大粒を多量に含む	明赤褐色	内外共丁寧なナデ	115
12	甕 土師器	A : (16.0) C : (5.3)	覆土下位 小片	普通	長石・石英 大粒を多量に含む	明赤褐色	粘土帶を明瞭に残す。口縁部周辺ヨコナデ 上側部には指擦圧痕	118
13	甕 土師器	A : (26.4) C : (5.8)	覆土 小片	普通	長石・石英 大粒を多量に含む	に赤い擦	口縁部丸みを持ち、継ははっきりしない。 外側指擦圧痕とナデ	111
14	甕 土師器	A : 15.6 B : 6.4 C : 17.5	カマド内 完形	普通	長石・石英 大粒を多量に含む	に赤い擦	下腹部窓位のへラ削り、上腹部指擦圧痕とナデ。 内面粘土帶を明瞭に残し、付近に指擦痕 内外共に床上付着	底部本垂痕 カマドに使用か 104

第7号住居址（第56図・57図 P L 9・61）

位置 調査区ほぼ中央の遺構集中域。標高23m付近で、北側の谷津に向かう緩斜面。4Y-76・77、4Z-76・77区。第17号住居址と切り合っており当住居の方が新しい。

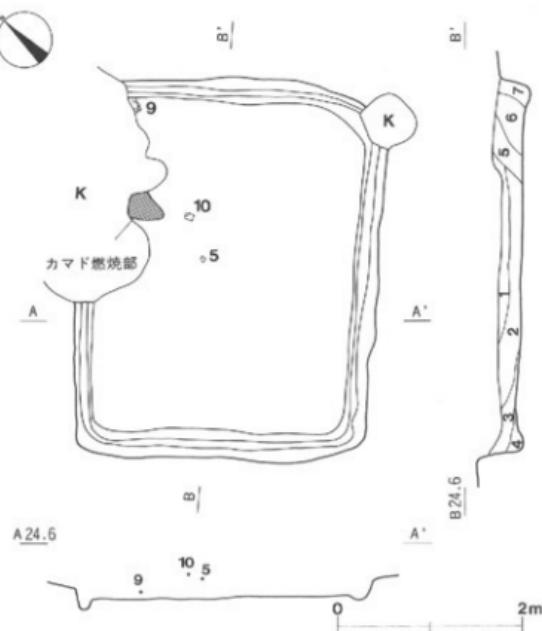
規模・形態 主軸長3.3m、幅4.1mの横長方形。面積13.5m²。

主軸方向 N-39°-W

壁 北西壁の一部は擾乱で壊されている。残存部ではほぼ垂直に立ち上がるが、斜面に掘削されたため削平が進み、高さは約30~40cmと低い。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は竈部を除いて整然と全周する。幅25cm、深さ5~6cmである。

ピット 検出されなかった。



- 1 7.5YR4/4褐色 粒子小・粒中・炭化粒少・ローム少・ローム軟中・黑色土軟中
- 2 7.5YR3/4褐色 ローム軟中・黑色土軟中
- 3 7.5YR4/4褐色 炭化粒少・ローム少・粒中・黑色土少・粒中
- 4 7.5YR4/6褐色 ローム大量・ローム少・粒中・黑色土少・粒中
- 5 7.5YR4/6褐色 炭化粒少・ローム少・粒中・黑色土軟中
- 6 7.5YR4/6褐色 ローム少・粒中・黑色土軟中
- 7 7.5YR4/6褐色 ローム少・粒多・黑色土軟中

第56図 第7号住居址完掘

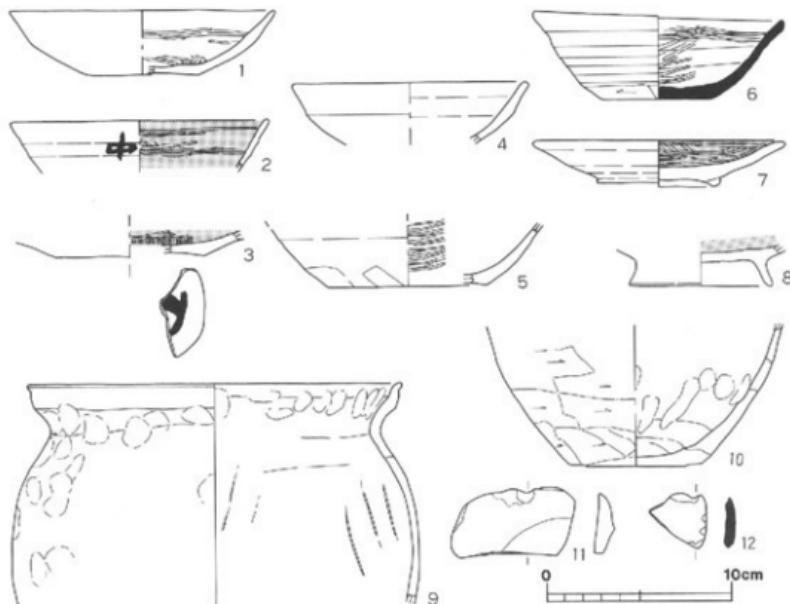
発 床上に焼土粒を含む燃焼部の一部が検出されたので、擾乱のはいった北西壁やや北寄りに、黄白色砂質粘土を使用して構築されていたものと考える。規模・遺物など詳細は不明である。

覆土 主として北の谷側の壁近くから埋まり始め、凹部にはレンズ状の堆積が見られる。

遺物 「中」の墨書きがある内黒の杯（2）等少量の土器が出土しているがすべて覆土中からの庵棄遺物である。

所見 覆土中の出土土器を総合的に判断して9世紀後葉の住居を考える。

図版No	器種 器形	法量	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土器	A:(14.4) B:(6.0) C:3.5	覆土 1/3	普通	細砂粒を少 量含む	明赤褐色 赤褐色	内面にヘラミガキ 切り離し後、底部とその周辺に回転ヘラ削り ロクロ回転は時計回り	122
2	杯 土器	A:(14.0) C:(4.8)	覆土 口縁小片	普通	粗砂粒を少 量含む	にふい橙 黒	握手 内面ヘラミガキ	内黒 墨書き125 「中」体部逆位 「□」体部



第57図 第7号住居址出土遺物

3	杯 土脚器	B : (8.0) C : (0.9)	覆土 底部小片	普通 母片を多く含む	細砂粒・素 母片を多く含む	根 黒	内側へラミガキ 切り離し後、底部とその周辺に回転へラ削り ロクロ回転は時計回り	内黒 墨書「匁」底部 129
4	杯 土脚器	A : (12.8) C : (3.4)	覆土 1/3	普通 石英・長石 粒を少量含む	石英・長石 粒を少量含む	に付い赤褐色 体部へと颈部の境にゆるやかな棱を持つ 内面へラミガキ		128
5	杯 土脚器	B : (8.4) C : (3.2)	覆土中位 小片	良好 良好	石英・長石 粒を少量含む	に付い褐色 外面部事なナデ 内面へラミガキ 底部ふき取り		126
6	杯 須彌器	A : 13.6 B : 6.0 C : 4.7	覆土 半形	不良 石英 基母片を多 量に含む	根 黒褐色	口縁部はゆるやかに外反。下体部に手持ちへ ラ削り、底部切り離し後、一方向へラ削り	破大焰瓶成色 130	
7	高台付皿 土脚器	A : (13.5) C : 2.3 D : 6.6	覆土 1/2	良好 石英・長石 基母片を少 量含む	に付い褐色 黒	切り離し後、底部とその周辺回転へラ削り。 低く、断面台形の貼り付け高台 内面へラミガキ		内黒 123
8	高台付杯 土脚器	C : (1.9) D : 7.8 E : 1.4	覆土 小片	普通 砂粒を極少 量含む	に付い褐色 黒	高台は細く、外に張り出す 底部回転へラ削り未調整 内面へラミガキ		130
9	裏 土脚器	A : (20.3) C : (12.0)	覆土下位 口縁小片	普通 長石・石英 少粒を少量 に含む	に付い赤褐色 口縁部の立上がりの段は甘く、端部は細くつ まみ出される。外面は指捺压痕とナデ、内面 にはラナデ			119
10	裏 土脚器	B : (7.2) C : (7.6)	覆土中位 底部小片	普通 長石・石英 大粒を多量 に含む	に付い褐色 明赤褐色 内面へラミガキ 内面へビナデ、指捺压痕 底部切り離し後ナデ			127

第8号住居址（第59図～61図 P L10・11・62・63）

位置 調査区南側。細長く突出した標高25m程の舌状台地の先端付近。5B・5C-90区。

規模・形態 主軸長3.1m、幅3.4mの方形。面積10.5m²。

主軸方位 N-14°-E

壁 ならかに傾斜で高さ35~42cm。竈を境に壁の掘り込みにズレが生じている。

床 平坦で明瞭に検出されたが、中央部竈寄りに径1.7m、深さ22cmばかりの円形の窪みがあり、その底面は凸凹している。性格は不明。壁溝は検出されなかった。

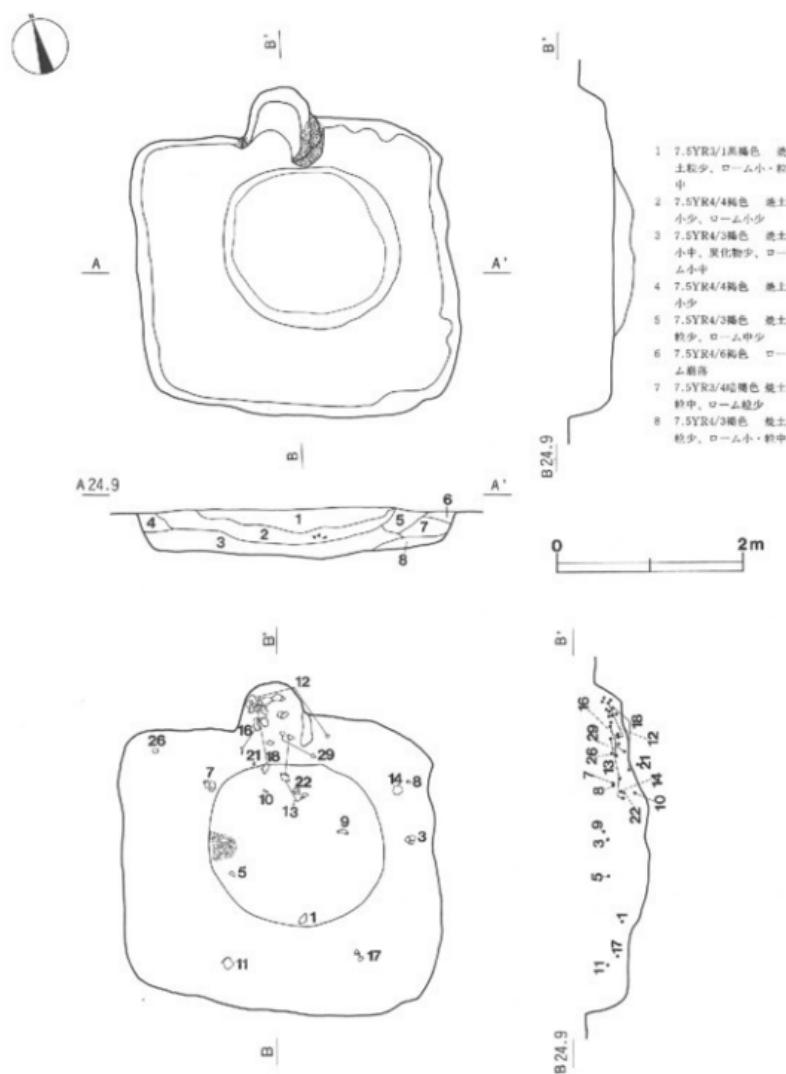
ピット 上記の大型ピットのみで、柱穴に準ずるようなものは検出されなかった。生活時の竈袖は住居内側へさらに伸びると予想されるので、このピットは住居使用時には埋まって床と同レベルであったと考える。

竈 住居壁から約50cm掘り出して、北壁中央部に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。

燃焼部範囲は明確でなく、袖も左右とも残存状態がよくない。特に竈に向かって左袖は基部の構築土しか残っていない。復元全長約85cm、残存袖部幅50cm程である。奥壁から燃焼部にかけては緩やかな立ち上がりを見せる。覆土中4層以下には使用時の焼土が多く散って赤褐色を呈しているが、上部は住居の埋土である。天井部は完全に失われおり、付近に遺物小片が散乱している。全て廃棄遺物である。

覆土 主に西側からの營力で埋まっており、2層中に土器細片が多い。

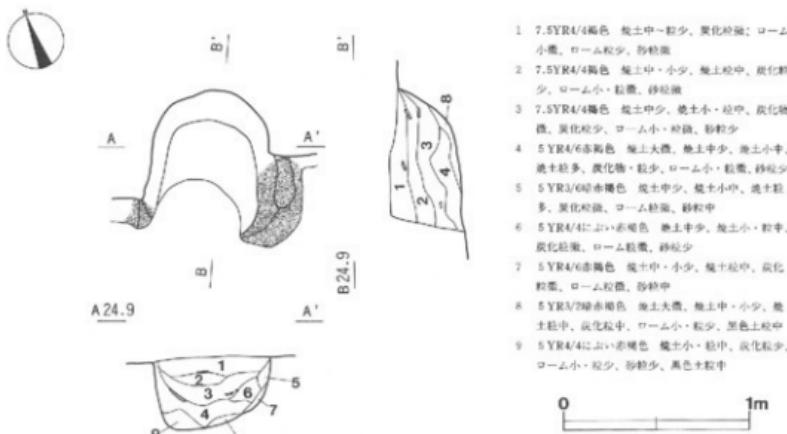
遺物 漆状の付着物を持つ個体（1・3・8・10）が多く、人面墨書きと推定される斐片も出土し



第58图 第8号住居址完掘·出土状况

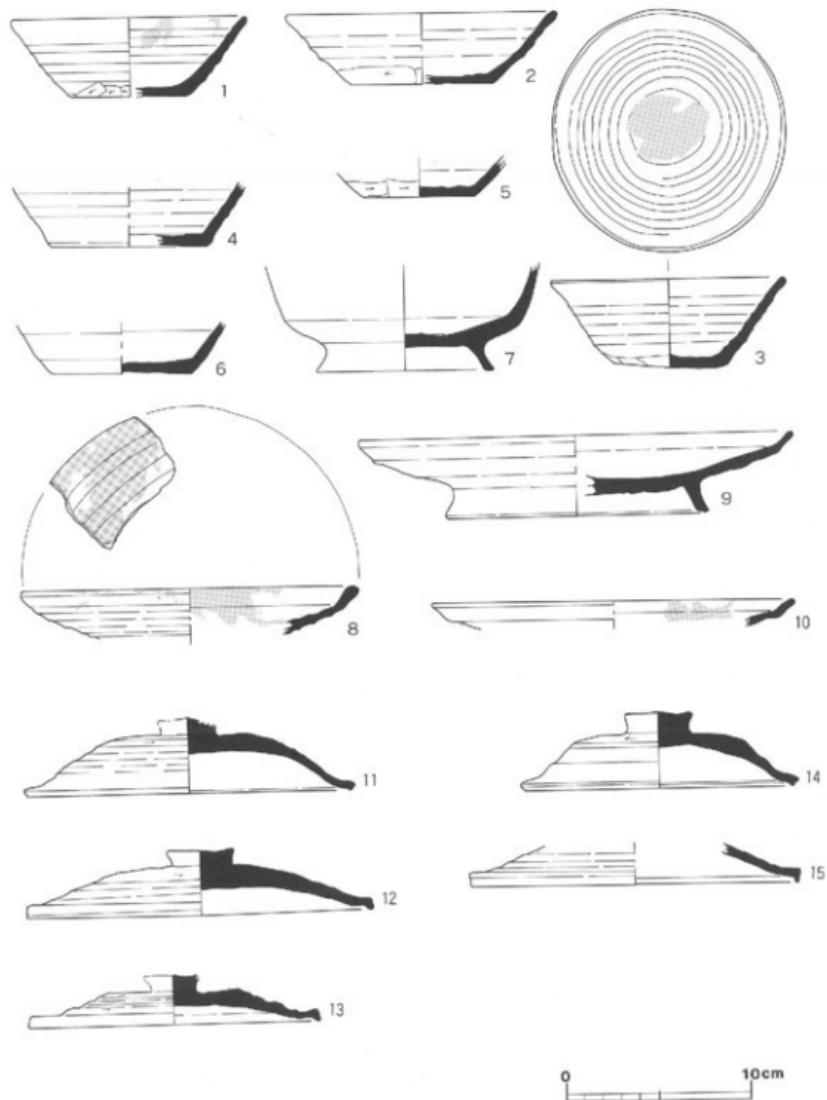
ているが、竈中出土品を含め細片が主で、中～上層で接合関係を持つ廃棄遺物である。

所見 覆土中の出土土器を総合的に判断して9世紀前～中葉の住居かと考える。



第59図 第8号住居址カマド

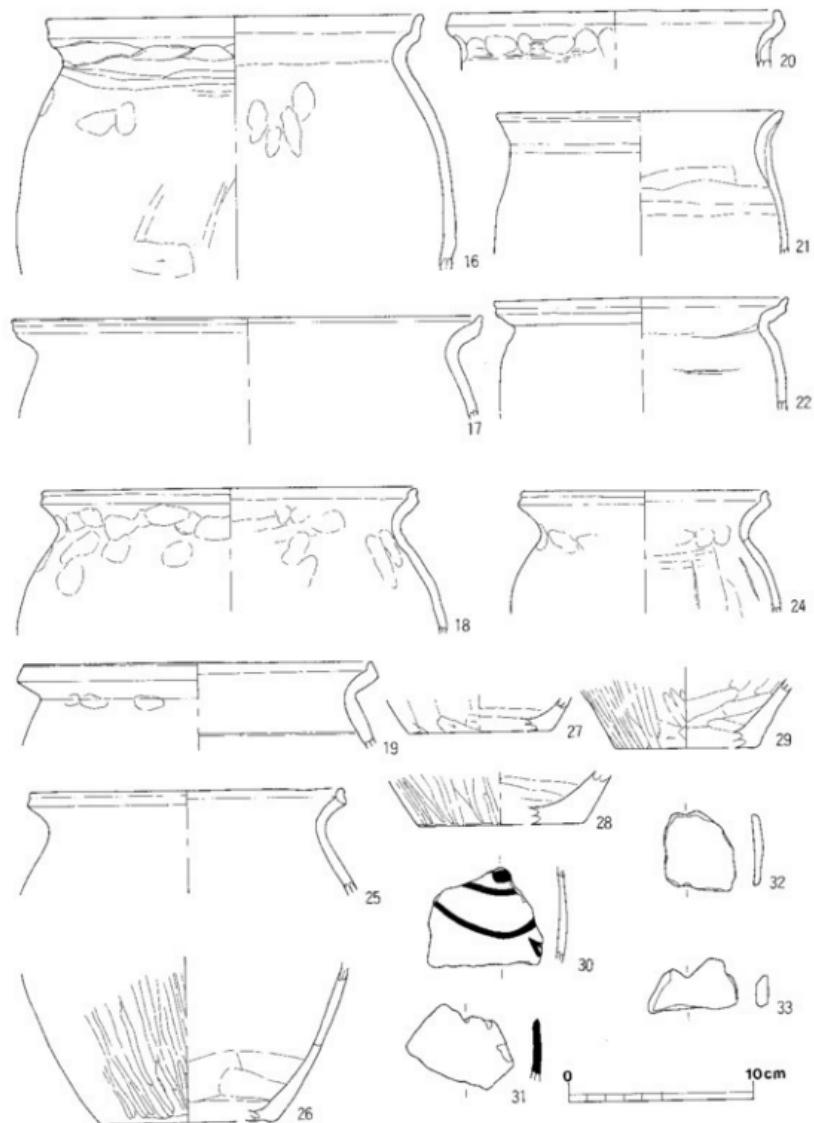
団体名	器種 器形	法量	出土位置 及 在 率	焼成	新土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 須恵器	A : (12.8) B : (6.3) C : 4.3	覆土下位 1/2	普通	粗砂粒を極 少量を含む	灰黄	底部は回転ヘラ切り後ナデ、その周辺手持ち ヘラ削り	口縁部に少量の 漆付着 147
2	杯 須恵器	A : (14.8) B : (7.8) C : 3.9	良好 覆土 小片	良好	石英・長石 中粒を多量 に含む	灰	底部回転ヘラ切り後一方向へラ削り。その後 手持ちヘラ削り	148
3	杯 須恵器	A : 12.7 B : 6.0 C : 4.7	覆土中位 完形	良好	石英・長石 無色粒を多 く含む	灰	回転ヘラ切りで切り離し後、底部とその周辺 手持ちヘラ削り。	内外底部に少量 の漆付着 161
4	杯 須恵器	B : (8.4) C : (3.2)	覆土 小片	普通	石英・長石 粒を少量含む	黄灰	底部回転ヘラ切り後軽く一方向へラ削り	158
5	杯 須恵器	B : (6.0) C : (1.7)	覆土中位 小片	良好	石英・長石 小粒を多量 に含む	灰	底部回転ヘラ切り後一方向へラ削り。その後 手持ちヘラ削り	159
6	杯 須恵器	B : (7.5) C : (2.6)	覆土 小片	普通	石英・長石 粒を少量含む	灰黄	底部回転ヘラ切り後一方向へラ削り	146
7	高台付杯 須恵器	C : (5.7) D : 9.4 E : 1.5	覆土中位 2/3	良好	長石・石英 粒を少量含む	灰黄 端灰黄	下部部の屈曲はあるやかで丸みを帯びている 高台は継ぐハの字に巻く。端部は平坦	152
8	台付盤 須恵器	A : (18.3) C : (2.6)	覆土中位 小片	普通	石英・長石 粒多量に含 む	褐灰	口縁部の屈曲はあるやか	杯部に多量の 漆付着 143
9	台付盤 須恵器	A : (23.6) C : 4.4 D : (14.8)	覆土中位 1/3	良好	長石・石英 大粒を少量 含む	灰	口縁・高台径共に大きく、底部底は垂れ気味 口縁端部は外反し、丸くおさめられる。底部 切り離し後、回転ヘラ削り	156
10	台付盤 須恵器	A : (19.8) C : (1.4)	床ヒート内 小片	普通	長石・石英 を少量含む	に近い黄灰	口縁端部は外傾して丸くおさめられる	酸化焰燒成色 少量の漆付着 160



第60図 第8号住居址出土遺物（1）

11	蓋 須恵器	A : (18.0) C : 4.0 G : (3.2)	覆土中位 2/3	堅穢 石英・長石 少量含む	灰	天井部は比較的丸みを持つ。天頂付近に面在 ヘラ削り、ロクロは時計振り。 偏平な擬宝珠つまみが貼り付けられる	157
12	蓋 須恵器	A : (18.6) C : 3.5 G : 3.6	カマド裏土 2/3	普通 石英・長石 大粒を少量 含む	灰白	天井・偏平な天井部を持つ。天頂付近に面在 ヘラ削り、ロクロは時計振り。 偏平な擬宝珠つまみが貼り付けられる	150
13	蓋 須恵器	A : (15.8) C : 2.7 G : (3.2)	覆土中位 1/2	普通 石英・長石 雲母粉を多 量に含む	灰黄	偏平な天井部、天頂部周辺は凹凸ヘラ削りし 中央が窪んだ鋸歯状の擬宝珠つまみが付く。	無火焔燒成色 149
14	蓋 須恵器	A : (15.6) C : 4.1 G : 3.6	覆土中位 2/3	良好 石英・長石 大粒を多く 含む	灰	小形だが、手で比較的丸みのある天井部を 持つ。擬宝珠つまみは断面四角で大きい。口 縁端部に杯を受ける浅い沈縫が施る。	144
15	蓋 須恵器	A : (18.0) C : (2.2)	覆土 小片	不良 雲母粉細粒 を含む	によい黄橙	薄手。口縁端部に杯を受ける沈縫が施る。 燒成度が低く軟質なでき。	無火焔燒成色 155
16	鏡 土師器	A : (16.6) C : (13.7)	カマド裏土 小片	普通 石英・長石 細粒を少量 に含む	棕	鏡部は比較的丸みを帯びる 外側丁寧なナデ、内面は指頭押圧及びナデ	139
17	鏡 土師器	A : (25.5) C : (5.3)	覆土下位 小片	普通 石英・長石 細粒を多量 に含む	棕	内外共にナデ	137
18	鏡 土師器	A : (20.4) C : (7.9)	覆土下位 口縁部 1/3	普通 石英・長石 細粒を多量 に含む	棕	外側指頭圧痕とナデ 内面ナデ	142
19	鏡 土師器	A : (19.0) C : (4.4)	覆土 1/3	普通 石英・長石 細粒を多量 に含む	棕	口縁部の屈曲は均整で、模をなす 内外丸ナデ	132
20	鏡 土師器	A : (18.0) C : (3.1)	覆土 小片	普通 石英・長石 中粒を多量 に含む	によい黄橙	鏡部の屈曲はゆるやかで、口縁端部も無く納 められる	131
21	鏡 土師器	A : (15.6) C : (7.6)	床土 小片	良好 石英・長石 細粒を多量 に含む	明赤褐	鏡部の屈曲がほとんど無く、鏡部の張りも少 ない。は縫部のつまみ出しもなく丸く納めら れる。	口縁端部に打痕 1ヶ所あり 140
22	鏡 土師器	A : (16.0) C : (6.2)	覆土下位 小片	普通 石英・長石 細粒を多量 に含む	によい棕	口縁部付近ヨコナデ 内面ヘラナデとナデ	133
24	鏡 土師器	A : (13.4) C : (6.6)	覆土 小片	普通 石英・長石 細粒を少量 含む	によい棕	外側ナデ 内面ヘラナデ	135
25	鏡 土師器	A : (17.0) C : (11.6)	覆土 小片	良好 石英・長石 細粒を少量 含む	によい棕	外側ナデ 内面ヘラナデ	136
26	鏡 土師器	B : (9.4) C : (8.3)	覆土中位 小片	良好 石英・長石 細粒を少量 含む	によい棕 によい赤褐	鏡部下半ヘラミガキ 内面ヘラナデ	鏡部に木葉痕 145
27	鏡 土師器	B : (7.8) C : (1.6)	覆土 小片	普通 石英・長石 小粒を多量 に含む	によい棕	内面ユビナデ 外側横位のヘラナデ	鏡部に木葉痕 151
28	鏡 土師器	B : (8.6) C : (2.5)	覆土 小片	良好 石英・長石 細粒を多量 に含む	棕 明赤褐	厚手の底部 外側横位のヘラミガキ、内面ユビナデ	鏡部に木葉痕 154
29	鏡 土師器	B : (7.6) C : (3.2)	覆土下位 小片	良好 石英・長石 細粒を多量 に含む	によい棕 輪	厚手の底部 外側横位のヘラミガキ 内面ユビナデ	153
30	鏡 土師器		覆土 小片	普通 石英・長石 細粒を多量 に含む	によい黄橙	鏡部横断片。厚手、器厚は約5mm 内面外共にナデ	人面形蓋土器か 141

図版No	種類	最大長	最大幅	重量	孔径	出土位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
31	上製品	4.6	5.9	12		覆土		普通	砂粒目立たない	灰	
32	土製品	4.4	3.9	9		覆土		普通	砂粒目立たない	赤褐色	
33	土製品	2.9	4.8	8		覆土		普通	砂粒目立たない	によい黄橙	



第61図 第8号住居址出土遺物（2）

第9号住居址（第62図～66図 P L 12・13・64～66）

位置 調査区南側で舌状台地の先端近くの台地上。標高25m付近で、第8号住居址に隣接する。

5B-91区。

規模・形態 主軸長3.6m、幅3.8mの方形。面積13.7m²。

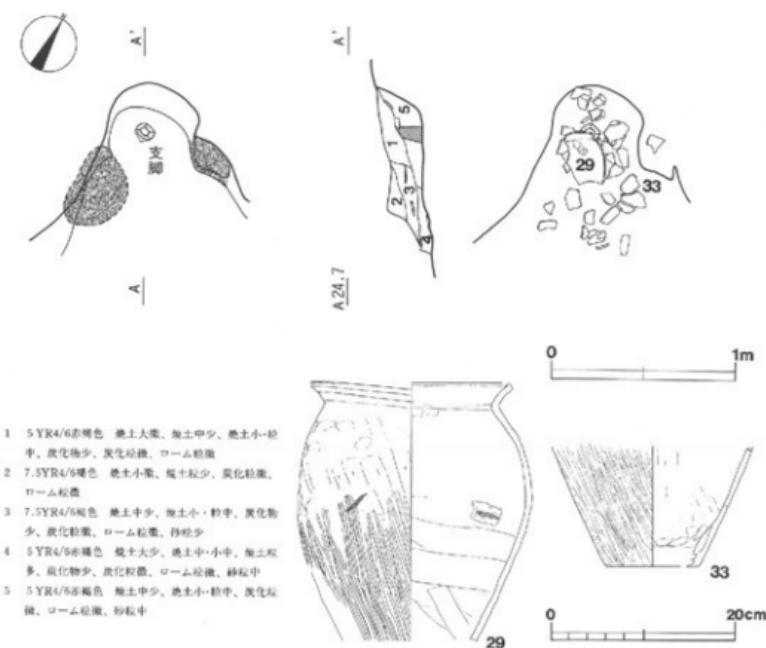
主軸方位 N-7°-E

壁 北・東側で残りが良く、高さ56cmではほぼ垂直に立ち上がる。西側では上端で崩れがみられ、傾斜も緩やかで残存高も25cm程と低い。

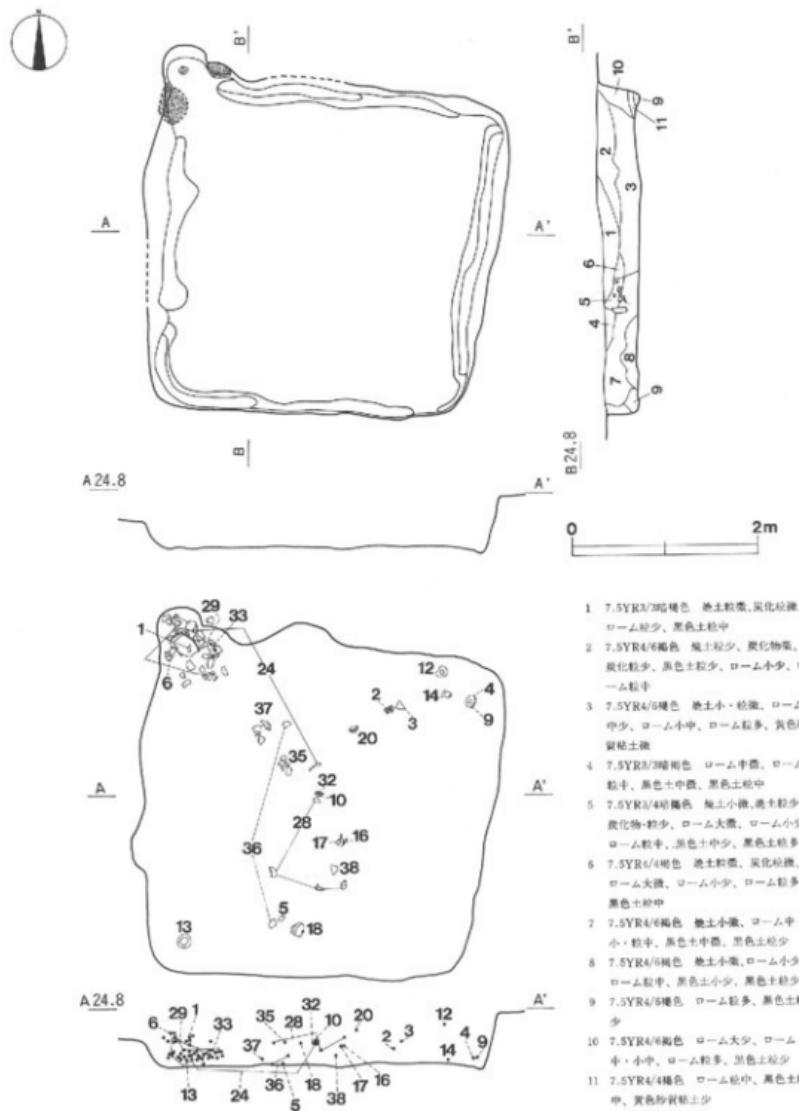
床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は途切れ途切れで特に西壁下で乱れている。幅20～35cm、深さ5cm程である。

ピット 検出されなかった。

龕 壁外へ30cm程掘り出して、北西コーナーに黄白色砂質粘土を使用して構築されている。左右の袖とも残存状態が悪く、ごく一部を残すのみである。燃焼部の掘り込みは明瞭でなく、奥壁か



第62図 第9号住居址カマド・出土遺物



第63図 第9号住居址発掘・遺物出土状況

ら煙道部にかけて急に立ち上がる。

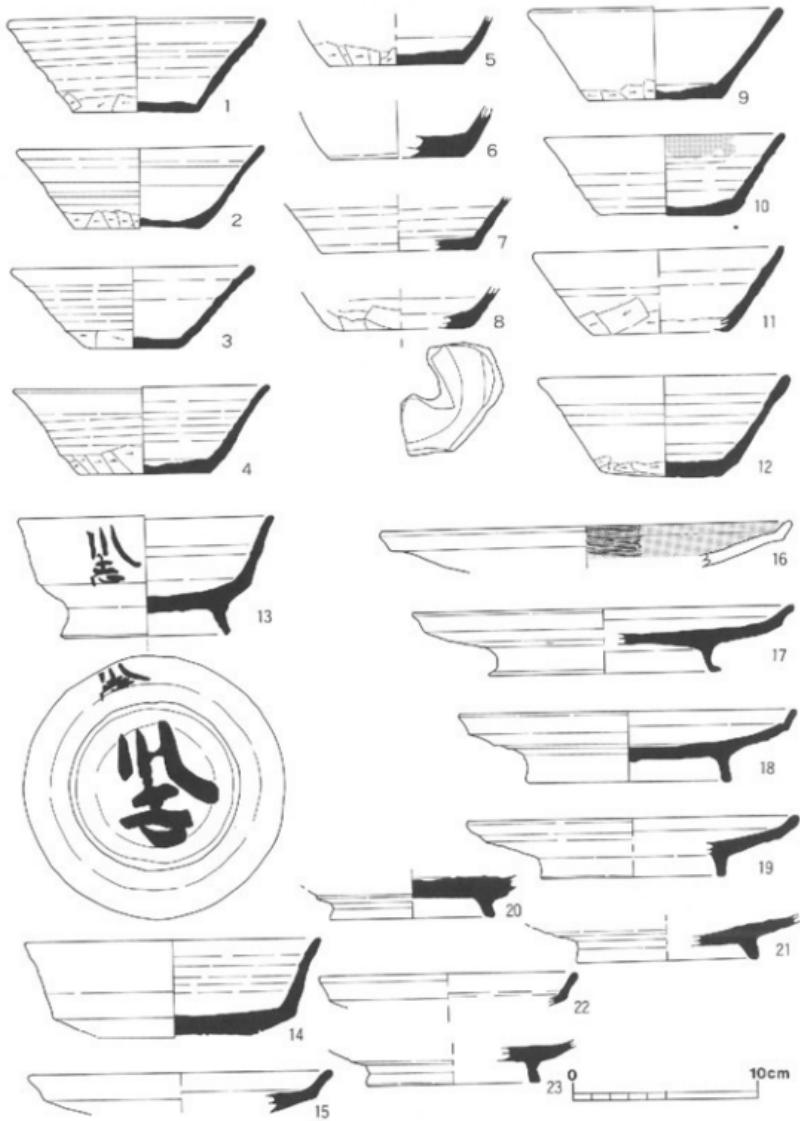
奥壁側に堆積する1・5層は使用時の焼土を含む赤褐色土で、その中に支脚が正立して残されていたが整理時の混乱で図示できなかった。その付近に散乱する變片を復元すると胴部中位は2ヶ所、外から内に向かって鋭利な刃物で突き刺したような穿孔痕がみつけられた(29)。33も同一個体の底部である可能性が高い。検出時は崩れていたが、当初は穿孔した完形變を支脚の上に安置した状態で遺棄したものではないかと考える。類例が田村・沖宿遺跡群中の鬼高窓住居の遺棄遺物にある(石橋南遺跡 第16号住・金澤遺跡 第13b住)。いずれも遺解体時の祭祀行為を暗示するもので、時間的な隔たりを越えて、儀礼の手順が遵守されたことを物語る。

覆土 初め壁際に堆積するが、主たる埋土の3層もローム酷似で人為的埋め戻しが行われたものと思われる。

遺物 遺域に集中が見られ、覆土中層にも廃棄遺物と見られる破片の散乱がある。当住居にともなうと考えられるのは上記の變(29・33)のほか、須恵器杯(4・5・9)、高台付き杯(13・14)等である。特に完形の13は体部に正位で、また底部外面にも同じ「川志」の墨書がある。図示できない土製支脚は堅く焼き締まり、四面に面取り調整がなされていた。

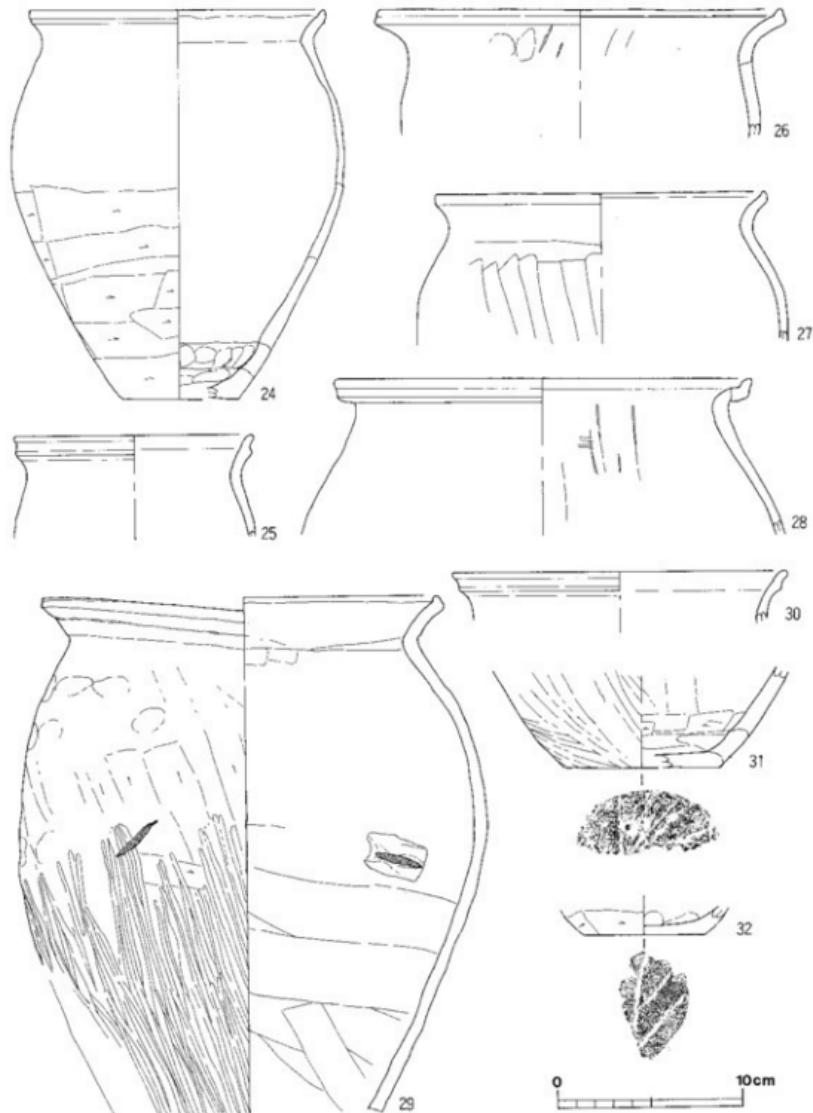
所見 出土遺物より9世紀前～中葉の住居と考える。

団体No	器種 器形	法量	出土位置 発現率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 須恵器	A:14.1 B:6.8 C:5.2	カマド内 には完形	普通	石英・長石 を多量に含む	にぶい黒	底部切り離し後一方向へラ削り、その後辺手 持ちへラ削り 口縁部はやや肥厚し、丸く納められている	166
2	杯 須恵器	A:13.5 B:6.4 C:4.4	覆土中位 2/3	良好	石英・長石 中粒を多量 に含む	黄灰	底部切り離し後一方向へラ削り、その後辺手 持ちへラ削り	178
3	杯 須恵器	A:(13.1) B:(5.2) C:4.4	覆土中位 1/3	普通	石英・長石 粒を多く含む	黄灰	底部切り離し後一方向へラ削り、底部とその 辺手持ちへラ削り	194
4	杯 須恵器	A:13.9 B:7.0 C:4.7	床上 完形	普通	石英・長石 玉母粒を多量 に含む	オリーブ黒	底部切り離し後一方向へラ削り、その後辺手 持ちへラ削り	179
5	杯 須恵器	B:(7.3) C:(2.5)	床上 小片	普通	石英・長石 小粒を少量 含む	灰	底部切り離し後一方向へラ削り、その後辺手 持ちへラ削り	186
6	杯 須恵器	B:(7.3) C:(2.7)	カマド覆土 小片	良好	長石・石英 大粒を少量 含む	にぶい黒 灰黒	底部切り離し後ナゲ。	底部へラ記号 酸火燒成色 174
7	杯 須恵器	B:(8.4) C:(2.7)	床上 小片	普通	長石・石英 黑色粒を少 量含む	灰褐	底部へラ切り未調整	酸火燒成色 184
8	杯 須恵器	B:(7.2) C:(2.2)	覆土 小片	普通	砂粒はとん ど目立たな い	褐色	内外共クロコナテ 底部切り離し後ランダムなケズリ	断部開孔か? 外→内 281
9	杯 須恵器	A:13.9 B:7.2 C:5.0	床上 完形	良好	長石・石英 大粒を少量 含む	暗灰黒	底部回転へラ切り後、一方向の解いへラ削り 辺手持ちへラ削り	167
10	杯 須恵器	A:(13.0) B:7.1 C:4.4	覆土中位 2/3	普通	砂粒はとん ど目立たな い	灰黒	底部回転へラ切り後、軽く一方向のへラ削り	口縁部に微量の 漆付着 177



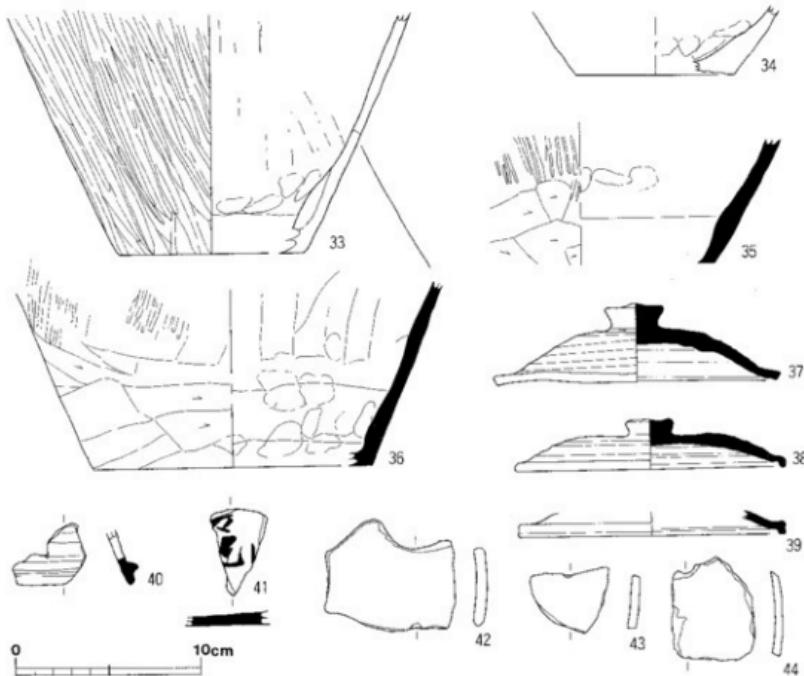
第64図 第9号住居址出土遺物（1）

11	杯 須恵器	A : [13.6] B : [7.4] C : 4.5	覆土 1/3	普通 石英・長石 雲母片少量 含む	灰 にぶい楕 にぶい楕	底部切り離し後、一方向へラ削り 底面部切り離し後、一方向へラ削り その周辺手持ちへラ削り	197 酸火焔施色 165
12	杯 須恵器	A : [15.5] B : [6.0] C : 5.4	覆土上位 はば完形	普通 石英・長石 雲母片を多 量に含む	にぶい楕 にぶい楕	底部切り離し後、一方向へラ削り その周辺手持ちへラ削り	酸火焔施色 165
13	高台付杯 須恵器	A : [13.5] C : 6.7 D : 9.1	床面 完形	普通 中形砂粒を 少量含む	にぶい楕	杯部斜切り後、縁付き高台 下部の棱ははっきりしている	墨書き川志 体部正位と底部 168
14	高台付杯 須恵器	A : [15.8] C : (5.2)	床面 1/3	良好 石英・長石 大粒を多く 含む	灰オーラ 大形厚手。下杯部の棱は明瞭。 杯部の底部は切り離し後、回転へラ削り。ロ クロは時計廻り	188	
15	台付盤 須恵器	A : [16.4] C : (2.2)	覆土 小片	良好 石英・長石 極細粒を含 む	灰灰 黄灰	口縁立ち上がりの棱は明瞭、端部は丸く柔め られる	176
16	台付盤 土師器	A : [22.6] C : (2.4)	覆土中位 1/3	普通 砂粒は殆 ど目立たない	楕 黒	口径が大きく、浅い杯部を持つ。 底面部切り離し後、回転へラ削り、ロクロは時計廻り。高台端部 は強く外反し尖り気味	内黑 191
17	台付盤 須恵器	A : [20.8] C : 3.5 D : [12.6]	覆土中位 1/3	普通 石英・長石 細粒を多量 に含む	灰	大形で浅い杯部を持つ。 底面部切り離し後、回転へラ削り、ロクロは時計廻り。高台端部 は強く外反し尖り気味	192
18	台付盤 須恵器	A : [16.4] C : 3.8 D : [11.2]	覆土中位 はば完形	不良 石英・長石 細粒を多量 に含む	にぶい楕	大形で浅い杯部を持つ。 焼成温度が低く軟質	173
19	台付盤 須恵器	A : [18.2] C : 3.2 D : [10.1]	覆土 小片	不良 雲母極細粒 を少量含む	灰 黄灰	口縁立上がりは短い。高台も低い。 焼成温度が低く軟質	185
20	台付盤 須恵器	C : (1.6) D : [9.0]	覆土上位 小片	良好 石英・長石 極細粒を多 量に含む	灰 灰灰	盤端部は切り離し後回転へラ削り 高台は強く外方に張り出す	169
21	台付盤 須恵器	C : (2.0) D : [9.9]	覆土 小片	普通 石英・長石 極細粒を多 量に含む	灰 灰灰	盤端部は切り離し後回転へラ削り 高台は強く外方に張り出す	175
22	台付盤 須恵器	A : [14.0] C : (1.8)	覆土 小片	普通 石英・長石 極細粒を少 量含む	灰 小形、薄手 口縁立上がりの棱は甘く、丸みを帯びている	190	
23	台付盤 須恵器	C : (2.6) D : [9.4]	覆土 小片	良好 石英・長石 極細粒を少 量含む	灰 灰	高台は外方へ張り出す	182
24	甕 土師器	A : [17.0] B : (6.4) C : 21.0	カマド覆土 1/3	普通 石英・長石 小粒を多量に 含む	楕 楕	胴部下半は横位のへラ削り、上部は丁寧なナ ダ。 内面ナダ。底近くには番頭压痕を残す	196
25	甕 土師器	A : [13.0] C : (5.5)	覆土 小片	普通 石英・長石 小粒を少量 含む	にぶい楕 にぶい楕	小形甕 内外とも丁寧なナダ	171
26	甕 土師器	A : [22.0] C : (6.9)	覆土 小片	普通 石英・長石 小粒を多量 に含む	にぶい楕	口縁は強く内傾し端部は尖る。内面に甘い凹 輪が残る。頭部の回転はゆるやか。外面部位 のみナダ。	199
27	甕 土師器	A : [18.0] C : (8.1)	覆土 小片	普通 石英・長石 極細粒を多 量に含む	楕 にぶい楕	口縁は強く直立し、端部は尖る。外面部位 は横位のへラナダ。頭部の粗面はゆるく横位の ナダ。内面丁寧なナダ。	胴部にスス付番 280
28	甕 土師器	A : [22.6] C : (8.4)	覆土中位 1/2	普通 細砂粒と雲 母細粒を多 量に含む	にぶい楕	などらかな頭部からはば直角に屈曲する跡り 付け口縁に続く。外面部は丁寧なナダ。 内面はヘラナダの後ナダ	168
29	甕 土師器	A : 21.9 C : [28.0]	カマド内 2/3	良好 石英・長石 少量含む	楕 楕	胴部下半に瓶位のヘラミガキ、上部はヘラナ ダ及びナダ。胴部中位に2ヶ所0.4×2.5cmの 鋸歯状穿孔あり。内面ナダ。	土器焼成後穿孔 外→内 162
30	甕 土師器	A : [18.2] C : (5.4)	覆土 小片	普通 石英・長石 小粒を少額 含む	にぶい楕	口縁外面には幅広の凹窪が並り、外傾 している。内面丁寧なナダ。頭部はほとんど 壊滅しない。	172
31	甕 土師器	B : (8.4) C : (5.4)	覆土中位 小片	良好 石英・長石 雲母を少量 含む	灰 にぶい楕	胴部器壁に比べ底部が薄い。 内面ユビナダとヘラナダ 外面部位のヘラミガキ	本漆痕あり 200



第65図 第9号住居址出土遺物（2）

32	甕 土師器	B : (6.6) C : (1.5)	覆土中位 小片	普通	石英・長石 粒を多量に 含む	に赤い粒	外面は下側部にヘラ削り 内面は丁寧なナデ	木葉柄あり 181
33	甕 土師器	B : (9.8) C : (13.0)	カマド内 胴部下牛 1/2	普通	石英・長石 粒を多量に 含む	に赤い場	胴部下牛に挺位のヘラミガキ。内面はナデ	198
34	甕 上部器	B : (8.6) C : (3.4)	覆土 小片	普通	石英・長石 小粒を多量 に含む	に赤い赤褐色	外面ナデとヘラミガキ 内面スピナデ	180
35	甕 須恵器	C : (6.6)	覆土中位 小片	普通	石英・長石 雲母粒を少 量含む	に赤い黄褐色	F胴部には横位のヘラ削り、上部には挺位の 平行叩き	焼火焔燒成色 195
36	甕 須恵器	B : (15.6) C : (9.6)	覆土下位 小片	不良	細砂粒と茶 色粒子を含 む	に赤い黃褐色 浅黄	F胴部には横位のヘラ削り、上部には挺位の 細かい平行叩き。焼成度度が低く軟質 底部端に數個粒状の圧出あり	焼火焔燒成色 201
37	甕 須恵器	A : 15.9 C : 4.4 G : 3.2	覆土下位 小片	普通	石英・長石 大粒を少量 含む	浅黄	口縁部に施成上の丸みを生じている 天井部は比較的丸みを帯びる。擬宝珠つまみ は逆台形状	164
38	甕 須恵器	A : (14.8) C : (2.7) G : 2.6	覆土下位 1/3	普通	石英・長石 を少量含む	に赤い灰青	口縁端部に杯を受ける沈縮が施されている が、全体に偏平でシャープさに欠ける	170



第66図 第9号住居址出土遺物（3）

39	蓋 須恵器	A : (14.5) C : (1.3)	覆土 小片	不良 無	砂鉄粒を少 量含む	浅黄	焼成温度が低く軟質 口縁部はほぼ直に折り返される	陶火焰焼成色 183
40	円筒甕 須恵器	C : (2.9)	覆土 小片	堅瓶	極少量の砂 粒を含む	褐灰	鉢把に断面三角形の突起を施す。また鉢形の 透しを連続していれる。 内面に自然釉の付着あり。	285
41	杯 須恵器		覆土 底部小片	普通	石英・長石 雲母細粒を 含む	にほい黄橙	切り離し後一方向へクレリ	墨書き「□」底部 陶火焰焼成色 269

測定箇所	種類	最大長	最大幅	東	西	北	出上位置	残存率	焼成	胎土	色調	備考
42	土製品	6.1	7.1	31			覆土		普通	砂粒目立たない	棕	
43	土製品	4.5	4.2	9			覆土		普通	砂粒目立たない	棕	
44	土製品	5.6	4.5	19			覆土		普通	砂粒目立たない	にほい黄橙	

第10号住居址（第67図・68図 P L 14・67）

位置 調査区南端。細長い舌状台地の突端部に単独で設営。標高23m付近の台地縁辺部。5J・5K-99・100区。

規模・形態 主軸長3.3m、幅2.9mの縦長方形。面積9.6m²。

主軸方位 N-72°-E

壁 ほぼ垂直に立ち上がるが削平を受け残存状態が悪く、高さ20~22cmしかない。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は途切れ途切れで特に南壁下で乱れている。現在壁溝はカマド2を切って掘られており、カマド1が使われた時点の住居にともなうものである。幅24~30cm、深さ5cm程である。

ピット 検出されなかった。

甕 2ヶ所検出された。カマド2がカマド1より古い。

■ カマド1 当住居廃棄時まで使用されていたものである。壁外に20cm程掘り出して東壁の南寄りに黃白色砂質粘土を使用して構築されている。全体に円形を呈し、全長と幅がほぼ同じ50cm内外である。燃焼部は横長の椭円形で長径40cm、短径35cm、深さ5cmに窪められている。

袖は非常に短くしか残っておらず残存幅は約30cmである。

この燃焼部を埋めているのは甕使用時の堆積土が主である12・13・14層で、その上のレベルより土器が重なって出土している。まず最下部には二次焼成痕のある同一個体が四片かさなる。これらは1/2程が残存する小型甕(6)に復元される。その直上に外面が磨滅し、口縁の一部欠損した土師器杯(1)が伏せて置かれ、間に明瞭な焼土をはさんで、さらに杯(2)が逆位で重ねられている。その上には図示できない甕下胴部片が4片重なり(内3片は同一個体だがNo.6とは別個体)、最上段に横位の平行叩きが施された須恵器大甕の破片がのせられてあった。最下部の甕

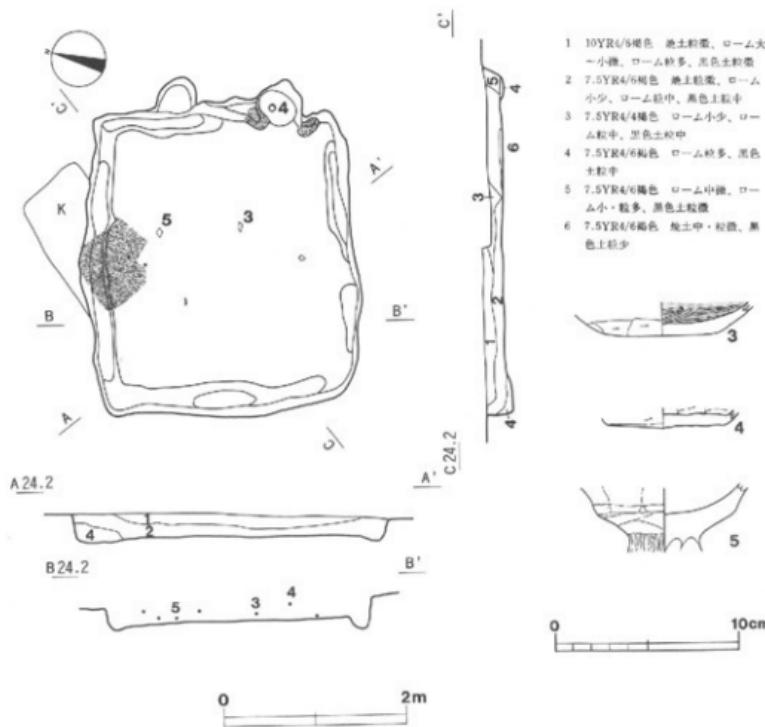
片から上段の須恵器表までの高さは14cmである。これらはいずれも内外に焼土の付着、器壁の荒れ、磨滅がみられ、支脚に代用されていた可能性が強い。しかし燃焼部床から10cm以上も浮いており、最下部片が小片で安定性に欠けるなど、使用時の姿をそのまま凍結しているか疑問である。支脚として使っていたものを壇解体時に再配置したと見るべきであろう。

■ カマド2 カマド1から1m北側の同じ壁上に、壁外へ35cm掘り出して黄白色砂質粘土を使用して構築されている。袖や燃焼部は住居の壁溝に壊され残っておらず、焼土の分布で確認されたものである。現存掘り方の幅40cmで、奥壁から煙道部にかけては急に立ち上がる。覆土には焼土粒子が散っているが明確な構築土や堆積土等はみられず図示できる出土遺物もない。

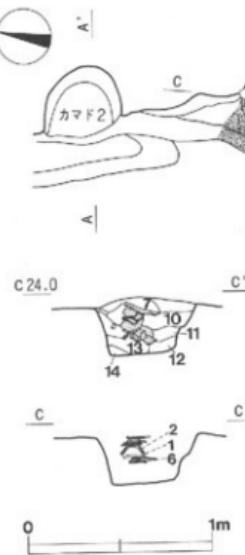
覆土 壁際に堆積した後ほぼ一気にうまっている。

遺物 小片が散見されるのみで流れ込んだ廃棄遺物と考える。

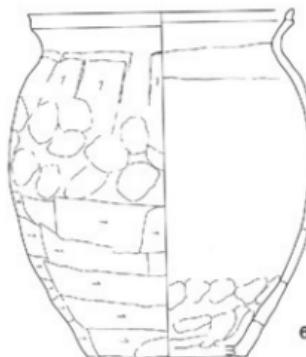
所見 当住居にともなうのは竈内に出土した1・2・6で、9世紀前～中葉の住居と考えられる。



第67図 第10号住居址発掘・出土遺物



- 1 7.5YR5/6暗褐色 深土小・较少、ローム軟中。黃色砂質粘土中、黑色土粒少
 2 7.5YR4/6褐色 深土小・较少、灰化粘重。ローム軟中、黃色砂質粘土少、黑色土粒中
 3 7.5YR5/6暗褐色 深土粘重、ローム粘中。黃色砂質粘土少
 4 7.5YR4/6褐色 深土小少、深土軟中。灰化粘少、ローム粘中、黃色砂質粘土少、黑色土粒少
 5 7.5YR4/6褐色 深土小・较少、灰化粘少、ローム粘中、黃色砂質粘土少、黑色土粒少
 6 7.5YR4/6褐色 深土粘少、ローム粘中、黑色土粒少
 7 7.5YR4/6赤褐色 深土中帶、灰土粘多、ローム粘少、黃色砂質粘土少
 8 10YR4/6褐色 灰土小中、灰土粘少、灰化物少。ローム小體、ローム粘中、黑色土粒少
 9 7.5YR4/4褐色 灰土小・粘中、灰化物少、ローム大體、ローム粘中、黑色土粒少
 10 7.5YR4/6褐色 灰土大~小少、灰土粘中、灰化物少、ローム小・粘少、黑色土粒少
 11 7.5YR4/6褐色 灰土中帶、ローム粘少、黑色土粒中
 12 5YR3/3暗赤褐色 深土大~较多、灰化物・粘少、ローム小・粘少、黑色土粒中
 13 5YR3/4に近い赤褐色 深土小中、灰土粘多、灰化物少、ローム大體、ローム小・粘少、黑色土粒多
 14 5YR4/6赤褐色 灰土中帶、灰土小少、灰土粘多、灰化物少、ローム小・粘少、黑色土粒少



0 10cm

第68図 第10号住居址カマド・出土遺物

図版No.	器種	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1 SI-10	杯 土師器	A : 13.4 B : 7.0 C : 4.7	カマド内 ほぼ完形	普通 石英・長石 雲母を多量に含む	にふい穂 褐色	底部切り離し後、乱雑なナナ 内面ヘラミガキ、外面丁本なナナ		203
2 SI-10	杯 土師器	A : 13.5 B : 6.0 C : 4.1	カマド内 2/3	普通 石英・長石 中粒を多量に含む	にふい穂	底部切り離し後、方向へラ削り、その周辺手 持ちへラ削り 内面へラ削り		204
3 SI-10	杯 土師器	B : 6.2 C : 1.5	覆土下位 小片	普通 石英・長石 粒を多く含む	穂 黒	底部切り離し後、方向へラ削り、底部とその 周辺手持ちへラ削り 内面ヘラミガキ		205
4 SI-10	杯 土師器	B : 6.4 C : (1.7)	カマド裏 小片	普通 石英・長石 粒を多量に含む	穂	底部切り離し後ナナ、その周辺手持ちへラ削 り		207
5 SI-10	高杯 土師器	C : (3.4)	床下 小片	普通 石英・長石 小粒を少量含む	穂	杯部外縁及び脚部は板状のヘラミガキ、杯底 部付近は手持ちへラ削り底、杯部の棱は目く 純い、内面丁寧なナナ		202
6 SI-10	甕 土師器	A : 14.4 B : 8.5 C : 18.9	カマド内 1/2	普通 石英・長石 大粒を多量に含む	穂	上肩部には指印压痕を残す。下肩部は横幅の へラ削り 内面ナナ、炭化物付着あり		206
1 SI-11	杯 須恵器	A : 13.4 B : 6.2 C : 4.4	床下 ほぼ完形	普通 長石・石英 雲母片を少 量含む	にふい穂 灰黑	底部切離へラ切り後、ランダムなヘラナナ 底部周辺は手持ちへラ削り		210
2 SI-11	甕 土師器	A : 11.8 B : 7.0 C : 11.6	床下 ほぼ完形	普通 石英・長石 粒を多く含 む	にふい穂 穂	頭部最大径が上方にあり、肩が張った器形 下肩部の他、口縁内側にもヘラミガキを施し 丁寧な造りである	木葉模倣あり	209

第11号住居址（第69図 PL15・67）

位置 調査区ほぼ中央、標高25m付近の台地上。第1号掘立柱建物跡と切り合っており当住居の方が古い。4 U-83区。

規模・形態 東西1.9m、南北2.1mの不整方形で、面積4m²の極小型住居である。

主軸方位 不明。

壁 西壁と東南コーナー付近は擾乱で壊されているが、東側ではほぼ垂直に40cmほど立ち上がっている。

床 平坦で明瞭に検出された。ほぼ中央部に第1号掘立柱建物跡の柱穴が掘り込まれ、床面に堆積した小規模な燒土の堆積を切っている。壁溝はない。

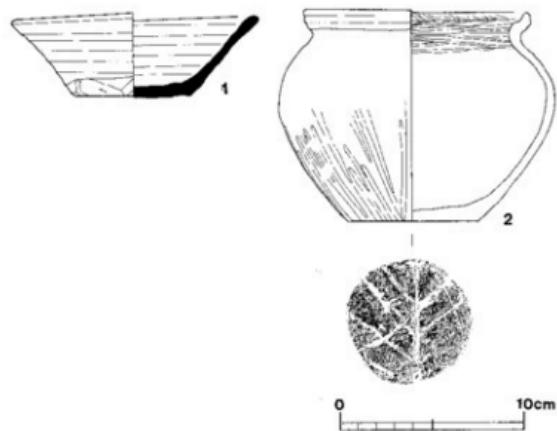
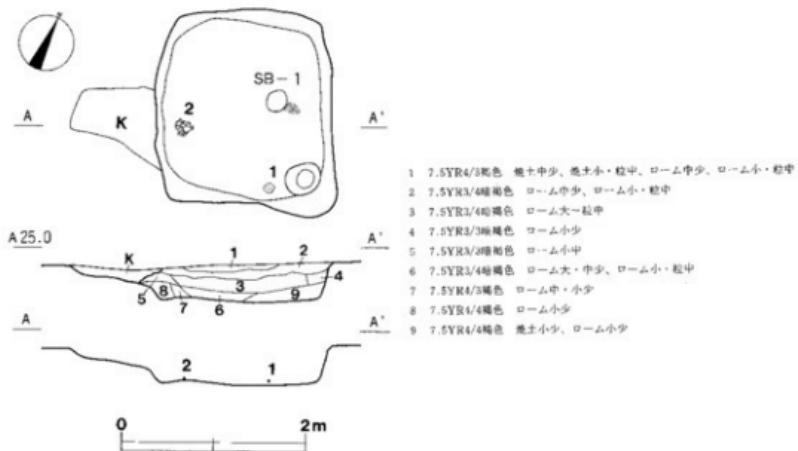
ピット 東南コーナーに1ヶ所、径38cm程の円形を呈する。性格は不明である。

甕 検出されなかった。

覆土 ロームブロックを主体とする堆積土である。

遺物 細かく破碎していたがほぼ完形に復された甕（2）と伏せられた須恵器杯（1）が床面上から出土している。これらは当住居にともなうものと考えられる。

所見 上記出土遺物より9世紀中～後葉の住居と考える。



第69図 第11号住居址発掘・出土遺物

第12号住居址（第70図・71図 P L16・17・67・68）

位置 調査区中央部で標高24m付近の台地上。集落の北のはずれに当たる。第13・14号住居址と3軒が切り合っており当住居が一番新しい。4 L-76区。

規模・形態 主軸長は不明、幅は約3.2mの方形。

主軸方位 N-48°-W

壁 ほとんど残っていないが、セクション中では緩やかに傾斜しており高さ35cm程度が観察できる。

床 残存する北西側を見る限り平坦で、壁溝はない。

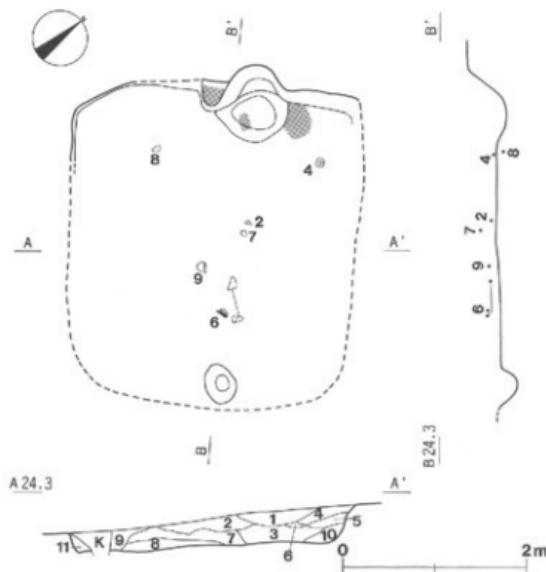
ピット 窓に対面する壁際

に1ヶ所検出され、当住居の入り口部に当たるのではないかと考える。長軸長42cm、短軸長34cmの楕円形を呈し、深さ18cmである。

窓 唯一残存する北西壁ほぼ中央に、壁外へ20cm掘り出して黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長85cm、袖はほとんど残っていない。

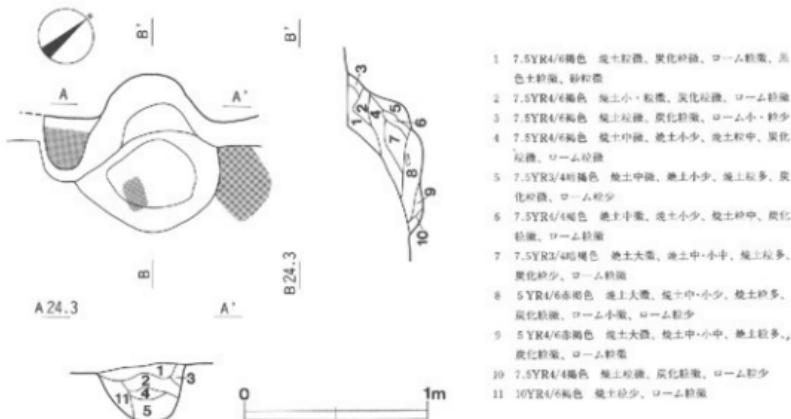
燃焼部は不整円形で内部に焼土層（8・9層）が堆積しており、焼土塊も検出された。長軸80cm、短軸55cm、最深部の深さ7cmである。奥壁から煙道部にかけては短く急に立ち上がる。廃棄遺物小片が散見される。

覆土 第13号住居の覆土中に掘り込まれていたため識別が遅れた。ほとんどが褐



- 1 7.5YR4/6褐色 焼土粒少、ローム中混、ローム粒半、黑色土粒半
- 2 7.5YR4/6褐色 焼土粒、炭化粒、ローム中、小葉、ローム粒中、黑色土粒中
- 3 7.5YR4/4褐色 地下小、ローム少、燒土粒、炭化物微、ローム粒中、黑色土粒中
- 4 7.5YR4/6褐色 地下小、粒、要化粒微、ローム粒半、黑色土粒半
- 5 7.5YR4/6褐色 地下小、ローム粒少、燒土粒、要化粒微、黑色土小葉、黑色土粒中
- 6 7.5YR4/6褐色 燃土粒、ローム小葉、炭化物、ローム粒少、黑色土小葉、黑色土粒中
- 7 7.5YR4/6褐色 燃土中、小・粒、要化粒少、ローム粒中、黑色土小葉、黑色土粒中
- 8 7.5YR4/6褐色 地下小、粒微、要化粒少、ローム粒中、黑色土小葉、黑色土粒中
- 9 7.5YR4/6褐色 燃土粒、炭化粒少、ローム大・小葉、ローム粒半、黑色土小葉、黑色土粒中
- 10 7.5YR4/6褐色 燃土少、炭化物少、ローム粒中、黑色土粒中
- 11 7.5YR4/6褐色 ローム大・小葉、ローム粒半、黑色土粒中

第70図 第12号住居址完掘



第71図 第12号住居址カマド

色を呈する類似土で層序も乱れている。

遺物 覆土中層に破片が少量散乱している状況で、ほとんどが流れ込んだ廃棄遺物と考える。ただし、完形で床面上に伏せられていた土師器杯（4）には吉祥句「万福」の墨書きがあり、遺棄されたものである可能性を捨てきれない。

所見 出土遺物と切り合い関係より9世紀後葉の住居を考える。

第13号住居址（第72図～74図 P L16・17・67・68）

位置 調査区中央部で標高24m付近の台地上。集落の北のはずれに当たる。第12・14号住居址と3軒が切り合っており、当住居は12号より古く、14号より新しい。4L-76区。

規模・形態 主軸長4m、幅3.8mで平面形は四隅で乱れ、隅丸の縦長方形を呈する。面積15.2m²。

主軸方位 N-50°-E

壁 やや傾斜を持って立ち上がる。南壁側で削平を受けており15~16cmしかないが、北壁下では50cmの高さがある。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝はない。

ピット 6ヶ所検出された。中央より南側は第14号住居が掘削されていることもあって全て北側、竈近辺に集中している。いずれも性格は不明で、当初の数もはっきりしない。

P1は径22cmの円形で深さ11cm。P2は長軸64cm・短軸50cmの横円形で深さ9cm、最下層に炭化材が多量に検出された。P3は円形で径34cm・深さ7cm。P4は径24cmの円形で深さ38cm。P5

は径27cm、深さ22cm。

P 6は竈焼き口近くに掘り込まれており、径47cmの円形で深さ16cm、焼土粒が散っている。

竈 壁外へ70cmほど掘り出し、北東壁やや南寄りに黄白色砂質粘土を使用して構築されている。

燃焼部が非常に大型で竈全長が165cm余りとなっているがやはり掘り過ぎの感がある。

残存袖部幅45cmで奥壁から煙道部にかけて

ては長くなだらかな傾斜で立ち上がる。最下層の堆積土の上部(4・5・14層)

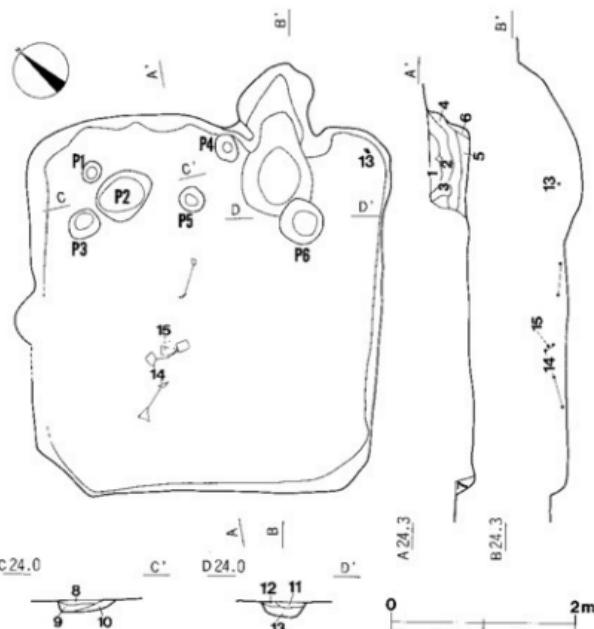
が使用時の焼土と思われる。特筆すべき遺物の出土はなく全て小片である。

覆土 第12号住には

とんど壊されており北側壁付近1m余りを残すのみである。

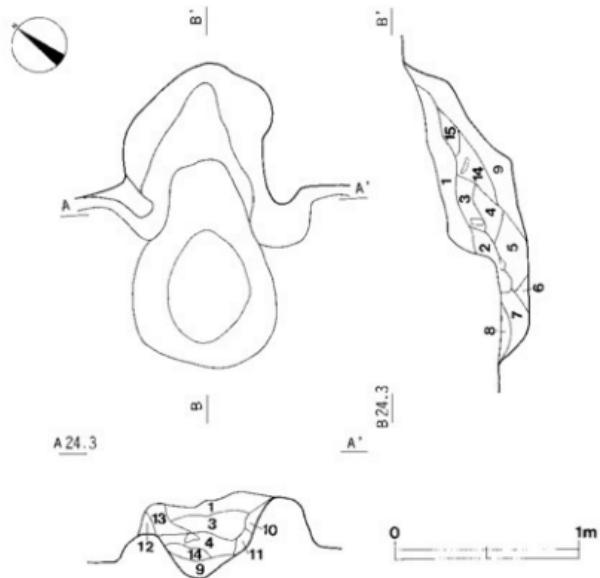
遺物 廃棄遺物小片のみである。

所見 切り合い関係より9世紀後葉の住居と考える。



1. 7.5YR4/4褐色 焼土中～砂質、炭化物微、炭化粒少、ローム中微、ローム粒少、白色粒少、山砂少、黒色土粒中
2. 7.5YR4/4褐色 焼土中微、焼土少、炭化物微、炭化粒少、ローム粒中、黑色土粒中
3. 7.5YR4/6褐色 焼土小量、燒土粒少、ローム中微、ローム小少、ローム粒中、黑色土粒中
4. 7.5YR4/6褐色 焼土小、砂少、炭化物微、ローム粒少、黑色土粒中
5. 7.5YR4/6褐色 焼土大、中微、燒土粒少、炭化物微、炭化粒少、ローム大・小量、ローム粒中、黑色土粒中、石礫
6. 7.5YR4/6褐色 焼土粒微、ローム粒中、黑色土粒中
7. 7.5YR4/6褐色 ローム中少、ローム粒多、黑色土粒少
8. 7.5YR4/4褐色 焼土小、粒微、炭化物、炭化粒多、ローム大少、ローム粒中、黑色土粒微
9. 7.5YR4/6褐色 焼土中屢多、炭化粒微、ローム大中、ローム少少、黑色土粒微
10. 7.5YR5/6褐色 炭化材屢多、炭化粒微、ローム大少
11. 7.5YR4/4褐色 焼土大層、燒土中・少、燒土和中、炭化物微、炭化粒少、ローム小微、ローム粒少
12. 7.5YR4/6褐色、燒土中・少、燒土和少、炭化粒微、ローム中・少、ローム粒少
13. 7.5YR4/6褐色、燒土小層、燒土粒少、炭化物微、ローム中・少微、ローム粒少

第72図 第13号住居址完掘



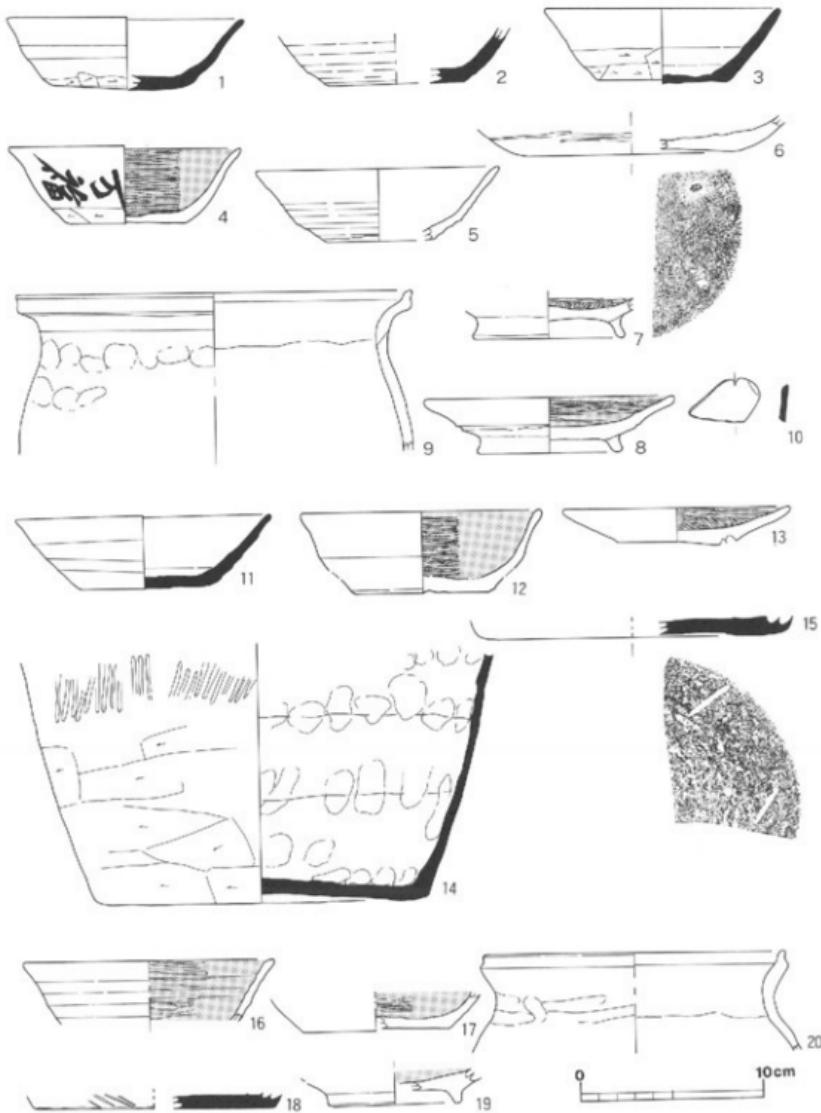
- 1 7.5YR4/6褐色 地中大礫、塊土中少、塊土小・粒中、炭化物多、ローム较少、黑色土中少
 2 7.5YR4/6褐色 地土中少、炭化物微、炭化粒少、ローム较少、黑色土粒中、砂質粘土少
 3 7.5YR4/6褐色 地土粒中、炭化物微、ローム粒中、黑色土中、砂質粘土中
 4 5YR1/6赤褐色 地土上・中少、地土中少、地中粘多、炭化粒少、ローム较少、黑色土较少、砂質粘土少
 5 5YR4/6赤褐色 地土中・小中、地中粘多、炭化粒少、ローム较少、黑色土较少、砂質粘土中
 6 7.5YR4/6褐色 地土小少、地土粘巾、炭化粒少、ローム较少、黑色土较少、砂質粘土中
 7 7.5YR4/6褐色 地土小少、炭化粒少、ローム较少、黑色土较少、砂質粘土少
 8 7.5YR4/6褐色 地土中微、块土粒中、炭化粒少、ローム粉中、黑色土粒少、砂質粘土微
 9 7.5YR4/6褐色 地土粒少、炭化粒微、ローム粉巾、黑色土粒中、砂質粘土微
 10 5YR4/6赤褐色 地土半微、块土小少、块土粉中、炭化粒微、ローム粒少
 11 7.5YR4/6褐色 黑土小・粉微、炭化粒微、ローム粉少
 12 5YR4/6赤褐色 地土小・粒微、炭化粒微、ローム粒微
 13 7.5YR4/4褐色 地土中・少少、块土粒中、炭化粒微、ローム小・粒微、砂質粘土粒微
 14 5YR4/6赤褐色 地土大礫、块土中・较多、炭化粒少、ローム粒微
 15 5YR4/6赤褐色 地土小・较少、炭化粒少、ローム粒微

第73図 第13号住居址カマド

国版No.	器種形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 須恵器	A : 12.9 B : 7.5 C : 3.9	覆土 2/3	普通	石英・長石 大粒を多量に含む	灰	内外共クロナダ。体部下段に手持ちヘラ削り施す。底部回転ヘラ切り後、ランダムな削り	231
2	杯 須恵器	B : (7.2) C : (2.8)	覆土下位 小片	普通	石英・長石 雲母細片を多量に含む	灰黄	内外共クロナダ	SI-12 217
3	杯 須恵器	A : 12.9 B : 7.1 C : 4.1	覆土 ほぼ完形	普通	石英・長石 小粒を多量に含む	灰黑	下体部1/2を幅広の工熟で手持ちヘラ削り。内面クロナダ。底部ヘラ切り後、ランダムなケズリ	酸化焰燒成色 228
4	杯 土師器	A : 12.6 B : 6.4 C : 4.2	床土 完形	良好	石英・長石 雲母片を多量に含む	にじい黄緑	下体部1/2を幅広の工熟で手持ちヘラ削り。内面クロナダ。内面は擦拭のヘラミガキ。体部最下段に手持ちヘラ削りを施す。	手書き「万福」 体部外面 横位 SI-12 236
5	杯 土師器	B : (13.2) C : (5.8)	覆土 小片	普通	砂粒はとん ど目立たない	にじい黄緑	外側クロナダ 内面「幸なナダ」	218
6	甕? 土師器	B : (11.8) C : (1.5)	覆土中位 小片	不良	石英・長石 極細粒を少量含む	橙	底部名切り。 外腹丁寧なナダ。内面削輪。	SI-12 219
7	高台付杯 土師器	D : 8.4 C : (2.1)	覆土中位 小片	普通	雲母細片を 多量に含む	にじい黄緑 黒	底部ヘラ切り後貼り付け高台。 高台は外反気味で端部は比較的小辺。 内面ヘラミガキ	内黒 213 SI-12
8	高台付圓 土師器	A : (13.6) C : 3.0 D : (7.9)	床土 1/2	普通	石英・長石 小粒を少量含む	にじい橙 黒	貼り付け高台は近く張り出し。端部は丸味を帯びる。 内面ヘラミガキ	内黒 214 SI-12
9	甕 土師器	A : (21.0) C : (9.2)	覆土下位 小片	良好	石英・長石 小粒を多量に含む	にじい赤褐	口縁は近く底立し端部を尖らせて、やや外反させる。底部の屈曲は非常にゆるやか。 外腹丁寧なナダ、内面ヘラナダ、ナダ	SI-12 220

国版No.	器種	最大長	最大幅	重 量	孔 仔	出土位置	残存率	焼 成	胎 土	色 調	備考
10	土製品	2.4	3.8	3				普通	砂粒目立たない	灰白	

国版No.	器種形	法量	出土位置 率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
11	杯 須恵器	A : 13.9 B : 7.0 C : 3.9	覆土 ほぼ完形	普通	石英・長石 大粒を多量に含む	灰オリーブ	内外共クロナダ。外側の手持ちヘラ削りは見られない。 底部回転ヘラ切り未調整	229
12	杯 土師器	A : (12.2) B : 7.4 C : 4.4	覆土 1/2	普通	石英・長石 大粒を少量含む	にじい黄緑	内外ともクロナダ。内面横位の細かなミガキ。	内黒 232
13	高台付圓 土師器	A : (12.4) C : (2.0)	床土 1/3	良好	石英・長石 大粒を少量含む	黒	底部ヘラ切り後貼り付け高台。 外腹丁寧なナダ。内面ヘラミガキ	内黒 215 SI-13
14	甕 須恵器	B : (18.1) C : (14.0)	覆土下位 小片	不良	石英・長石 大粒を多量に含む	にじい黄緑	腹部には横位の平行叩き 底部には横位のヘラ削り。 内面の仕上げは箆で整形時の指彫を多く残す	酸化焰燒成色 221 SI-13
15	甕 須恵器	B : (17.0) C : 1.0	覆土中位 小片	普通	砂粒はとん ど目立たない	にじい黄緑	内面に鋸歯状の衝撃压痕	酸化焰燒成色 212 SI-13
16	杯 土師器	A : (13.6) C : (3.3)	覆土 小片	良好	砂粒はとん ど目立たない	にじい黄緑 黒	外腹丁寧なナダ。 内面横位のミガキ。	内黒 225
17	杯 土師器	B : (8.0) C : (1.6)	覆土 小片	不良	石英・長石 小粒を少量含む	にじい橙 黒	底部回転ヘラ切り。 外腹削輪、内面ミガキ	内黒 224
18	甕 須恵器	B : (12.7) C : (0.7)	覆土 小片	不良	石英・長石 細粒を少量含む	灰 灰黒	内面ユビナダ	227
19	高台付杯 土師器	D : (7.2) C : (1.3)	覆土 小片	普通	砂粒はとん ど目立たない	にじい橙 黒	貼り付け高台。近く施部は平底。 外腹ナダ、内面ヘラミガキ。	内黒 223
20	甕 土師器	A : (16.4) C : (5.3)	覆土 小片	良好	石英・長石 小粒を多量に含む	にじい赤褐	口縁は近く内側し端部は丸味をおびて外反する。 底部の屈曲はゆるやか。 内外共に丁寧なナダ。	233



第74図 第12・13号住居址出土遺物

第14号住居址（第75図 P L16）

位置 調査区中央部で標高24m付近の台地上。集落の北のはずれに当たる。第12・13号住居址と3軒が切り合っており当住居が一番古い。4 L-76区。

規模・形態 第13号住居と主軸方向を同じくし、同住居の床下より検出された。主軸長約3.2m、幅3.3m程、面積10.6m²である。

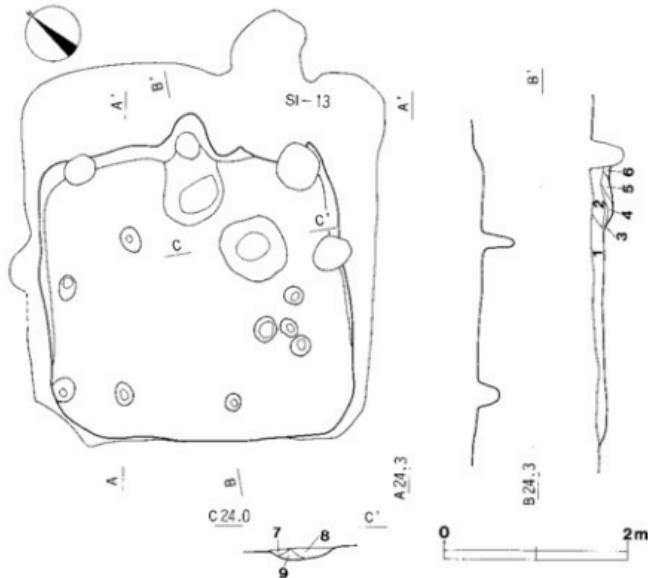
主軸方位 N-47°-E

壁 立ち上がり際を残すのみで殆ど残存していない。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝はない。

ピット 10ヶ所検出されたが全て円形で使用目的・性格は不明である。最大のものは径70cm余りの不整円形を呈するが非常に浅く当初の様子をうかがうことができない。

窓 壁外へ40cm程掘り出して、北東壁中央に黄白色砂質粘土を使用して構築されている。全長



- 1 7.5YR4/6褐色 焙土大・中層、燒土小・砂少、ローム大~小中、ローム粒多、素色土粒少、山砂少
- 2 7.5YR4/4褐色 烧土大~小中、燒土粒多、炭化物少、ローム小、粒中、黑色土粒中、山砂中
- 3 7.5YR3/1暗褐色 烧土中、小層、燒土粒少、炭化物少、ローム小、中層、ローム粒少、砂粒少
- 4 7.5YR3/3暗褐色 烧土小層、燒土粒少、炭化物微、炭化物中、ローム小少、ローム中层、ローム粒少、砂粒微
- 5 5 YR4/4に近い赤褐色 烧土大層、燒土中少、燒土中少、燒土粒多、炭化物小層、炭化物少、ローム粒少
- 6 7.5YR4/4褐色 烧土小・粒微、炭化粒微、ローム小・中層、ローム粒少、砂粒少
- 7 7.5YR4/4褐色 第二小層、燒土粒少、炭化粒微、ローム粒微
- 8 7.5YR4/4褐色 烧土小・中層、燒土粒微、炭化粒微、ローム粒少、砂粒微
- 9 7.5YR4/4褐色 烧土粒微、炭化粒微、ローム粒少、ローム小~大層

第75図 第14号住居址完掘

120cm、袖部は残っていない。燃焼部は径70cmの不整円形で深さ10cm。4・5・14・15層には焼土が含まれ竈内部の堆積土と思われる。明瞭な遺棄遺物はない。

覆土 ほとんど最下層しか残っておらず、10cmほどの深さで単一に堆積する。

遺物 当住居に明瞭にともなう遺物はない。

所見 切り合い関係により9世紀後葉の住居と考える。

第15号住居址（第76図～78図 P L18・69）

位置 調査区ほぼ中央で標高24m付近の台地北縁部。4S・4T-74区。

規模・形態 主軸長2.9m、幅3.2mの横長方形。面積9.3m²。

主軸方位 N-31°-W

壁 上端が崩れており傾斜して立ち上がる。高さ30～35cmである。

床 平坦で明瞭に検出された。壁溝は竈を持つ北壁を除く3辺に検出された。幅20cm、深さ10～15cmと大きい。

ピット 6ヶ所検出され全て円形を呈する。P1は一番大きく径38cm、深さ25cmを測る。東壁溝に接して掘削されている。P2は径約25cm、深さ17cm、住居中央に検出された。

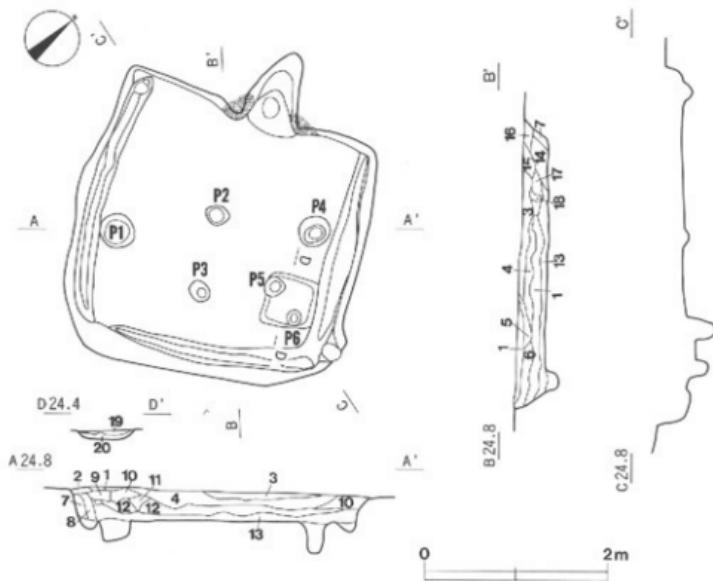
P3は径20cmあまり、深さ29cm、P4は径34cm、深さ32cmを測る。

P5とP6は深さ10cm程の方形ピット内に検出されており、P5は径20cm、床からの深さ31cm、P6は径15cm、掘り方底面からの深さ17cmである。この方形掘り込みとP5・6の相関関係は不明である。

これらは比較的深い掘り込みを有し柱穴と考えても良いと思われるが明確な並びを想定できない。

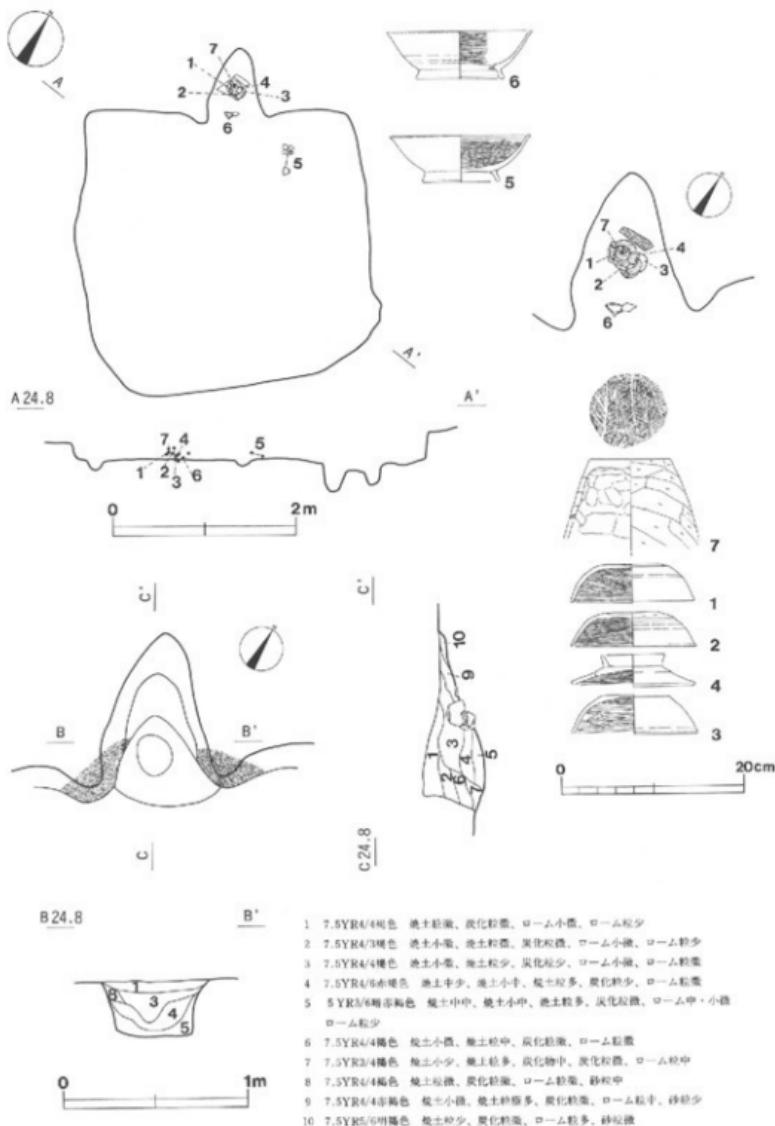
竈 北壁中央部に壁外へ70cm掘り出し、黄白色砂質粘土を使用して構築されている。両袖は壊されており基部を残すのみである。燃焼部は径50cm程の不整円形を呈し、内部には使用時のものと思われる焼土が充満していた。奥壁から煙道部にかけては緩やかに立ち上がり、奥壁際に7個体分の土器が全て逆位で重ねられて遺棄されていた。以下にその詳細を述べる。

まず、最下段に実測不可能な土器小片を置き、その上に土師器杯（3）、内黒の高台付き杯（4）、さらに内黒土師器杯（2）、横位の平行叩きを持つ須恵器襲片（実測無し）、また内黒土師器杯（1）、最後に木葉痕を持つ土師器襲底部（7）をかぶせるといった念のいれようである。上下のレベル差は13.5cmになる。土器柱の真ん中にセットされていた杯類さえも完形品ではなく、どこかしら欠損していることを考えると、当初から完形品を選択して置いたわけではない。また、器壁はやや風化したり炭化物が付着したものもあるが際だった被熱の痕跡や荒れではなく、支脚として使用されていたものとは考え難い。出土場所も燃焼部中央から大きくはずれていることも考え合わせると、竈解体時の儀礼のためにセットし、遺棄していくものと考える。同様な

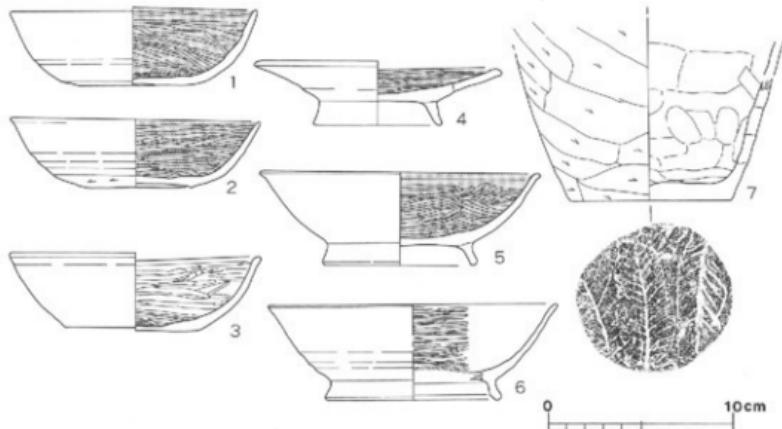


- 1 7.5YR3/3暗褐色 ローム粒重、三色土粒重
- 2 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム粒少
- 3 7.5YR3/3暗褐色 地下粘重、炭化灰微、ローム少重、ローム粒少
- 4 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム半・小強、ローム粒少
- 5 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム半重、ローム粒少、黑色土粒重
- 6 7.5YR4/4褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム半・小強、ローム粒少、三色土粒重
- 7 7.5YR4/6褐色 炭化粘重、ローム中～粘重、黑色土粒微
- 8 7.5YR4/4褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム半・小強、ローム粒少
- 9 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム半・粒重
- 10 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化粘重、ローム少重、ローム粒中
- 11 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム半・小強、ローム粒少
- 12 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化粘重、ローム中重、ローム少、黑色土小、粒微
- 13 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化灰微、ローム半・粒微、黑色土粒微
- 14 7.5YR3/4暗褐色 地上半・小強、地上粒少、炭化灰微、ローム半弱、ローム半、粒少
- 15 7.5YR3/4暗褐色 地上粘重、炭化粘重、ローム粒微
- 16 7.5YR4/4褐色 地上粘重、ローム粒重
- 17 7.5YR3/4暗褐色 地土半・粒强、ローム半微、ローム粒少
- 18 7.5YR3/4暗褐色 地土粘重、炭化粘重、ローム砂弱、砂粒重
- 19 7.5YR4/4褐色 地土小・粒强、炭化物少、炭化物中、ローム大・中少、ローム小・粒中、黑色土粒重
- 20 7.5YR4/6褐色 地土粘重、炭化粘重、ローム粒小、粒微

第76図 第15号住居址完掘



第77図 第15号住居址カマド・出土状況



第78図 第15号住居址出土遺物

団体名	器種形	法量	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	杯 土師器	A : 13.5 B : 5.6 C : 4.2	カマド内 ほぼ完形	良好	雲母繊維片 赤色細粒を 含む	にぼい黄澄 黒	底部切り離し後一方斜へラ削り、その周辺手 持ヘラ削り。外面にロクロナデの痕を残す 内面横幅のヘラミガキ	内黒 239 No2・3・4・7と 重なって出土
2	杯 土師器	A : 13.6 B : 5.7 C : 3.8	カマド内 ほぼ完形	良好	雲母繊維片 赤色細粒を 含む	にぼい黄澄 黒	底部切り離し後一方斜へラ削り、その周辺手 持ヘラ削り。外面にロクロナデの痕を残す 内面に横幅の痕のヘラミガキ	内黒 242 No1・3・4・7と 重なって出土
3	杯 土師器	A : 13.7 B : 7.4 C : 4.3	カマド内 2/3	良好	石英・長石 粉を少量含む	にぼい黄澄 黒	底部切り離し後ランダムにヘラ削り。杯部は ロクロナデ、内面ヘラミガキ 口縁端部をわずかに外反させる	No1・2・4・7と 重なって出土 235
4	高台付 土師器	A : 13.4 C : 3.1 D : 6.9	カマド内 1/2	普通	雲母繊維片 を少量含む	にぼい黄澄	外面ロクロナデ、内面ヘラミガキ。 貼り付け高台で外輪し端部は丸い 外底にいぶしの痕跡を残す	内黒 237 No1・2・3・7と 重なって出土
5	高台付 土師器	A : 15.3 C : 5.1 D : 8.4	床上 ほぼ完形	良好	砂粒の地 ごめだらね精 選粘土。	にぼい黄 黒	底部切り離し後芯軸ヘラ削り、杯部はロクロ ナデ、内面は規則的に六角形を描くヘラミガ キ。口縁端部をわずかに外反させる	内黒 241
6	高台付杯 土師器	A : (15.8) C : 5.1 D : (9.7)	床上 1/3	良好	雲母繊維粒 を多量に含む	にぼい黄 澄	杯部外面ロクロナデ、内面横幅の横幅なヘラ ミガキ	240
7	碟 土師器	B : 8.6 C : (10.0)	カマド内 底部分 1/3	普通	長石・石英 粉を多量に 含む	にぼい赤陶	脚部下半は、横幅の明瞭なヘラ削り。 内面には番頭注痕およびナデ	木葉模 238 No1・2・3・4と 重なって出土

儀礼の痕跡は第10号住居址竈に見られる。

覆土 主として北・西壁側に土層の乱れがあり、当該方向より人為的埋め戻しが行われた痕跡ではないかと考える。

遺物 竈付近の覆土下層中より廐棄遺物と思われる小片（5・6）も出土している。しかし、当住居にともなうのは竈内に遺棄された上記土器類（1・2・3・4・7）である。

所見 出土遺物より9世紀末葉の住居と考える。

第17号住居址（第79図）

位置 調査区ほぼ中央の遺構集中域。標高23m付近で、北側の谷津に向かう緩斜面。4 Y-76・77、4 Z-76・77区。第7号住居址と切り合っており当住居の方が古い。

規模・形態 第7号住居址と切り合う上、擾乱に大きく乱され原形をとどめていない。方形を呈すると思われるが規模は不明である。

主軸方位 N-39°-E

壁 現状では傾いて立ち上がり、高さ30cmあまりを確認した。

床 ほとんど壊されている。焼溝の有無も不明。

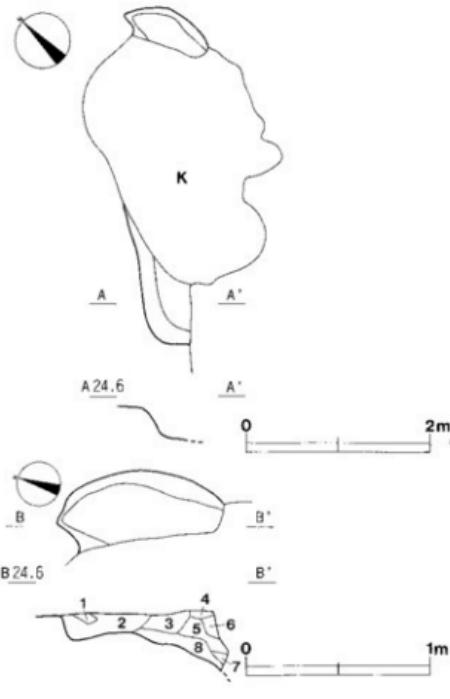
ピット 検出されなかった。

竈 北壁コーナー近くに焼土の集中散布が見られ、これが煙道部の残りと考えられる。長軸方向に90cm、深さ10cm程確認した。

覆土 不明。

遺物 極細片のみ。

所見 時期判定の遺物に欠けるが、切り合い関係や覆土中の細片遺物を総合的に判断して9世紀中～後葉の住居かと考える。



- 1 5 YR 4/4に近い赤褐色 焼土中少、焼土小・粒多、粘土粒多
- 2 5 YR 6/3に近い赤褐色 焼土大少、焼土中一粒多、粘土粒多
- 3 5 YR 8/4褐色褐色 焼土中粒多、焼土小・粒多
- 4 10 YR 3/4褐色褐色 焼土小少、粘土粒多
- 5 7.5 YR 4/4褐色褐色 焼土中～粒多、炭化粒少、ローム小少
- 6 10 YR 3/4褐色褐色 焚土中多、燒土小中、炭化粒少、ローム小中、粘土粒多
- 7 10 YR 4/3に近い黄褐色 焚土小中、ローム小中
- 8 5 YR 3/4褐色褐色 焚土中中、燒土小多

第79図 第17号住居址完掘

第19号住居址（第80図）

位置 調査区中央の遺構集中域で、標高25m付近の台地上。4V・4W-79区。第5号住居址と切り合っており床下から検出された。当住居の方が古い。

規模・形態 主軸長約1.4m、幅1.6mと非常に小型で不整方形を呈する雑なプランである。

面積2.2m²しかなく居住のための家屋として機能したか疑わしいが、竈の痕跡かと見られる焼土の分布があったので住居址として報告する。

主軸方位 S-53°-E

壁 現状では傾斜して15~20cmの高さに立ち上がる。

床 中央付近でやや凸凹がある。壁溝は検出されなかった。

ピット 検出されなかった。

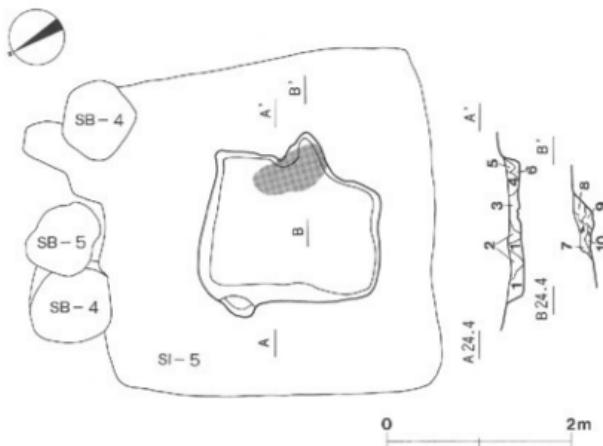
竈 東壁中央部に焼土粒の集中散布がみられ、これが竈の痕跡かと考える。現状では壁外に40cm程掘り出して煙道

部としているようである。構築土などは検出されず、袖部も残っていない。焼土堆積中に土器小片が混入している。

覆土 主として大 小のロームブロックを多量に含む埋め戻し土である。

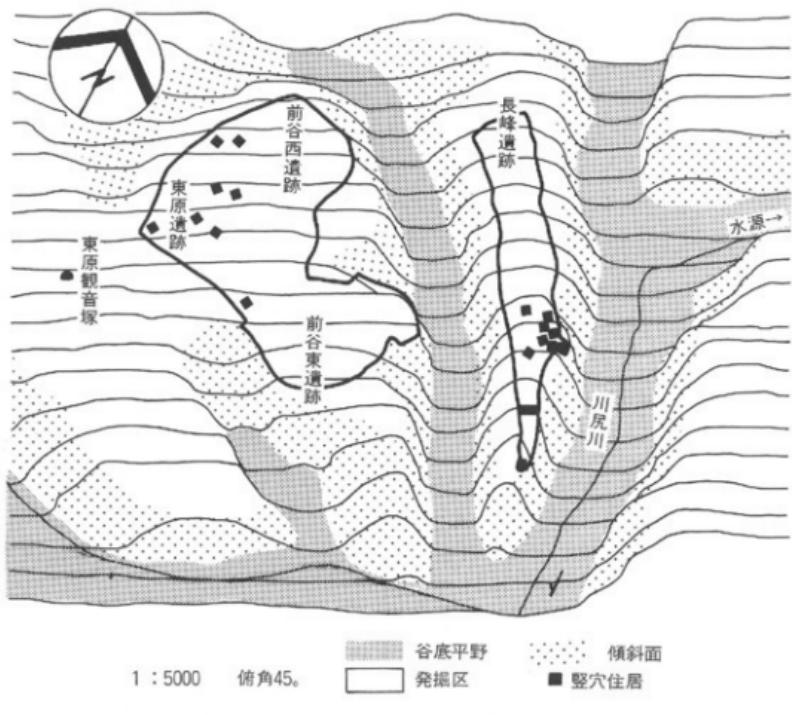
遺物 極細片のみ。

所見 時期決定のための遺物に欠けるが、切り合ひ関係と覆土中出土の細片遺物を総合的に判断して9世紀前葉のものかと考える。



- 1 10YRA/6褐色 ローム較大→較少
- 2 10YRA/6褐色 ローム大少、ローム中多、ローム小、粒中
- 3 10YRA/6褐色 ローム半多、ローム小・粒中
- 4 5YRA/6赤褐色 焼土小少、焼土粒中、変化粒少、ローム半少、ローム小・粒中
- 5 5YRA/6赤褐色 焼土小中、変化粒半、砂質粘土
- 6 10YRA/6褐色 焼土小・粒中
- 7 5YRA/6赤褐色 地上中~粒少、変化粒少、砂質粘土粒
- 8 7.5YRA/6褐色 焼土中~粒中、ローム半・粒少、ローム少
- 9 10YRA/6褐色 ローム大多
- 10 7.5YRA/6褐色 焼土小・粒多、ローム少

第80図 第19号住居址完掘



第81図 遺跡鳥瞰図

2 挖立柱建物跡

復元に関しては、柱痕や柱基部の据え付けによると見られる掘り方底面の窪み（根あたり痕）などを極力活かして柱列を設定し、これらが残らないものは掘り方の中での柱間距離が完尺になる位置に柱位置を想定した。ちなみにここで言う「1尺」とは9世紀以降に使用が一般化したという和綱大尺（29.6cm）を基準にした。ただし、削平や測量・縮尺時の誤差の中で相殺されると考え、机上の計算は1尺=30cmで行った。主軸方向は全て梁行側柱列の磁北に対する偏角を示す。

第1号掘立柱建物跡（第82図 P.120）

位置 調査区ほぼ中央の遺構集中区。標高25m付近の台地上で、4T-82区を中心とした7グリッドに広がって検出された。東南コーナーの側柱が第11号竪穴住居跡と重複しており、当址が新しい。

規模・形態 身舎2間×1間の東西棟で四面庇を持つ。

主柱穴は6個で、上端の径100~130cm、深さ60~75cm、壁は傾斜し緩やかな立ち上がりである。確認プランはほとんどが円形であるが下部では方形を呈するものが含まれ、木の根や削平での崩れを考えると当初は方形掘り方であった可能性は強く残っている。柱間は桁行6尺、梁行11尺となる。特に梁方向には補助柱穴を全く持たずに3m以上の長さを一気に渡している。覆土に柱痕は認められず版築の痕跡も残っていない。

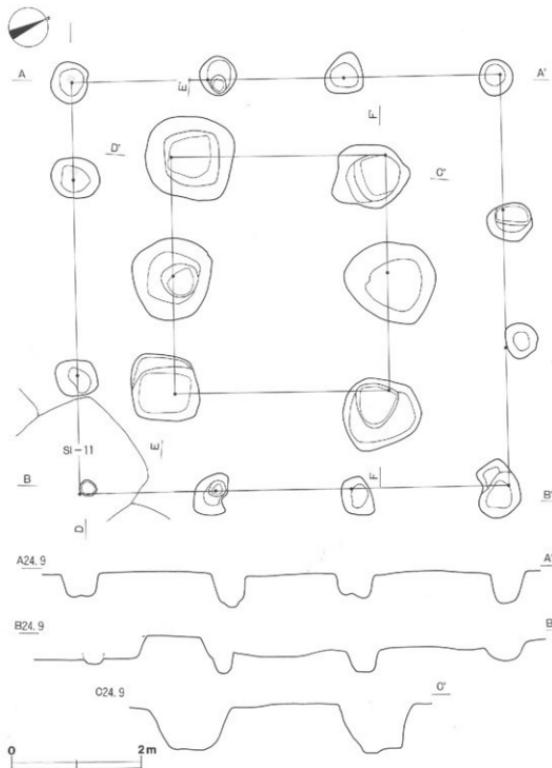
側柱は12個で全て円形を呈する。径は50~60cm、深さ40~50cmと主柱に比べると小型で浅い。内2個に柱痕が残っており、それによると径10~12cmの柱であったようである。

桁行3間で、北辺では間が7尺均等になる。これに対し南辺では中央の間が10尺と大きく開口し、この2等分線上に身舎の中心主柱が納まるように配置されている。おそらくはここが入り口で、南面する平入りの建物であったと考える。一方、梁行は22尺で身舎の梁行のちょうど倍数を採用しているようだ。入り口側の2間では均等に7尺の間隔だが、建物の裏側に当たると考える北辺ではやや広がり8尺に復元される。

主軸方位 N-18°-E

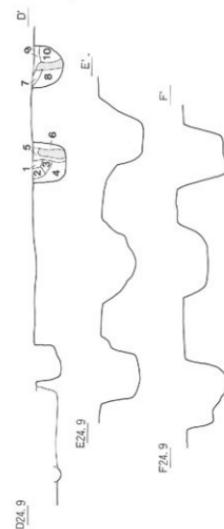
遺物 北東の隅柱埋土中から内黒の高台付き杯片（1）が出土している。底部外面に「福得」の墨書がある。瓦は出土していない。

所見 主柱穴の梁行柱間が長く、倉庫・住居などに供するものとしては耐用重量に疑問があること、周囲に側柱を持つこと、南面に開口すること、付近の竪穴住居から「長谷寺」銘の墨書き器が出土していること等から四面庇を持つ堂宇と考える。住居が全く検出されていない谷に向かって開口しており興味深い。柱穴出土遺物及び「長谷寺」銘の墨書きを当堂付隨のものと考えると9世紀前～中葉の遺構かと推定する。



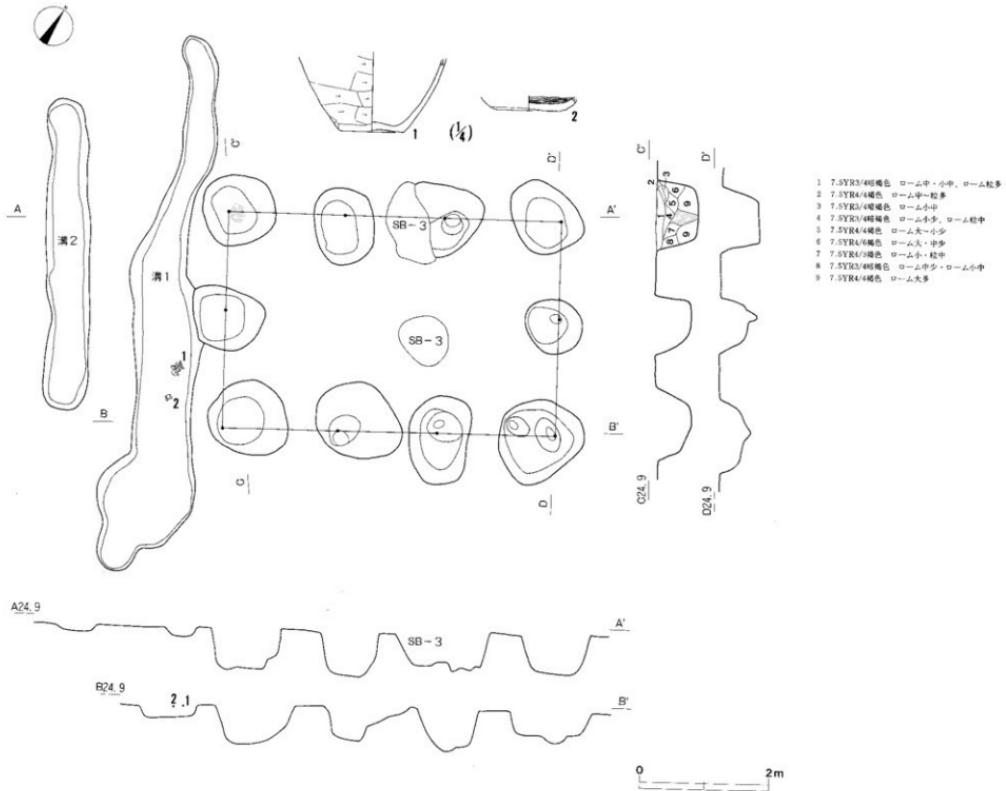
第82図 第1号掘立柱建跡

-123-



1. 7.5YR3/4褐色 地一ム程少、黒土小量、黒土輕少
2. 7.5YR4/4褐色 フー一ム少、ロ一ム程少、黒土程少
3. 7.5YR4/4褐色 黒土輕多、ロ一ム中量、ロ一ム少、黒土少、輕少
4. 7.5YR4/4褐色 黑土輕微、灰化紅色、ロ一ム大、地中
ロ一ム程少、黑土少、黑土輕少
5. 7.5YR4/4褐色 地一ム程少、黒土少、黑土程多
6. 7.5YR4/4褐色 フー一ム大、ロ一ム程多、黒土程微
7. 7.5YR4/4褐色 黑土輕微、ロ一ム小量、ロ一ム程少
黑土程少
8. 7.5YR4/4褐色 ロ一ム程多、黑土約少
9. 7.5YR4/4褐色 ロ一ム少、黑土少、黑土程少
10. 7.5YR4/4褐色 黑化黑集、ロ一ム程多、黑色程少

-124-



第83図 第2号擡立柱建物跡

第2号掘立柱建物跡（第83図 P L20）

位置 調査区ほぼ中央の遺構集中区。標高25m付近の台地上で、4 S - 78区を中心とした4グリッドに広がって検出された。第3号掘立柱建物跡とは桁方向を直交して切り合っているが新旧関係は確認されていない。

規模・形態 3間×2間の南北棟

柱穴掘り方はおむね円形を呈し、径85~120cm、深さ60cm程度である。

桁行3間で柱間距離は南側から6尺・5尺・6尺に復元でき中央部がややせまい。梁行は2間で中央の柱穴は他に比べ若干小型である。また掘り方底面の根あたり痕を活かすと、東から6尺と5尺にわかれようである。

主軸方向 N-31°-W

覆土 柱痕を残すピットが一個検出されているがそれによると径15~20cmの柱であったようである。他に根あたり痕を有するものもみられる。埋土には版築の痕跡はみられない。

遺物 明瞭に当跡に伴う遺物はない。

第3号掘立柱建物跡（第83図 P L20）

位置 調査区ほぼ中央の遺構集中域。標高25m付近の台地上で、4 S - 77区を中心とした4グリッドに広がって検出された。第2号掘立柱建物跡とは桁方向を直交して切り合っているが、新旧関係は確認されていない。

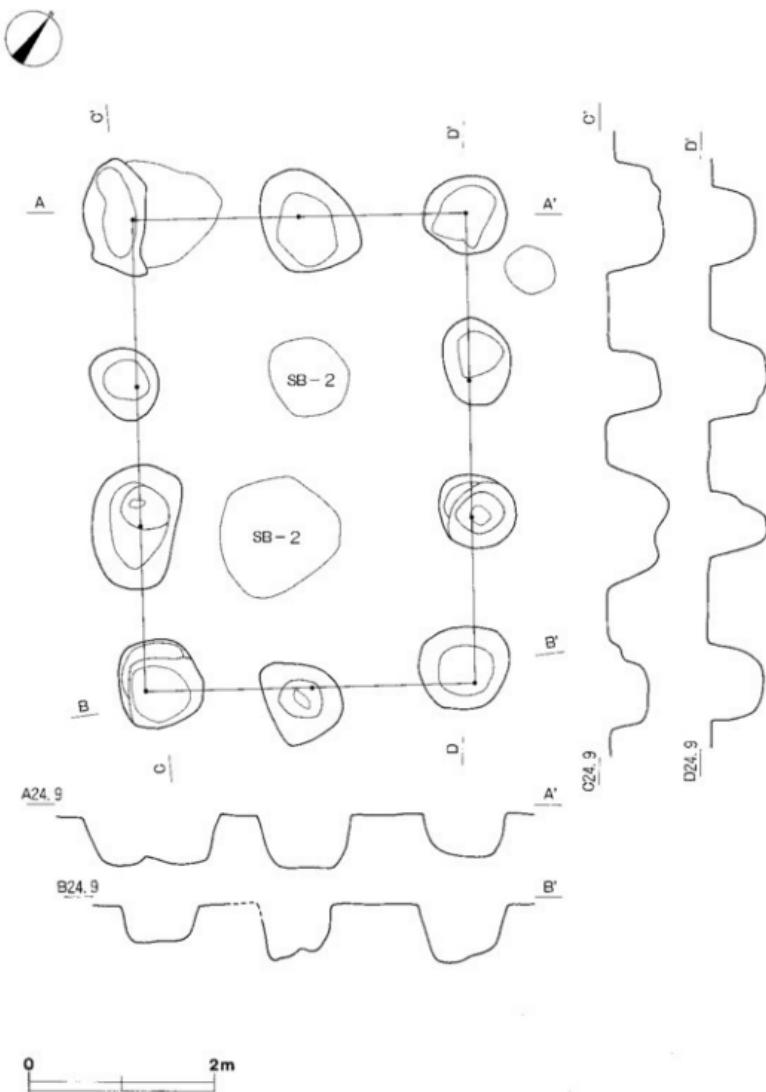
規模・形態 3間×2間の東西棟。

柱穴掘り方は円形ないし楕円形を呈し、梁行中央部の2個は南北辺とともに小型で径70~80cmほどである。隅柱を含む梁行方向の6本は掘り方径90~120cmと大きい。深さはどれも60cm平均である。柱痕は検出できなかったが根あたり痕と整合させると、桁行3間の柱間は東から6尺・5尺・6尺、梁行2間は6尺・6尺に復元できる。

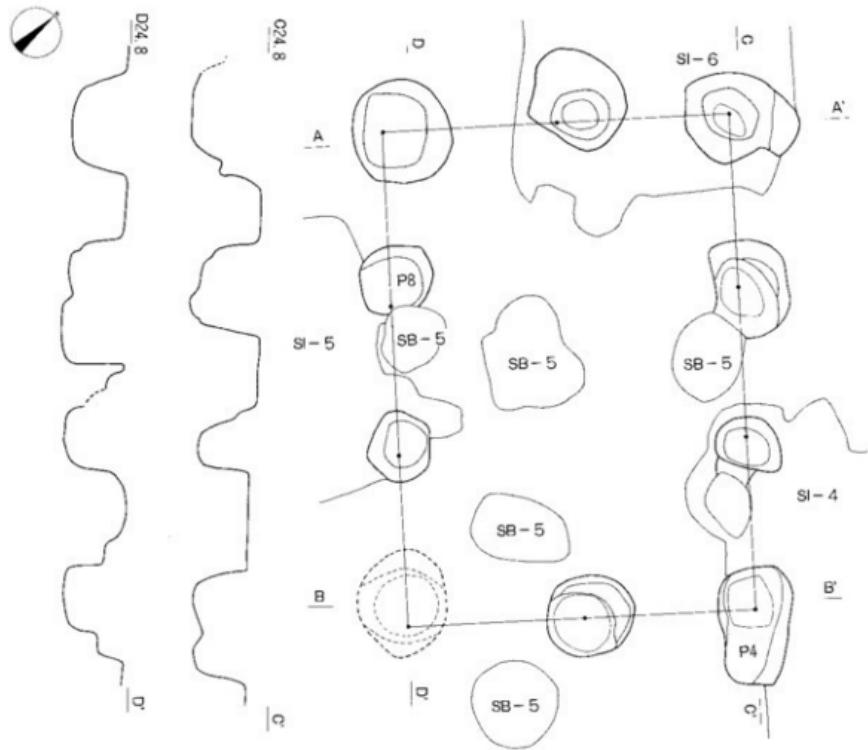
主軸方位 N-53°-W 桁行側柱列の偏角をとるとN-37°-Wとなり第2号掘立柱建物跡とは直交することがわかる。また両跡は2ヶ所、柱穴の位置をほぼ共有しており、西側の柱列面を合わせるなど構築場所・方向・柱間距離に共通した指向がみられることから建て替えがおこなわれた可能性がある。

遺物 明瞭に当跡にともなう遺物はない。

覆土 層序はほとんどが柱を抜き取った後のランダムな埋め戻し状況を示すと考える。柱痕・版築痕は見られない。



第84図 第3号攝立柱建物跡



第85図 第4号掘立柱建物跡

第4号掘立柱建物跡（第85図 P L21）

位置 調査区中央の遺構集中域。標高25m付近の台地上で、4W-77区を中心とし4グリッドに広がって検出された。第5号掘立柱建物跡、第4号・5号・6号住居址と切り合っている。

当跡は竪穴住居址群より新しいが、5号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

規模・形態 3間×2間の東西棟

柱穴掘り方はほとんど円形を呈し、上端の径100~120cm、深さ60~85cmと大型である。

柱痕が検出されていないので掘り方中央近くに柱位置を推定して復元すると、掘り方に準するよう柱間距離も長く、桁行3間では東から7尺・6尺・7尺となる。ここでも中央2本間が短くなっている。梁行2間も呼応するように7尺・7尺の距離に復元され、第2号・3号掘立柱建物跡より規模が拡大する。

主軸方向 N-38°-E

遺物 P4掘り方上位から高台付き杯（3）、甕片（4）が、またP8掘り方内より漆付着の須恵器杯小片（2）が出土している。

第5号掘立柱建物跡（第86図 P L21）

位置 調査区中央の遺構集中域。標高25m付近の台地上で、4W-77区を中心とし4グリッドに広がって検出された。第4号掘立柱建物跡、第2号・4号・5号住居址と切り合っている。

当跡は竪穴住居址群より新しいが、4号掘立柱建物跡との新旧関係は不明である。

規模・形態 3間×3間の純柱の東西棟。

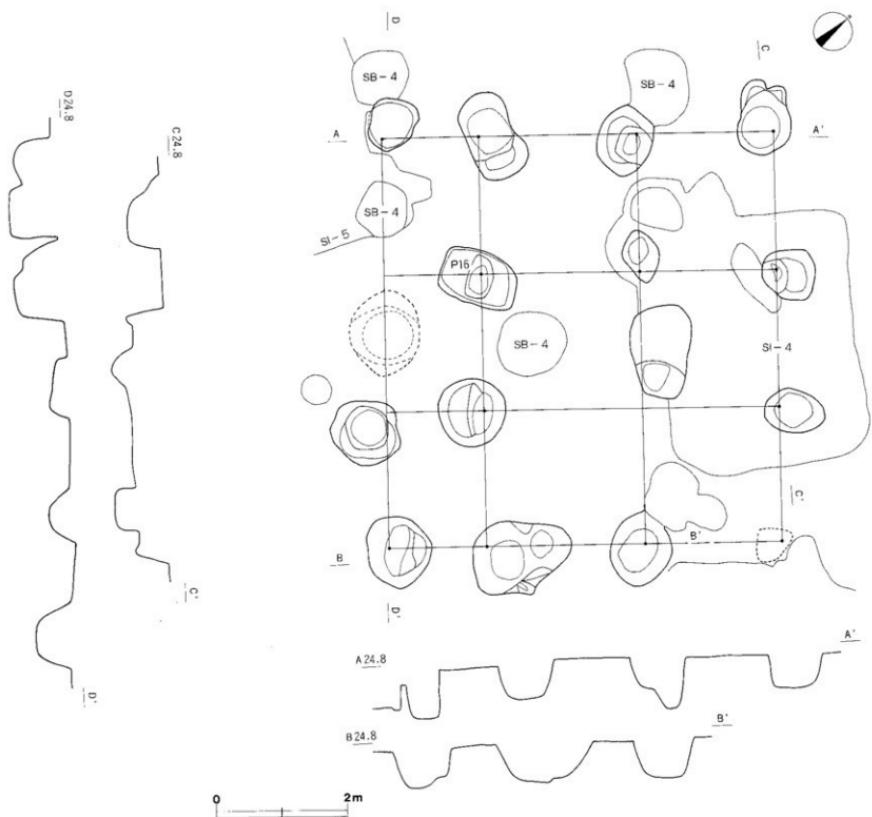
竪穴住居など他の遺構との切り合いで個々の掘り方のプランが不明瞭で、上端は大きく崩れいるものが多いが、ほとんどの円形ないし稍円形を呈し、径80~110cm、深さ50~80cm程度である。

桁行3間はそれぞれ7尺の柱間距離を測るが、特に南辺では柱筋の通りが悪く整然と復元できない。一方梁行は配列が整合し、南より5尺・8尺・7尺の柱間をとっている。南端の柱間を短いことと桁行南辺が乱れていることから、あるいは南底の建物となるのかも知れない。ただし、掘り方の平面性、深さなどに顕著な差はみられない。

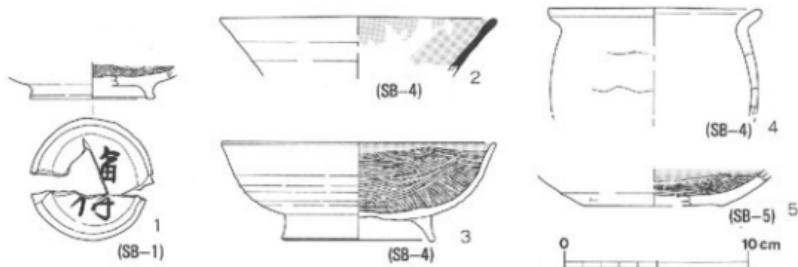
主軸方位 N-40°-E

第4号掘立柱建物跡と主軸方向が近似しているが建て替え等の相関関係は不明である。

遺物 P16掘り方覆土内より内黒の土師器杯片（5）が出土している。



第86图 第5号据立柱建物跡



第87図 掘立柱建物跡出土遺物

図版No	器種 形	法 量	出土位置 確 率	成 分	性 土	色 調	器形・技 法の特 徴	備 考
1	高台付 土師器	C : (1.3) D : 6.7	振り方複 素 小片	普通	石英・長石 粘土を少量含 む	に赤褐色 黒	底部切り離し後回転へラ削り、杯部はロクロ ナデ、内面へラミガキ 高台は短く、端部は外に突出し気味	内黒 252 墨書「国厨」 底部
2	杯 須恵器	A : (15.0) C : (3.2)	振り方複 素 小片	普通	砂紋はとん ど目立たな い	に赤褐色	内外共にロクロナデ	口縁付近に漆付 着 253
3	高台付 上師器	A : (15.0) C : 5.3 D : 8.4	振り方複 上位 2/3	良好	雲母・磁鐵石 を含む	に赤褐色 黒	底部回転へラ切り。外面にロクロナデの痕を 残す。内面横位のラミガキ	内黒 251
4	裏 上師器	A : (11.4) C : (6.8)	小片	普通	石英・長石 小粒を含む	に赤褐色	素口段ながらヘラ状工具を用いて凹線を削り 出す。墨跡はくの字に屈曲する。内外のナデ は誰で、接着痕を残す。	288
5	杯 土師器	B : (7.4) C : (1.6)	振り方複 素 小片	普通	石英・長石 雲母・磁鐵石 を含む	に赤褐色 黒	底面とその周辺回転へラ削り。内面横位のラ ミガキ	内黒 252

第15号土坑（第88・89図 P L22・69）

位置 調査区中央部の遺構集中区。標高24m付近で北側の谷津を見下ろす台地縁辺部。

規模・形態 長軸径1.7m、短軸径1.4mの梢円形を呈し、深さ約30cm。

壁 継やかな丸みをもって、傾斜して立ち上がる。

底面 ほぼ平坦。

覆土 極少量の焼土が散った有機質土が堆積し、その上部に土器片が散乱している。

遺物 実測可能な個体は2点とも内黒の高台付き皿で、(1)の底部外面には「国厨」の墨書があり直線距離にして約11キロ離れた国衙からの搬入品である可能性が高い。出土レベルからみて使用後の廃棄遺物と思われる。

所見 不要物廃棄土坑、いわゆるゴミ捨てのための土坑と推定するが、土坑の検出数自体がこの遺跡中に非常に少ない。一時期に極少数の人間しか暮らしていなかったこと、廃棄行為の実施も極稀にしか行われなかつたらしいこと、供膳に国衙よりの搬入品を使用していること等、一般集落の不要物廃棄土坑とは一線を画する。9世紀末葉。

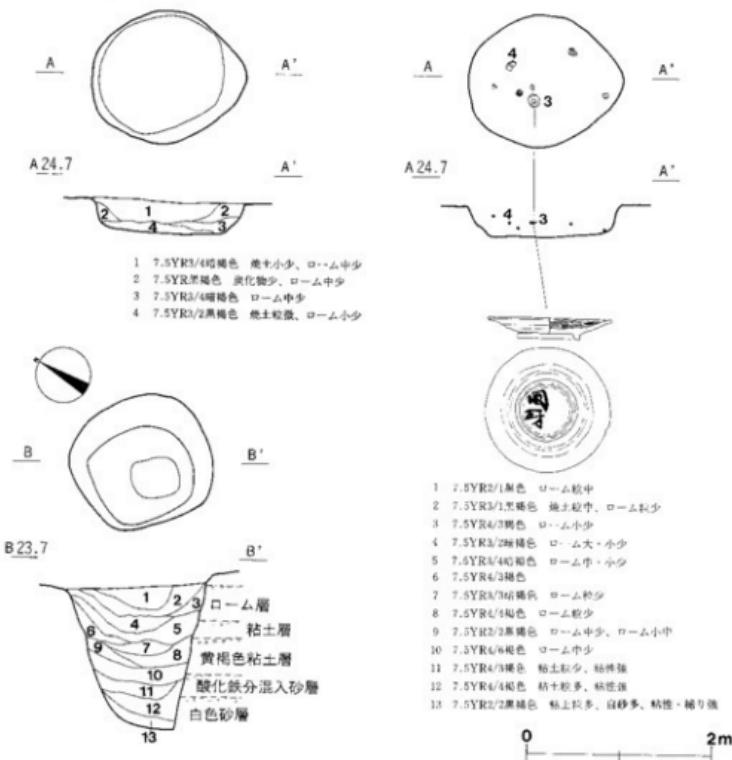
第17号土坑（第88・89図 P L22）

位置 調査区北寄り。北側の谷津を見おろす標高23m付近の台地縁部。居住区から60m程も離れて単独で検出されている。4E・4F-60区。

規模・形態 円形を呈する。上端の径1.5~1.6mで深さ約1.7m、底面は径50cm程で、壁はバケツ状に傾斜してにすばまっている。

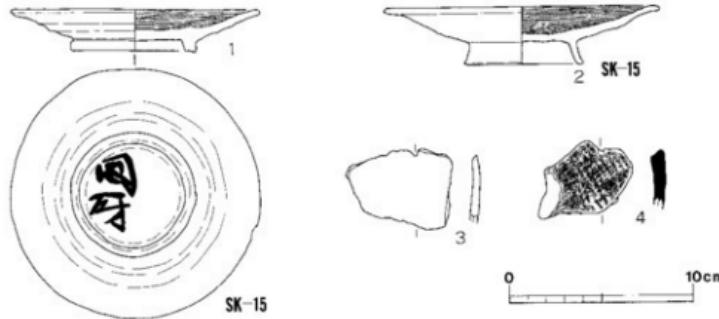
覆土 挖り方はローム層を掘り抜いてその下の酸化鉄混じりの砂質層、さらには白色砂層にまで達している。砂層に鉄分が混じるレベルと粘性・締まりの強い堆積土の最上層（11層）のレベル

第15号土坑



第17号土坑（井戸状遺構）

第88図 第15・17号土坑



第89図 土坑出土遺物

がほぼ同じで、この地下約1.2m地点まで約50cmの深さで湧水していた可能性がある。

遺物 図示できるものはない。

所見 通常の土坑に比し非常に深く、最下部の土層状況から見て井戸ではないかと考える。ただし、当遺跡調査中に約50m離れた同じ台地上で夏に行われた地質ボーリング調査では、白色砂層を1m掘り下げた標高約20mが現在の湧水レベルと判明している。これと比較すると当土坑は白色砂層に達してから40cm下方で掘り方の底面となり、そのレベルは標高21.8mである。

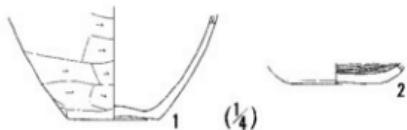
当時の湧水地点が今より高かったとしても、當時こんこんと湧くというほどの豊富な水量は期待できないと思われる。また、居住域からなぜこれほど離れているか、さらに田村・沖宿遺跡群全体の中で井戸と思われる遺構はここ一ヶ所で、なぜこの台地だけに井戸を掘削したのかなどいくつかの疑問も残る。

団体No.	器種形 器形	法 篆	出土位置 残存率	地成	動土	色 調	器形・技法の特徴	備考
1 SK-15	高台付皿 上鉢器	A:13.6 C:2.3 D:6.8	覆土中位 変形	良好	雲母板状片 を微量含む	黒 にふい質感	底部切り離し後同軸ヘラ削り、杯部はロクロ ナデ、内面ヘラミガキ	内黒 248 盤面「國印」 底部
2 SK-15	高台付皿 +鉢器	A:15.0 C:3.2 D:6.6	覆土中位 2/3	良好	石英・長石 粒を多量に 含む	黒	底部切り離し後、周辺を含めて同軸ヘラ削 り。杯部はナデ、内面ヘラミガキ 口部はわずかに外反する	内黒 246
3	土製品	4.4	5.8	13	/	覆土	普通 砂粒目立たない	暗褐色 SK-13
4	土製品	4.2	5.2	13	/	覆土	普通 砂粒目立たない	灰 SK-15

第3号溝〔II S X - 3〕(第91図)

4 Q・4 R - 80区

全長5m60cm、幅は狭広があるが約80cm、深さ8cmと浅い。底面はやや凸凹がある。



第90図 第4号溝出土遺物

因版No.	器種 形	法量	出土位置 現存率	地成	施土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	縫 土師器	B: 6.6 C: (7.6)	小片	普通 石英・長石 を多量に含む	灰 灰青褐色	下脚部に明瞭な横位のヘラ削り 内面剥離	底部にうっすら と木葉模 250	
2	杯 土師器	B: (6.6) C: (1.2)	小片	不良 石英・長石 小粒を微量 含む	棕 黑	外層は灰質、風化 内面ヘラミカキ	内黑 249	

第4号溝〔II S X - 4〕(第90図・第91図)

4 S - 80、4 T - 79・80区

全長6m40cm、不自然にカギ状に屈曲しつつ幅は1m30cmと広い。中央部に小型のピットがみられるが溝にともなうものかどうか不明。深さ10cmと浅く壁の立ち上がりも明瞭でない。

覆土中から内黒土師器杯片(2)、土師器甕片(1)が出土しているが遺構にともなうものではないかも知れない。

遺構外出土の石器(第92図2~5、7~9、11、12 PL24~26)

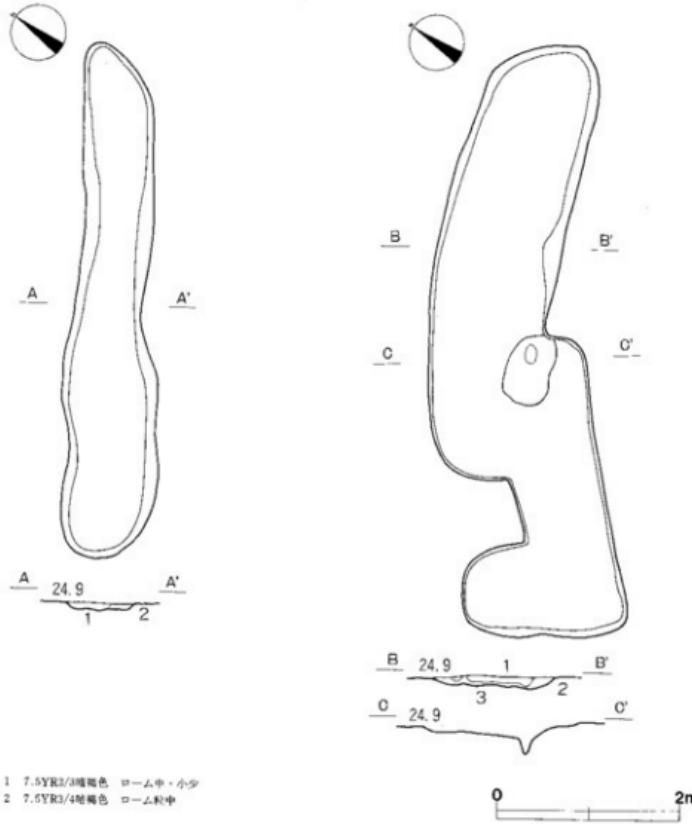
平安時代の石器は合計で12点出土した。このうち遺構外出土として砥石5点、小型磨石類4点がある。以下器種毎に詳述する。

a) 砥石(第92図2~5、7)

出土した全点を図示した。全点が欠損品で、石材の影響にもよるが風化が著しいものが多い。器種の特徴として石材原産地や切り出し場以外で未使用品が出土する可能性は非常に少ないと考えている。石材には雲母を多量に含む筑波山塊周辺で産出する変成岩類を主体に、粘板岩や安山岩を使用している。

b) 小型磨石類(第92図8、9、11、12)

本器種は安山岩礫を使用して全面が研磨面に覆われているものを抽出して、縄文時代に多数使用



第91図 第3号・4号溝

されている磨き石類と類似した用途を想定しうるものを小型磨石類とした。重量は16~33g程の物で、全面には研磨に使用したものと考えられる平坦面を持ち擦痕が各所に観察される。縄文時代の磨石類に一般的にみられる平坦面中央付近や側面の敲打痕は、この器種には残っていない点が縄文時代の物と異なっている。使用している安山岩は、角閃石や輝石が石基の中から溶脱した径1mmの細孔が多数表面にみられる。

第2号住居址（第92図10）

小型磨石類

全面に研磨面を持つ。最大で径1mm程の溶脱孔がみられる安山岩を使用している。

第5号住居址（第92図6）

砥 石

板状の雲母変岩製で表面の風化が著しい。

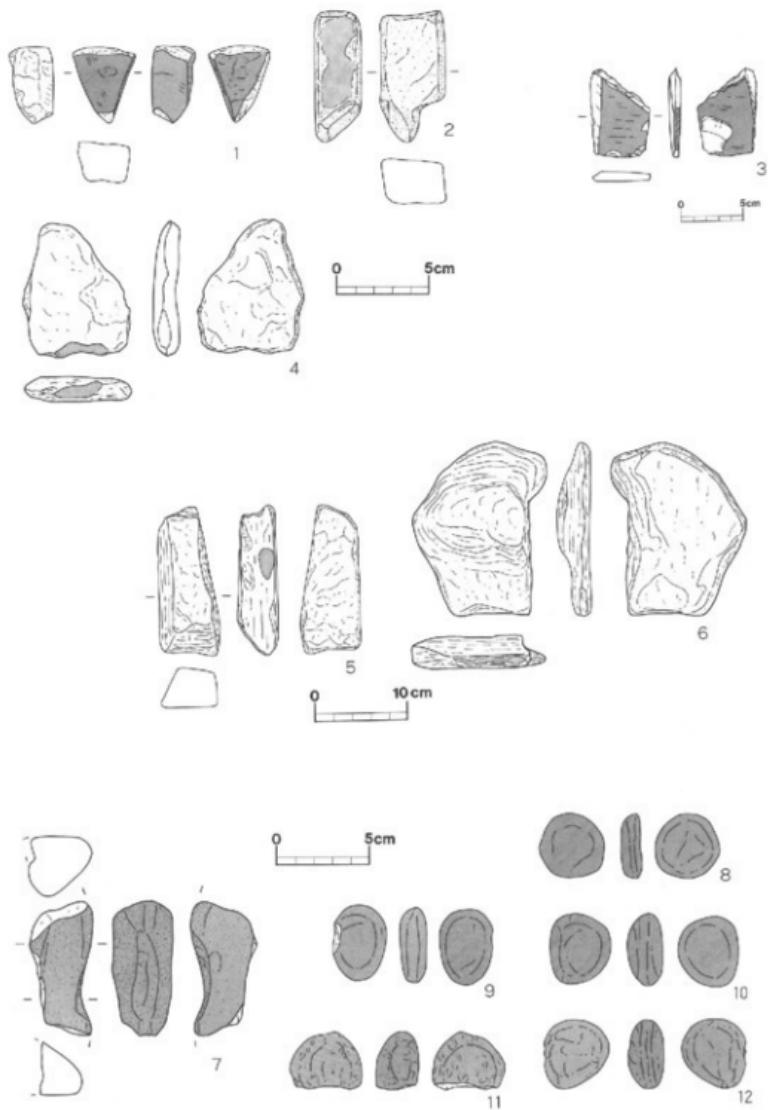
第12・13号住居址（第92図1）

砥 石

凝灰岩製の棒状砥石の破損品が原形で、かなりの頻度で使用したのち折損したようだが、その折損面も研磨面として再使用している。この再使用面には折損時の破断面が研磨しきれずに残っている。

図版No.	器 様	出 土 地 点	最 大 長	最 大 幅	最 大 厚	重 量	石 材
92-10	小型磨石	SI-2-31区	37.30	32.30	18.90	31.50	安 山 岩
92-6	砥 石	SI-5	193.00	146.00	34.00	1115.0	雲 母 片 岩
92-1	砥 石	SI-12-13-1区	4.10	3.40	2.30	20.40	凝 灰 岩

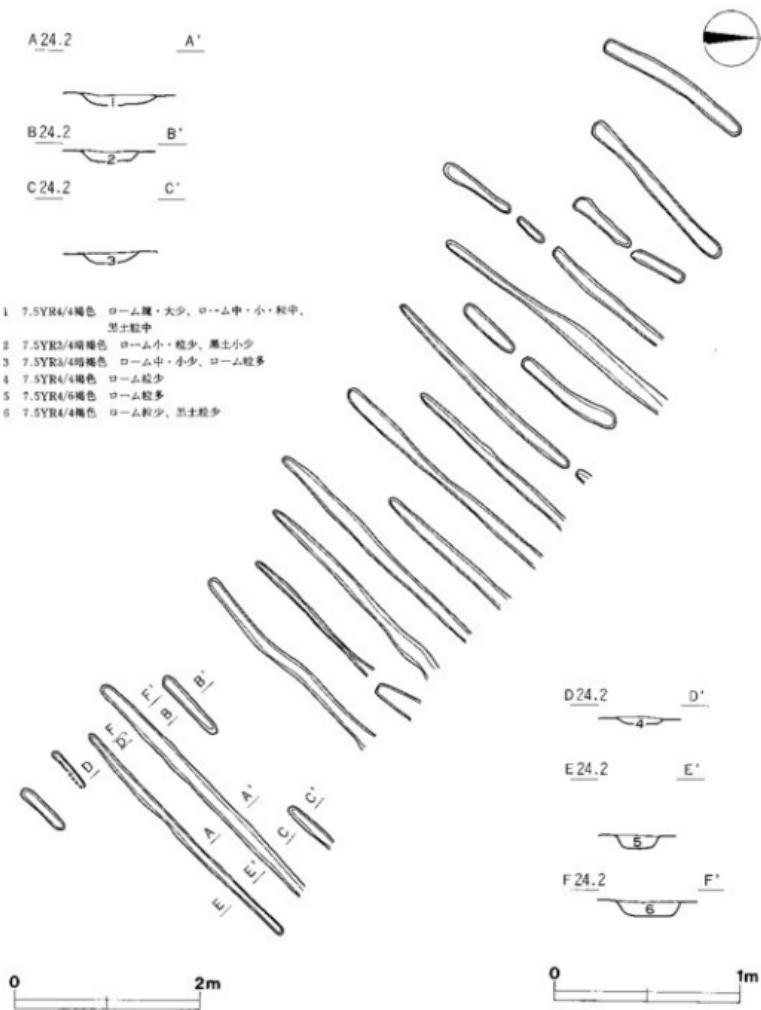
図版No.	器 様	出 土 地 点	最 大 長	最 大 幅	最 大 厚	重 量	石 材
92-2	砥 石		7.05	3.55	2.55	93.57	花崗岩
92-3	#	SI-51区	3.20	2.10	0.40	3.52	粘 板 岩
92-4	#	SD-19	7.20	5.75	1.40	65.50	雲 母 片 岩
92-5	#	4S-82区	160.00	64.50	4.31	625.00	#
92-7	#	中央	71.30	37.40	31.50	91.50	安 山 岩
92-8	小型磨石	4W-81区	36.20	34.10	11.40	16.00	#
92-9	#	4X-79区	39.90	28.50	14.20	20.00	閃 綠 岩
92-11	#	中央	38.80	30.30	21.80	38.50	安 山 岩
92-12	#		39.20	34.40	20.00	29.50	#



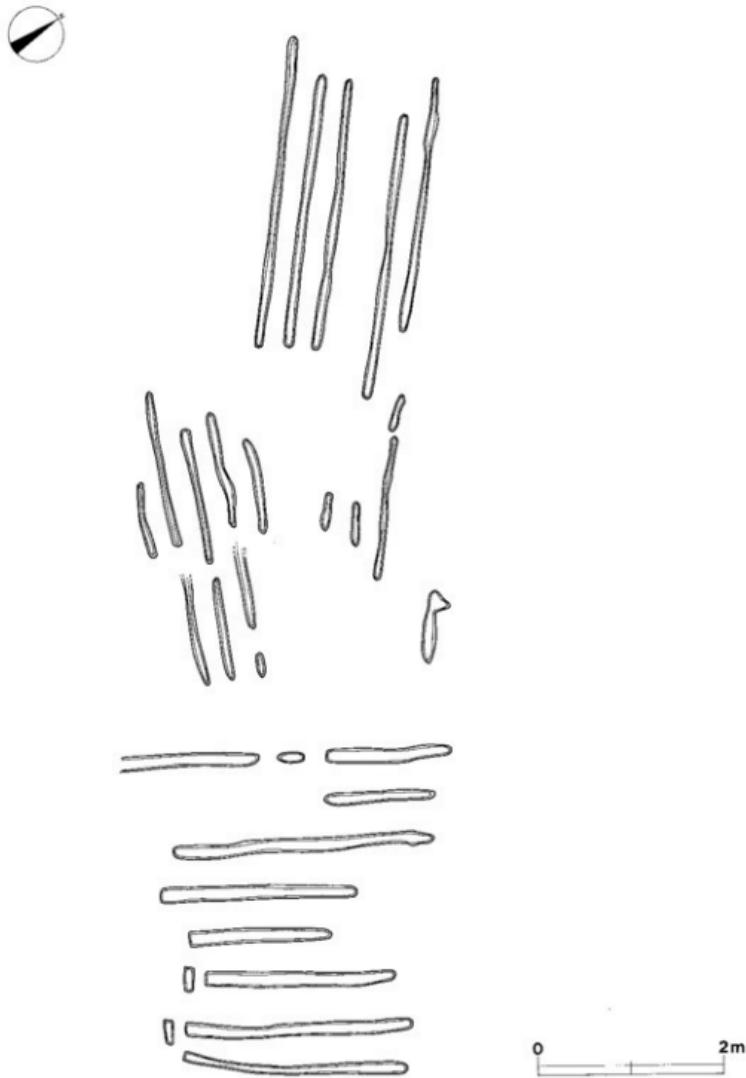
第92図 平安時代石器

第4節 中世以降・時期不明遺構・遺構外

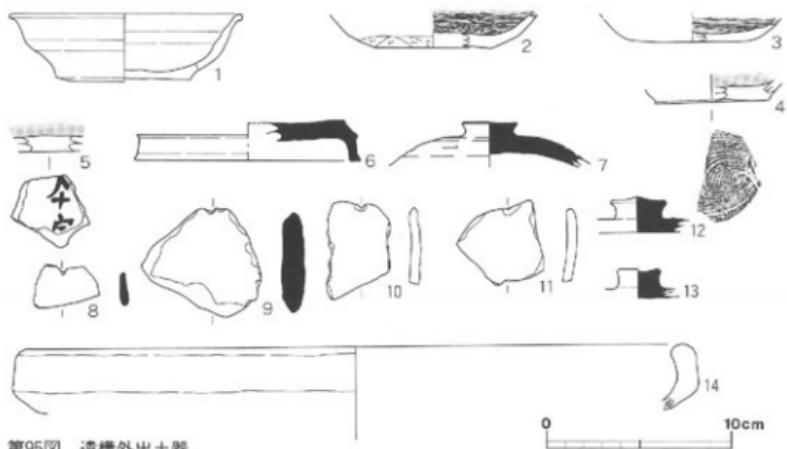
調査区の西において、近世以降と思われる歛状遺構が2か所で検出された。竪は幅15m、長さ約50mの範囲にみられる。



第93図 歩状遺構（1）



第94図 欽状遺構 (2)



第95図 遺構外出土器

図版No.	器種 形	法 量	出土位置 残存率	成 分	胎 土	色 調	輪 形・技 法の特 徴	備 考
1	杯 土器	A : 12.5 B : 7.3 C : 3.7	2/3	普通 石英を少 量含む	棕		底部回転ヘラ削り後、周辺を手持ちヘラ削 り。外面にロクロナヂの痕を残す。	254
2	杯 土器	B : (6.2) C : (1.8)	小片	普通 石英・長石 小粒を含む	にぼい赤褐 黒		切り離し後、底部周辺手持ちヘラ削り 内面ヘラミガキ	内黒 258
3	杯 土器	B : (6.9) C : (1.3)	小片	普通 石英・長石 小粒を含む	にぼい赤褐 黒		底部切り離し後回転ヘラ削り、内面ヘラミガ キ	内黒 259
4	杯 土器	B : (6.2) C : (0.7)	小片	良好 石英 長石 少量 藍含む	にぼい褐 黒		底部糸切り	内黒 263
5	杯 土器		底部小片	普通 石英・長石 粒を含む	棕 黒		底部切り離し後、回転ヘラ削り	内黒 墨書「本カガム」 257
6	高台付杯 須恵器	C : (1.4) D : (32.4) E : 1.4	小片	良好 石英・長石 大粒を少量 含む	灰		底部切り離し後、回転ヘラ削り 裏面貼り付けの為に泥濘を2条施す	255
7	蓋 須恵器	C : (2.4) G : 3.0 H : 0.9	小片	良好 石英・長石 大粒を少量 含む	灰		天井部は回転ヘラ削り、ロクロは時計回り 楕円底つまみは導く偏平で、縁部は外方へつ まみ出される。	268

12	蓋 須恵器	C : (1.9) G : 3.0 H : 1.2	小片	普通 石英・長石 粒多量に含 む	灰		擬宝珠つまみは薄く偏平で、縁部は外方へつ まみ出される	262
13	蓋 須恵器	C : (1.6) G : 2.3 H : 1.0	小片	不良 雲母顕微 鏡を含む	灰白		拟宝珠つまみは小形で、ほぼまっすぐ立上が る	261
14	焰袋 須恵器	A : (36.1) C : (3.5)	小片	普通 石英・長石 少量含む	暗灰		口縁部は内側し、底部は丸く捺められる。	256

結語

今回調査した長峯遺跡について簡単にまとめてみたい。

本遺跡は北西から南東に延びる細い尾根状の台地に位置する。台地の北東には霞ヶ浦に注ぐ川尻川が流れている。調査の結果、台地の端から中央にかけて縄文時代の包含層と、平安時代の集落址が発見された。

縄文時代の包含層からは早期から中期にかけての土器が出土した。特に早期（井草式から鶴ヶ島台式）、前期末から中期初頭の土器群はまとめた資料である。

平安時代は堅穴住居址16軒、掘立柱建物5棟、溝2条、土坑2基、井戸状遺構1基（17号土坑）が検出された。時期は9世紀代を中心とする。特出される遺構として四面廂付掘立柱建物址がある。この建物は親舎が1間×1間、廂が3間×3間、小規模な建物である。近くの堅穴住居址から「長谷寺」の墨書きが出土していることから、この建物は「長谷寺」と呼ばれていた仏堂と思われる。「長谷寺」の命名について、鬼頭清明氏は地形からくる可能性を述べている。本遺跡は建物1棟と墨書き土器以外に仏教関係の遺構遺物は少なく、小規模な集落に作られたお堂、いわゆる村落内寺院のイメージである。仏教施設については同じ台地上で本遺跡から西へ370離れた寺畠遺跡からも発見されており、規模や建物の構成等に違いが見られる。問題となるのは接近した集落にそれぞれ仏教施設が存在するということであろう。

遺物は土師器や須恵器が主であるが、墨書き土器も多い。特徴として「万福」や「福福」等の吉祥句が目立つが、第15号土坑出土の「国厨」の墨書き土器は注目される。当遺跡のように国衙以外の地点から「国厨」の銘が出土することについて平川南氏は、国内各所における国司饗宴との関連を想定できると述べている。（註1）当遺跡を含めた川尻川右岸は平安期の集落が存在し、掘立柱建物群、火葬墓群や二彩・三彩を含む多量の施釉陶器、皇朝十二錢などが発見されている。これから当地一帯は交通（水上）の要所で、一般的な集落とは異なる様相の集落が存在し、国司が巡回することも十分考えられる地である。また、長峯遺跡の先端は川尻川やその支谷が入り込む風光明媚な地であり、国司が饗宴するのにも適した地と思われる。

この地の遺物として、円面鏡、転用鏡、灰釉陶器26点（小片含む）、瓦3点が出土した。また、8号住居址出土の墨書きは人面墨書きの可能性ある。

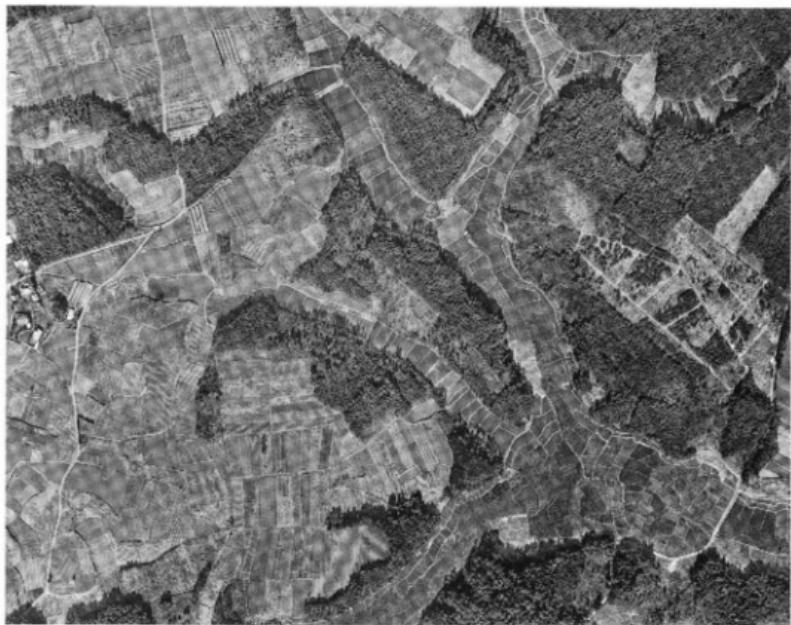
以上、調査の結果を簡単に纏めてみたが、これらが地域の解明に少しでも役立つことができれば幸いである。発掘から整理まで多くの方々にご指導、ご助言や励ましのお言葉を頂いた。文末ではあるが厚く感謝の意を表して結語としたい。

（註1）平川南『「厨」墨書き土器論』「山梨県史研究」一創刊号－山梨県教育庁 1993

報告書抄録

ふりがな	ながねいせき							
書名	長峯遺跡							
副書名	田村沖宿土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
巻次	3							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編集者名	黒澤春彦	著者名	小松葉子 福田礼子 黒澤春彦 寺田恵一					
編集機関	土浦市遺跡調査会							
発行機関	土浦市教育委員会							
所在地	〒300 茨城県土浦市下高津2-7-36							
発行年月日	1997年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ　一　ド		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
市町村	遺跡番号							
ながね 長峯遺跡	いばるけん つちうらし 茨城県土浦市 たひらまち あながね 田村町字長峯 2463-10外	D-146		36° 5' 8'	140° 15' 35'	19910108~ 19910420	12,800	土地区画 整理事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長峯遺跡	包含層 集落	旧石器 縄文(早) 縄文(前) 平安	竪穴住居址・土坑 掘立柱建物跡	スクリイバー 縄文土器・石器 土師器・須恵器 灰釉陶器・墨書き土器		尾根状の台地に展開する平安時代の集落。 四面廻付掘立柱建物跡や、「長谷寺」「國尉」の墨書き土器は注目される。この他の墨書きは吉祥句が多い。		

写 真 図 版



航空撮影（昭和50年撮影・国土地理院）



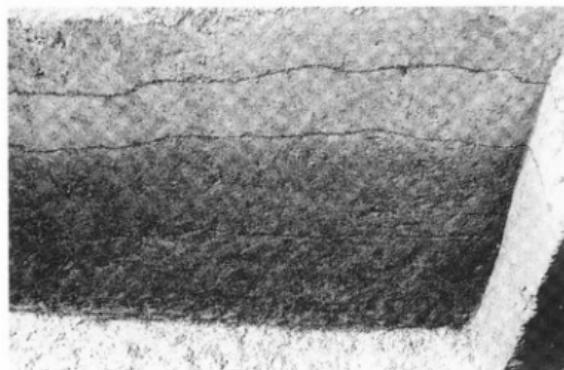
試掘状況



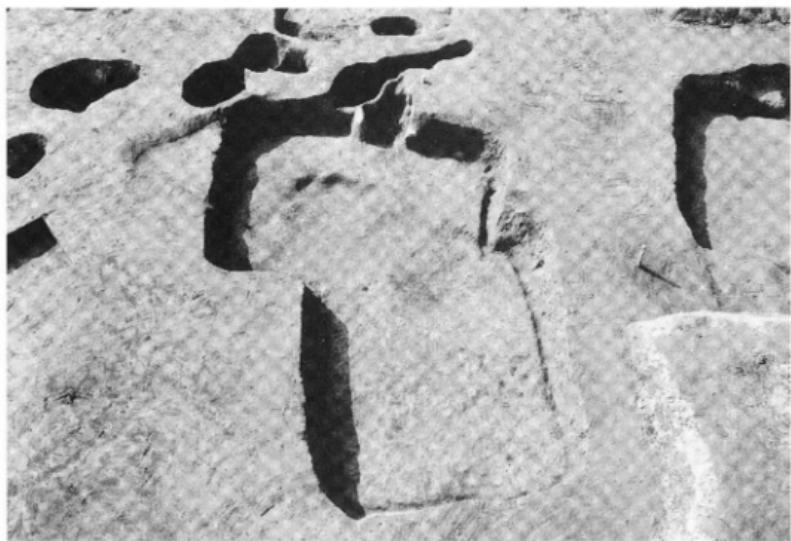
遺跡遠景（北西より）



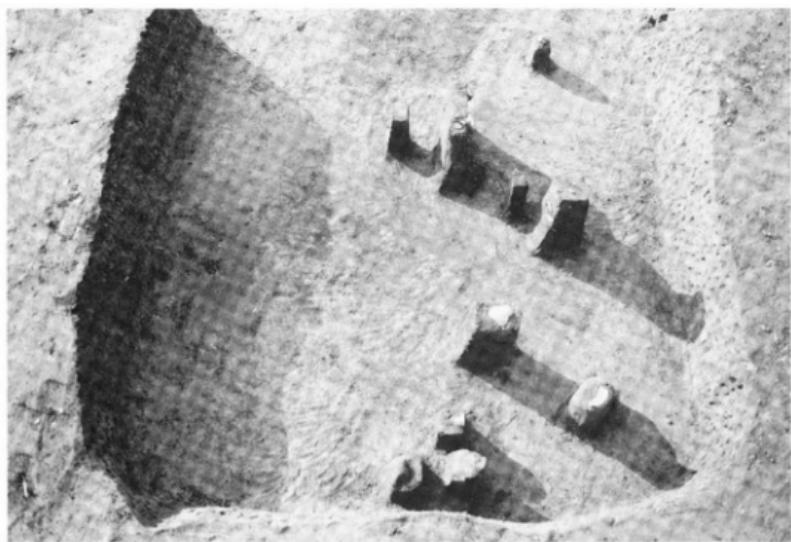
遺跡遠景（北より）



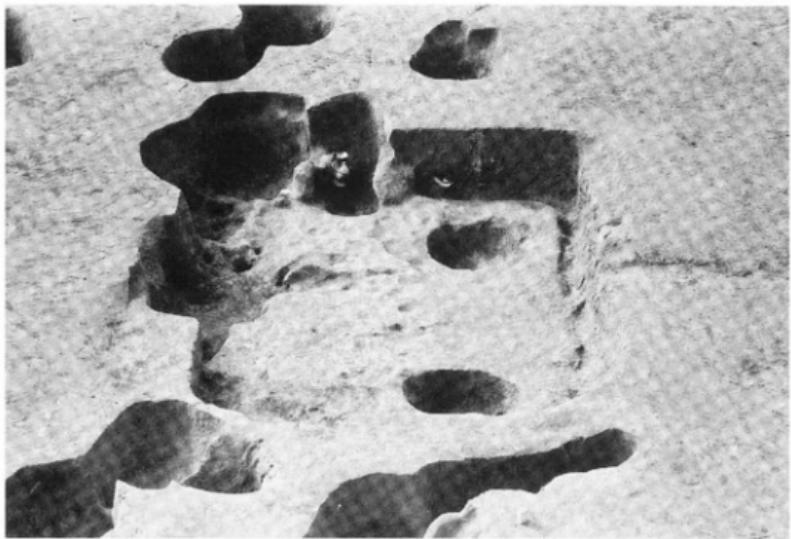
基本層序



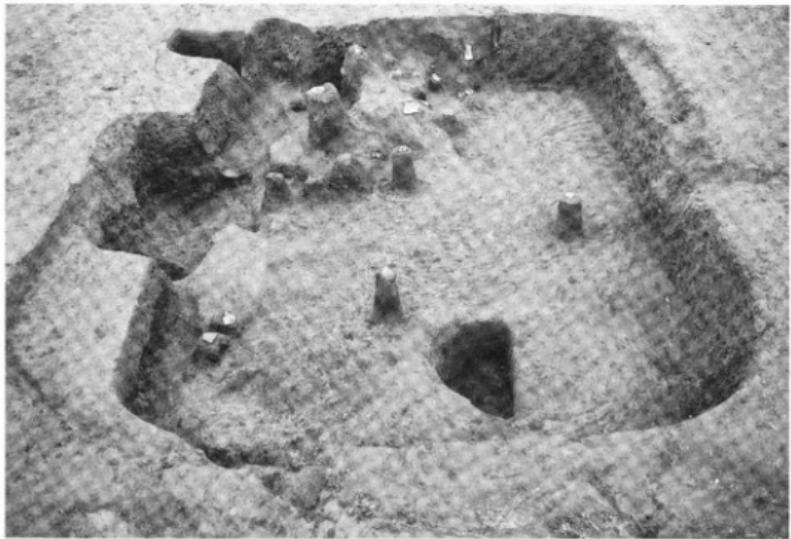
第2·3号住居址完掘



第3号住居址遺物出土状况



第4号住居址完掘



第4号住居址遺物出土状况



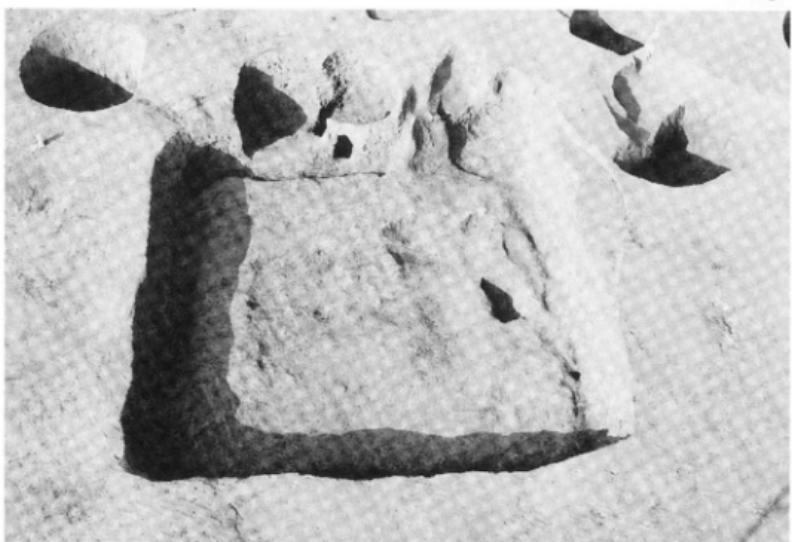
第2号住居址カマド



第4号住居址カマド



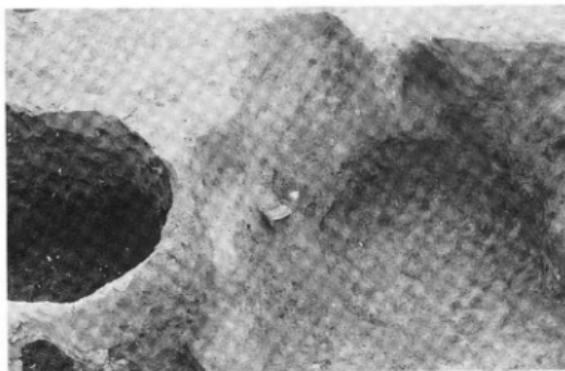
作業風景



第5号住居址完掘



第5号住居址遺物出土状況



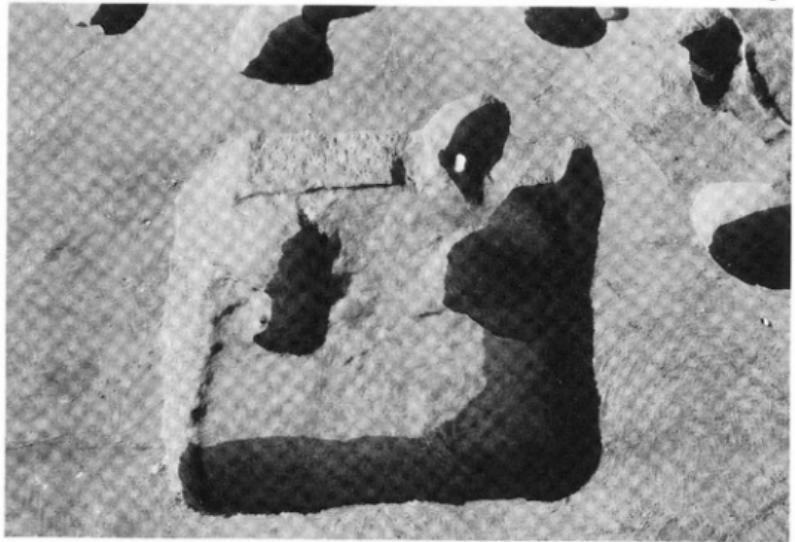
第5号住居址カマド



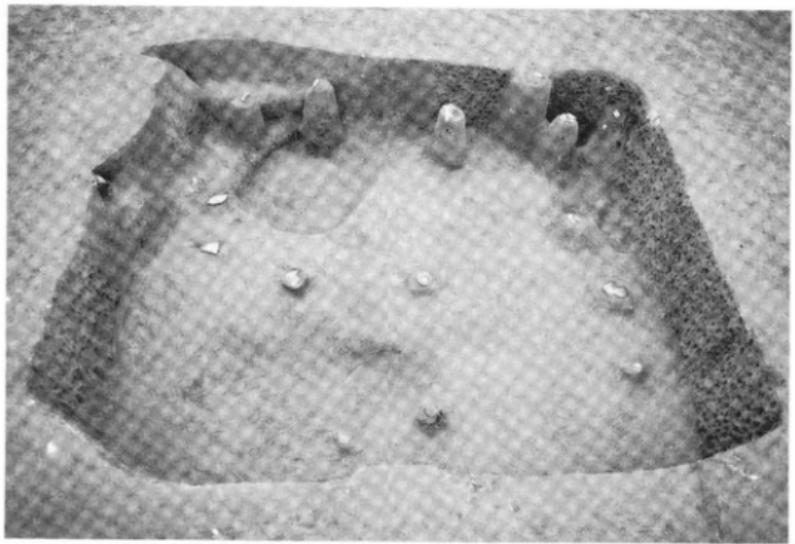
第5号住居址遺物出土状況



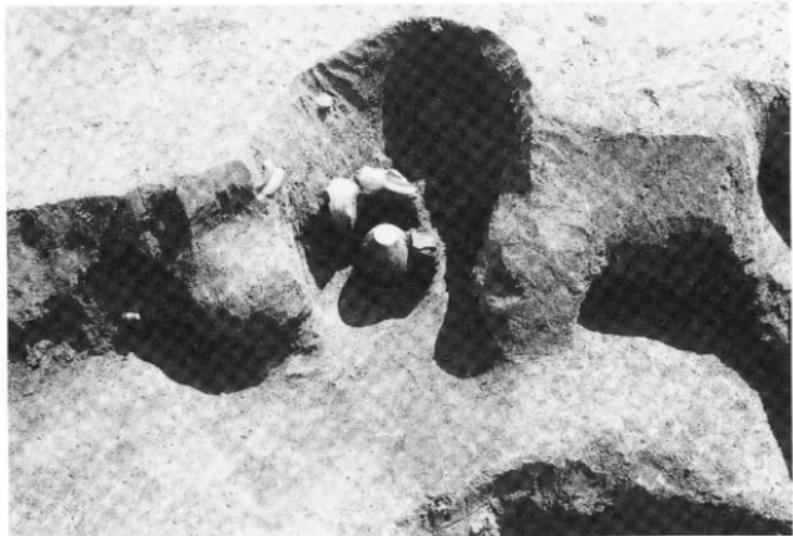
第5号住居址土層



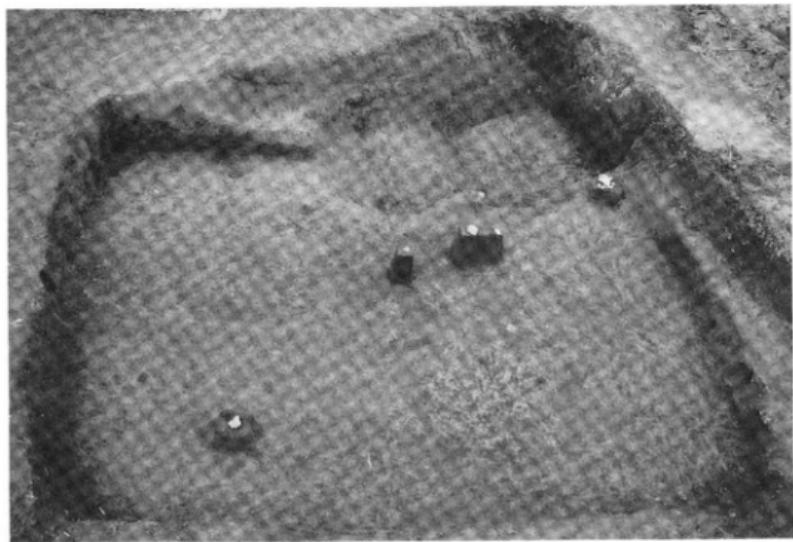
第6号住居址完掘



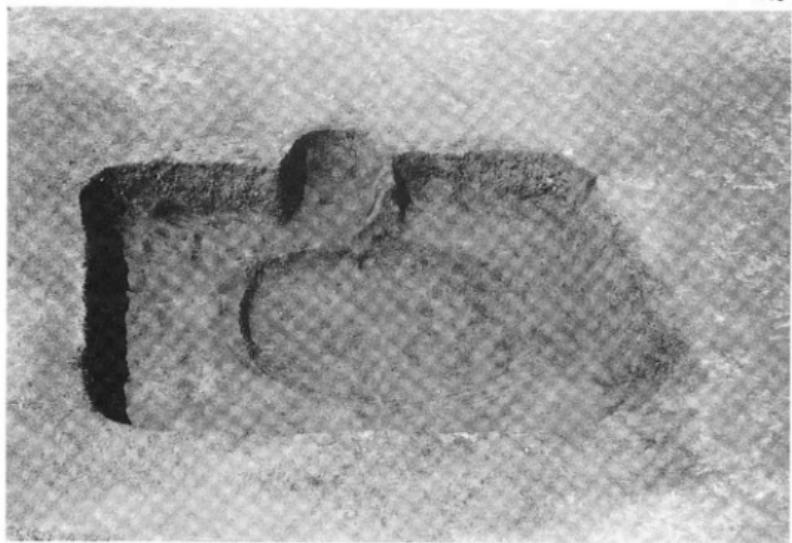
第6号住居址遺物出土状況



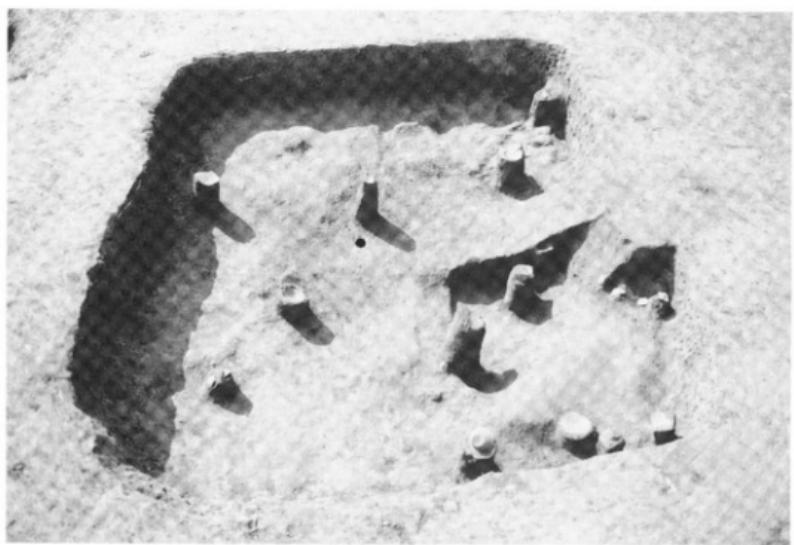
第6号住居址カマド



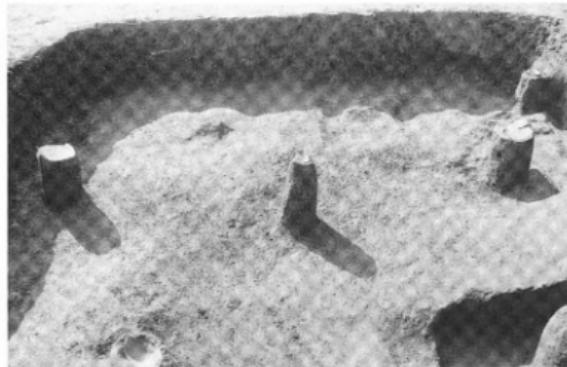
第7号住居址完掘



第8号住居址完振



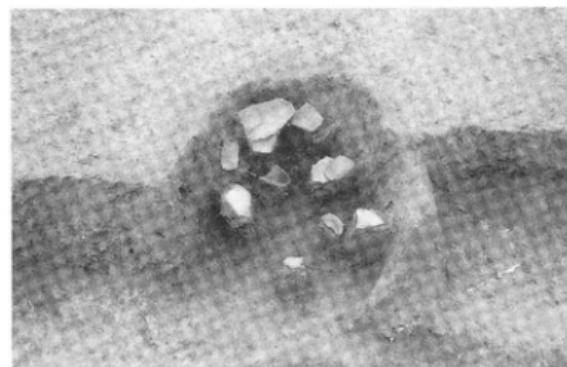
第8号住居址遺物出土状况



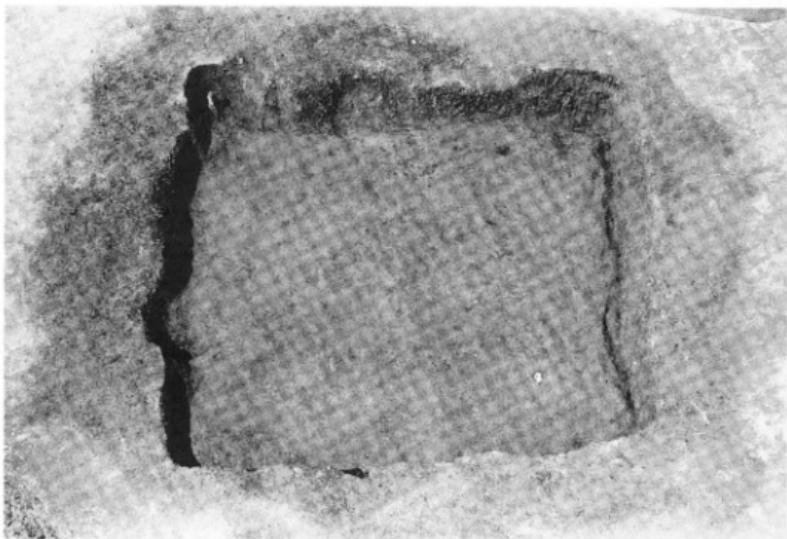
第8号住居址遺物出土状況



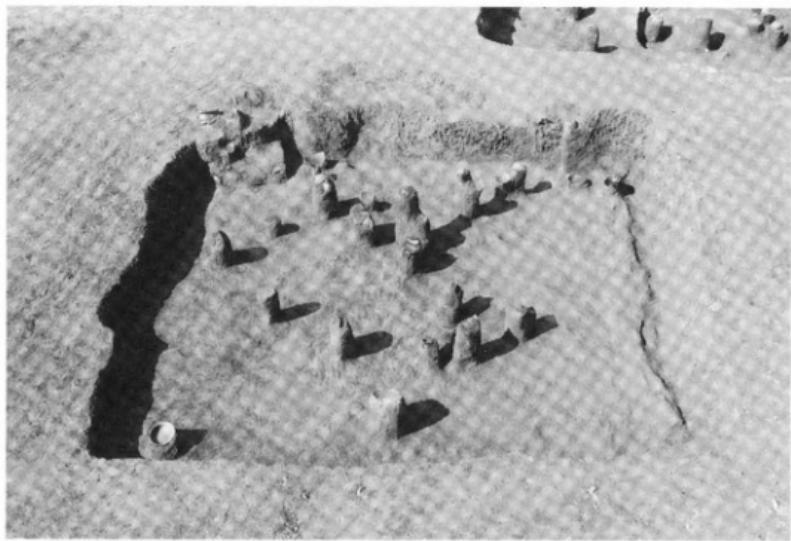
第8号住居址カマド



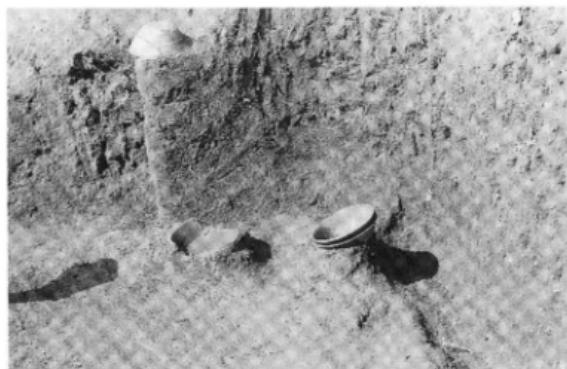
第8号住居址カマド
遺物出土状況



第9号住居址宪掘



第9号住居址出土状况



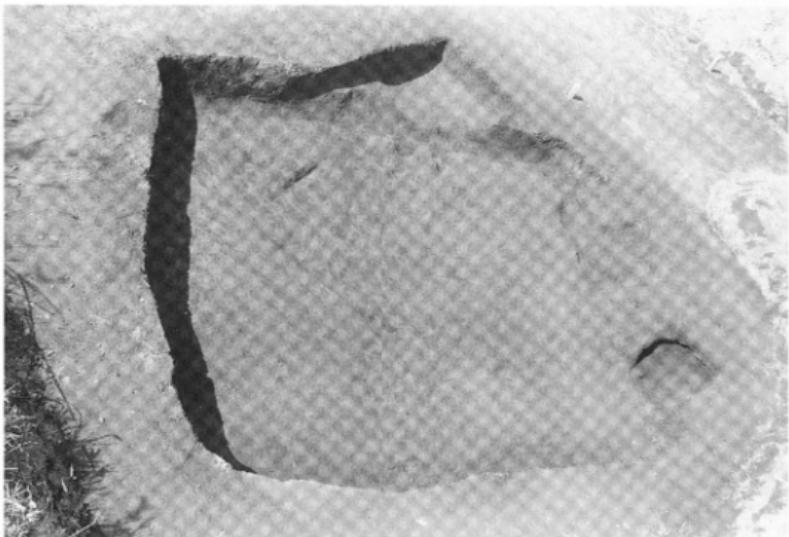
第9号住居址遺物出土状況



第9号住居址カマド



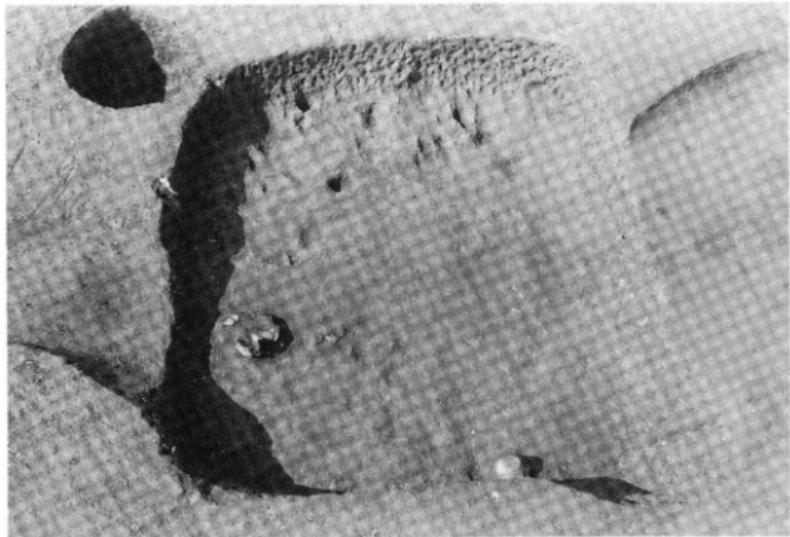
第9号住居址カマド
遺物出土状況



第10号住居址穴掘



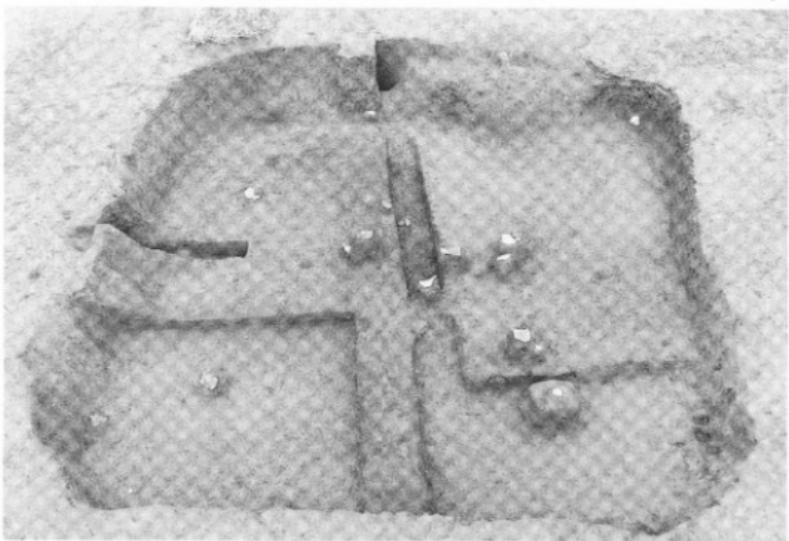
第10号住居址カマド遺物出土状況



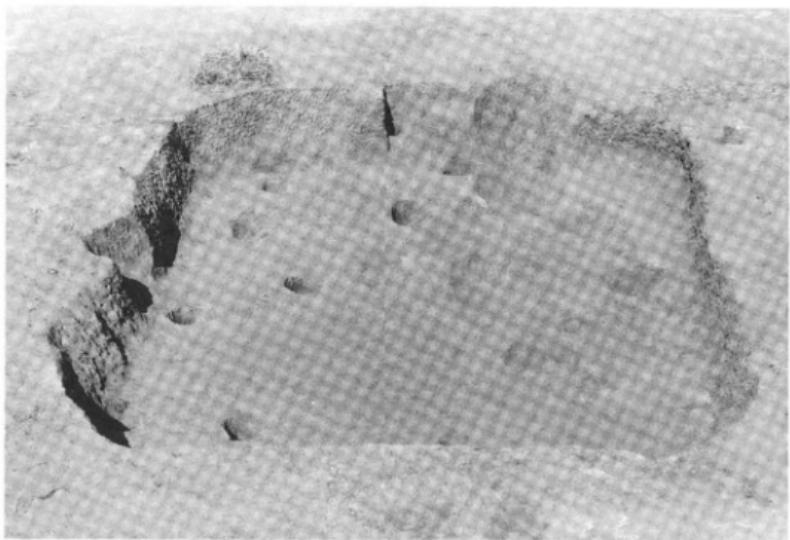
第11号住居址完掘



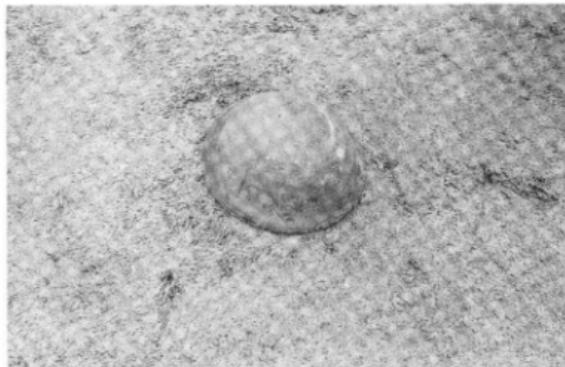
第8・9・10号住居址遠景



第12・13号住居址遺物出土状況



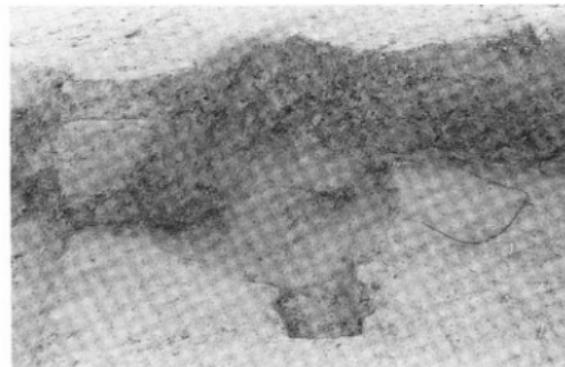
第12・13・14号住居址穴掘



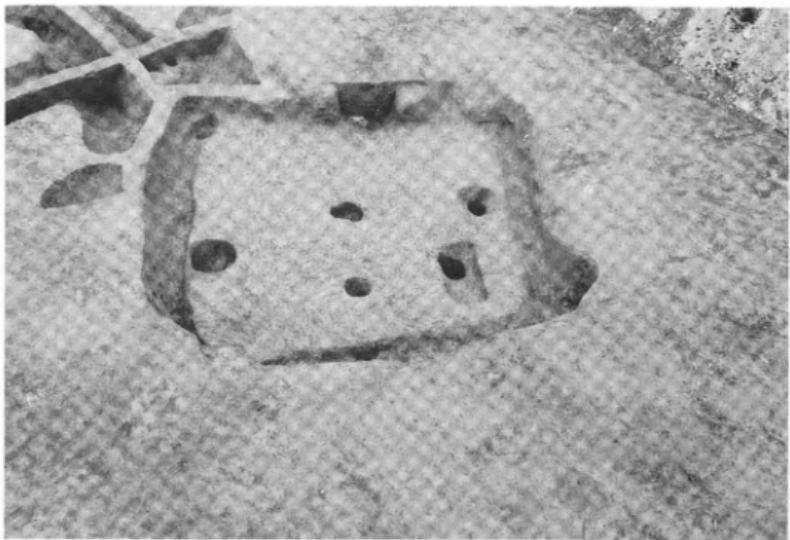
第12号住居址出土状況



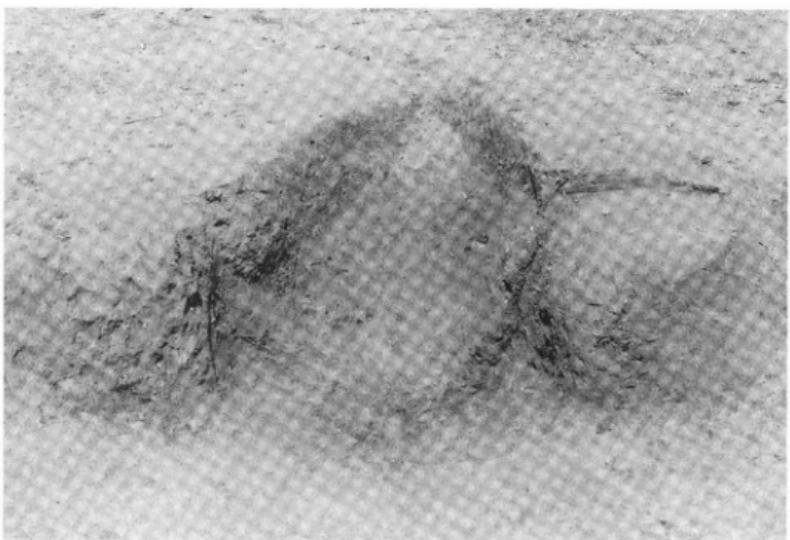
第12号住居址カマド



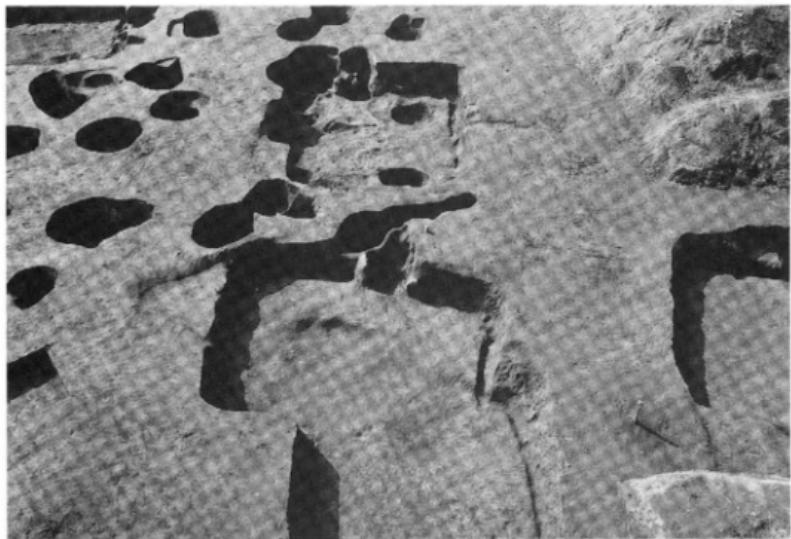
第13号住居址カマド



第15号住居址宪擺



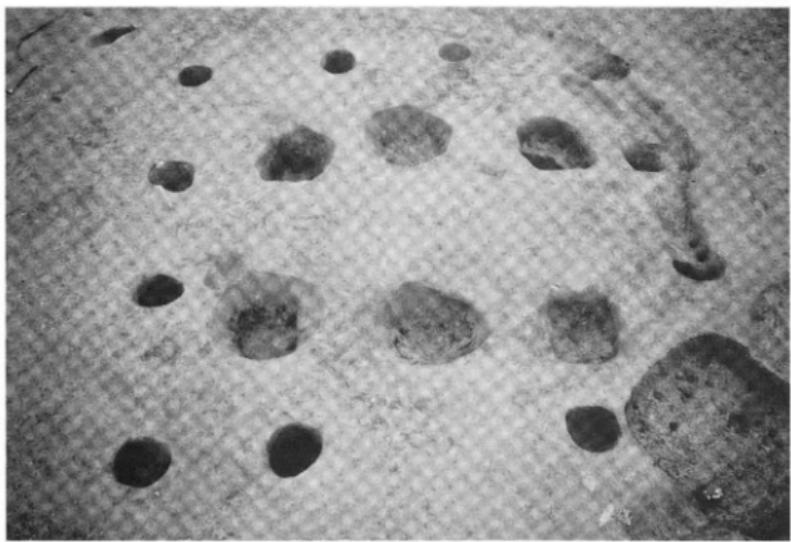
第15号住居址 カマド



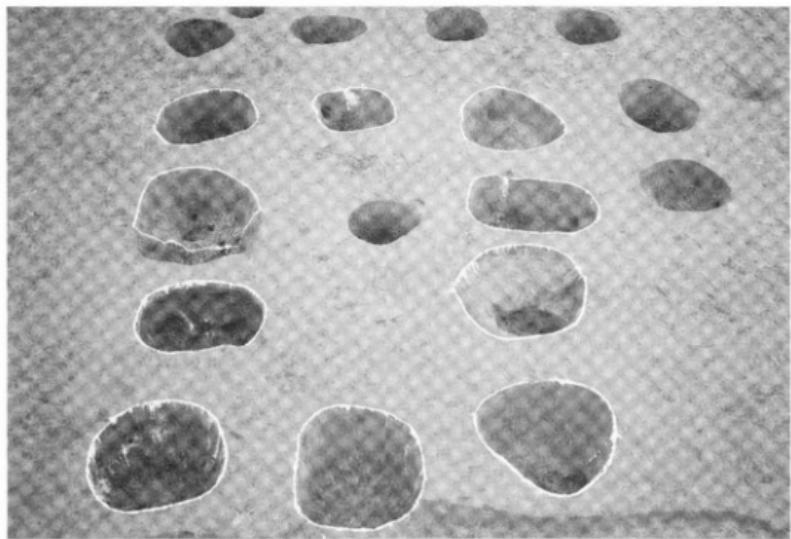
第2·3·4号住居址宪掘



第4·5·6号住居址宪掘



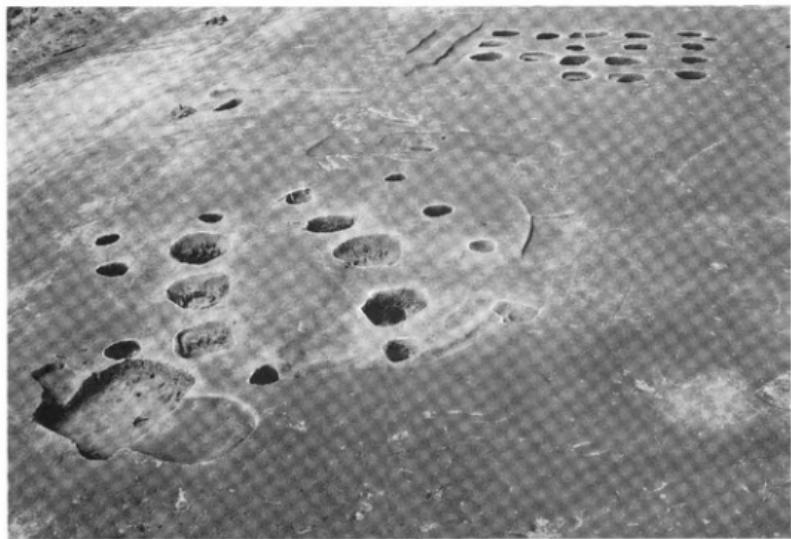
第1号振立柱建物跡完掘



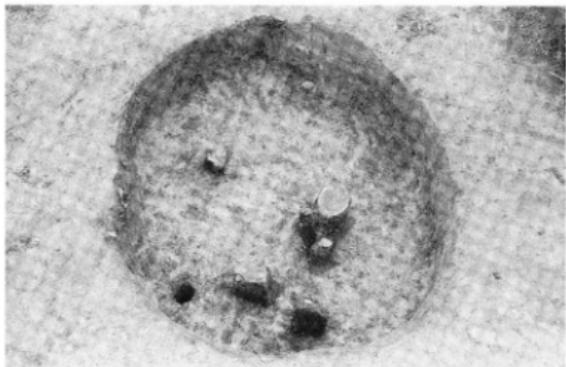
第2・3号振立柱建物跡完掘



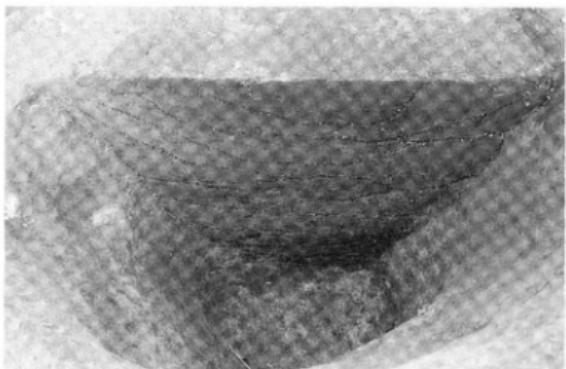
第4・5号据立柱建物跡完掘



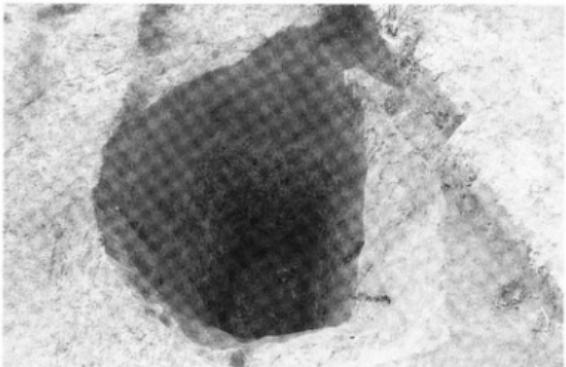
第1・2・3号据立柱建物跡



第15号土坑



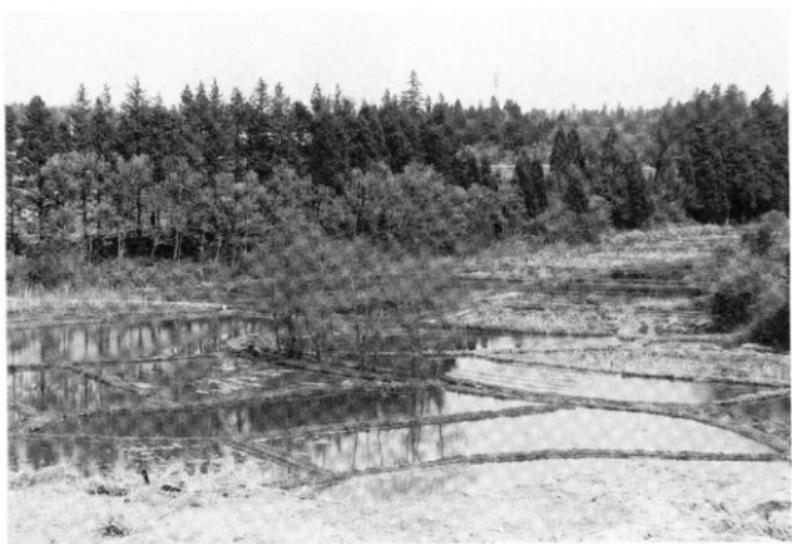
井戸状遺構土層
(第17号土坑)



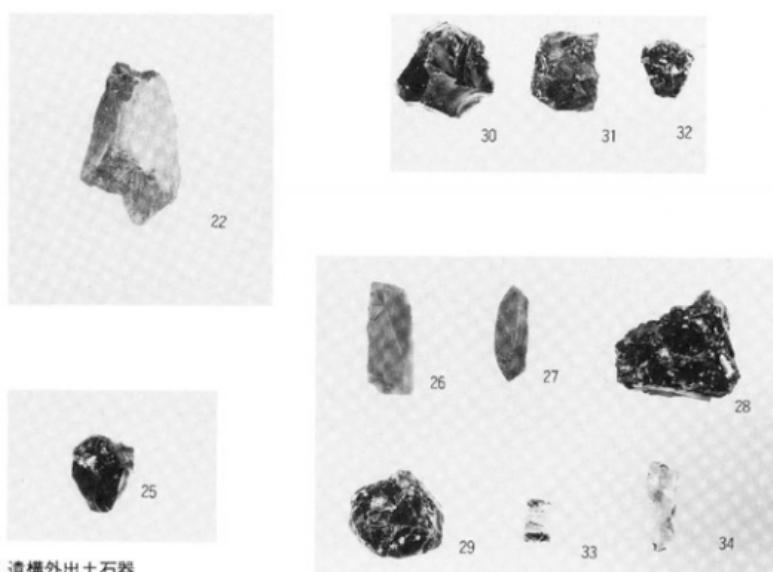
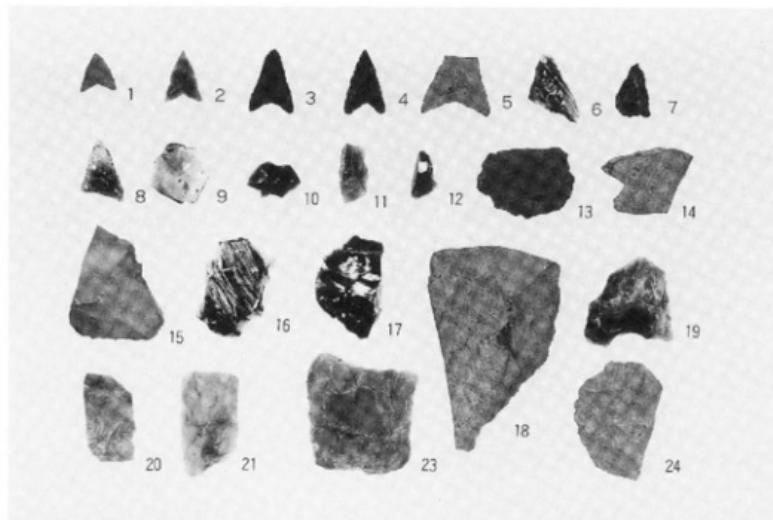
井戸状遺構完掘



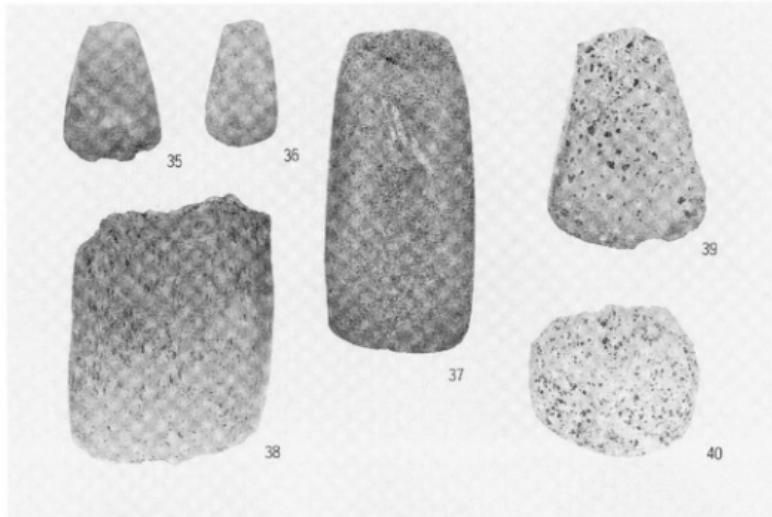
全 景 (北西より)



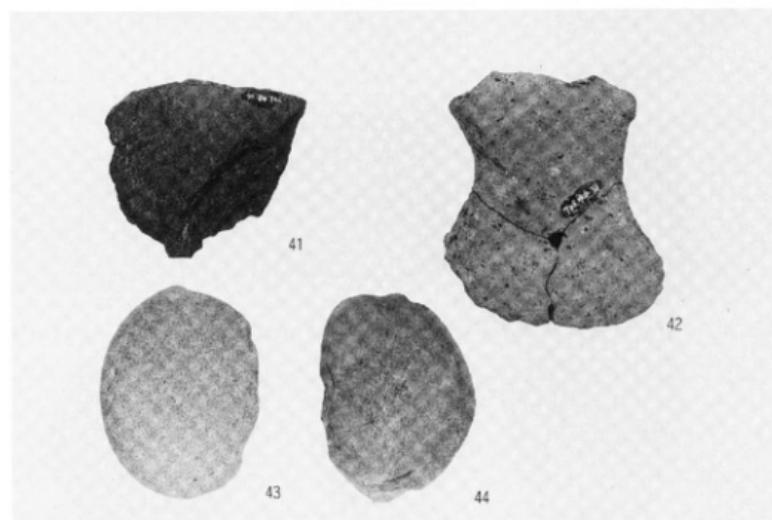
周辺風景



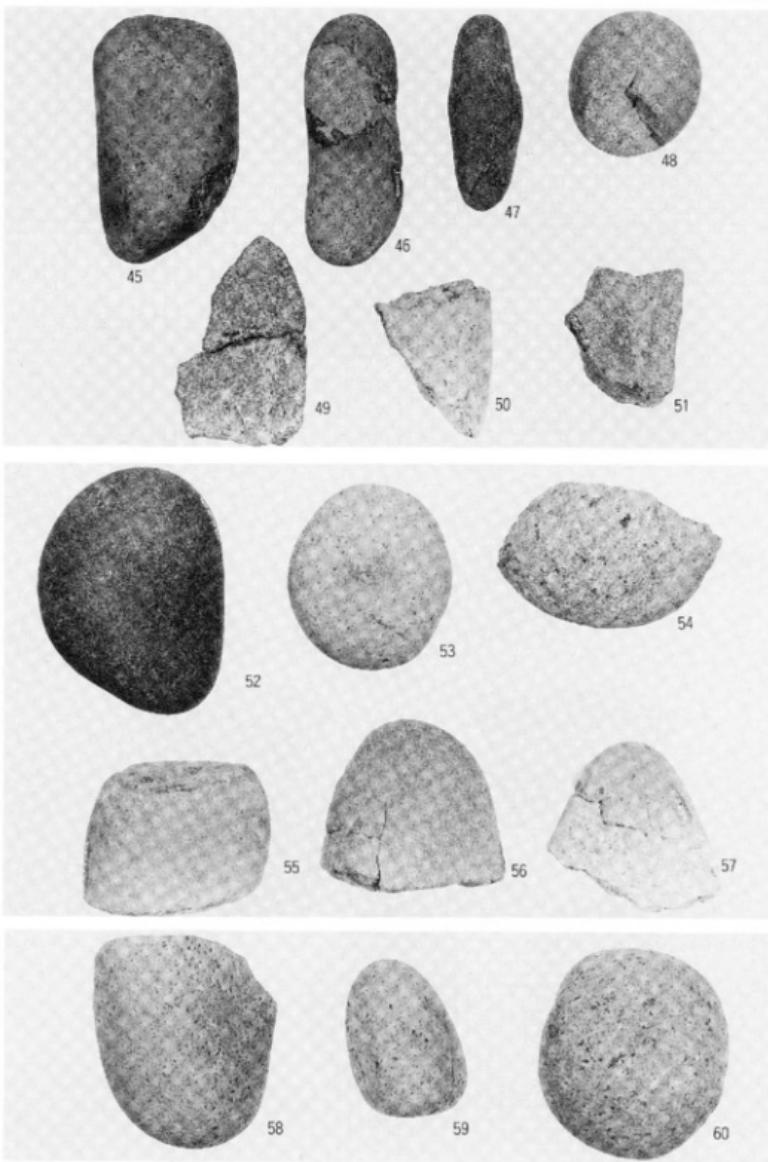
遺構外出土石器



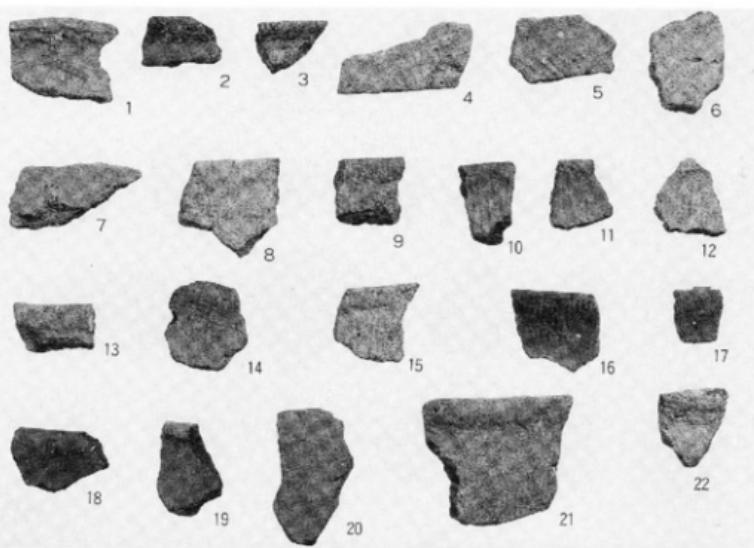
遺構外出土石器



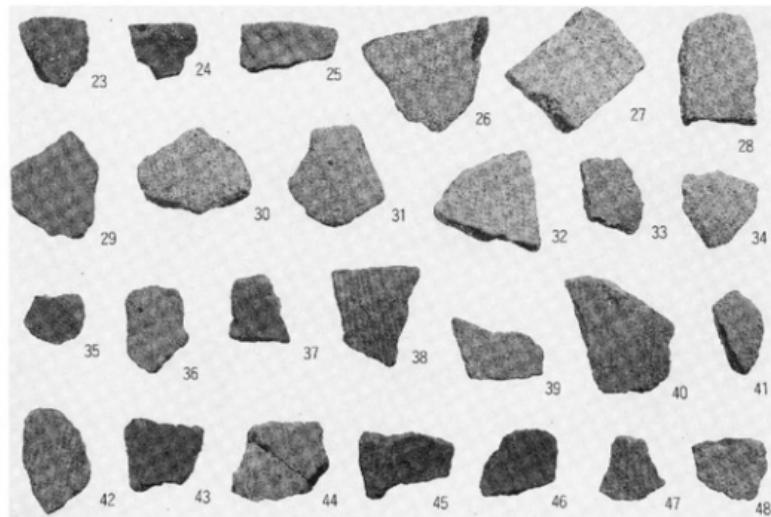
遺構外出土石器



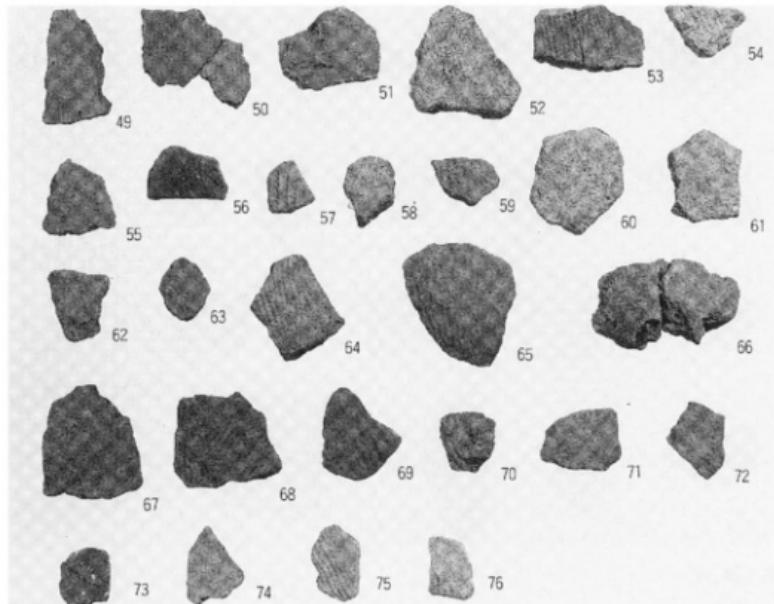
遗构外出土石器



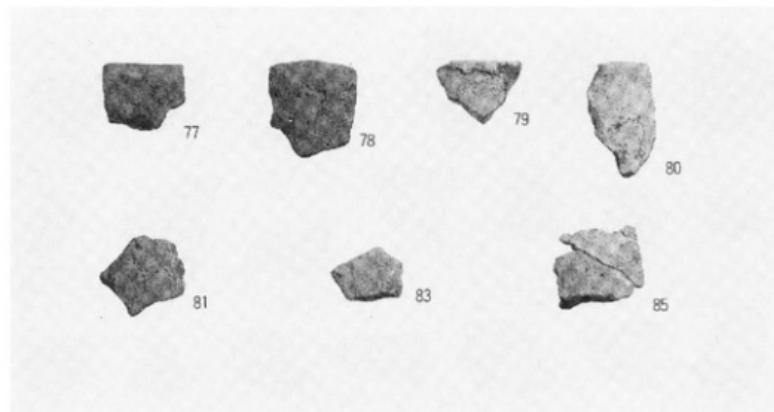
第1群土器-1



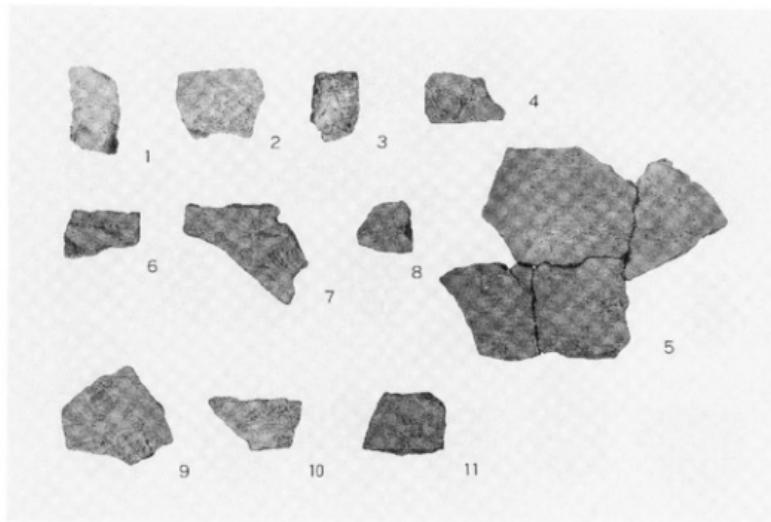
第1群土器-1·2



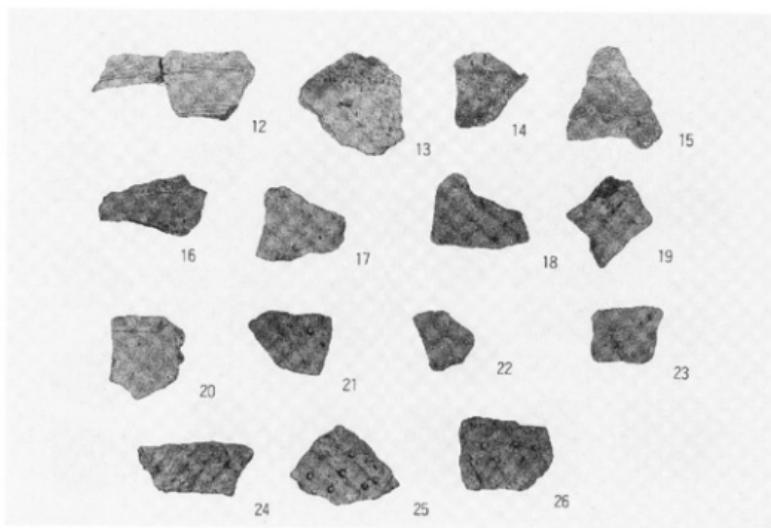
第1群土器－2・3



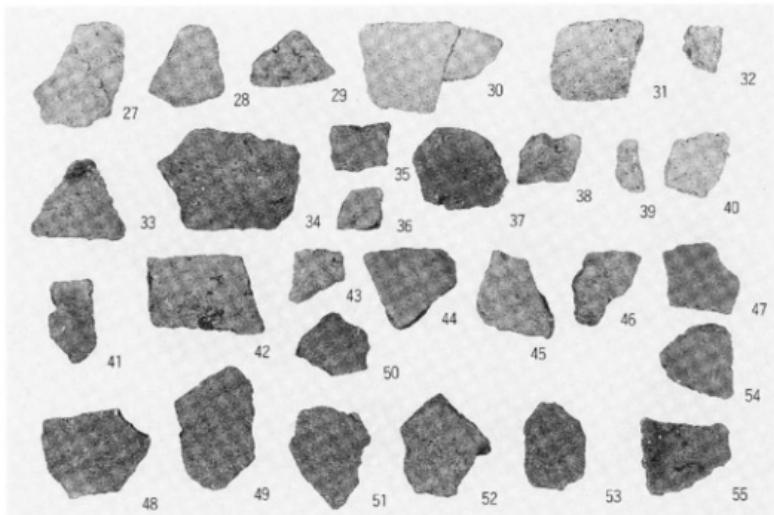
第1群土器－3



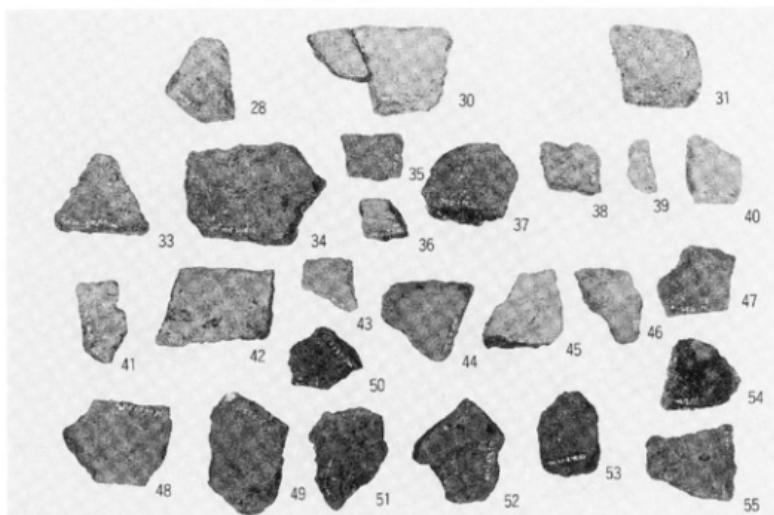
第2群土器-1



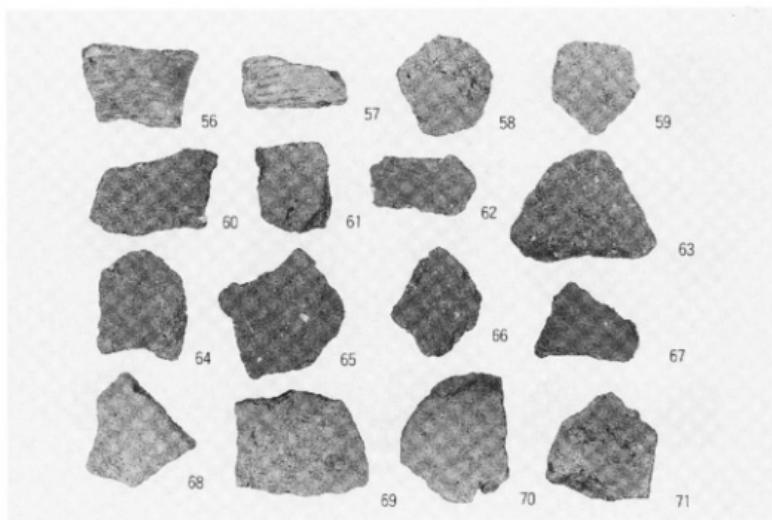
第2群土器-1



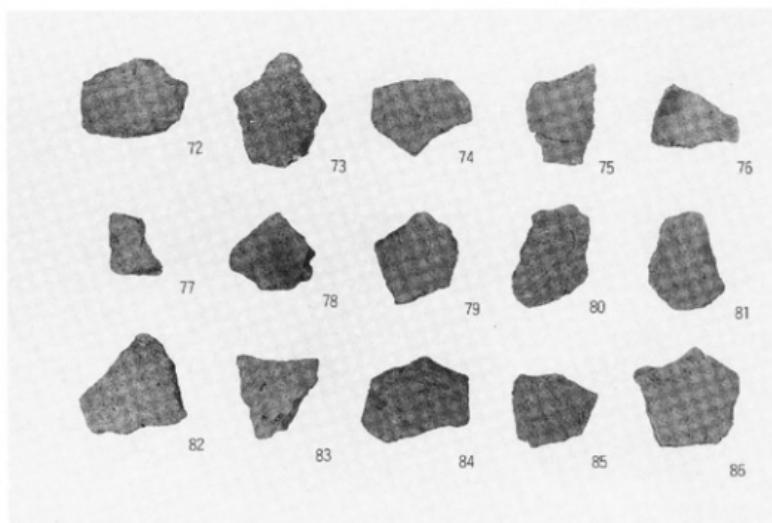
第2群土器-2



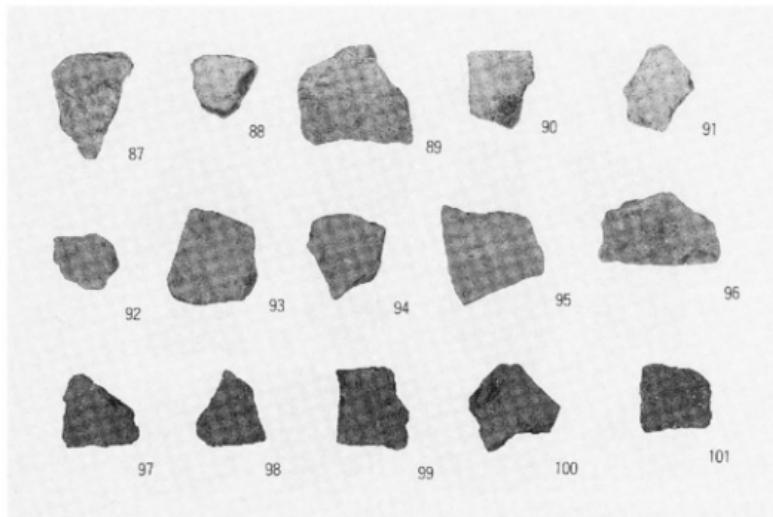
第2群土器-2



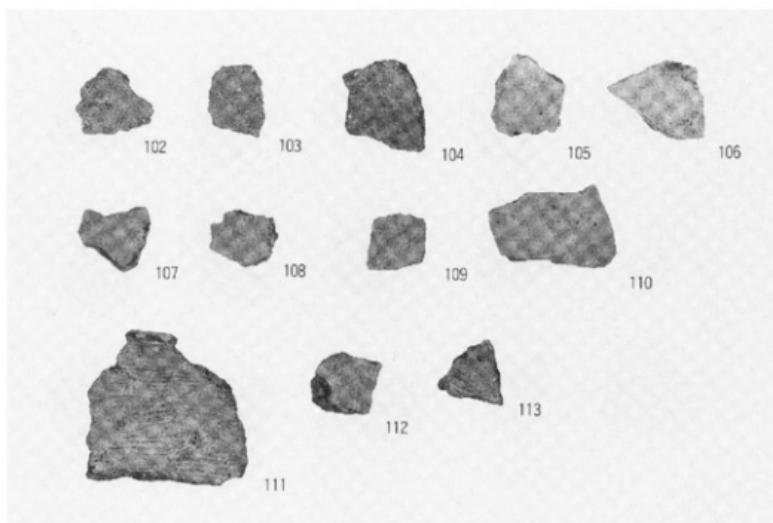
第2群土器-3



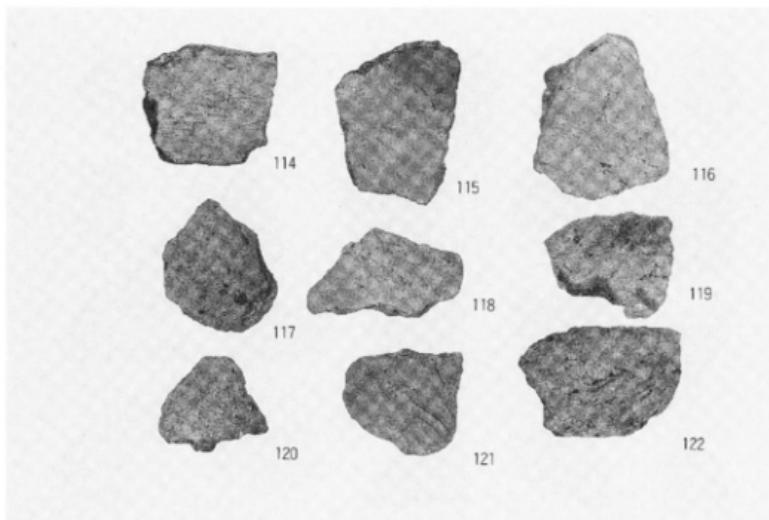
第2群土器-3



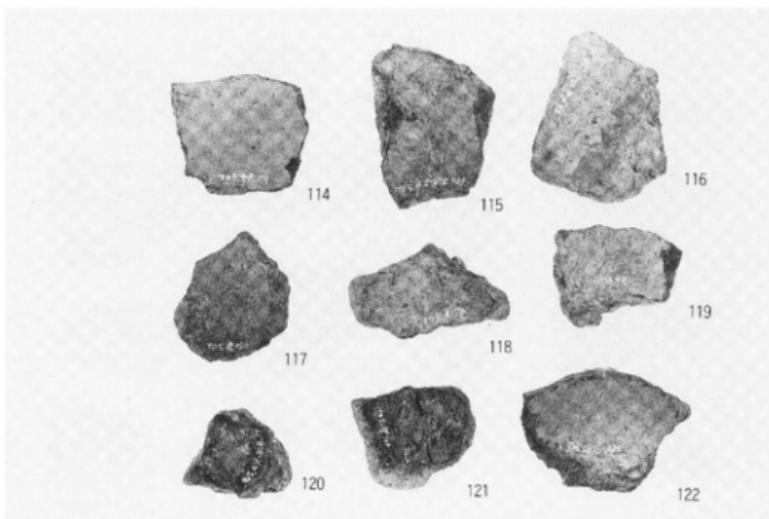
第2群土器-4



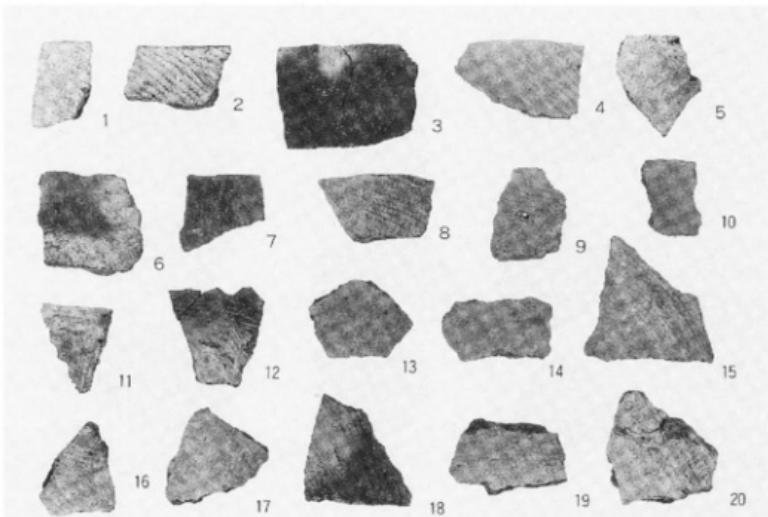
第2群土器-4



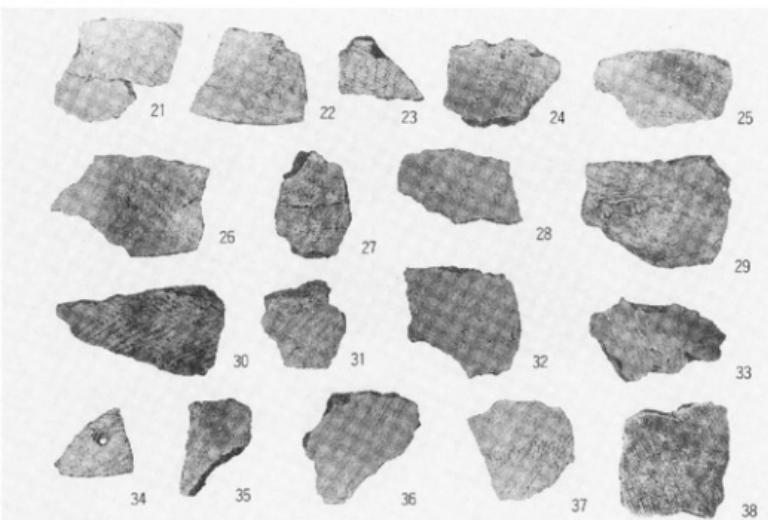
第2群土器-5



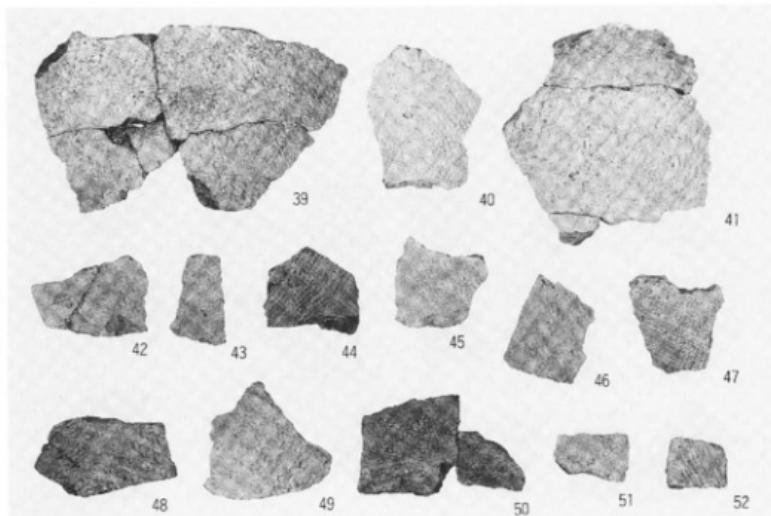
第2群土器-5



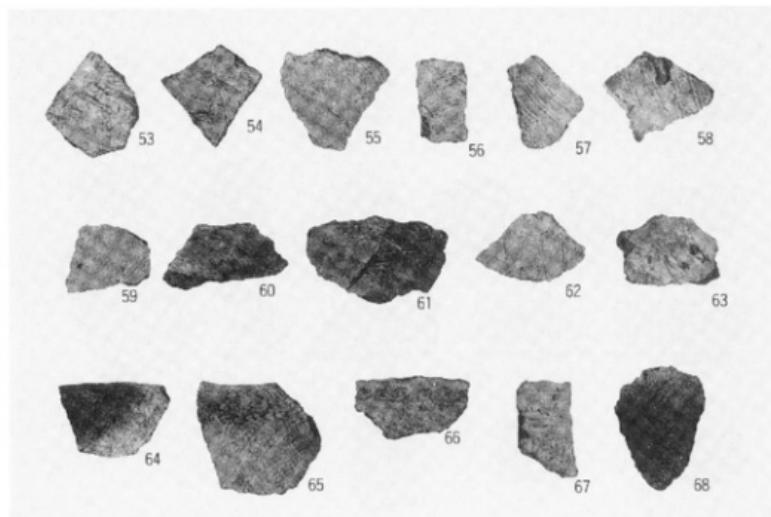
第3群土器－1



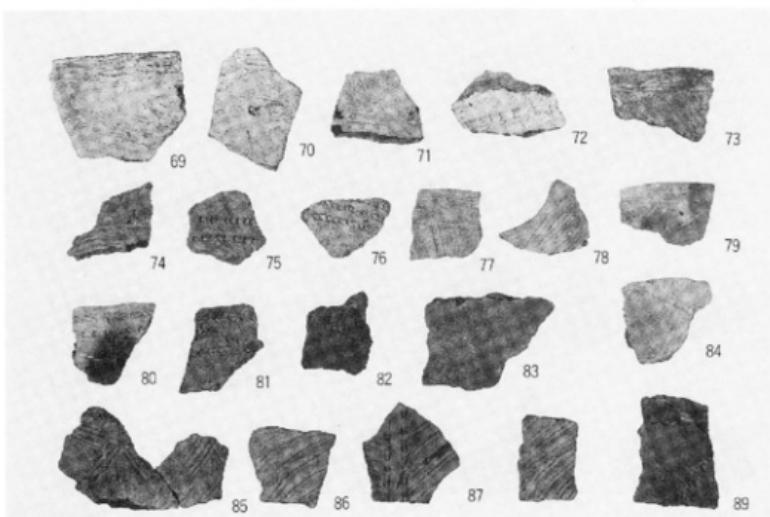
第3群土器－1



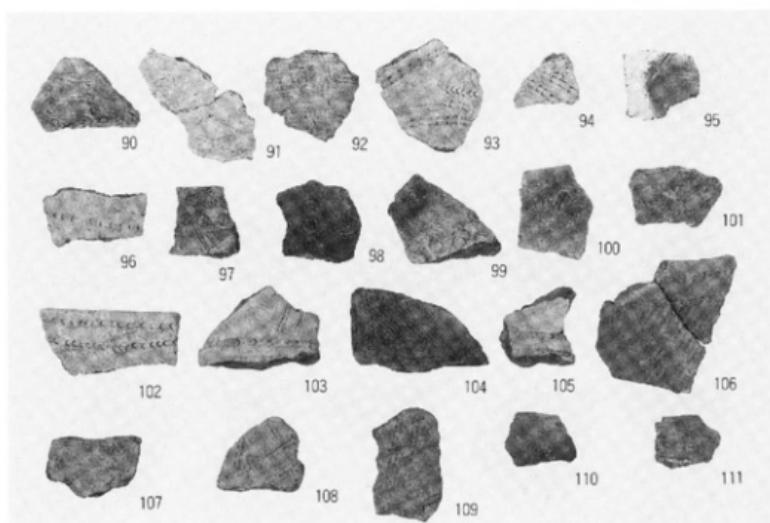
第3群土器-2



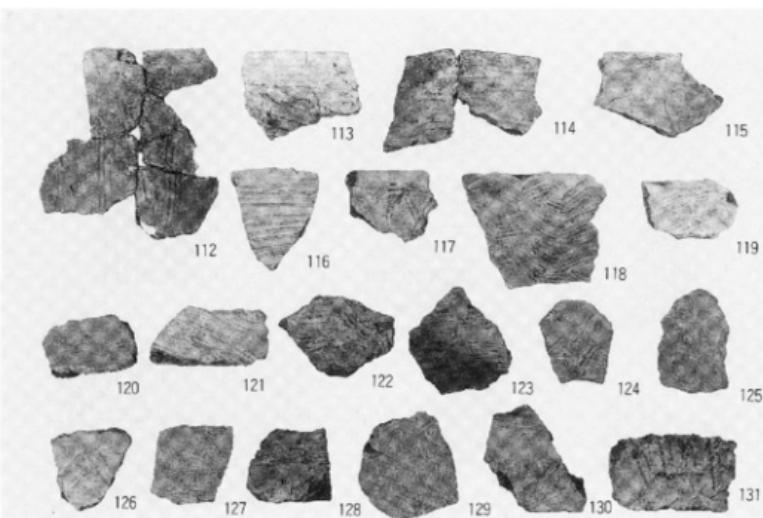
第3群土器-2



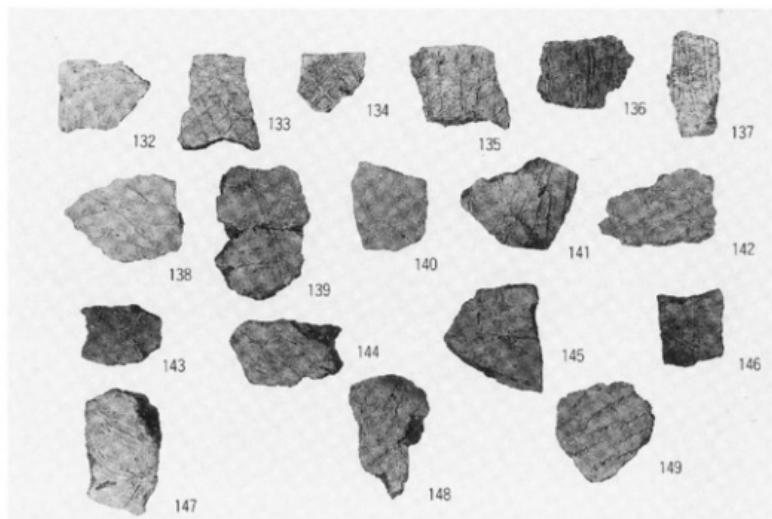
第3群土器-3



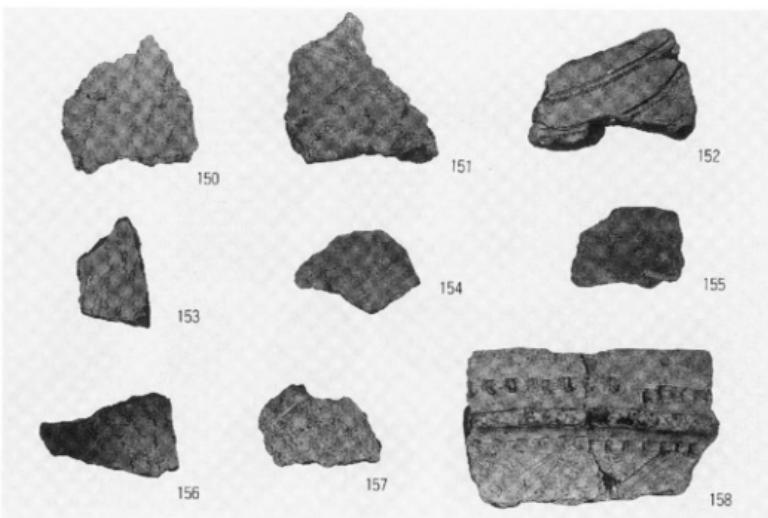
第3群土器-3



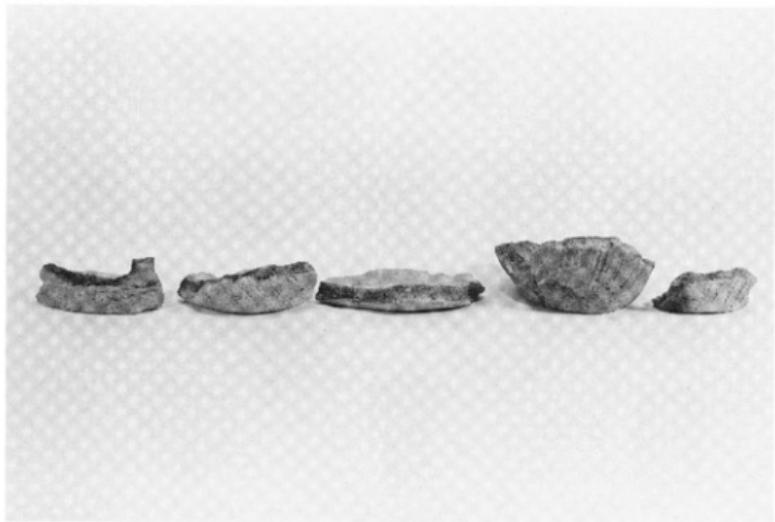
第3群土器-4



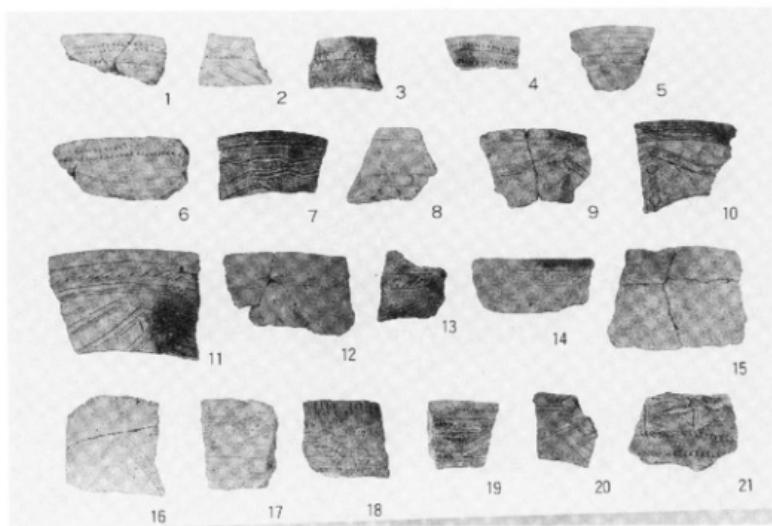
第3群土器-4



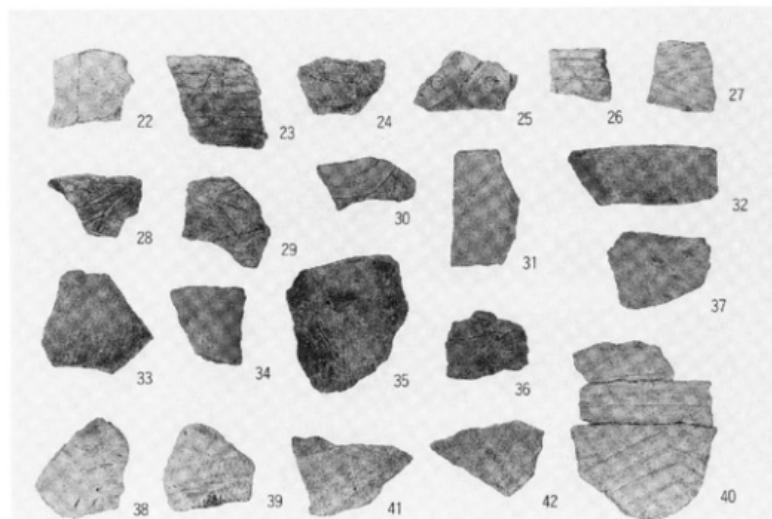
第3群土器 - 5



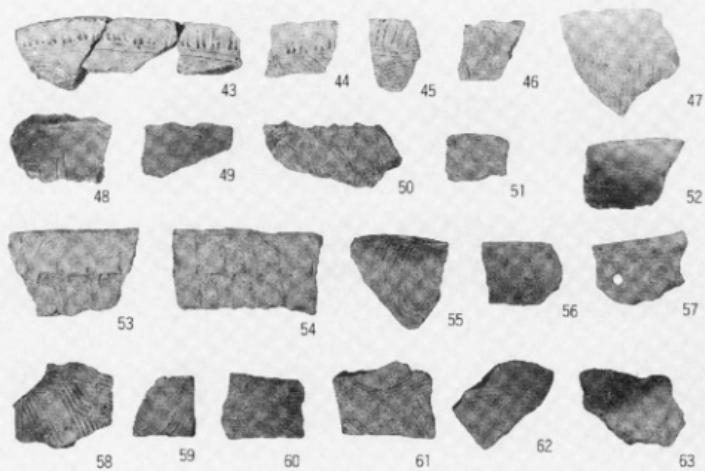
第3群土器 - 5



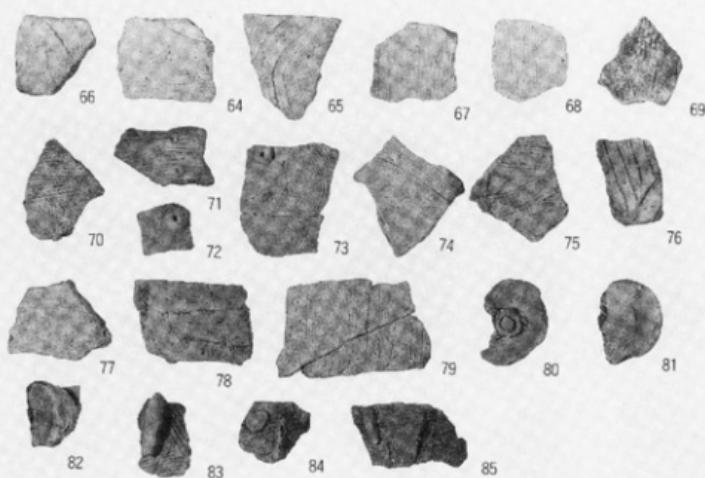
第4群土器-1



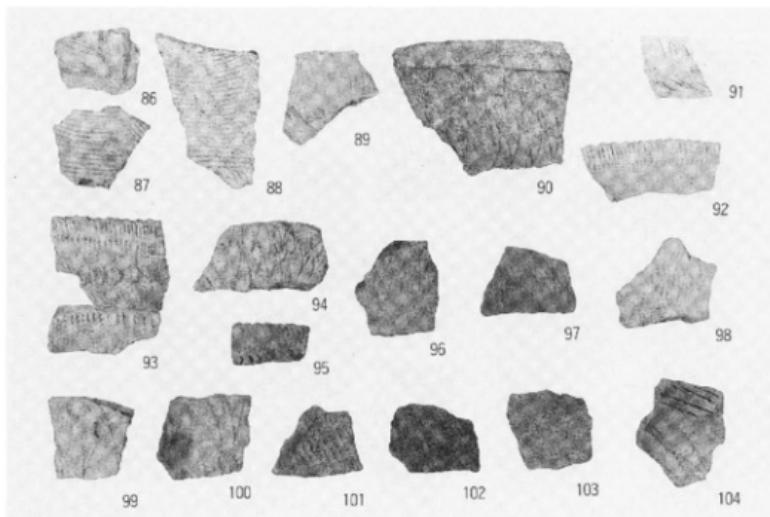
第4群土器-1



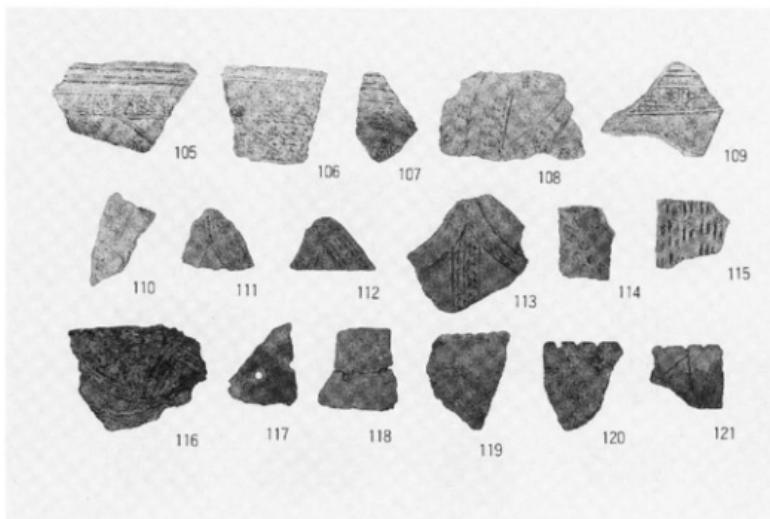
第4群土器－2



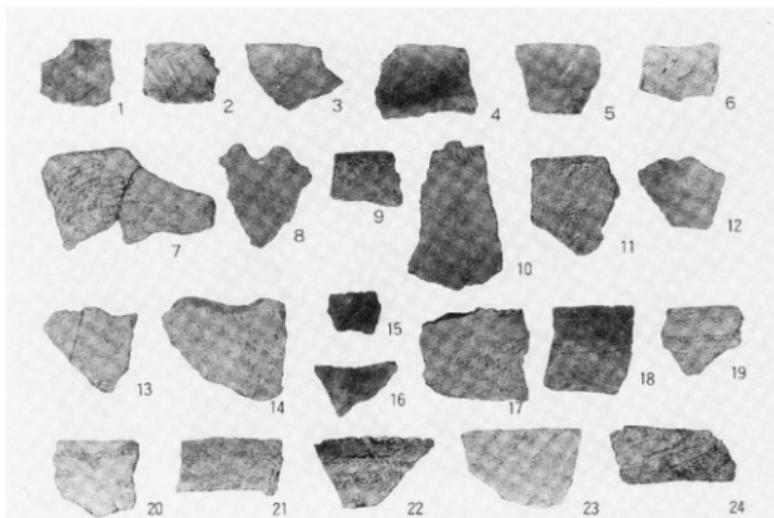
第4群土器－2



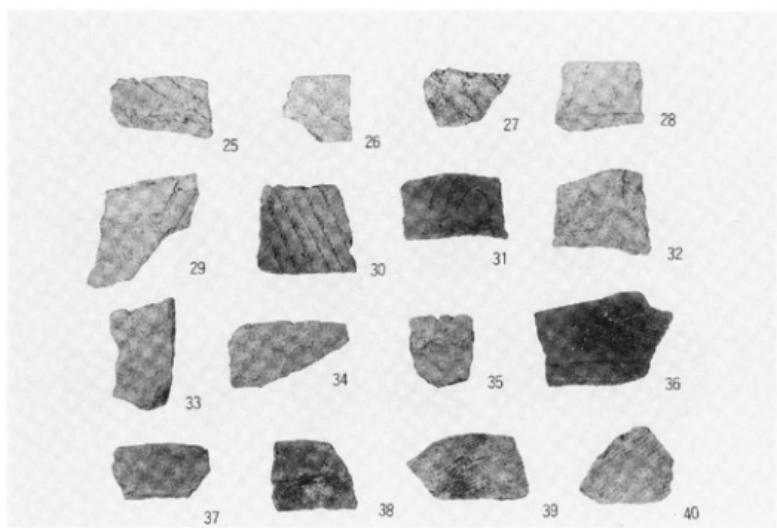
第4群土器-3



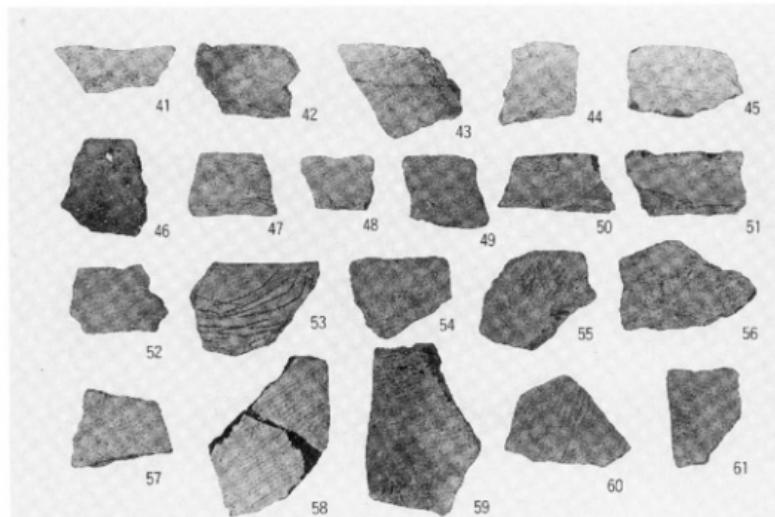
第4群土器-3



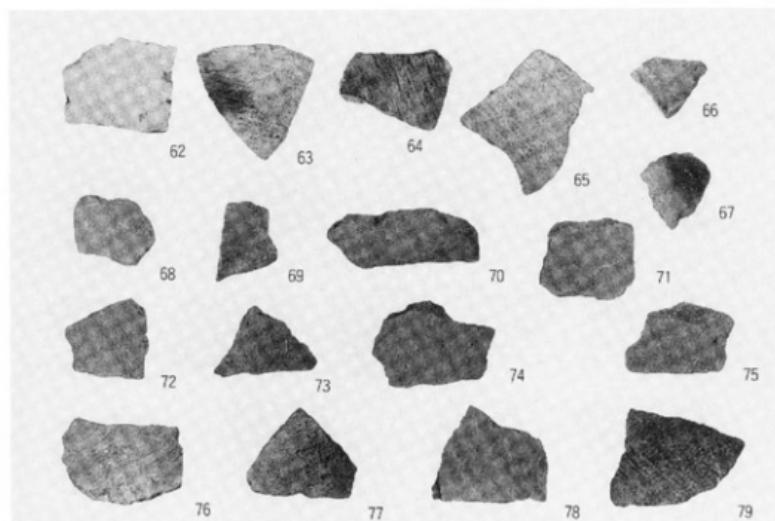
第5群土器-1



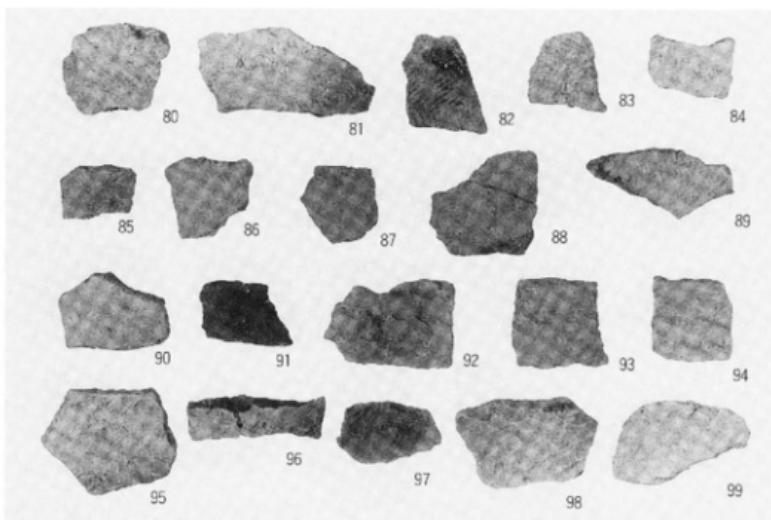
第5群土器-1



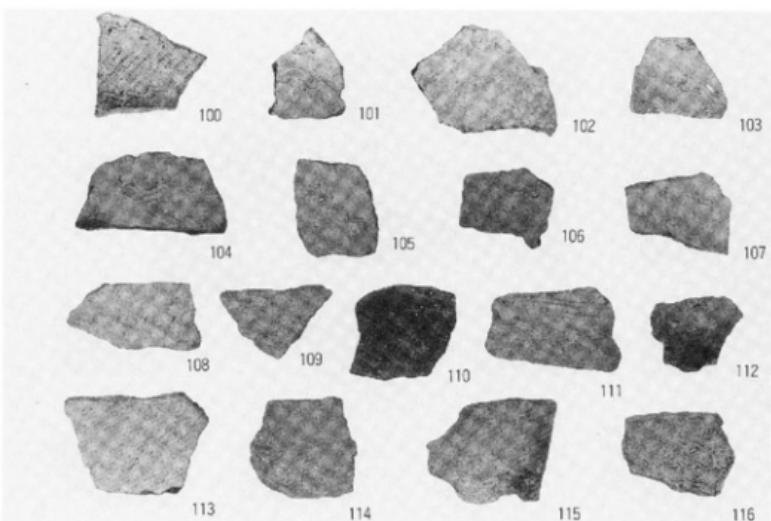
第5群土器-2



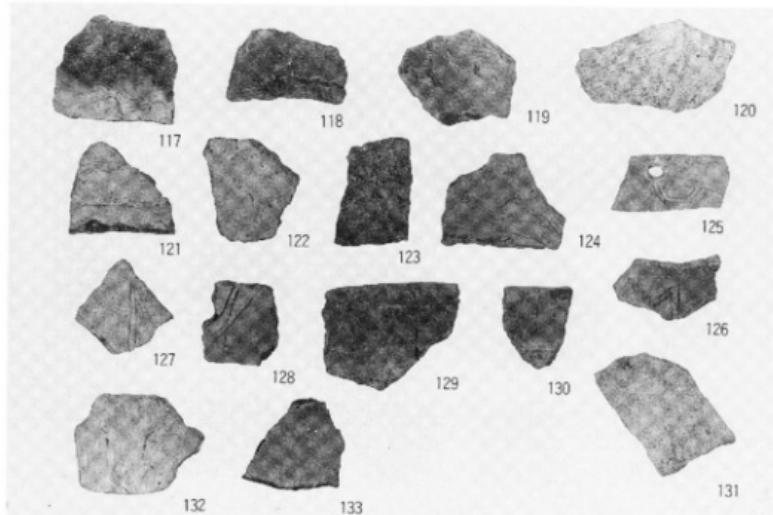
第5群土器-2



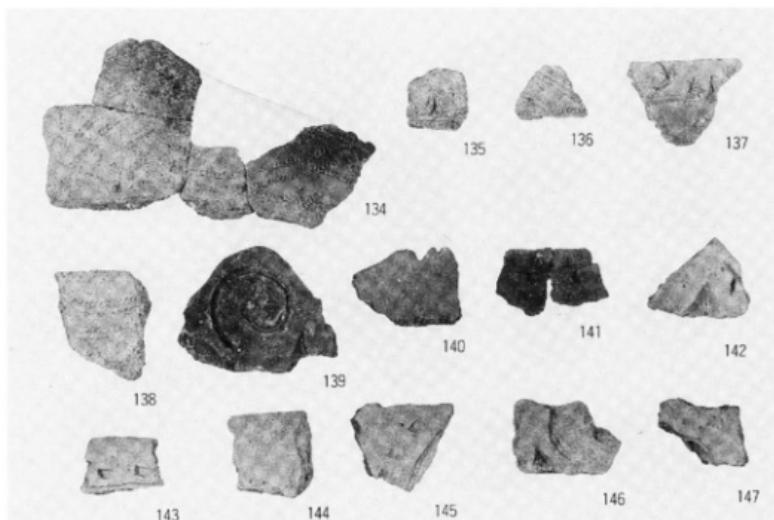
第5群土器-3



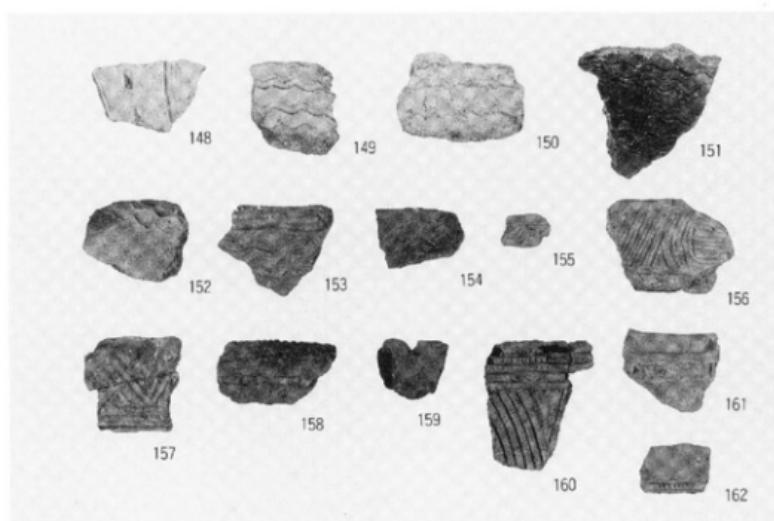
第5群土器-3



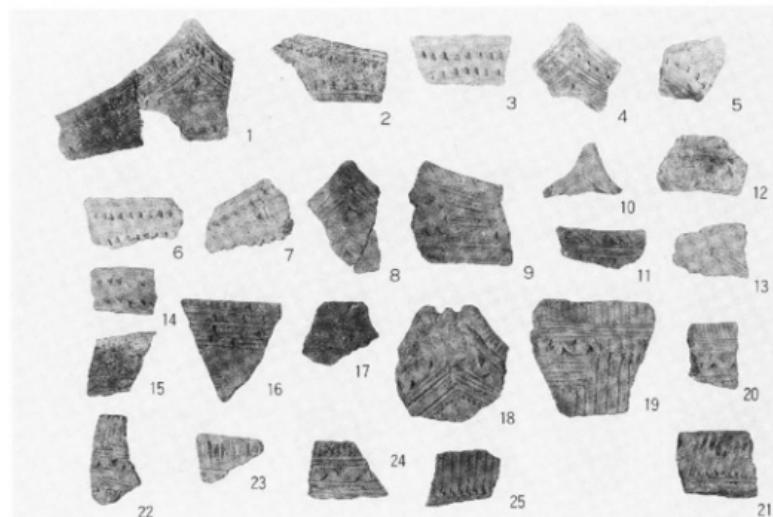
第5群土器-4



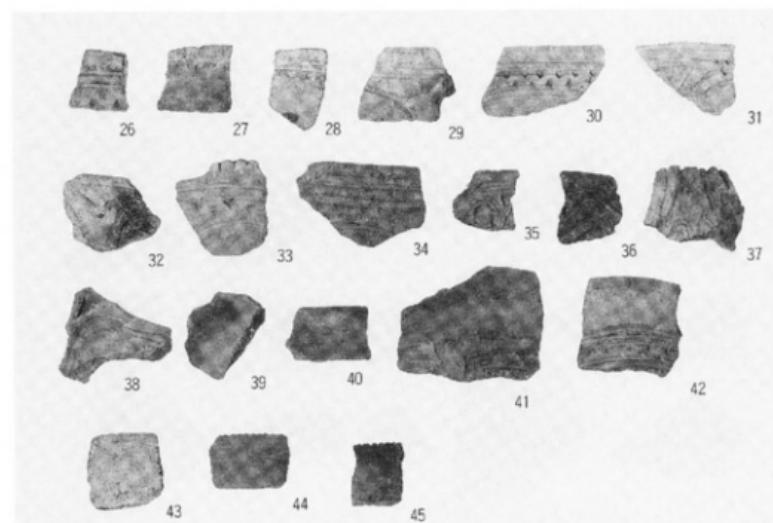
第5群土器-5



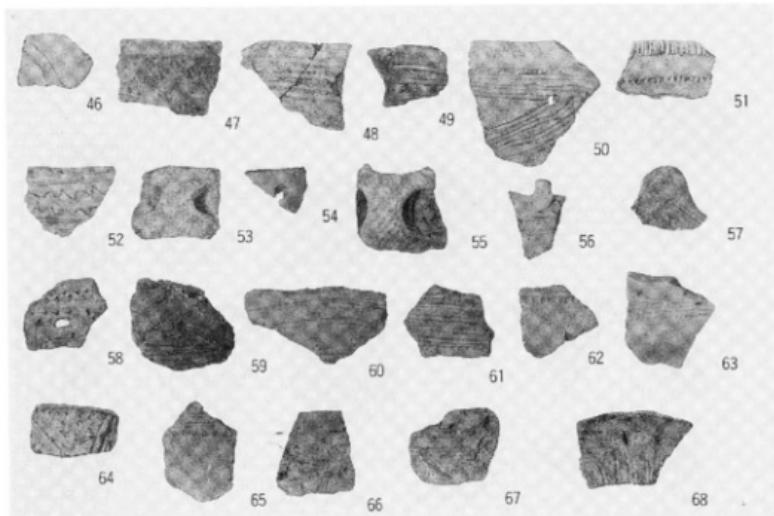
第5群土器-5



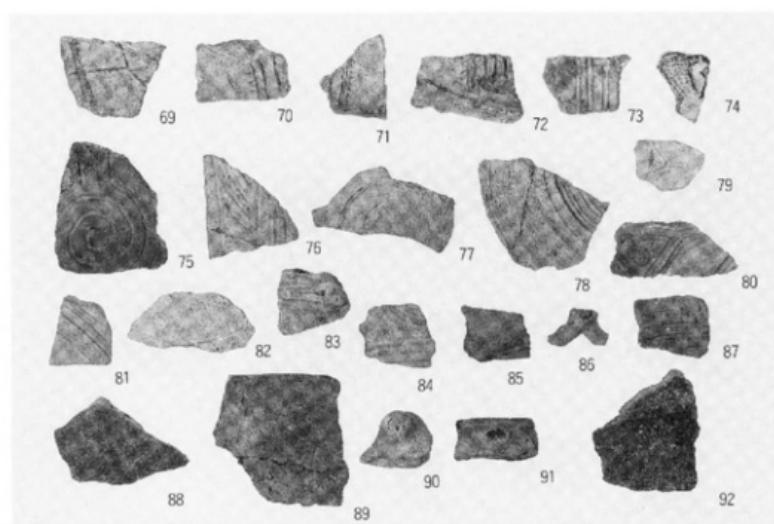
第6群土器 - 1



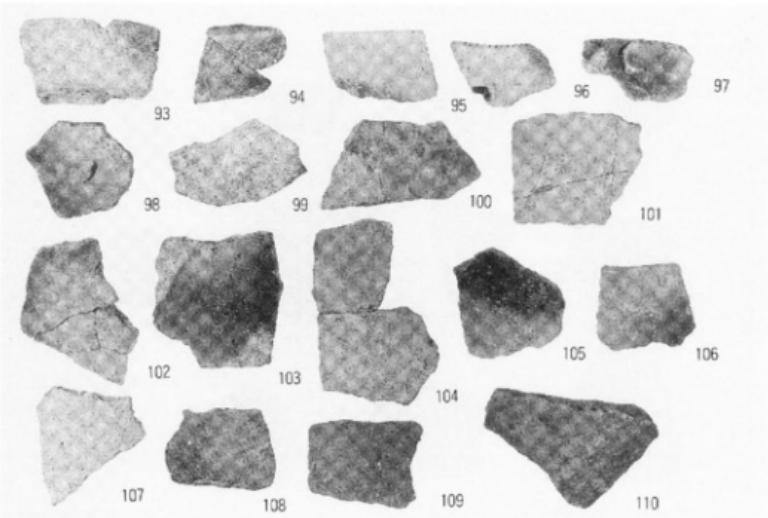
第6群土器 - 1



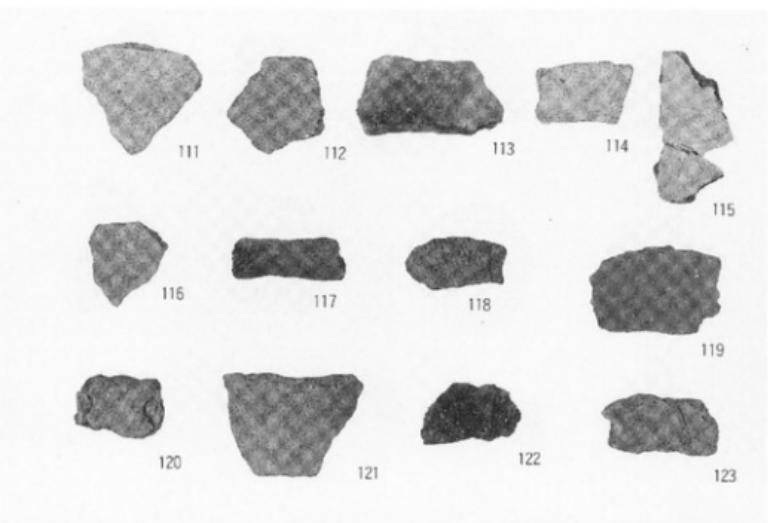
第6群土器-2



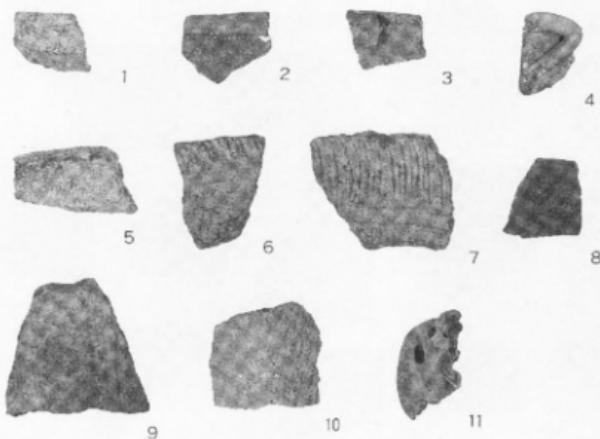
第6群土器-2



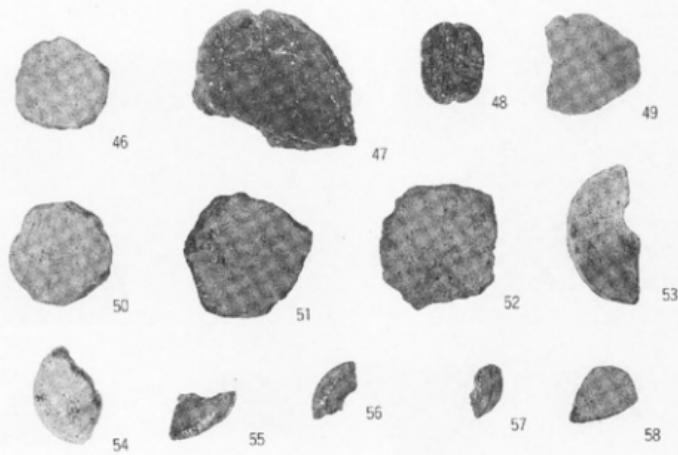
第6群土器-3



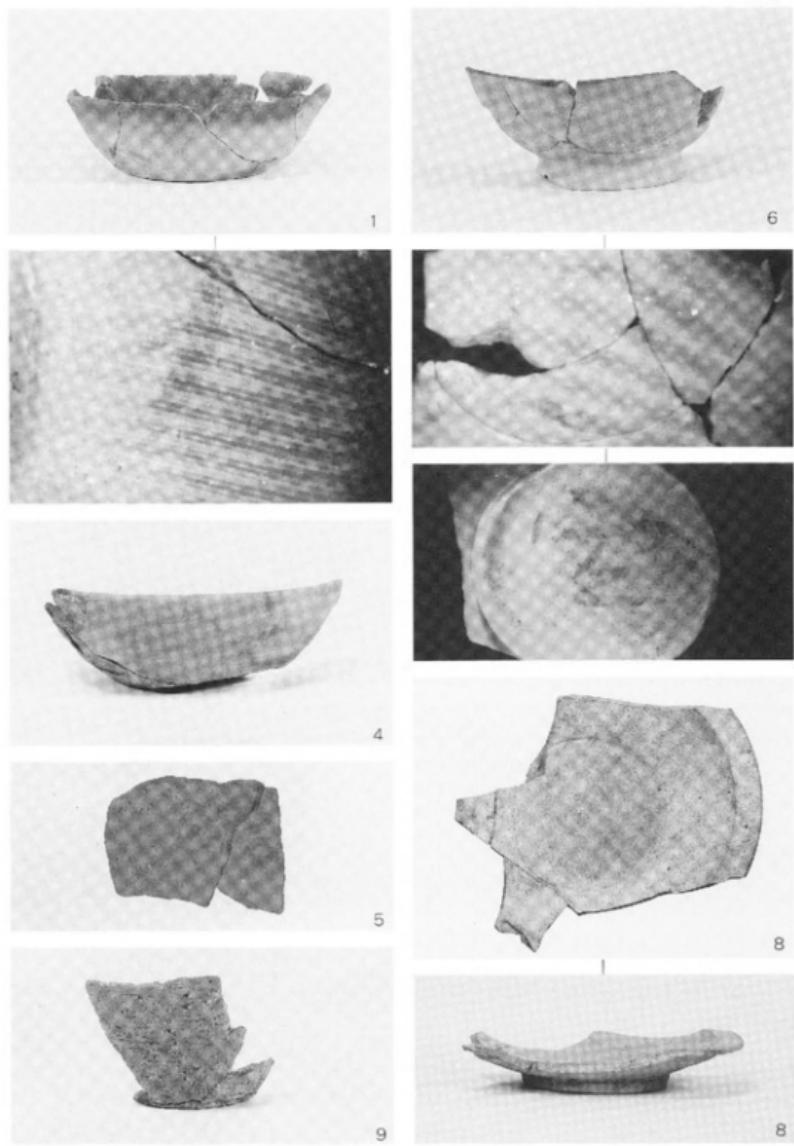
第6群土器-3



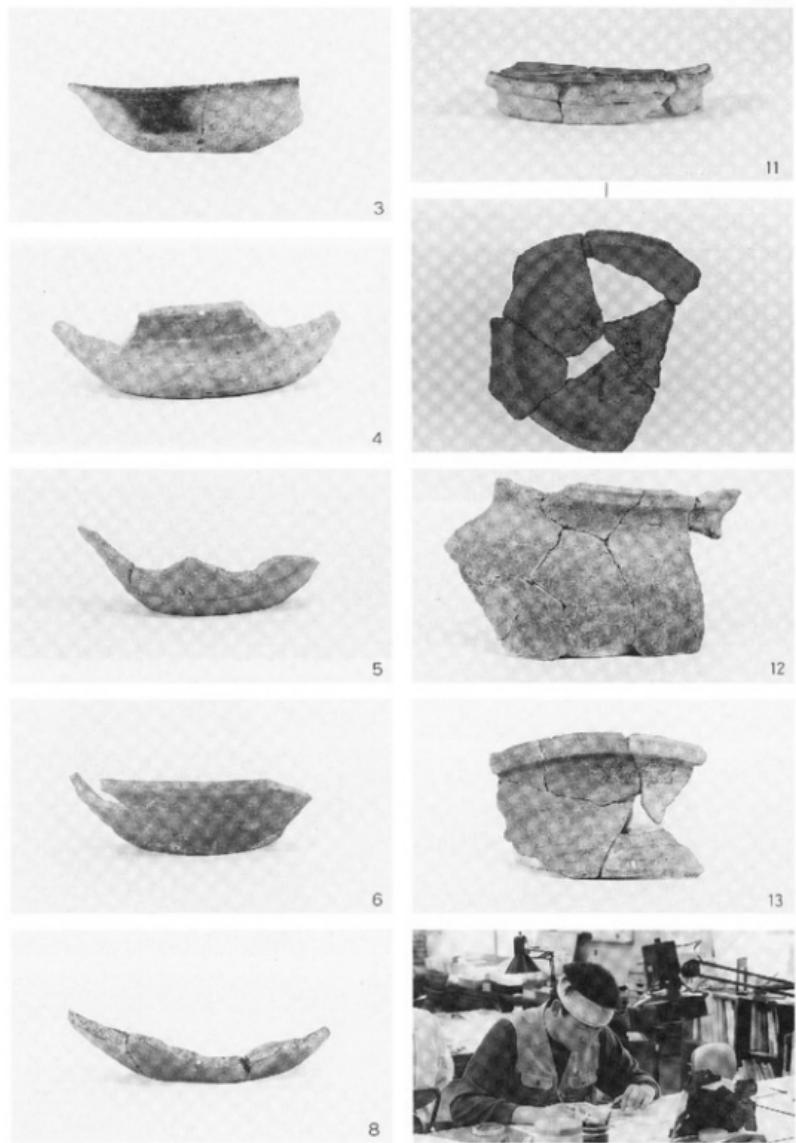
第7~9群土器



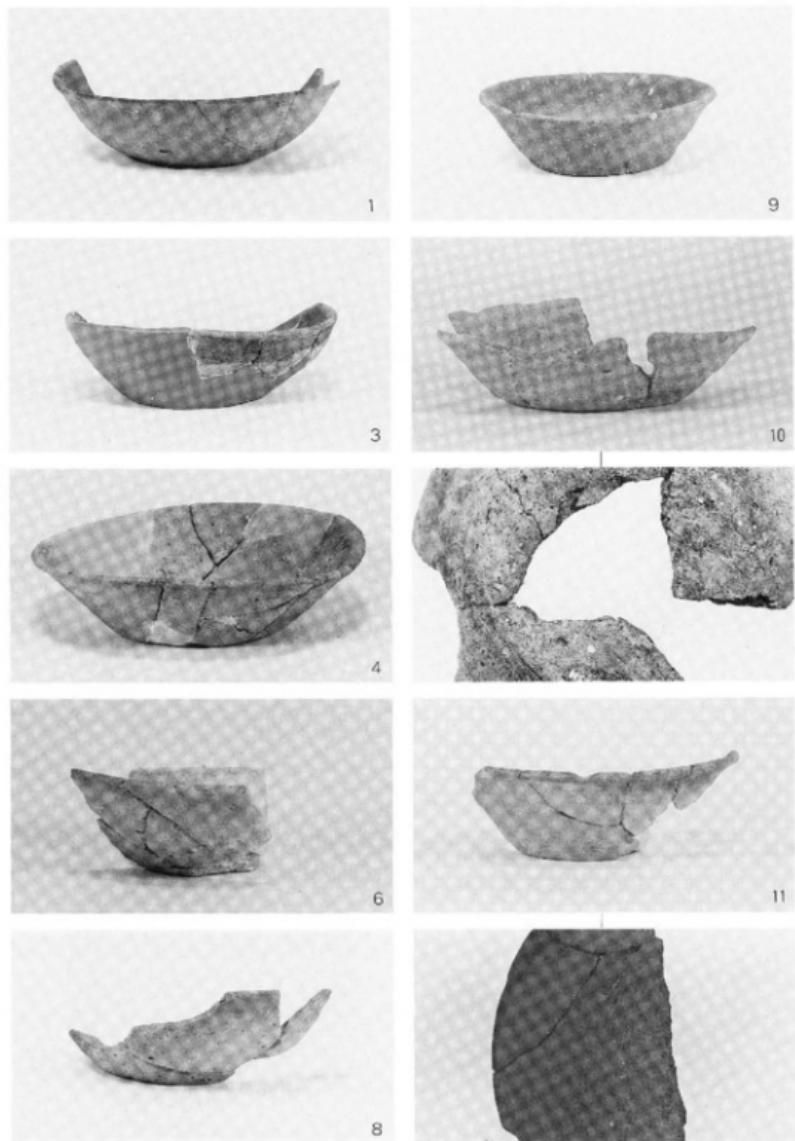
第10群土器-2



第2号住居址出土遗物



第3号住居址出土遗物



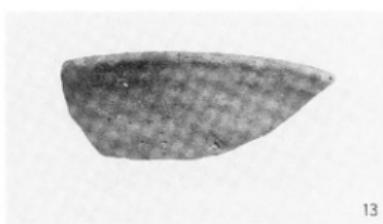
第4号住居址出土遗物



12



19



13



20



16



22



17



23

第4号住居址出土遗物



21



28



24



30



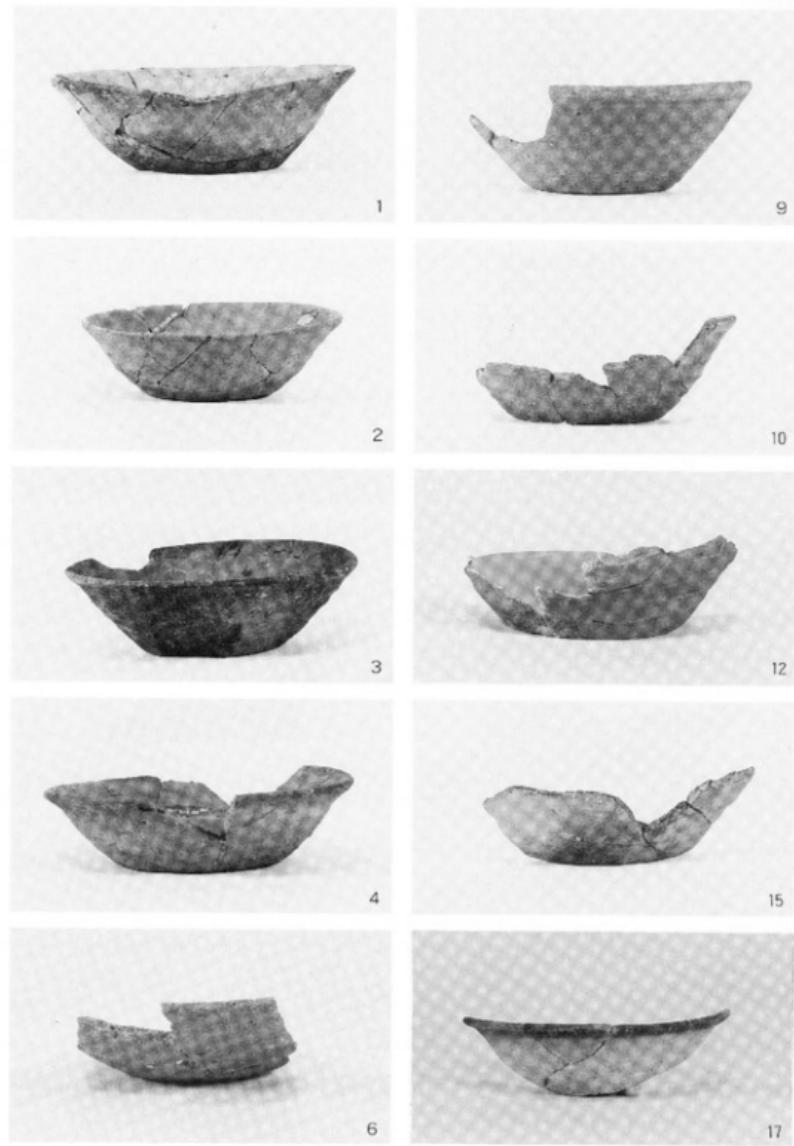
25



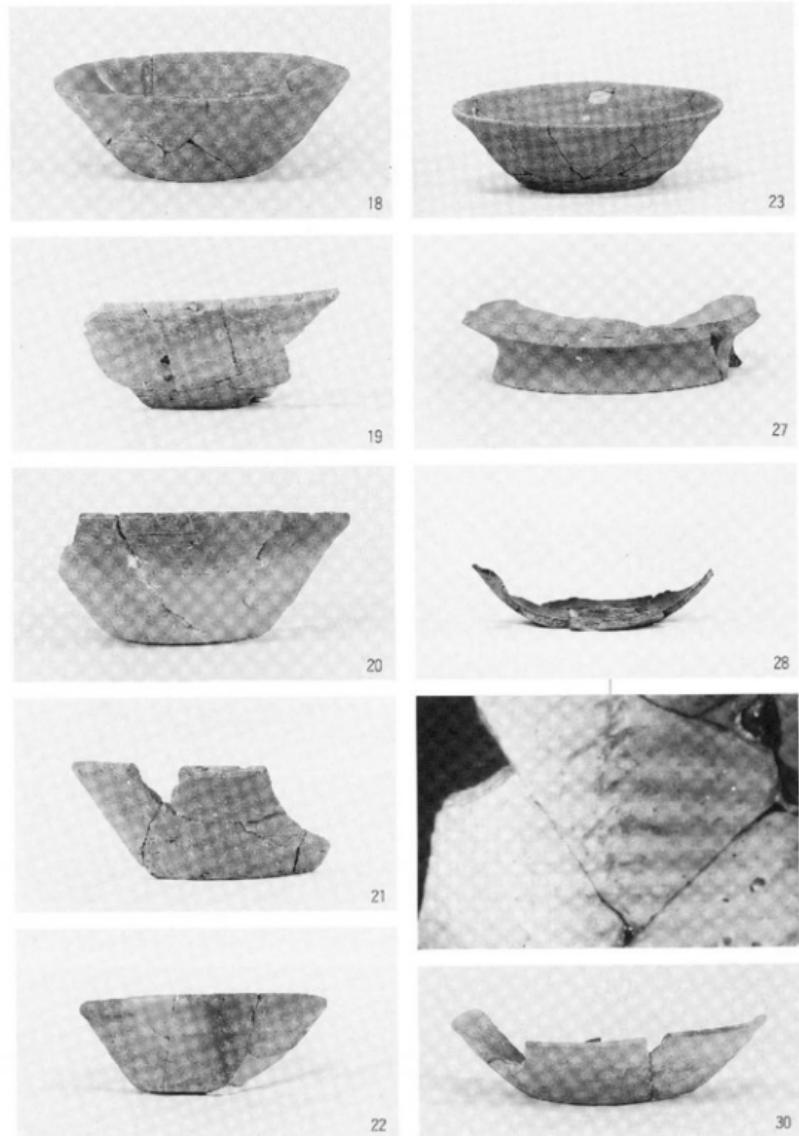
31



26



第5号住居址出土遗物



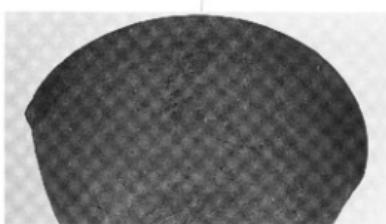
第5号住居址出土遗物



29



41



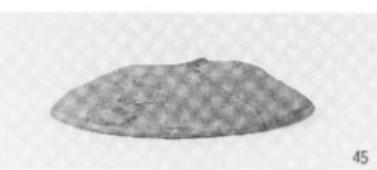
33



43



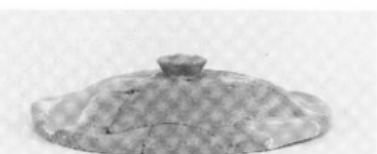
35



45



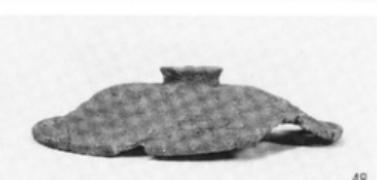
38



47

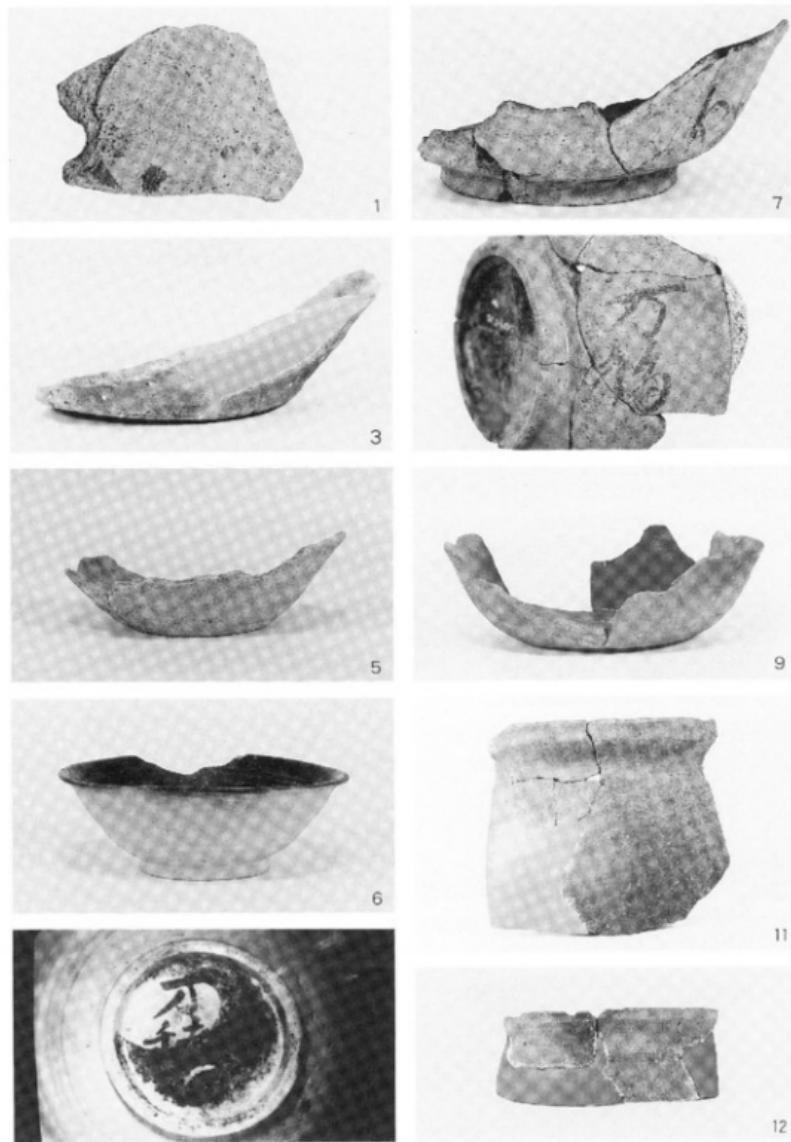


42

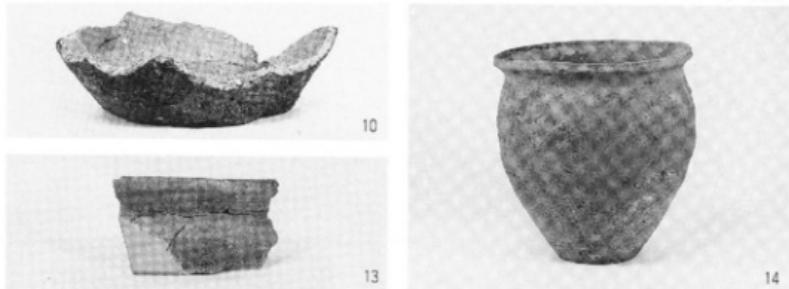


48

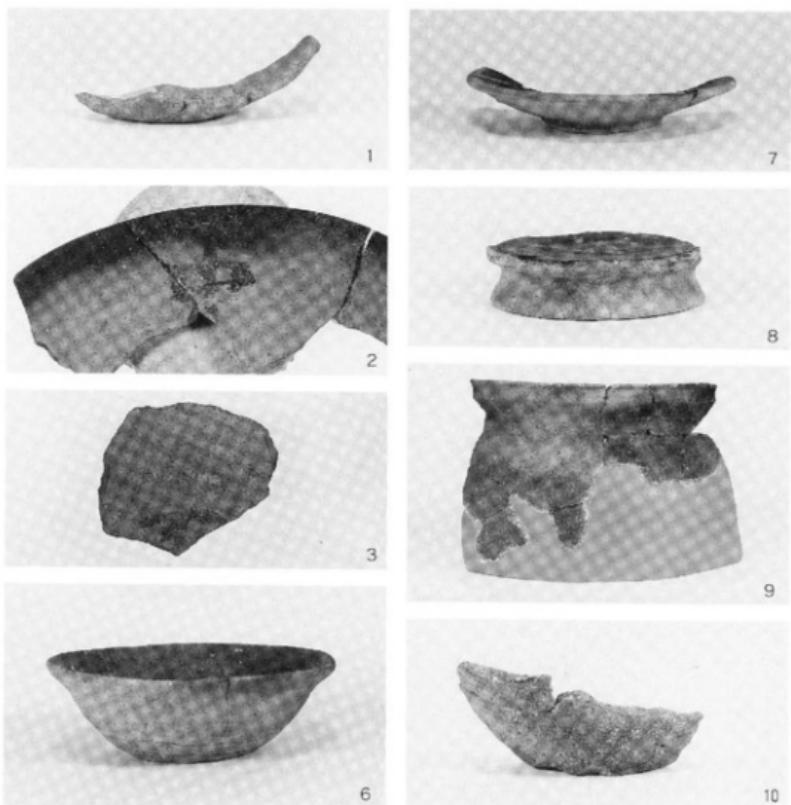
第5号住居址出土遗物



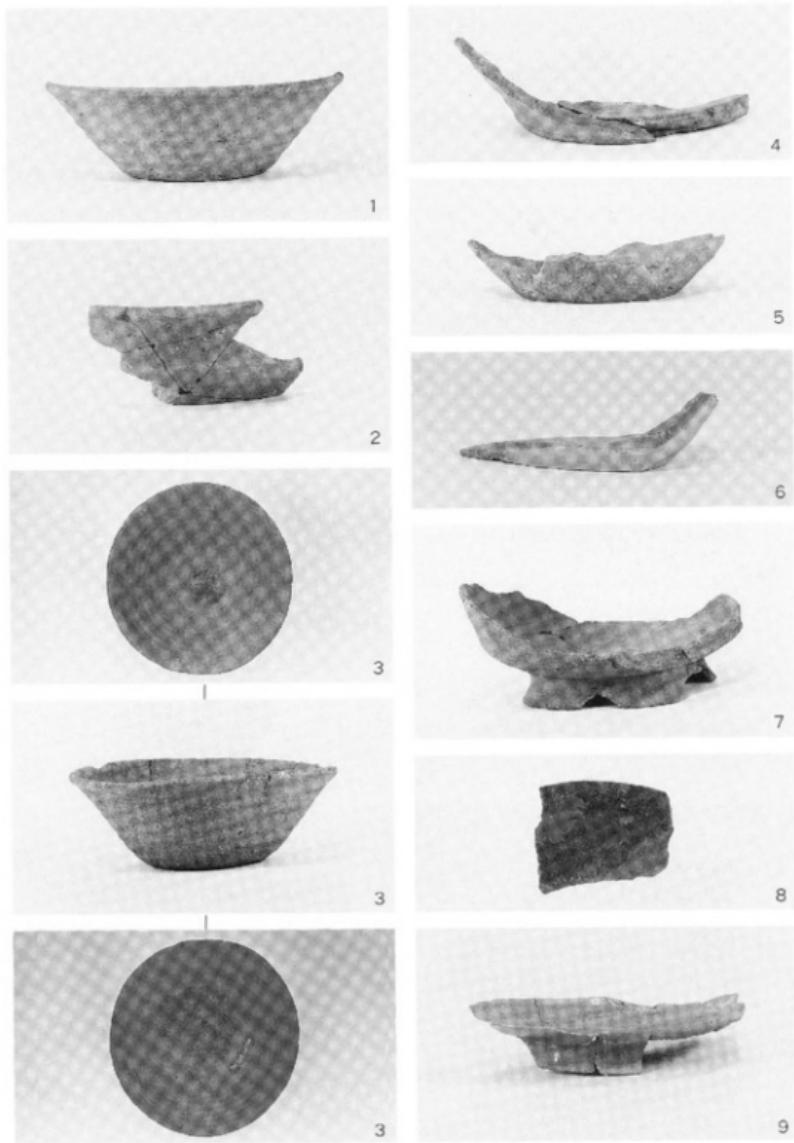
第6号住居址出土遗物



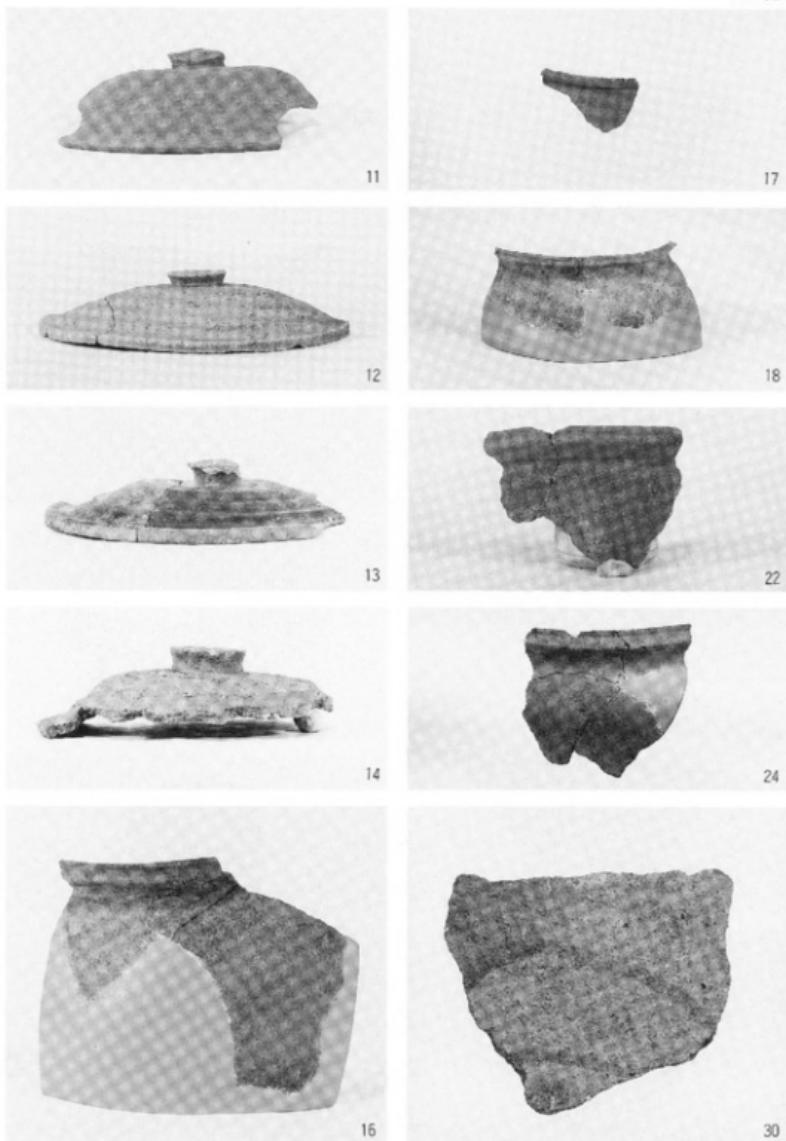
第6号住居址



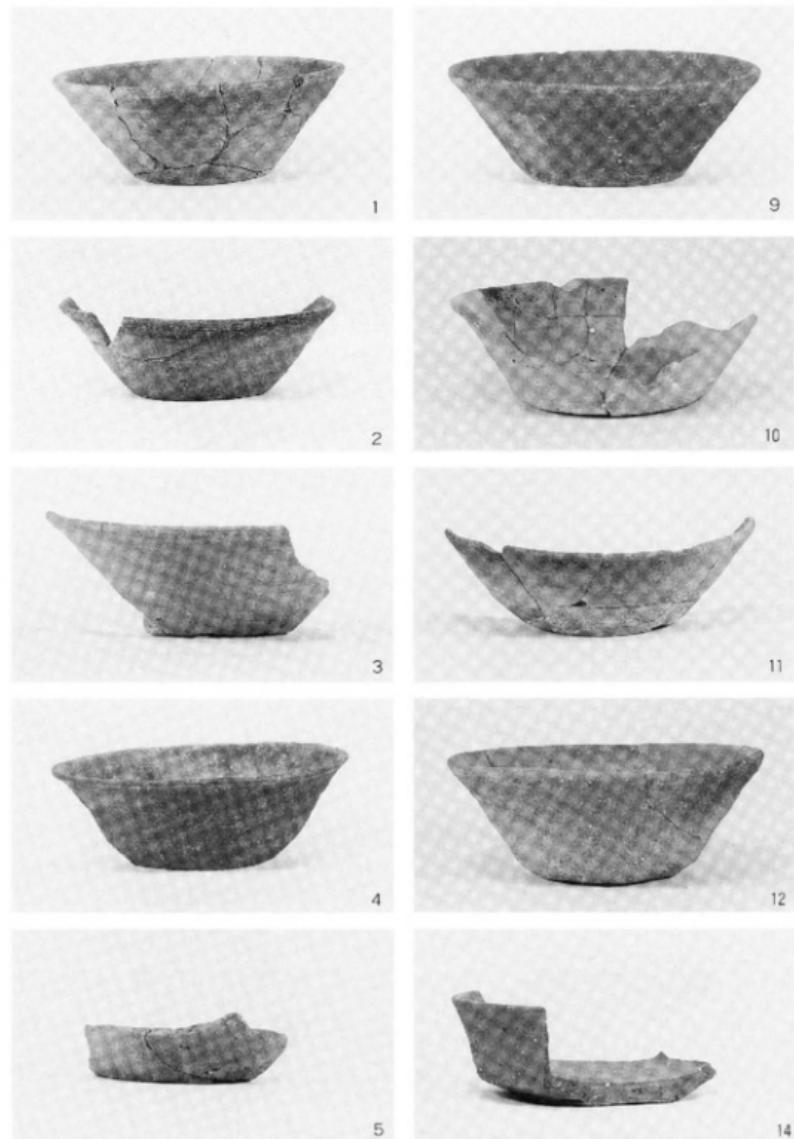
第7号住居址出土遗物



第8号住居址出土遗物



第8号住居址出土遗物



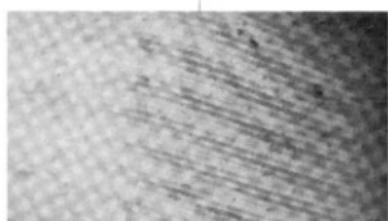
第9号住居址出土遗物



13



17



14



18



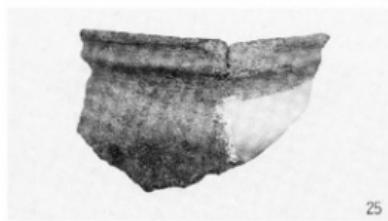
15



19



20



25



21

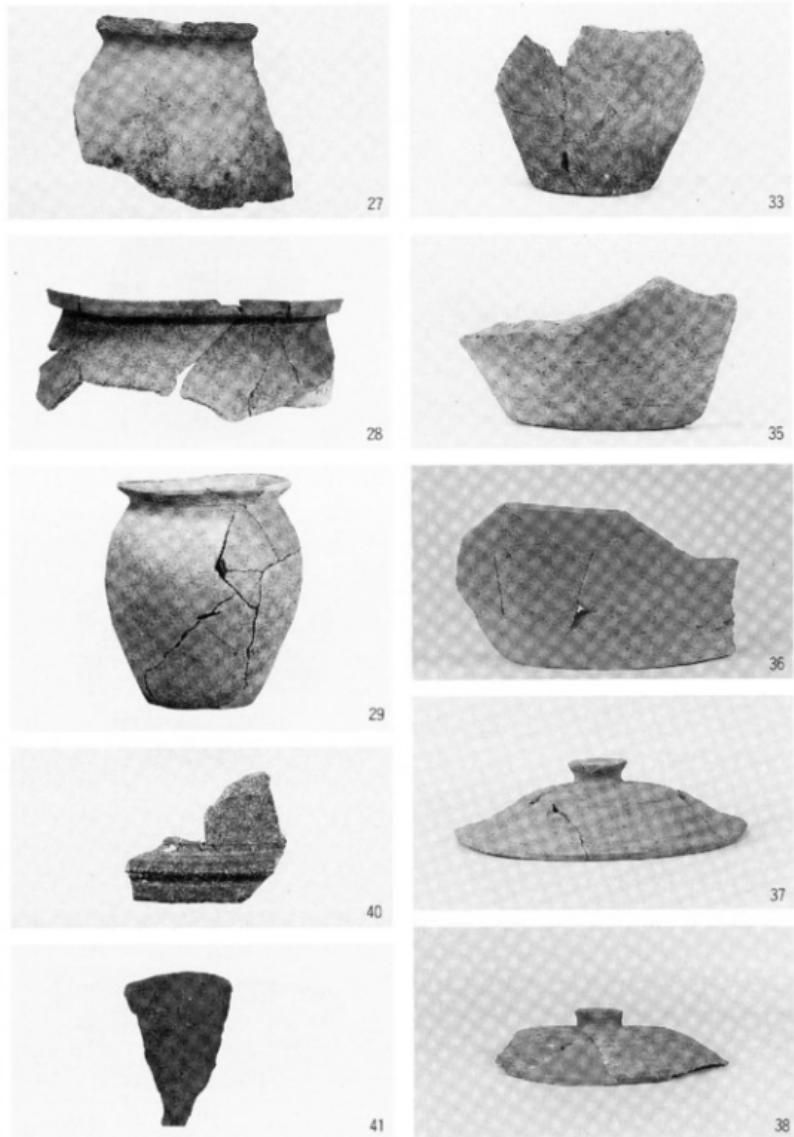


26

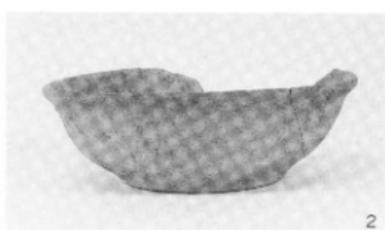
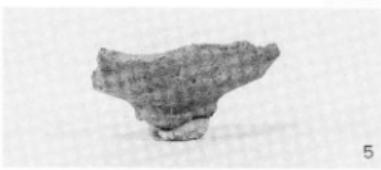


24

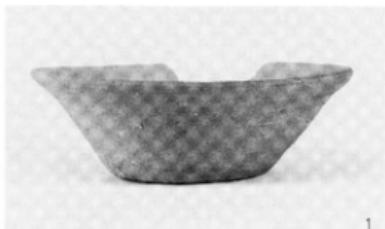
第9号住居址出土遺物



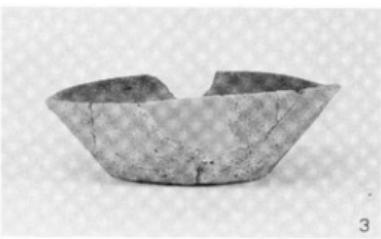
第9号住居址出土遗物



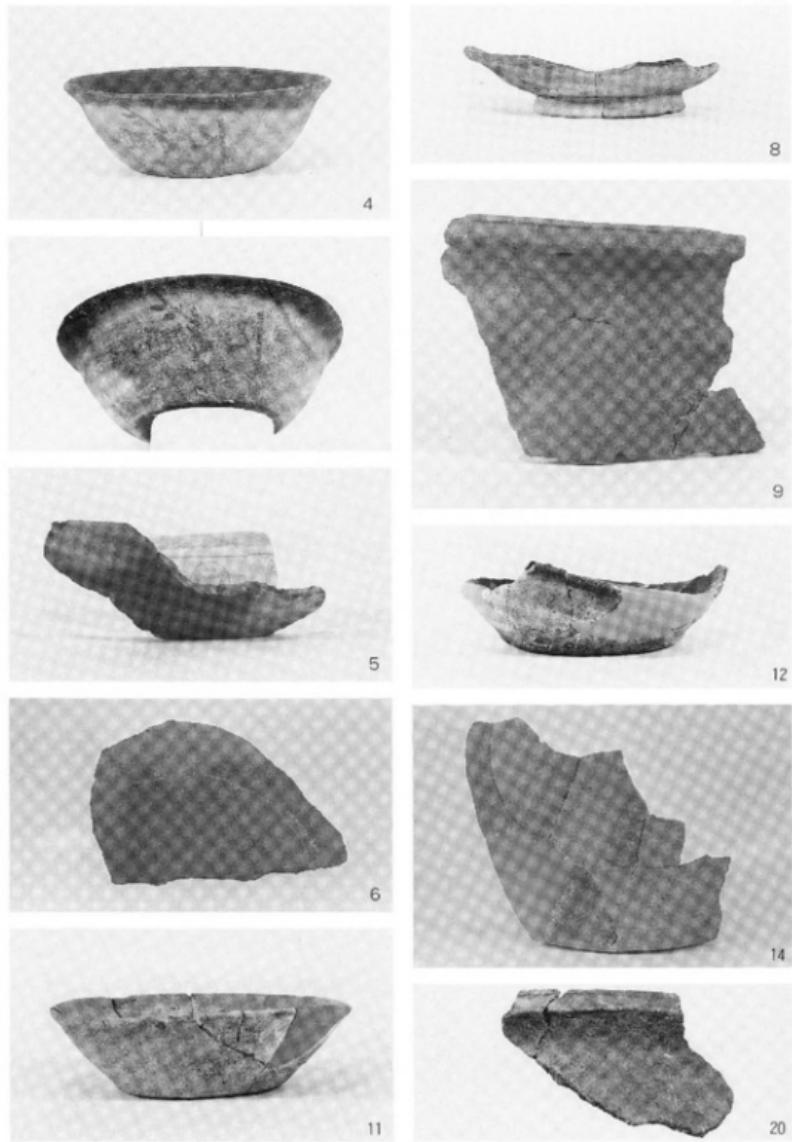
第10号住居址出土遗物



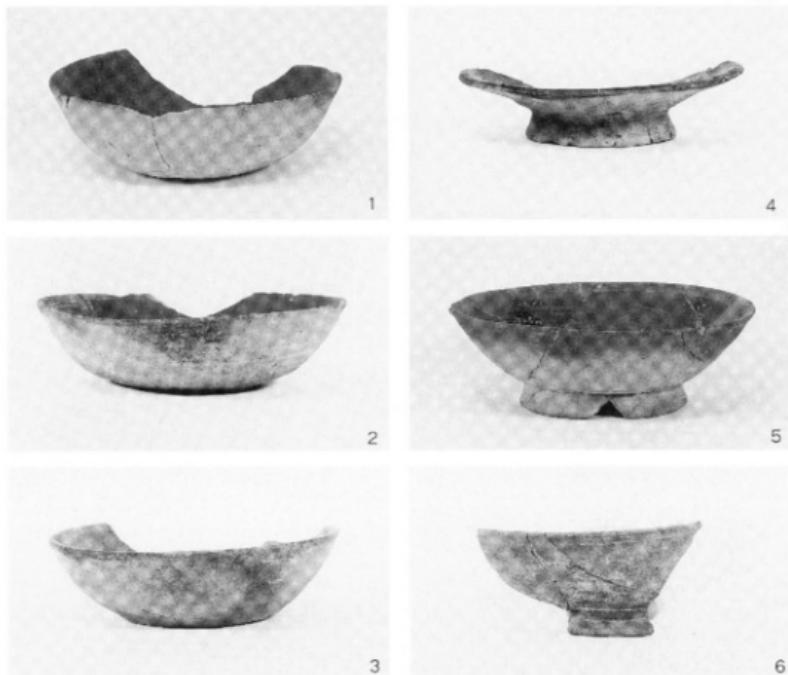
第11号住居址出土遗物



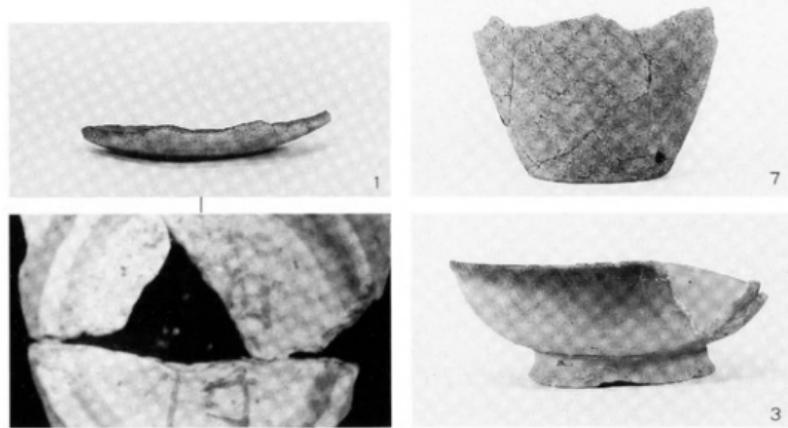
第12号住居址出土遗物



第12·13号住居址出土遗物



第15号住居址出土遗物



掘立柱建物跡出土遗物

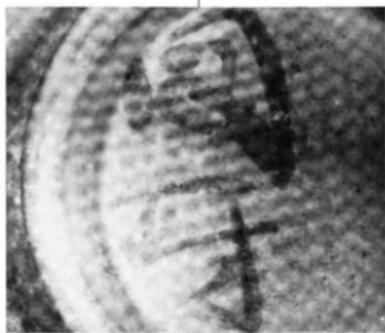


1



2

第15号土坑出土遗物



1



1

第4号溝

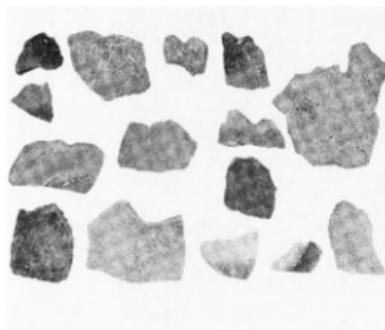


1



5

遺構外出土遺物

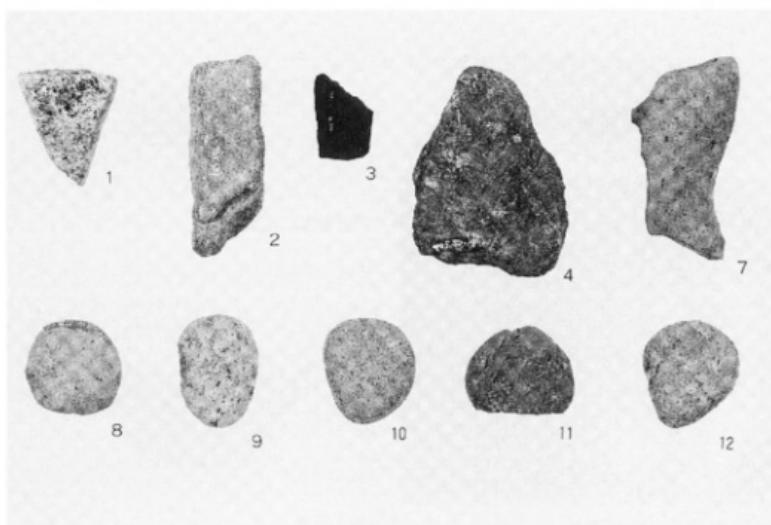


1

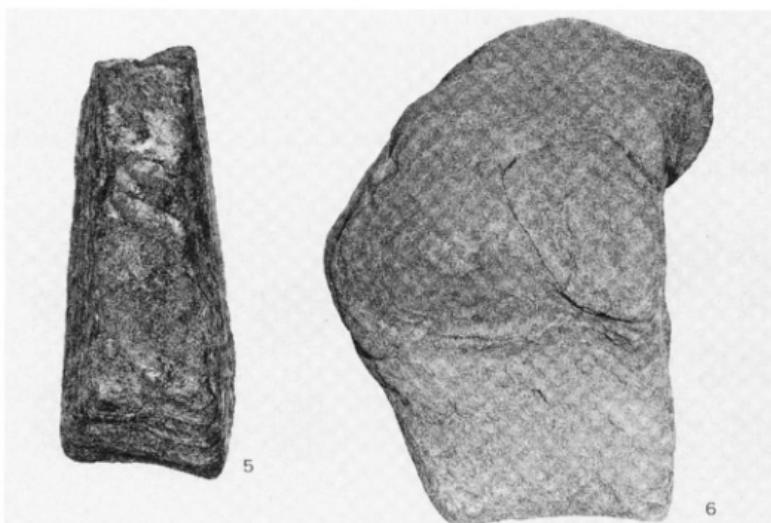


1

土製品



平安時代石器



平安時代石器

長峯遺跡

田村・沖宿土地区画整理事業に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

第3集

発行日 1997年3月

編集 土浦市遺跡調査会

発行 土浦市教育委員会

〒300 茨城県土浦市下高津2-7-36

TEL 0298-26-1111代

印刷 緑光和印刷
